

# ゴルゴナの大冒険

ビール中毒プリン体ン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ロトの紋章の冥王ゴルゴナが、ダイの大冒険の世界に死後行き着く話。

陰湿、悪虐なゴルゴナが活躍しますので、

原作主人公勢に原作よりも不幸になるキャラがいます。（原作よりも強くはなりません）

ご注意ください。

2015/11/20 アンチ・ヘイトタグ追加しました。

# 目次

ゴルゴナの再誕	1
腐敗の雷竜	16
探求者ゴルゴナ	29
魔界樹の誕生と冥竜王の挨拶	41
名工が、来て作って帰った	54
魔王と冥竜王の蠢動	63
相討つ冥竜王と竜の騎士	75
天の精霊	87
ムーの7賢人	102
アルキード滅亡	118
独りになった竜の騎士	136
キングとじじい	167

冥王とキングとじじい	179
キングの尊い犠牲	189
冥王の暗躍	200
復活の雷竜	209
魔剣戦士、始動	229
消える命	244
灯りだす希望の火	258
その頃の人間達&魔王の目覚め	279
真の不死と獣王と氷炎の誕生	299
恐怖！機動鬼岩城	324
連合崩壊	338
勇者vs魔王	348
ロモス決戦 その一	368

鬼岩城 大地に立つ	594
ハドラーの憂鬱	571
ベンガーナ前哨戦、終結	549
グノンの猛攻	532
獣王と獣王	517
ロモスの人々	490
グノン	476
肥大する悪	461
ロモス決戦 終幕	434
ロモス決戦 その五	420
ロモス決戦 その四	403
ロモス決戦 その三	387
ロモス決戦 その二	377

逆襲のキラマシーン	617
戦士に絡みつく邪糸、そしてベンガーナの戦いへ	662
暗躍する者達	692
真・冥王ゴルゴナ	724

# ゴルゴナの再誕

暗雲立ち込める魔界は、今日も変わらない。

分厚くどす黒い雲の間からは、絶え間なく雷鳴が轟く。

千年計画ともいうべき地上消滅の大計画は、（実際には軽く千年を越えているが）  
順調に着実に進行している。

しかし、焦ってはならない。

魔界に七つの宮殿を持つ魔界を二分する実力者、大魔王バーンは常々、  
己にそう言い聞かせている。

魔界の神とも呼ばれるこの老人は、既に天上の神々をも超えていると自負している  
が、

それでも尚、油断しない。

魔界には未だ宿敵である冥竜王ヴェルザー率いる大勢力が健在だし、

何より天の神共は得体の知れぬ“奇跡”の術を得意としている。

「急いではこちらと分かつてはいるが、な……」

右手で、血のように赤い美酒が注がれた杯を弄ぶバーン。

「……………」

忠実なる影は、主の独り言にただ静かに頷くのみ。

「ふっふっふ……勝手知ったる者しかおらぬのだ。そう黙る必要もあるまい」

「そうだよミスト。もつと僕とおしゃべりしようよ。」

結構熱弁振るうタイプなの……

全くミストつたら必要ないと何百年でもだんまりなんだもんねえ」

玉座の主を挟み、白い影・ミストバーンとは真逆の位置に佇む黒い死神。

死神にミストバーンはややキツイ眼光を注ぐが、そんなものはこの男にとって屁でもない。

「キルバーンよ、その辺にしておけ」

バーンが一言呟き、玉座を立つ。

強大な魔力と体力を有する魔族……特に、高位の者は睡眠を必要とせぬ者も多い。

この三人も、ご多分に漏れずそうであったが、

嗜みの一つとしてバーンは寝る。

豪華なベッドに横になり目をつぶると、なかなか良い。

少なくとも不快ではない。

それに思考の整理にも繋がるし、

計画の発動の日がまた一日近づいてくることを実感できるのであった。

一分の隙もありはしない大魔王の極僅かな睡眠中も、

股肱の臣・ミストバーンが一睡もせず番をしているのだから何の危険も無い。

(あくあ……まったく一秒も熟睡の時間が無いってどういふことさ。)

ミストも仕事熱心だしなあ。

いつになったらボクのお仕事は完了するのかねえ……)

バーンに協力しつつ、隙あらば殺せ……との命を、

本当の主から賜っているキルバーンは内心で愚痴る。

ただっ広い食卓の間を後にして、長い長い白亜の長廊下を歩く三人の視界に、

一点、黒い染み。

床にポツン……とある小さなそれ。

それはあり得ない光景であった。

バーンの宮殿は、常に完璧に整っている。

広大な魔界に点在する、七つの巨大な宮殿は例え主が留守にしていようと

数千の使用人と兵隊が守り整えている。

ましてや滞在中のこの宮殿で、光沢を放つ純白の床に“塵”が落ちているのは、

明らかに不自然である。

侵入者。

控える影が、一瞬にして主の前に飛び出して気を漲らせる。  
しかし、

「落ち着きなよミスト。侵入者は、どうもこの死んだ虫サンみたいだよ」  
友である死神が制止する。

「……………不自然過ぎる」

とはミストの弁。数十年ぶりの発言であった。

「ボクもそう思わないでもないけどねエ。

でも……………ご覧よ。握りつぶされてグチャグチャさ」

「うわあ、蜘蛛さんかわいそ〜。こんな殺し方しなくてもいいのに」

「そうだねピロロ、その通りだ。あんまり…センスの良い殺し方じゃあないなア。

もつとじつくりねつとり、ジワジワと殺さなきやね」

キルバーンが蜘蛛の残骸を拾い上げると、それを掌で軽く転がす。

何者かの手によって歪められ潰されたその死骸は、

それだけでカサカサと軽い音を立てて更に崩れていく。

「……………それにしても……………ミストが警戒するわけだよ。

凄いなあこの蜘蛛。こんな様でも……………なかなか愉快な気配を醸し出してる。



ウツクツクツク……」

薄く笑うキルバーン。

彼の言う通り、その蜘蛛の残骸は死して尚おぞましい気配を放っていた。

「あららっ？」

キルバーンの左掌から蜘蛛が消える。

「ふむ……面白いな。」

こやつが放つ“瘴気”は並大抵ではない」

リリルラへの応用だろうか。

蜘蛛の残骸は瞬時にバーンの掌へと移動していた。

「完全に死んでおる。」

しかし……この怨念と瘴気……。

そこに余の魔力が加われば……ふっふっふ。

面白いことが起きるやもしれぬ」

その言葉に、一瞬ミストバーンはギョツとなり、光る目を僅かに見開いた。

彼としては主に及ぶ可能性のあるあらゆる危険を除いておきたかったからである。

あまりにも強力な怨念を放つ正体不明の怪しい蜘蛛の死骸。

ミストとしては万が一の可能性も摘んでおきたいところであったが、

主が暇を持て余し、そしてその暇を埋められる“遊び”を見つけてしまったのだから、

臣としては従うより他がない。

なにせ彼のモットーは『大魔王さまのお言葉は全てに優先する』なのだから。

大魔王が、聞き慣れぬ古代の魔界言語を唱えると、

彼の目の前の床に邪悪の六芒星の光陣が浮かび上がり、

バーンは己の手の平にあつた蜘蛛を陣の中心へと投げ入れる。

すると即座に。

そう、即座に蜘蛛は膨れ上がっていく。

流れこんでくる大魔王の魔力を余すことなく貪る。

「わオー！ バーン様も然ることながら、蜘蛛クンもすごいねえ」

「……………!!」

影と死神の両名は膨張する蜘蛛に見入る。

バーンだけが、ただ冷然とそれを見据え不可能はないと言われる超魔力を注ぎ続ける。

蜘蛛は、飢餓に陥った悪鬼のように極上の魔力を貪り続ける。

瞬く間にバーンらを追い抜き、ゆうに3mはあろうかという巨大蜘蛛へと成長し、

“それ”に命が戻り始める。

「ぐ、ぐ……………ぐ……………お……………」

焼けただれた皮膚が再生し、

「が、あ……あ、に……………じゃ……………！　お……の、れ……………！！」

千切れた六本の腕が生え揃う。

「ぐ……………お……………！！　い、いたい！！　く、るしい……………！！」

巨大蜘蛛が、激しく息を切らせ、肩を揺らして白亜の床に突っ伏していた。爪を床に食い込ませ、藻掻く。

「はあ……………はあ……………！！」

き、貴様……………ら、は……………な、何者、だ」

八つの眼が三人の魔族を見つめる。

薄ら笑いを浮かべ続ける黒い男。

白いローブを纏う、闇に浮かぶ光る目を持つ男。

そして……………老人。

(な、なんなのだ……………こ奴らは……………！！)

この俺を……………このように完全な姿で蘇らせるとは！

そ、それに……………この三人……………四大魔王に勝るとも劣らぬ……………！！

あの老爺に至っては……………!!

なんとという魔力! なんとという覇気!

この爺は……………、い、異魔神様と同じ!?

いや、あるいは……………それ以上の……………!!)

並び立つ三人。

その中央に静かに佇む枯れ葉のような老人に、大蜘蛛は怯えた。

想像を絶する魔力。

溢れ出る威厳。

「大蜘蛛よ」

老人……………大魔王が一步、ゆるりと歩みを進める。

「う、うう……………!」

それに合わせるように、大蜘蛛が一步後ずさる。

「ふむ……………余の力が理解できるようだな。知性もある。

ならば其の方に聞こう。お主は何者だ? 何故我が宮で死んでおった」

嘘を言えば死ぬ。

それは八本足の物の怪の直感であった。

生に貪欲であるからこそその嗅覚。

「わ、我が名は……冥王ゴルゴナ……」。

何故、俺がこんな場所で死んでいたのかは知らぬ。

ほ、本当だ……俺は……魔州湖で忌々しき勇者共に……憎きタオに敗れ、殺された……！

ここはどこなのだ……そして、お、お前達は……一体……!?」

心底、恐怖しながらも己を失わず弁明できたのは、

かつて彼が破壊の神・異魔神を召喚し、

その異形の神と長年接し続けた経験があるからだろう。

「ほう……大魔王の前で“王”を名乗るか。ふふふ……」

「……大——魔王?」

「そう……余の名はバーン。大魔王バーン」

荘厳なる老人は抑揚なく、ただ当たり前のようにそう名乗った。

大魔王——あらゆる魔の頂点に立つ者。その尊称を。

(大魔王……古のゾーマの再来!)

冥王ゴルゴナは己の心の中、恐怖一色の心中奥深くに歓喜が生ずるのを自覚した。

己を甦らせた超魔力。

圧倒的な威圧感。 威厳。

己が大魔王である……という言葉に宿る力強き言霊。

間違はなくこの者こそゾーマが時代より失われていた大魔王！

精霊神ルビスすら敵わぬ魔界の神！

百年の雌伏を経て、ゾーマの後継者が現れたのだ！

「ぐふふ……ぐふふふふふ……！ 大魔王、バーン……様」

ゴルゴナは確信し、平服する。

ルビスとタオ。そして勇者アルス達。

大魔王バーンがいれば、彼らへの復讐は成る。

ゴルゴナのその予想は正しい。

バーンの力は神々をも上回り、ルビスは分からぬが

間違はなく太陽王ラ・ムー……タオは屠れるだろう。

しかし、ゴルゴナはまだ知らない。

自分が蘇りし世界にはアレフガルドは無く、

精霊神ルビスも実兄タオも存在しないことを。

バーンは、拾った大蜘蛛に部屋を与えた。

餌も与えた。

欲しいと言うので様々な書物も道具も与えた。

「面白いペットを拾ったものだ。

余の退屈を紛らわせる良い余興よな」

と側近の影に言ったとか言わないとか。

魔界の神の言は置いておくとして、

そのペット、大蜘蛛冥王ゴルゴナは愕然としていた。

多くの呪文と言語は共通するが、文字は幾つかの類似点が見られるものの別物。

しかし、もともとと研究者・科学者としての才気に溢れていたゴルゴナである。

短時間の学習（それでも半年を要した）で文字をマスターし書物の山を読み漁った。

その結果――

!!? っ、っ、っここはどこだ!!? 俺は………我は一体どこの異界に迷い込んだ!!?

神が違う。

歴史も違う。

世界も違う。

時空も違う。

ここは――異世界だ。

ゴルゴナはそう結論付けた。

彼は一万二千年前に、大召喚器を作り出し

異魔神や冥府の主を異界より呼び出した実績のある召喚士でもある。

異世界がある、ということは承知していた。

しかし、まさか自分がそこに迷い込んでしまうとは……。

彼は考えたこともなかった。

そしてもう一つ。

世界を学ぶのと並行して、

自分の心身の調子を分析し

大魔王バーンの魔力の影響を調査していた彼が気付いた衝撃の真実が

「私の肉体が!! 俺の体が無い!! どこにも……ない!!」

のであった。

冥王ゴルゴナとは、彼と、人間時代に彼が召喚した冥府の主たる大蜘蛛、

そして部下である6人の優秀な科学者達の集合体であった筈だ。

しかし、

バーンが彼に与えた大鏡を見ながら大蜘蛛の背部甲殻を開放しても、

そこにはただ肉塊が蠢いているだけで、



ゴルゴナの本体とも言うべき人間時代の肉体が無かった。

ついでに言えば甲殻に埋め込まれていたゴルゴナの6人の部下もいない。

「な、なんとということだ！　くそ！　原因はなんだ!!」

なぜ俺の体が！　兄者に消し飛ばされたままなのか!?

いや……オテイカワン達もいないということは、俺が大蜘蛛と分離した影響か？

しかし、それならば……ええい、くそ！　とにかく究明せねばなるまい!」

長年、大蜘蛛を通して活動した癖か、本体の喪失に気付かずになっていたゴルゴナ。

しかしそれも仕方がないだろう。

余りにも大蜘蛛の肉体が、自分の精神にピッタリと合うのだ。

恐らく、アレフガルド時代よりも。

調べてみれば、原因はあっさりとは判明した。

迅速な説明はゴルゴナの研究者としての優秀さの現れだろう。

自身（大蜘蛛）の細胞を採取し、それを事細かに分析した結果、

「これは……私の細胞と俺の細胞が……遺伝子レベルから結合しているのか？

ふ……む。そうか。バーン様は、俺の残骸と大蜘蛛の死体を一緒に蘇生した。

肉体が再構成される際に、俺と私の肉体が……。

俺と……我……？

俺は何を言っている？

——ま、まさか!？」

バーンから与えられた様々な魔道具を改良し、

超帝国ムーの機材を可能な限り再現した実験道具の数々。

その中に魂と精神を取り出す魂吸器なるものまである。

もつとも、古代ムーにあつたものと比べると性能は著しく劣る。

今、ゴルゴナの手元にあるそれは魂と精神を写す念写器に過ぎない。

ゴルゴナは、魂吸器に魔力を注ぎ、己の精神を投影する。  
すると、

「おおー… おおお……!! なんとたることだ！

大蜘蛛と俺の精神が……!! 魂が癒着している!!

か、完全に一つだ！ バカな……!! こんなことが！

これが大魔王の超魔力なのか!!」

ゴルゴナという一人のムー人と、冥府の主・大蜘蛛。

両名の、その肉体は原子の単位から融合し、

その魂は霊子の単位から結合していた。

「……………我は……………蘇つたのではない、のだな。

正しく……一度死んだのだ。そしてアレフガルドから消滅した。  
……そうか。

俺は……真に化け物になったのか。

もはや王弟ゴルゴナは、その存在も消え失せたのか」

全身を覆う漆黒のベールから覗く、ゴルゴナの八つの瞳に、

ほんの僅か、暗い悲しみの色が浮かんだ気がした。

だが、

「ぐんぐんぐんぐんぐん……」

俺は生きている。それは間違いないのだ……！

生きているぞ……タオ……！ 我はまだ生きている！

二度、貴様に殺されて……そして、また生まれた！」

地の底から響く悪鬼の呻き声、とも聞こえるゴルゴナの暗い笑い声が研究室に響く。

「我、再誕せり……」

グブブブブブブ……」

新たな一個の生命が、魔界に生まれた瞬間だった。

## 腐敗の雷竜

ゴルゴナは、大魔王バーンと直接話すことが許されている。

現在はまだバーンの元にはいないが、後の魔軍司令ハドラーでさえ

ベール越しにのみ謁見を許されていたことを思うと、

これは破格の扱いであった。

もつともこれは、ゴルゴナを復活させる際に自然と姿を見せる形になってしまったからで

信頼の証とかそういうものではない。

だが、ゴルゴナの語る『異界の話』はバーンの興味をそそののに充分なものだった。

強さだけでなく知も兼ね備えている大魔王はこの世界において知らぬことなど、

ほぼ無い……と言っても過言ではない。

神話・伝承・伝説。真贋織り交ぜほぼ全てを知ると自負するバーンにとつてすら、

ゴルゴナの語りの内容は興味深かった。

異世界アレフガルドと地上世界。

主神ミトラ、大地の神ガイア、太陽の神ラー、月と英知の神ミネルヴァ。

そして精霊ルビスと大魔王ゾーマ。

古代帝国ムーの超科学。

世界樹の葉を利用した不老不死の人形と異界の破壊神異魔神。

勇者ロトと、その子孫アルスの活躍。

「面白い……………実に面白いな。」

特に死者を生き返らすという世界樹の葉と、

おまえがそこから創り出したという不老の肉体。

素晴らしい技術だ……………まさに神域へと辿り着いた人類の叡智といえよう。

それが真実ならば、な……………」

もちろん拾った大蜘蛛が、気が違った“イカれ”で無いのなら……………という大前提での賞賛。

「ゴルゴナよ……………お前の力と知識……………」

嘘偽りでないことを余に証明してみせよ」

半信半疑の域を出ないバーンは、ゴルゴナへと迫る。

それは当然だろう。

全知全能たる大魔王バーンが、嘘八百の与太話に躍らされるわけにはいかないのだ。

バーンが片手を軽く振ると、三人と一匹の姿が宮殿から消えた。

次の瞬間には、彼らは酷く破壊された鬱々とした開けた荒野へと瞬間移動し、

「これはこれは……………この戦場跡は……………」

ひよつとしてかの冥竜王ヴェルザーが雷竜ポリクスと伝説の決戦を行ったという……？」

キルバーンが冷笑を浮かべながら問う。

「そう……………この地で、真竜の戦い」が繰り広げられたのだ。

ヴェルザーとポリクスの闘気と魔力、ブレスによつて全てが焼きつくされた地。

竜の爪痕よ……………」

数百年前に行われた、未だに語り草となつている名勝負。

「ゴルゴナよ。この地に王となりそこねた竜が眠つておる。

彼の者を甦らすのは余でも骨が折れる。

おまえの死者を司るという力を見せるがいい。

冥王の名が伊達ではないことを……………おまえが語つたものが

真実であることの証明の一端を見せよ」

バーンは静かにそう告げた。

「はっ……………御覧ください……………」

我が極めし地獄の秘術を……………!!」

三本指の蜘蛛の腕が、ゴルゴナの全身を覆う烏の濡羽色のローブから鋭く飛び出し、左右に広々と広げられる。

「ぐぶぶ……………、我…冥王…」

ここに永遠の暗黒より偉大なる魔界の竜を召喚す……………」

不気味な6つの灯火が竜の爪痕に灯りだし、

そこから素早く炎が円を描くように伸びていく。

「描かれたる六芒の魔法陣……………印されたるルーンの秘文字……………」

唱えられたる呪文の効力によりて……………」

天に燃ゆる金蠟宮（スコープオン）の火の心臓よ……………」

我が従僕にかりそめの命を与えるべし……………」

旧き世の殺戮者 猛々しき魔界の竜よ 永遠の闇より来たれ!!」

ゴルゴナの詠唱が終わるとともに、

大地より瘴気が染み出し、それに追従するように骨がズズズ…と湧き出る。

「……………!?!?」

「ハ、ハ、これは…」

ミストとキルの両名も驚きを隠せない。

地面より這い出た巨竜の骨に、瘴気を纏った腐肉が纏わりつく。

千切れた神経が、筋肉が、やがて旧き偉大な雷竜を形作り――

「……………素晴らしい」

全能の魔界神すら感嘆させた。

「グオオオオオオ……………！ アアアギギギギギギギギ！！」

痛イ……………！ 体ガ…痛イ……………！ 早くオレを、安息の眠りに戻スノダ……………！！」

腐臭を放つ雷竜が、激しい痛みに半ば我を失いながらも

己を甦らせたであろう、目の前の黒衣の男を威嚇する。

しかし、

「それはできぬ！」

ゴルゴナは一蹴する。

彼の対応は慣れたものだ。

「グ、グ……………き、貴様ア……………！ 死…ね……………ライ…テイ…ン！」

ポリクスの腐った体が電撃を一瞬纏う。

と、魔界の暗い空を轟音とともに閃光が引き裂いた。

雷光は鋭く蛇行しながらゴルゴナを貫く。が、

「……………魔界の者でありながらライテインを使うか。頼もしいぞ……………ぐぶぶぶ。

しかし、ライテインなどこの冥王に効かぬ」



ゴルゴナの衣すら焼けつくこと無く、ライデインはただ大地を焼くのみ。もちろん、彼の後ろに控える三名も無傷であった。

「め、冥王……………？ 貴様は……………ヴェルザーの手の者か……………!？」

生前の威力には遠く及ばないものの、己の得意とする雷撃が完全に無効化され、ボリクスの矜持は酷く傷つき、また彼の意気は消沈した。

「ヴェルザーなど関係無い。」

…我が従僕よ……………おまえの主たる冥王の言葉に耳を貸すがよい。

いずれ魔界に光を取り戻す”聖戦”が始まる。

その時、貴様は我のため……………そして、大魔王バーン様の御為に戦うのだ。

我が従僕に命ずる……………。

地上を焼き払い、人間を喰らい尽くせ。 天の神々を討ち滅ぼせ」

ボタリ、とボリクスの腐肉が垂れ落ちる。

大地に広がったその腐肉が、すぐさま異形の別種モンスターを形作る。

ボタリ、ボタリ、と更に落ちる濁った汁と悪臭放つ肉。

次々に不完全なアンデッド達が生まれ落ちていた。

「なぜ……………貴様らのために戦わねばならぬ……………!？」

「お前の主たる我がそう命ずるからだ……………」

「ぐ、グオオオオオオオオオオオツツツ!!!

フザケルナ……………！ オレを誰だと思っっている……………！！

知恵ある竜……………雷竜ボリクスなるぞ……………！！」

「ぐぐぶぶぶぶ……………古、冥竜に敗れし哀れな雷竜よ……………。

重ねて命ずる……………：パーン様の手駒となれ」

反骨の意気地を折られた雷竜の腐った瞳に、

再び敵愾心が燃え上がる。

かつてのオレならばこのような無礼者は即座に喰らってやったというのに！

そう思うボリクスであったが、体が思うとおりに動かない。

激しい痛みが絶え間なく襲い、体から自由を奪っていた。

そして気付いた。

「!? き、貴様！ オレの皮膚を……………わざと創らなかつたな!?

このオレを……………痛みで縛ろうというのか……………!!」

「そうだ……………おまえは業火の鎖で永劫縛られ続ける。

我は冥王にして死の支配者……………

我が妖術によって甦った者は誰であれ我が命令に背くことは出来ぬのだ」

魔界の大地に風が吹く。

それはそよ風に過ぎず、

荒れ果てた地に僅かな雑草程度しか雑ぐことの出来ぬものだったが、

「グウウウウウ……、イ、痛イ……痛イ……痛イ……い・た・い……い！」

全身を焼くような苦痛が休むこと無く駆け巡り、

誇り高き雷竜から正気を奪っていく。

「天と地の全てを滅ぼした時、おまえに再び永遠の安息を与えてやろう」

ゴルゴナは冷酷に言い放つ。

その放言っぷりを後ろで聞いていたキルバーンは、

口の中で押し殺しながらも、クツクツと笑う。

(いやいや……なんとも堂に入った外道っぷりだねコレは)

「ぐぶぶぶぶ……腐った肉でできたおまえの体……」

むきだしの神経が刺激され、風が触れただけで気が狂うほどの痛みが走る……。

だが……その地獄の苦しみが……お前の力を限りなく増幅させるのだ」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

痛みに狂った竜の咆哮が魔界に木霊する。

「ぐぶぶぶぶ……、聖戦が発動するその時まで

我が冥界の魔牢にて痛みを狂い続けよ……」

ゴルゴナの黒きマントが不気味に伸びると、そのまま猛る竜を覆い包む。

ボリクススの巨体がすっぽり覆われると黒のマントはそのまま地の影と融け合って、雷竜を、その腐肉から産まれた不死生物ごと魔界から消し去った。

しばしの沈黙がながれ、

「素晴らしい見世物であった…ゴルゴナよ」

大魔王の素直な称賛であった。

「お褒めに預かり恐悦至極……」

ゴルゴナが猫背を更に俯かせて平服する。

「死を司る冥王の名に恥じぬ力だ……」。

改めて余から冥王の称号をおまえに授けよう」

「ははーっ」

今さっきまで雷竜が存在した場から、

ゆっくりとその視線をゴルゴナへと向けるバーン。

「お主の力は見届けた。

ならばその“知”にも期待させてもらうぞ……？

おまえの言っていた不老不死の人形……再度造り出すがいい」

「……そ、それは…難しいかと思われまします……」。

こちらには、我が故郷に存在した世界樹が無く……

例の人形は死者をも甦らす世界樹の葉から、

その成分を抽出することが肝でございます故……」

その言葉に、しばし大魔王は考えこむような素振りを見せ、

徐ろに片手で美し整えられた白いアゴ髭を撫でる。

「無いのならば創り出せば良い。

進化の秘術を秘めたる我が鬼眼の力……お主に貸し与えてやろう」

ニヤリと老帝が笑った。

大魔王バーンのお気に入りである魔界の第7宮殿。

そこに戻ってから、ゴルゴナの破格だった扱いはさらに良くなった。

それは『気まぐれで拾った半蟲半人のペット』から

『正式な側近』へと昇格した証。

ゴルゴナへと与えられる道具・書物の類はより上質のものへと変わった。そして中でも別格の物が、

「この宝玉には余の“鬼眼”の力が込められている。

進化させるものの種類、大きさにもよるが……大体10回も使えば魔力が切れる。

この“進化の秘宝”を5つ、お前に授けよう。

それを使いきるまでに……一定の成果を余に見せるのだ」

進化の秘宝であった。

この宝玉の力にゴルゴナは戦慄した。

(こ、これが大魔王の力……我の及ぶところではない……)

何の変哲もない植物に使っただけで、

高位の魔族に迫ろうかというモンスターが生まれたからだ。

ゴルゴナは感動と同時に絶望した。

出し抜けるかも知れぬ……という淡い希望が、完全に身の程知らずな野望だったことを悟った。

(純粹な魔力は……異魔神とそう大差はないかも知れぬ。

だが、バーン様の魔力の応用力・転換力は……恐らく異魔神を上回っている。

それに……奴は我がいなければろくに動けぬ不出来な神であったし、な)

かつて自分の故郷を滅ぼした時に見た異魔神の高密度言語魔法。

あれは自然災害を連発するのかなような恐るべきものだったし、

海王リヴァイアサンから知性を奪った超魔力も見事だった。

だが、異魔神は独り立ちできぬ哀れな破壊神でもあった。

降臨に必要なお膳立ては全てゴルゴナが行った。

不滅の肉体も、自分が用意した。

ムー帝国における暴走に学んで、

異魔神の肉体に仕込む『キルスイッチ』の準備も密かに推し進めていた。

あの時……エツゾで勇者一行を追い詰めた時に、闇のオーブの行方さえ掴んでいれ  
ば。

そうすれば異魔神を己の傀儡として、世界を思うがままに支配できたのに。

ムーを復活させ、新たな太陽王になれた筈だったのに。

その暁には、兄弟の誼で夕才を相談役なりなんなりにして飼い殺してやつても良かった。  
た。

だと言うのに精霊ルビスに誑かされた愚かな兄は……！

瞬間的に、様々な記憶と感情が交差する。

(フン……だが、今となっては全て過去のことよ。

我は……この世界に……大魔王バーン様に賭ける……。

この御方がいれば……永遠の安寧と至福は、手に入る……！  
死を回避し、美味しい飯を食い極上の美酒に酔い、

世の美女達を囲ってどっぷりと欲望の極楽に浸かり続ける。

そんな余りにも俗物染みた望みを魔界の神へと願う。

そして願いの代償として魔界の神へ捧げる供物は、

「人間共……そして神々……グブブブブブ」

一人の元人間の欲のために、地上の人々と天上の神達……  
その全てが犠牲の祭壇へと祭り上げられた。



## 探求者ゴルゴナ

大魔王バーンの命を受けてゴルゴナの研究漬けの日々が始まる。

かつて、兄や同僚達と不老不死の夢に突き進んでいた時以来のことだ。

だが、あの時と余りにも環境が違う。

魔界のバーン勢力の技術は決して低くはない。

しかし、聞いた話によるともう一人の実力者、冥竜王ヴェルザーの陣営の方が魔導研究は一步先んじているらしい。

だが、そのヴェルザーの技術力ですらムー帝国の超文明には叶わないだろう。

ムーは時間と空間をも自由に操る超時空国家で、

あの文明水準にあつて初めて不老不死研究の基盤が整うのだ。

ゴルゴナがいかに奮闘しても、一人では限界がある。

数十年の年月があつという間に過ぎ去つてしまい、

気付けば、彼が授かつた進化の秘宝は残り2つ。

30回もの進化を無駄にしてしまった。

彼の研究所の廃棄庫にはいくつもの異形のモンスターが転がっている。

(やはり、世界樹の再現は不可能だ……………。

あの樹は神性が強すぎる……………

あれを生み出すということは……………新たな神の一柱を創造するも同義)

ゴルゴナが、己が書いた研究日誌を乱雑に破り捨てる。

彼が書き溜め、そして捨てた魔導研究書の数は既に四桁を超える。

「だが、必ず何か手はある……………科学と魔導の研究において、不可能などということはない。

壁は必ず乗り越えられる……………。

ただ見落としているだけだ……………!

必ずある……………発想を変えるのだ……………」

ぐぐぐ、という不気味な呻き声を上げながら、ゴルゴナは六本の腕で腕組をし、考えこむ。

(……………昔は、こうした時にはあの6人の意見を聞いたものだったが……………。

思えば、彼奴らは優秀な研究者であり錬金術士であったな。

奴らの頭脳を失ってしまったのは正直惜しい。

ともに、ムー崩壊を生き延びるために大蜘蛛と融合し……………

その媒介に人工生命体の不死細胞を使用した。

………我の人間であつた時の肉体があれば……

そこからエキスを取り出すことも不可能ではなかつたであろうが……、

——む……そう、か。 我の今の体は、王弟ゴルゴナと大蜘蛛の肉体が混ざり合つてい  
る。

ならば………！)

「以前よりも更に深く、詳細に！ 我が細胞を調べる必要がある………！」

ゴルゴナはまさに不眠不休、一心不乱の研究を続けた。

それは彼の人間時代……魔導研究の第一人者としての血が騒いだ結果である。

そして、

「ぐぐ、ぐぐぐぐぐぐ………我の予想通り………！」

1万2千年前に混ぜ込んだ人形のエキスは、未だ我が体内に残っていた。

さすがは我が創りだした肉人形よ………劣化は見られんな………。

しかも………それに加え、あの6人の残滓までも発見できたのは僥倖。

一気に襲いかかつた年月によって風化し尽くしたと思つていたが………」

己の体内から抜き出した世界樹のエキスを収めた試験管をゆるく振るう。

(………念のため………魂吸器で我が魂魄の再調査もしておくべきであるな)

ゴルゴナはあの者達の知恵と経験を欲し、

それ故に、出来るかもしれないのならやる価値はある。そう判断した。

すぐさま魂吸器に魔力を注ぎ起動させる。

するとすぐに、

(やはり……………我が精神にも奴らの搾り滓が混入していたか)

と判明した。

以前は自分と大蜘蛛の魂に気を取られすぎて見落としていたようだった。

(しかし、細胞も魂魄も、我に何の影響もないことから分かる通りあまりに微弱。

これではいかに培養しようとも奴らの復活は不可能……………。

そして、これっぽっちのエキスではどの道、不死人形を造るのに足りぬ。

……………ならば……………)

己の体内に、カスとはいえ取り入れてしまっている6人の古代ムー人。

それがために冥王ゴルゴナが得意とする死の秘術を用いた復活はできない。

一応は、彼らはゴルゴナの体内で生きている状態なのだから。

「やはりこれ以上の成長は無理か……………」

胎児サイズを超えると肉体の崩壊が始まる。

やはり、ベースとなった細胞に……………もはや生命力が残されていないのだ」

半年の後、6人の古代ムー人は半透明のカプセル内に胎児状態で漂っていた。

（我から採取した世界樹のエキスは非常に貴重なもの……………」

しかし、一度抽出と蒸留の法を確立してしまえば二度目は容易い）

世界樹のエキスを使えば生命力の枯渇などあつという間に補える。

ゴルゴナが体内からかき集めたエキスは濃度が薄く、

しかも取り出しすぎればゴルゴナ本人が衰弱してしまう。

血液等と同様に、時を置けば体内で一定量は作り出されるが、

それには多くの時間がかかる。

バーンの期待に添えるような不老不死を成し遂げるには、

今のペースでは千年近くかかってしまうだろう。

「……………ならば、このエキスはうぬらに使うが吉か」

コンコン、と鋼のような爪でカプセルを叩く。

そして6つのカプセルと無数の管で繋がった吸水装置に試験官を押し込むと、

カシユツと短い音がし即座にそれが飲み込まれ、カプセル内をエキスが満たす。

「ぐいぐいぐいぐい……」

ツークーマン、オティカワン、トピアポ、フロレンシア、キアーラ、ポポルヴー。  
再び我のためにその頭脳を役立てよ……」

「そして、蘇ったのはあただけ……というわけですか」

エキス投入から1週間がたった。

「うぬらの貧弱さが、我の予想を上回っておっただけのこと。

脆弱な奴らめ……」

「……ゴルゴナ様だって人間だった時は運動音痴の太っちょだったじゃないですか」

「……………」

今、黒衣の冥王と対等に話しているのはどうみても人間の女だった。

しかもその人間は、太く短いホクロのような眉が特徴的だが、

その瞳は大きな愛らしいもので、黒々とした長髪も相まって清楚な雰囲気とする美女である。

まさに美女と野獣。

彼女は古代ムー人の一人であり、名をキアラという。

カプセルから出たてで、

彼女の意外に肉付きのいい肢体は培養液で濡れていてなかなか艶かしい。

割と豊かな胸部と下腹部の局所らはしつかり両手で隠し、

微妙に体もねじって恥じらっているからより一層艶姿が際立つ。

そんな彼女の周りには、干からびてヒビ割れた5人の残骸が転がっていた。

エキスが足りず、肉体が崩壊し精神と魂の固定にも失敗した成れの果てである。

「あの……………何か着るものを下さい」

「そこに布がある……………巻け」

「えええっ!? 乙女に向かつてなんてことを!」

「キアラ……………早速だが、

古代ムーにおいても随一と言われた錬金術の腕前を振るってもらおうぞ」

「ちよ、ちよっとお待ちを! いきなりですか!」

1万2千年ぶりにまともな体に戻ってしかも蘇りたてですよ!? 休暇を申し立てま

すう！」

割れ物を包んでいた布を適当にひっぺがして、

自分の裸体にまきまきしながらキアラーが涙目で訴える。

「ムー帝国のような福利厚生が魔界にあるとも思っておるのか？ 休暇などない」

軽く一蹴する。

無慈悲であった。

「そんなあゝ！ というか魔界ってどういうことなのですか！

魔州湖からこつち、全然情報が入ってないからさっぱりです！

説明をお願いいたします！ あと塵取りどこですか？」

死体を通り越して残骸になっている元同僚5人を片付けながら、

キアラーは訴えを続ける。

冷酷なゴルゴナと付き合いが永いだけあって色々と耐性ができていた。

彼女自身、研究に入れ込むと結構酷いことを平然とやってのける性分で

なんだかんだでゴルゴナと気が合い、太陽王ラ・ムーに見捨てられるだけのことはある。

「……………そうであったな……………説明してやろう……………」

そこから小一時間ほど今までの経緯を教えてやったゴルゴナであった。



ツーカーマン達の残骸は潔癖症のキアラが綺麗に分別して捨てた。

小間使いの魔族女性から洋服を貰ったキアラは、  
今、なかなか際どいスリットの入った極薄のドレスを着ている。

しかし、大蜘蛛と完全融合して人としての性欲やらが低下しているのか、  
それともただ研究欲に思考が支配されているのか。

ゴルゴナはキアラの太ももに眼もくれず

次元乱気流やら並行世界やら多元宇宙論等の説明を熱心に行っていた。

「つまり我々は時空の乱れによってこの世界に流れ着いた……とお考えで？」

居室にあるソファアの、絹のような肌触りを楽しみながらキアラが問い返す。

「ぐんぐん……そうだ……後は言った通り……」

我らは大魔王バーン様の御力によって再誕した」

魔法関連なら大魔王バーンの知識は群を抜いておりゴルゴナと対等以上に語り合え

る。

しかし科学関連ではゴルゴナは孤独だった。

それ故にキアールラという同郷の部下が復活してくれたことは、

ゴルゴナにとって色々な意味で助かった。

「5人を再生させるのはしばし捨て置く……………」。

奴らに必要な量のエキスがあれば、不死のゴーレムが創れるからな…………。

キアールラよ…………おまえはバーン様より賜りし魔具の数々を元に、

古代ムーの研究施設と同等のものを造るのだ。

若くして天才と謳われた貴様だ…………不可能ではあるまい」

「魔具を拝見しなければ何とも言えませんが…………お任せ下さい」

浅く一礼したキアールラは、控えめな口調であるが声色は自信に満ちている。

超帝国ムー全土から集められた魔導士・錬金術士達。

その中でも最も優秀な6人に選出された自負であった。

彼女が合力してから不老不死の研究速度が格段に上がった。

往時の水準とまではいかなかったが研究器具の性能はだいぶレベルアップし、

ゴルゴナの体内からのエキス抽出の効率が飛躍的に上昇した。

キアールラ復活から僅か2ヶ月のことである。

「では、そのエキスで人工生命体の生産を？」

「やらぬ。高効率な結構だが、このペースでいけば我が枯渇するわ。

抽出対象そのものを見直さねばならぬ。

そもそも……………あの時、我らが創ることができた不死のゴーレムは偶然の産物。

その予期せぬ変異へと至る過程を記録した莫大なデータは帝国崩壊とともに失われた……………。

キアララよ……………おまえはあのデータ群を覚えておるか？」

ゴルゴナが、黒衣から八つ目の内の6つを覗かせ視線で訴える。

「いえ……………それはさすがに……………」

ムーが誇った研究所のデータバンクである。

それに記憶されていた情報量は、神々の頭脳ですら覚えきれぬだろう。

「であろう。」

だからこそ前回、異魔神復活のために闇のオーブを探しまわらねばならなかった。

此度は、その闇のオーブすらないのだ。

ならば、我らは記憶を頼りに試行錯誤を続けねばならぬ……………。

そしてエキスの源そのものを創る必要がある……………そう、すなわち世界樹を！

「せ、世界樹を創る!? そ、そのようなことが……………できますか……………!?!」

キアーラの大きな瞳が見開かれる。

かつて、神をも恐れぬ研究に邁進してきた彼女でさえも驚愕を隠せない。

「できる……！」

我一人では成し得なかっただろうが貴様が手に入った。

そして……今の我らには、かつて無かったものもある……！」

「それすなわち“進化の秘宝”なり……！」

ゴルゴナのローブから輝く2つの宝玉が取り出され、

爪で器用に挟まれたそれは美しい暗黒色の光を放つ。

「進化の……秘宝……」

「ぐふふふ……キアーラよ。かつての我らの悲願……完全なる不老不死は近いぞ」

ゴルゴナの八つ目がギラリと光る。

## 魔界樹の誕生と冥竜王の挨拶

「それが例の期限までに、おまえが用意した成果か？」

玉座に腰掛けながら、大魔王は冥王から差し出された植物の苗木を眺めている。差し出す冥王の横には、

古代ムー文字が刺繍された装束で身を包んだキアラが片膝を突いていた。

「はっ………世界樹のエキスと魔界深部から採取した魔晶石……」

その2つと魔界のモンスター・ダークドリアードを融合させ、

それに進化の秘宝の力を照射したものでございます……」

どす黒い葉には所々パールの筋が入っていて、

まだ小さな幹にはダークドリアードの面影があり、蛍光色に近い不気味な緑。

そして苗木全体からはどこか禍々しいものが感じられる。

「これぞ………我らが研究の成果……」

苗木の葉は、まだ小さいながらも

世界樹の葉と極めて酷似した成分であり、十分に代用として堪えられるもの。

我らの魔界に咲く新たな世界樹でございます……」

ゴルゴナの左右2本の腕、六本の爪によつて苗木が抱えられていた。その苗木を見る大魔王の瞳は満足気である。

「ふむ……余の予想よりも遥かに早いな。」

だが、その苗木からは確かに強力なものを感じる……。

ゴルゴナよ……苗木はどれ程で使い物になるのだ？」

「100年もあれば、十分な量の葉がとれるほどに成長するでしょう。」

ぐぶぶぶ……その時こそ、不老不死のゴーレムの量産が可能です」

ゴルゴナの言を聞くと、

バーンは双眸を閉じ口角をやや上げてるとククク、と笑い出す。

「実に素晴らしい……。」

おまえが語つた世界樹が、

我が魔界の不毛の大地に芽吹く時が僅か100年後にやってくるとはな。

ふつ、はつはつはつはつ………魔界に芽吹く大樹、か。

魔界樹と呼んだほうが相応しかろうな………良い気分だ」

バーンは豊かな髭を撫でながら、しばし沈思して

「………おまえと、その女……キアラに、何か褒美をやらねばなるまい。

望みのものをとらせよう。言ってみるがいい」

悪童染みた笑みを浮かべる。

魔界の神とまで言われる大魔王が「望みのものを」と言っているのだから、まさしく何でも願いが叶うと思つて差し支えないだろう。

「ぐふふふふ……我が望みは唯一つ。

バーン様とともに永遠に全世界を支配すること……………」

天界を滅ぼしたその時に褒美を賜りたく……………グブブブブ」

そのゴルゴナの言葉を受け取つて、

大魔王は鼻先であしらうように素気ない素振りだが、

バーンの眼に籠められた感情は冷淡なものではない。

聞く人によつてはゴルゴナの発言は、

迂遠なヨイシヨをしゴマをする太鼓持ち……………と思われなくもないが、

バーンと2人の大幹部は知っている。

冥王ゴルゴナは、

心底から「全世界の永久支配」を望んでいる欲深き大蜘蛛だ……ということ。

そして彼は、その望みを叶えるためには大魔王バーンに尽くすのが一番効率が良い、ということに気付けるだけの知恵もある、ということすらバーンは理解している。

完全なる利害の一致。

そして決して埋まらぬ実力差がある。

だからこそ冥王ゴルゴナは絶対に自分を裏切らぬと、大魔王は知っていた。  
「くく……それもよからう。

では、キアラよ……。

人の身でありながら良くゴルゴナを補佐した……褒めてつかわそう。

何なりと願いを叶えてやろう……申してみよ」

「はい……。では遠慮無く。

私の望みは永遠の若さ……永遠の美しさ。

幸いなことに、美貌は生まれ持ったものがありますので

バーン様は永遠の若さをくださるだけで結構です。

ゴルゴナ様のエキスも魔界樹も、どちらも勝手に使うわけにはいかなくて困ってましたの。

あと、オマケに2歳ぐらい若返らせて下さると嬉しいですね。

研究してる間にそれぐらい老けてしまったので」

この場で唯一の人間であり女であるキアラ。

ズバズバと欲望全開で嘆願する。

余りにも物怖じしないその態度に、大魔王の左右に立つ2人も一瞬呆ける。



「…………君、スゴイね。 何ともストレートに言うんだなア…。

さすがはゴルゴナくんのパートナーだ…………。

ムー人って皆こんななのかい？」

キルバーンが呆れる。

ミストバーンも、沈黙を保ちながらもどこことなくキルと似た空気であった。

「…………いや、こやつはかつて太陽王ラ・ムーに糾弾されている最中にも、

一人平然と笑顔を保っていた筋金入り…………。無礼はご容赦願いたい…………。」

黒衣の冥王も、やや嘆息している。

神を冒瀆する研究に全く悪びれず邁進し、

しかも現人神となった異魔神とも相対したこともあるキアラ。

彼女は神…あるいはそれに類するものに“慣れていた”といえる。

「フツ…………よいよい。

瑣末なことよ…………。永遠の若さ、か。 良き願いだ。

人程度を不老にするのならば容易い」

バーンがそう言った瞬間、

大魔王の額の眼…………。鬼眼から一条の閃光が放たれキアラの胸を貫く。

瞬間的に体を貫いた熱と衝撃に、キアラは短く呻きながら体制を崩し突っ伏した。

しかしすぐに立ち直ると、

「……………ああ……………なんだか力が満ちるような……………気がします。」

今ので若返って、しかも不老ですか？

ゴルゴナ様どうです？ 私若返ってますか？」

己の顔をペタペタ触り確認に移行する。

ゴルゴナは、

「わからぬ。 2、3年如きどうでもよかろう……………誰が見ても差など気付かん」

改めてため息を付いた。

魔界樹の苗木を、バーン領内の比較的豊かな土壤に植えてから約10年。

豊か…とはいっても所詮は魔界。

目くそ鼻くそのレベルで、地上の豊かさに比べれば“不毛の大地”の領域を出ない。

魔界樹に万が一が起きぬように、キアラによる月一回の視察と、

バーンが招集した魔界樹守備軍まで常設されるという念の入れようである。だが、大魔王のその入れ込みっぷりに、

ついつい食指が動いてしまうものがこの魔界にはまだ一人……いや一匹いる。魔界最強の巨竜にて最後の知恵ある竜・冥竜王ヴェルザー。

協定を結び、その証としてキルバーンも派遣して友好を示している彼だが、突然に麾下のモンスター部隊をけしかけてきた。

『大魔王バーンが不老不死の大樹を育てようとしている』という情報を

どこからか掴んだ冥竜王は（間違はなくキルバーンが出処であろう）

それが本当かどうかを調べたかった。

そして隙あらば奪いたかった。

りゆうせんしとドラゴニットの混成軍団。その数およそ400。

ヴェルザーの勢力から考えれば全く本気ではない。

つまり、調べたいとか奪いとか以前に、ただ“茶々を入れない”のであった。

言ってみれば魔界流の挨拶である。

「魔界樹つてのを育てているんだって？ どれ、ちよつと見せてくれないか」程度の挨拶。

バーンとしても慣れたものだ。こんなことを何百年とヴェルザーと繰り返し

てきた。

「この程度の小競り合いで協定は揺るがん……。

……しかし、余の魔界樹に手を出してきたことは許せん。

ヴェルザーめには少々お灸を据えてやる必要があるな……」

慣れているが、今回は少々お冠。

(かと言つて……ミストを出すほどでもない。

当然キルバーンは使えん……)

との判断から自然、冥王にお鉢が回つてきた。

「魔界樹に傷がつかなければ何をしてもよい……。

ゴルゴナよ……ヴェルザーが二度と下らぬことをせぬように、

その者らに……地獄を見せよ——」

冷たく、老いたる大魔王は言い放った。

知恵ある純粋なドラゴンは、正真正銘ヴェルザーが最後であるが、

“混ざった”ドラゴンには一定の知性は、まだある。しかし純粋種に比べればその分力も劣るが、

それでもこうして隊を率いるのには重宝している。

「グギャギャー！ 見えたぞー！ あれがマカイジユとやらを守っているバーンの軍勢か！

我らドラゴン族は魔界一の猛者の群れぞ！ 者共蹴散らせエー！！」

先頭を飛びりゆうせんしの掛け声に合わせて、竜族の群れが猛り、突撃を開始するが「おいチョット待てー！ なんだあれー！ あの雲おかしくないか？」

別のりゆうせんしが指をさすと、そこには不気味な雷雲が広がっていた。

魔界の住人から見ても、明らかに邪悪で恐ろしげなその暗黒の雲。

今の今まで猛っていた竜の群れがピタリと止まってしまふ。

「い、こつちに来るぞー！」

「雲の上に……………ま、魔族…なのか？」

瘴気纏う暗黒の雷雲の上に座す黒衣の者。

誰が見ても普通では無いと分かる。

栄光あるヴェルザーの一族……

ヴェルザーに属する者として抱いてはならぬ感情が彼らを蝕んでいく。

怯えと恐怖。

「ぐふふふ………我が名は冥王ゴルゴナ。

冥界を司る死の支配者………お見知り置きを………そして………」

漆黒のローブから異形の右腕が突き出されると、

その瞬間、ヴェルザー一族のモンスタラーの眼下の大地が、ごっそりと抉れ浮かび上がる。

「なんだ!? 何の呪文だ!」

「散れっ! 散れえー!」

りゆうせんし達は、即座に“浮かぶ大岩が次に何をするか”を理解できて叫んだ。

しかし既に、群れを包むように岩石のベールは完成し、

「死ぬがよい」

冥王の宣告とともに、三本の指がグツと握られる。

次の瞬間には、群れが存在した空間は轟音とともに巨塊で埋め尽くされて、

岩々の隙間から僅かに血肉が覗く。

瞬間的に大多数のドラゴン族が圧死すると、

「ひ、ヒイイイ……!! なんなんだコイツ! た、退却しろー!」

「ギギギギ! グガアアア!!」

残されたりゆうせんしとドラゴニット達は、矢も盾もたまらず逃げ出す。しかし、

「ぐぶぶぶ……どこに逃げる、下郎。」

貴様らが行く着く場所はヴェルザーのもとではないぞ……?」

嘲笑うゴルゴナが、今度は左腕を冥き天へ掲げ

「我召喚す! 天に燃ゆる金蠍宮スコレオンの火の心臓よ、我が従僕にかりその命を与えよ!」

呪言を唱えると、先ほどの岩石群の間隙……

圧潰したモンスター達が、その狭間からぐじゆる、と這い出てき……

「や……めろ……やめてくれえ……いた、い……」

「死なせてくれ……た、た、す……け、て……」

「グ、ガアアア……! アゴゴゴギギイ……!」

見るも悍ましいひしやげた肉体を引きずりながら次々に甦りだした。

「殺せ……! 貴様らが安息を得るためには我が命に従うしかないのだ……ぐぶぶぶ」

必死に逃げるりゆうせんしが振り返って見た光景は、

崩れる肉体の同胞が、同胞のはらわたを食いちぎり、

そして飛び散った臓物から更なる化け物が生まれる地獄絵図。

そしてそれを眺めながら、嘲笑う冥王であった。

「あ、悪魔………！」

その言葉を最期に、りゆうせんしは数分前まで仲間だったモノに首をはねられた。

後日、ヴェルザーの領土に400体のアンデッドが攻め寄せてきた。

「バーンの意趣返しか」と部下の竜達に迎撃を命じたヴェルザーであったが、

簡単に片付くと踏んでいた予想はあっさり裏切られる。

切っても潰してもアンデッドどもの進撃は止まらず、

しかもその切り口からはどんどんと異種の腐敗モンスターが発生し、

混乱はとどまることを知らなかった。

部下からの報告に、とうとう冥竜王その人が出陣するはめになり、オマケに

「ハ、ハ、ハ、つらは………！！」

400体のアンデッドは、全員己の部下の成れの果てと判明した。

さすがにヴェルザーのプレスには敵わず全ての骸は灰塵に帰したが、



それ以後、ヴェルザーはバーン領への“ちよっかい”を控えるようになった。この小規模ではあったが衝撃的だったこの戦により、

『大魔王のもとに冥王あり』とゴルゴナはその名が広く知られるようになる。

## 名工が、来て作って帰った

現在、大魔王の宮殿には珍しい客が訪れている。

精悍な偉丈夫然とした魔族の青年で、大魔王の前でも一切臆することがない。

黒々とした長髪を後ろで縛り垂らしていて、なかなかの男前だ。

彼の名はロン・ベルク。

魔界一腕が立つと言われる名工である。

だが、昔の彼を知るものは声を揃えて彼をこう評するだろう。

魔界の伝説的剣豪ヒュンケルにも劣らぬ天才剣士、と。

「どうだロン・ベルクよ。

余のための武器を作ってはくれぬか？

余の力に耐えられる武器……余の真価を発揮できる、

神々の伝説の武器にも劣らぬものを、おまえならば作れるはず……。

どうであろうか」

長大な食卓の上座にゆったり腰掛ける大魔王が、伝説の名工を口説く。

青年は、美しい魔族の美女に注がれたワインで唇を湿らせながら、

「……………面白い。」

神どもより優れた武器……………作ってみせよう」

言い切ると血のように紅い美酒をグイと飲み干す。

「というようなことがあってね」

大鎌を担いだ漆黒の死神が、暗黒のローブで全てを覆う背虫の冥王へと話しかける。  
現在、死神の親友は大魔王のお供をしているため冥王が暇つぶしの相手選ばれた。  
「ほう……………200歳にもならぬ若造と聞いていたが……………」

鍛冶師としての名声は聞こえておったが、バーン様が直接乞うほどとはな……………  
鉄と石の中間の性質を持つ“魔鉱石”の切り出し現場で指揮を執っているゴルゴナ。  
百ウン十年程前から大改修が始まっていた『大魔宮』に使われるもので、  
予定よりも魔鉱石の産出が遅れていたためゴルゴナのアンデッド軍団の出番となっ  
た。

数千のアンデッドを不眠不休で作業にあたらせている。

腐臭漂う採石場までわざわざ来るあたり、キルバーンも暇人である。

「う、うええええええ くさーい！ 鼻がひん曲がりそうだよ……。」

早く帰ろうよキルバーン！」

「へえ？ ピロロって鼻が無いとばかり思ってたけど臭いわかるんだ？」

「……………馬鹿にしてるだろ」

死神の肩に常にへばりついている小柄な一つ目ピエロが不満気に主人へと噛み付く。

彼の真の正体を知るものがこの光景を見たら、

その自虐ネタつぶりに思わず吹いてしまうだろうが…

幸いゴルゴナには気付いたような素振りはない。

「それで……………おまえは、まさかわざわざこここまで雑談をしに来たのか？」

円柱状に窪んだ採石場を崖の上から見下ろすゴルゴナは、

指揮を執るといふよりは監視しているだけだ。

ひたすら労働を繰り返す死に損ないのモンスター達は、延々と単純作業を行う。

そこには高度な知能もゴルゴナによる複雑な指令も必要ない。

体が崩壊し、完全な機能不全に陥るまで働き続けるまさに死の奴隷である。

「うゝゝん……………そのまさかなんだよねエ。」

だってバーン様もミストもロン・ベルクの接待で忙しいみたいだし、どうせ君も見てるだけで暇してるんだろ？ いいじゃないか」

「いいじゃないかいいいじゃないかー！ きゃははー！」

ピロロは怨嗟の声を響かせながら働き続ける動く死体達を愉快そうに眺めており、そのテンションは妙に高い。

「いやぁ良い眺めだね……。君の、魔法とは異なる術…妖術だっけ？

羨ましいよ……。死者を操るなんてスゴイ素敵だ。

ボクも死神なんて呼ばれてるけど、君のほうがいかにも“死の神”って感じだ」  
クスクス笑いながらの死神の軽口は、どうにも皮肉のように聞こえる。

が、実際は心底からの褒め言葉である。

ゴルゴナの冷酷無惨・残酷非道な性格と能力に、  
キルバーンは最大限の敬意とシンパシーを抱いている。

卑怯で陰險な性質もまるきり隠さず、

取り繕おうとする努力すらしない所にも、キルバーン的にはポイントが高い。

「君とボクは似たもの同士だ。そう思わないかね……。ゴルゴナ」

死神は楽しんでいた。

“本当の主”には少し申し訳なく思うが、

大魔王バーンは冗談を解する懐が広い男だ。

そしてミストバーンとは何もかもが正反対であるにも関わらず馬が合う。

冥王ゴルゴナとは“同好の士”。

「……………かもしれぬ」

ゴルゴナもまた、無感情にあっさりと認める。

が、それきり興味が無いという風で話題を提供することもなく、

むしろ最初から目線すら合わせていない。

「君って、喋る時は良く口が回るけど、雑談するタイプじゃないんだね。

ミストといいゴルゴナといい、少しは会話を楽しんだほうがいいんじゃないかな」

「……………おまえが喋り過ぎるだけだ」

結局、死神は石切り場から帰ることはなく、

ゴルゴナの仕事が終わるまで無駄話を続けることになる。

陽気でお喋りな死神に、冥王は相槌を余儀なくされたのだった。

1ヶ月もかからない仕事だった。

帰れば噂のロン・ベルクの顔を拝めるだろう。

そう思つて帰還したゴルゴナだったが、

「ロン・ベルク様は、先程………帰る、と一言おつしやつて……」

手近な侍女に聞けば幾つかの武具を大魔王に献上してから機嫌が悪くなり、突然、本日を限りにバーンの元を出て行つた……とのことであつた。

「ぐぶぶ………随分と気難しい男と見える………」

「それかよつぽど子供つてことさ。」

帰還した挨拶を主へとする前に、

とりあえず死神と冥王はその短気な名工のツラを拝みにいこうと

宮殿の正門口へ歩いて行く。

長く続く白亜の廊下に、漆黒の魔人兩名の足音が響く。

カシヨリ……という爪の音と、カツンツという銀のブーツの金属音が交互に反響し、

それ以外の音は一切しない。

静か過ぎて耳鳴りでもしそうなほどであつた。

そこに、段々と別の音が響き始める。

意思ある者の声で、そして何やら苛烈な勢いのある声色だ。

歩調はそのままだに、声が聞こえた瞬間思わず見合ってしまう冥王と死神。

(……なにごとだ?)

(さあ?)

と目線だけで意思疎通を交わす。

その怒声が聞こえたと同時に僅かに殺気混じりの闘気が感じられたが、

それでもこの2人は別段急がない。

怒声が聞こえた方向からは、彼らが良く知る気配を放つ存在が感じられたからだ。

ロン・ベルクとやらが何かをしたとしても、或いは別の曲者がいるのだとしても、

気配の主・ミストバーンが殲滅するだろう。

ひよつとしたら……方が一にもミストバーンが敗死しても、

「最強の手駒が手に入る」としかゴルゴナは思わぬし、

「ミストが死んだら悲しいけど……お仕事が捗るなア」とキルバーンは考えるだろう。

もつとも、両名ともミストバーンが負けることは永遠に來ない……とも思っているのだが。

そんな風にどこかのんびりとやってきた冥王と死神。

彼らがそこに着くと、白垂の床に小さな血の水たまりで汚れていて、



その傍らにはミストバーンが黙って立っていた。

ミストバーンが両手の指を素早く空で切ると、

彼の無機質な指から血が弾かれ床の血溜まりに落ちる。

「ミストは優しいんだな。ロン・ベルクがいたんだろ？　ボクが始末してあげようか？」

「……………」

キルバーンの問いかけに、ミストバーンはただ黙っているだけだ。

首を縦に振るでもなく、横に降るわけでもない。

「……………ロン・ベルクの意志が疎ましいのなら、

この冥王が…奴を立派な傀儡にしたててやろうか？　ぐぶぶぶぶ……………」

ゴルゴナの本気か嘘かわかりにくい言葉を受けて

ようやくミストバーンが光る目を力強く輝かせ冥王らを眼光で射抜く。

どうやら「手出しは無用」ということらしかった。

「ぐぶぶぶ……………甘い奴……………」

「……………」

やはり沈黙を保ったままのミストバーンは、

静かに振り返るとそのまま廊下の奥へ消えていく。

キルバーンが、やれやれ……といった感じに肩をすくめてそのままミストバーンへ付いていく。

（使いこなせぬ駒など……いくら強力だろうと無価値。

才を惜しんで始末せぬことが……後々我らの災いとならなければ良いのだが、な）  
冥王はチラリと正門側を見やると、そのまま白い影と死神を追ってゆつくり歩き始めた。

## 魔王と冥竜王の蠢動

ここ7、80年ぐらい魔王軍は忙しい。

というのも大魔王の改修がとうとう完了して、

それを大魔王バーンの超魔力で地上に転送しなくてはならないからだ。

その前段階としてバーンパレスをすっぽり覆う、

巨大で緻密な邪悪の六芒陣を大地に描かなければならないし、

そして更にもう一手間必要で、

転送先の座標にも邪悪の六芒星を描いて転送精度を上げる必要がある。

魔界の黒い太陽にも見える、空にぽっかり開いた暗黒の孔……、

それを遙か昇っていき地上世界のデルムリン島に出て、

転送目標である死の大地へ六芒陣を描く役目は、ミストバーンが担当する予定である。

天界の神々に気付かれないよう、隠密かつ迅速に実行でき、

そして強大な魔力を持つ者でなくてはならない。

しかも天界に与する精霊や竜の騎士などに出くわしたら、

知らされるより前にそいつらを始末する必要もある。

あらゆる点を考慮しても、ミストバーンが適任であった。

それらが整って、バーンパレスが地上に見事転送された暁には、

大魔王内に詰める番兵モンスターを合流目標として、

魔王軍はリリルーラを用いて魔界と地上を行き来できるようにする。

わざわざデルムリン島を経由しなくて良くなるし、

大規模な軍勢を僅かな時間で魔界本土から送れることになるのだ。

バーンの地上破壊計画成就のためにも、失敗は許されない大事業であった。

だが、失敗できぬ…といっても派遣されるミストバーンは極めて優秀で失敗はまず無い。

魔界での様々な作業（大魔法陣の敷設、祭壇の建造 e t c …）も、

こういった作業と指揮に慣れたゴルゴナがいれば滞らない。

考慮すべきはヴェルザーの妨害だけだが、

実のところ冥竜王にその気はない。

以前の小競り合いで部下がごっそりアンデッドになってしまい懲りたのもあるだろうが、

「地上への橋頭堡をバーンどもが固め終わったら、それを横から奪うのだ」

という算段があつたからだ。

そういった諸々の事情が手伝つて、バーンパレスは六芒星に高められた大魔王のバシルーラで無事、死の大地に送り届けられた。特に問題も起きず、それはバーンの予定通りの…  
神々に気取られぬ、とても静かな転移であつた。

地上軍設立の準備、天界侵攻に向けた魔界本軍の本格的な軍備増強。  
ヴェルザー軍の不穏な動きに対する警備網の強化などなど。

人生密度が薄いからだれて腐る……などというのはバーンとその部下達には当てはまらず、

日夜対応に追われ光陰矢の如し。あつという間に時間は過ぎていく。  
バーンも最近は楽しそうにしていることが多い。

「順調だな……」

「そのようで。地上も人間同士の戦争以外は平穩そのもの。

神々は相変わらず寝ぼけ眼のようですよ」

バーンの独り言とも取れる呟きにキルバーンが揚々と応える。

魔界の第7宮もまた平穩。

数十年前にロン・ベルクを逃したものの、計画の全てが万事うまくいっている。

しかし……とバーンは思う。

「やはり軍をまとめる者が必要だな。

天界を潰すのに兵は多いに越したことはない……。

余の力のみで全てが片付くとしても、

無敵の軍団を作る努力は常にすべきであろうな」

お気に入りのワインのグラスを傾けながら、

地上の様子を映す巨大な水晶を見る。

いや、正確には、水晶は地上を映してはいない。

水晶が映しているのは太陽。

直接視界に捉えれば目が眩むほどの明るい陽の光。

幾重かの減光のための防御膜で水晶を覆って、ようやく瞳が楽になる。

「太陽………強く……美しい光だ」

あれほどの力ある陽光を千年・万年・億年と放ち続ける大いなる星。

大魔王の力をもってしても、あのパワーを維持し続けることは難しい。

瞬間的なら太陽の再現も可能だろうが、それでは太陽を手に入れたことにはならない。

魔界を永遠に照らし続ける生命の源こそが必要なのだ。

「フツ……太陽を作ったことだけは………神々を褒めてやらねばならぬ」  
いつの間にか空いたグラス。

それに気付いたキルバーンが指を軽く鳴らすと、

すかさず死神の手になみと注がれた酒が現れ

「どうぞ」と、演技がかった仕草でバーンに捧げられる。

そのように優雅な玉座の間に、カシヨリ……という聞き慣れた爪の音が近づいてきていた。

爪の音の間隔が短い。足音の主は珍しく急いでいるらしい。

「バーン様」

王の間に早足で飛び込み、浅めの一礼のみの挨拶にとどめた冥府の大蜘蛛は、様式よりも実利である……と言わんばかりに報告を始めた。

バーンも「無礼である」などと言って咎めはしない。

むしろ、さっさと見えと視線で急かす。

退つ引きならないことが起きたのは、ゴルゴナの様子で分かったのだから。

「地上に侵攻した魔族がおります——」

冥王のもたらした言葉に、バーンの眉がやや寄る。

「ほう………そのような覇気のある魔族がまだおったか」

「はっ………そやつは魔王を名乗り地上世界に宣戦を布告したようです」

「魔王とは大きく出たな………その者の名は？」

大魔王の自らを差し置いて、

魔王を名乗りあまつさえ慎重を期してきた地上へずかずかと乗り込む愚か者。

魔王の前に“大”をつけぬだけ、まだ控えめだと満足すべきか。

しかし、永い時の中で覇気と血気を失っていった多勢の魔族共にくらべれば、

短慮な愚か者と思う以上に可愛気がある。

是非ともその愛しき愚者の名を知りたいと、バーンは思った。

「魔王ハドラー………」

ゴルゴナが控えめにその名を告げる。

大魔王の顔に、いつかのような悪童染みた薄い笑みが浮かんだ。



「キアーラ。……………キアーラはおるか」

ゴルゴナが言いながら巨大な部屋の扉を開ける。

当初の頃に比べると、広さも質も桁違いになったゴルゴナの研究室。

既に独立した研究機関と言えるレベルに到達していて、

不死の研究だけでなくモンスターの量産から希少金属の培養まで手広くやっている。

そしてそこを預かるのは彼女…。

「はいはい、なんででしょう」

座り心地の良い椅子に姿勢よく腰掛け、2本の試験管を持ちながら頭だけで振り返る。

魔王軍唯一の純粋な人間であり、ゴルゴナと対等の知識を持つキアーラである。

当然、研究所の総責任者はゴルゴナだが、

しかし、ゴルゴナは研究だけが仕事ではない。死霊を従える彼の仕事は多岐にわた

り、

時には戦場で陣頭指揮も執ることがあり非常に忙しい。

そこで彼女の出番である。冥王が留守の間は彼女が研究の全てを取り仕切るのだ。

「悪魔の目玉が予定より多く必要になった。」

今までの10倍の数を半分の期日で仕上げる」

「え、ええ〜!? なんなんですかそれ!」

ブラック企業もびつくりの納期変更である。

思わずキアーラは試験管を落としそうになった。

「愚かなはぐれ魔族が、我らの地上侵攻の直前に地上に攻め入った」

「あらまあ」

「バーン様はその魔族が引き起こす戦争の鑑賞を望んでいる。」

魔王を名乗るハドラーの戦ぶりをあますことなく記録するのだ……………」

「だ、だからといって10倍……………」

キアーラがやや青ざめた表情で尋ねる。

「そうだ」

躊躇なく肯定する冥王。

「も、もちろん…ゴルゴナ様も手伝ってくれるんですよ」

「私は地上に赴いたミストバーンに代わって成さねばならぬことがいくつかある。

人手は回す。好きに使って構わぬ……………期限を順守せよ」

黒いローブから覗く八つの単眼が、少し鋭くなった気がした。

キアーラはとてつもなく嫌そうな顔をしているが、それも仕方ないだろう。

どうやら何を言っても逃れられそうもないぞ……？ と彼女は悟る。

青ざめた顔から嫌そうな顔になり、そして今はげんなり顔。

「……わかりました。わーかーりーまーしーた。

やつてみせますよ。あたしはムー帝国一可愛くて若い天才錬金術士ですからね。

これがフロレンシアだったら肌荒れと偏頭痛で倒れますよ。

良かったですねゴルゴナ様。若くて美しいあたしがお側にいて。

あたしのサポートがあるから魔王軍で居心地いいんですよゴルゴナ様は。間違

ないです。

ほんとに分かってます？ あたしの重要性。大切にしたいほうがいいと思います。

もつとご褒美をいっばいしましょう。あたしに。

そもそもあたしだけに任せるってちよつと無謀ですよ。

可愛いあたしを側に置いておきたいのはまあ分かりますけど、

あたしを独占したいって気持ちはわかりますけど。

でもそこは元ムーの王族としてドンツと構えて研究所の人員増やしましょう。

だいたい人手は回すって言ってもゴルゴナ様とあたし以外バカばかりじゃないで

すか。

あれ運んでこれ持って、ぐらいしか出来ないバカだらけじゃありませんか。誰もムーの超理論についてこれないじゃないですか。

ひよつとしてあれですか、あたし以外バカばつか配置して

あたしをより一層輝かせようというゴルゴナ様の計画ですか？

まあその気持はありますがたいですけどゴルゴナ様蜘蛛ですし。

ミストバーン様とかキルバーン様の方が

ゴルゴナ様と同じで顔隠してますけどスタイルが段違いですよ。

オマケに声からしてあいつらのほうがかっこよさそうです。

まーそこはゴルゴナ様とは古い付き合いですし、

あたしが見捨てたらゴルゴナ様に靡く女なんてこの世に存在するわけもないですし

あたしも実は爬虫類とか虫は結構好きなんです

大蜘蛛のゴルゴナ様も実はありっちゃありませんけど、

というかバーン様の側近3名全員なんで顔隠してるんですか。

全員素顔に自信ないんですか。男の子って無駄に被り物好きですよ。

かっこいいと思ってるんですか？ 蜘蛛のくせに。 蜘蛛のくせに！ 蜘蛛可愛い

ですけど！」

ブチギレであった。

おっとり顔で切れている。

(ああそういえばこんな風に怒る奴であったな……)

然しものゴルゴナも少し鼻白む。

永い間、同化していて……しかも複数名の集合体であったから、

キアラ一人に負担が集中することはなかった。

彼女の1万2千年ぶりの怒りの言葉弾幕であった。

魔王ハドラーが暴れだしてから、そう経たぬ内に今度は魔界でも事変が起きる。

ヴェルザー一族がとうとう動き出したのであった。

「それで、ヴェルザーめはどれだけの軍勢を動かした」

第7魔宮・玉座の間にてゴルゴナの言を待つ大魔王。

「数はおよそ70万から80万。その内の6割がドラゴン族で構成されております。

軍団の威容はさすがの一言……………ぐふふふふ。

知恵が足りぬ竜どもを、冥竜王が恐るべき統率力で一個の生命のように率いる……。  
(まさに竜王と呼ぶに相応しい……………あのように甘い男とは違ってな)

早急に対処が必要かと……………」

「70万とはヴェルザー様もやる気ですねえ。

ちよつとヤバイんじゃないですかバーン様」

キルバーンは声色は愉快そのもの。

真の主と仮初めの主との戦いに、死神の心は踊る。

しかし、

「フ……………さすがはヴェルザーよの。それ程の軍勢を用意していたとは驚きだ。

だが、奴と戦うのは余ではない。

余との戦いの前に……………ヴェルザーめにはとつておきの催し物を用意してある」

大魔王は顔色一つ変えず不敵に微笑むだけだった。

## 相討つ冥竜王と竜の騎士

バーンがやったことは単純明快。

魔力はある所から無い所へと流水のように流れ行く…という性質を利用し、ヴェルザー率いる大軍団周辺に魔力の真空地帯を作り、

真空の道筋をそのまま魔界の孔へ繋げ地上に放出してやっただけだ。

デルムリン島の大穴から垂れ流れる濃密な冥竜の魔力を

天界が見過ごすはずがなかった。

強大な魔の力を嗅ぎつけた当代の竜の騎士バランを中心として、

ラーハルト達の前身となる前代竜戦騎達…、

そして彼らに与する精霊達とが“天界の勇者パーティー”を結成し、

案の定魔界に乗り込んできた。

後はバーン軍が大人しくしていれば、

嵐は勝手に頭上を通過しヴェルザーへと襲いかかるだけである。

もつとも厄介な二つの陣営が潰し合ってくれるという、バーンにとって極めて都合の

良い展開。

大量に増産された悪魔の目玉が、バランとヴェルザー一族の戦いを大魔王へ伝える。  
「ぐんぐんぐんぐん……」

神々が創りたもうた究極の戦士という前評判は、あながち嘘ではないようで……」  
「とんでもない化け物ですよアレは。」

ヴェルザー様とバラン達の戦端の火蓋が切つて落とされたのは僅か1ヶ月前…。

やれやれ……冥竜王自慢の大軍団が、今じゃ半分以下だなんてねエ。

質の悪いジョークより酷い」

キルバーンが、珍しく茶化す気力もない……といった様子である。

それ程に竜の騎士は強い。

まさに一生命として規格外の存在だ。

バランの鬼神の如き暴れまわる様を映す大水晶に、ゴルゴナは食い付き観察する。

(素晴らしい……あれぞ生命の神秘の具現と言うべきだ。

奇跡のバランスの上に成り立つ生体兵器……！

興味深い……実に、興味深い……)

探求者としてのゴルゴナの魂を揺さぶる存在であった。

大魔王もまた、熱心に見入っている。

バーンは永い時を生きているが、生きた竜の騎士を見るのは初めてである。



若かりし頃から、竜の騎士によってそれぞれの時代の魔界の実力者が  
誅滅の憂き目にあつたという噂を聞いたことがある程度。

竜の騎士は今まで全ての敵を100%滅ぼしてきた。だから生き証人などおらず、  
遠目で無関係の第三者がその戦いを記憶に焼き付けるしかなかった。

バーンも十分な実力が備わるまではひたすら天界を刺激しないよう心がけてきたの  
は、

偏に三界の調停者・竜の騎士の存在を警戒していたからだ。

「竜の騎士……………恐るべき戦闘生物だ……………」

余も予想し得ぬ勇猛にして変幻自在の戦いぶりは見事と言うしかない」

バーンは感嘆する。

「……………ま、まさか……………竜の騎士の持つ剣の、あの輝きは……………」

ゴルゴナが、バーンの持つ片刃の豪剣から放たれる異様な煌きに気づく。

あの光は、古代ムーが精錬法を確立させた超金属に酷似している。

「そう……………オリハルコンだ……………」

あれこそ、神々が創出した伝説の剣・真魔剛竜剣……………！

竜の騎士がその剣を手にした姿は……………、

まさしく神の威光に逆らう全ての者を屠る殺戮生物といえような」

大水晶の中では、竜の紋章から放たれる閃光によつて数百のドラゴンが一方的に蹂躪されている。

「凄いなア。画面越しにも殺気が伝わってくるようですね。」

魔界のどんな猛者よりも血に飢えた狂獣ですよ、アレは。容赦なくて実にいい」  
死神からも称賛の声があがり、真の主の軍勢が……、

つまりは同僚が虐殺されているのを今では笑顔で眺めていた。

三人の大魔族の視線が、大水晶の映像に注がれて続けていた次の瞬間。

「むっ!」

「……あれは!」

「く、黒の核晶!」

黒い光に包まれた、子供の頭ほどの物体が高速で画面を横切り、そして…

「ぬう!」

凄まじい閃光と天地を砕かんばかりの轟音が大水晶に伝達する。

ピシリ、と水晶に僅かながらヒビが入るほどだ。

思わずバーンも目を細め、激光から眼を庇う。

ゴルゴナとキルバーンもまた、腕で咄嗟に瞳を覆った。

「ヴェルザーめ……やりおつたな……!!」

完全に映像が途絶した大水晶を見ながら、バーンが言う。

「まさかあれ程の規模の黒の核晶を己が領地で使うとは……………」

ゴルゴナよ。 早急に爆心地に悪魔の目玉を派遣しろ。

あの辺り一帯に潜ませていた悪魔の目玉は、全て消え去った」

「はっ」

短く応えた冥王は、そのままフツと姿を消す。

リリルラでキアラの元へいき、ストックされている目玉の起動と、

そして失った分のそいつらを追加生産するつもりだろう。

キアラの罵声と悲鳴がすぐに聞こえてくるかもしれない。

バーンは、それきり何も言わず……ただ黙って割れた大水晶を見つめていた。

（あれ程の大きさの黒の核晶だ……………」

“ボクの持つ” 黒の核晶とは段違い……………まずただじゃあ済まない。

どれだけの被害が出たのか……………さすがのボクも引きますよ……ヴェルザー様

キルバーンもまた言葉を失っていた。

ゴルゴナの調査の結果、

ヴェルザーが使用した黒の核晶による被害は極めて甚大であった。

ヴェルザーの支配する大陸一つが丸々と、2つ目の支配大陸の半分が消滅。それに伴い領内の臣民も当然死に絶え、

バランの足止めを行っていた軍勢も全滅した。

ヴェルザー本人こそ無事だったものの、

魔界の海までが大量に蒸発してしまい、

不毛の世界である魔界の気候がさらに荒れ狂うこととなった。

しかも、泣きつ面に蜂とはまさにこのことで、

竜騎衆と精霊の多くを超爆弾で始末することは出来たものの、

肝心のバランを討ち漏らしてしまったのだ。

ヴェルザーの計算は完全に狂った。

しかもまだある。

仲間を失い、己の部下と国民をも巻き込んだヴェルザーの非情さに

バランの怒りは頂点に達し……、

「ヴェルザー……！ 貴様は絶対にただでは済まさん！」

竜の騎士の名に賭けて貴様を殺す!!」

マックスバトルフォーム・竜魔人となったバランの全力を、

余すことなく叩き込まれる事になってしまったのだ。

通常の竜魔人ならば、まだ冥竜王にも分があつたかもしれないが

迂闊にバランの怒りを増大させてしまったヴェルザーは、

不滅の魂を持つ……という慢心も手伝いまさかの敗北を喫した。

「信じられぬ……！ この俺が竜の騎士如きに遅れをとるとは!!」

だが、バランよ！ 貴様の努力は全て無意味だ……！ 俺は不死身！

我は不滅の冥竜王ぞ！ 必ず甦り世界を支配してみせる！」

滅び行く冥竜王の肉体が石と成り果てると、

そのまま邪悪の竜の魂は輪廻の輪に飛び込もうと魔界の空を昇っていったが、

生き延びた天の精霊達に捕らえられ、封印の屈辱を味わう羽目になる。

こうしてヴェルザーは討伐されたが、バランの負った傷もまた深く……

天の精霊達もヴェルザーが最期に放った怨念によって、その心身は衰弱している。

大魔王バーンは、大した労力もかけず2つの強力な敵対勢力を潰すことに成功したの

だ。

ヴェルザーの敗北までを見届けたバーンは、

「フツ………正直、ここまで余にとつて都合良く事が運ぶとは思わなかった…。

ミストバーンも地上から呼び寄せ祝杯をあげるかな…?」

上機嫌である。

そこに、

「バーン様…」

冥王が平身低頭で大魔王の御前に進みいでる。

「どうしたゴルゴナ…」

「我に出撃をお命じ下さい……………」

竜の騎士はまだ生きております……………」

虫の息の今こそ最大の好機。我が彼奴めを始末してご覧に入れまする」

ゴルゴナの進言に、バーンは即答しない。

数秒もの間を使い、熟考しているようで

「ふむ…」と小さく漏らし、美しく豊かな髭を左手で撫で弄る。

数千年に及ぶ大計画発動の、完全なる機が熟すまであと一步。

本当に後一步であるが故に迷いが生じてしまう。

天界を刺激せぬよう、

あくまでもヴェルザーが首謀者という体を取り死にぞこないを見逃すか。それともこのまま

天界に対して宣戦布告をするのを覚悟で、 balan 達を確実に排除するか。後者をとれば、神々が得意とする“奇跡の術”で更なる理不尽を味わう可能性が高い。

竜の騎士を殺害しても、それ以上の脅威が出現してしまえば意味は無い。

「……………捨て置け」

大魔王の決断であった。

「捨て置く？ 神代の頃からの戦闘経験値を持つ竜の騎士を……………野放しにしておくの？」

「そうだ……………噂に違わぬ戦士であったが、余の勝てぬ相手ではない。

だが、今ここで balan を殺してしまえば聖母竜は次代の竜の騎士を産み落とす。

そしてその者が更なる力を持って余に楯突くやも知れぬ。

大計画の成就まであと十数年……………といったところか……………。

まだ幼くも、竜の騎士として機能するには充分な年齢に到達するだろう」

なるほど、と死神が小さく言う。

「ヴェルザー様の仇討ちが出来ないのはとくっても残念ですが、

確かにバラン君の手の内は、ボクらは既に見ましたし……相手しやすいですね」  
しかしゴルゴナにはまだ言い分があった。

「バランを害すればその魂は聖母竜に回収され、新たな竜の騎士の誕生を促すは必然。  
しかし……ご安心くださいバラン様……」。

ぐぶぶぶ……我はバランを生かしたまま囚えまする。

究極の戦士の肉体の神秘……必ずや解き明かし、大魔王様にご覧に入れましょう」  
ゴルゴナの狙いは、あの化け物の肉体。

魔界樹の葉は、もうじき研究に耐えうるまでになるだろう。

その時に竜魔人の肉体があれば……

『竜魔人の肉体強度を持った、不死身で不老不死』

という真なる化け物を創りだせるかもしれない。

そう思うとゴルゴナは自然笑みが漏れてしまう。

バランもまた、ゴルゴナの言わんとする事を理解する。

「ほう……不老不死の研究に竜魔人を組み込むのか」

「はい……魔の神に仕える究極の魔戦士を創りだしてみせましょうぞ」

たしかに生かしたままならば聖母竜も手出しできぬかもしれない。

だが聖母竜の力は未知数だ。



生きた竜の騎士から命と魂を回収することも可能、ということとは有り得る。しかしそれでもゴルゴナの提案は大魔王にとつてあまりにも魅力的だ。(いつの日か……余の真の肉体が必要になる日が来るやもしれん。

余の見据える未来には……天の神どもの排除も必要なのだ。  
ならば……………ミストの新たなボディとしてこれ以上のスペアはない)  
竜魔人・不死身・不老不死。

その体を操るミスト……………それを夢想するだけでバーンは愉快になる。  
取らぬ狸のなんとやら……だが、夢見ずにはいらぬ甘美な夢だ。

それに、比較的バーンの本当の体に近い性能を持つ  
竜魔人の肉体を不老不死とすることができれば、

真バーンそのものが不老不死となることも夢ではない。  
それらを思うと笑わずにはいらぬバーンであった。

「フッフ……………はっはっはっはっはっはっはっ！

……………其の言や善し。

ゴルゴナよ……………バランを生け捕りにしてまいれ。

キルバーン……………おまえもゴルゴナに協力してやれ」

「おやおや、ボクも行っているんですか？

これは楽しみだなあ……ヴェルザー様からのお礼を代理で伝えなくちや。  
よろしく頼むよゴルゴナ」

死神の、常に笑みが張り付いた道化の仮面が、  
残酷に笑った気がした。

「ぐふふふふ……お任せ下さいバーン様」

冥府の大蜘蛛の瞳が怪しく光る。

魔王軍の大幹部……2人の黒き魔人が動き出す。

死神キルバーン、冥王ゴルゴナ——出陣。

## 天の精霊

「腐・病・葬・怨・魔……ぐんぐんぐんぐん」

冥王の呪言に瘴気が引き寄せられ、やがてそれは一つの暗雲となり

邪悪の雷撃がパリパリと短い音とともに放出される。

暗雲はゴルゴナの足元に集い呪いの主人を空へと持ち上げいく。

「腐・病・葬・怨・魔………！ 腐・病・葬・怨・魔………！ グブブブブブ」

スルスルと魔界の暗い空へ舞い上がり、

闇の空をうねって駆ける邪悪の蛇のようにも見えるゴルゴナの雲は、

傷つき倒れたバラン目指して一散に滑り飛ぶ。

魔界の空が荒れている。

ヴェルザーが起爆させた黒の核晶の余波が、魔界全土を侵食していた。

海の多くが干上がり、全てを切り刻み吹き飛ばす凶悪な嵐が常に空を支配する。

大地は干上がり、或いは腐毒が広がる底なし沼に浸かつていて、生命を拒む。

山々は地獄の業火と溶岩を堪えず吹流して、何もかもを燃やし尽くしていた。

だが、それら全ても冥王ゴルゴナを止めることはできない。

冥王の雲に近づく嵐は減退し腐ったそよ風となつて霧散する。

彼が通つたあとには瘴気がばら撒かれ触れたモノ全てを朽ち果てさせる。

狂つた天候すらも切り裂く、ゴルゴナの暗雲は、

確実にバランスのもとへ忍び寄つていた。

上半身が裸の男が荒野をさまよい歩いてゐる。

右手に、ヒビがはいつた片刃の豪剣を緩く持ち、

左手で右肩を庇い右足は軽く引き摺られているが、歩行に大きな支障はなさそうだ。剥き出しの上半身は至る所が傷だらけで、

中には一見して「なんで生きてゐるんだ？」と思うほどのものもあつて、

この男が只者でないことを証明している。

「はあ……はあ……まだ、生きてゐるか……精霊達よ」

額から垂れてきた血が左目に入り思わず片目を瞑りながら問うと、

どこからともなく声が響き、満身創痕の男へ語りかける。

『大丈夫です……………バラン様にご心配していただけて……………我々はそれだけで…』  
バランへと語りかけた声の主は天の精霊。

今は激闘に継ぐ激闘の疲労…ヴェルザーを封印する際に受けた呪いによって物質世界に顕現するのも辛い状態で、

バランの携える神器・竜ドラゴンファンクの牙を依代としてその内側で体を癒していた。

本来はその竜の牙として左目を保護するように装着する物なのだが、

戦闘の中で留め具が破損し、バランの黒革のベルトに括りつけられている。

真魔剛竜剣も竜の牙もどちらも損傷しているが、

ともに神々の創りだした装備であり自然治癒能力を備えているので問題ない。

『旅の祠まで、あと半日も歩けば…たどり着きます…』

バラン様……………そのように傷付いたお体で歩かせてしまい、誠に申し訳ございません  
…』

「構わん……………今は喋るな。」

少しでも疲れを癒やせ……………ヴェルザーの残党がいつ襲ってくるとも限らん」

『…はい』

だが、正直バランも辛く限界は近いと感じられた。

呼吸は既にずっと荒いままで、どんなに整えようと思っても乱れる。足取りもふらついたままだ。

自分も精霊達も体力・MPは空っぽで、魔界に持ち込んだ数々のマジックアイテムも使い切った。

「まさに総力戦だったな……。今襲われたら目も当てられん」

竜騎衆も全滅し精霊達も大半が討たれ、生き残りも疲労困憊。

相棒ともいえる真魔剛竜剣も、ヒビがはいっており刀身全体が疲労していて、出会う敵によってはオリハルコン製の相棒でも折れかねない。

倒れこんで目を閉じてしまいたい衝動を必死にこらえながら、 balan は重い足を引きずって必死に前へ進む。

魔界に降り立った時に精霊達が設置した旅の祠まで辿り着けさえすれば……。竜の騎士の憩いの聖地・奇跡の泉まですぐなのだ。

「はあ……はあ……祠が……。誰にも、見つかって……いなければいいのだが……」  
『?!』 バ、balan様……。お、恐ろしく邪悪な気配が……迫っています！

ああ！ そんな……。この邪悪さは……。ヴェルザーにも劣りません……！

「な、なんだと……。く……。それほどの力を持った奴を討ち漏らしていたか！」  
balan の顔色が変わる。

この状態で勝てるレベルの敵ではないことが、精霊の口ぶりからもわかる。

『早く……早く逃げて下さいバラン！　今の我々では勝てません！』

バランも既にそれはわかっている。

しかし足が思うように動かない……トベルーラを発動するMPも残っていない。

「く……くそ……！　はあ、はっ……はっ……はっ……はっ！」

なけなしの体力で必死に走る。

だが、

「グブブブブ……情けなや……伝説に謳われる竜の騎士が無様に逃げるか」

不気味な唸り声とも笑い声ともしれぬ音があたりに響く。

と、同時にバランの周りを急速に黒い霧が包みだす。

「何者だ！」

足を止め、真魔剛竜剣を構えるが、既に持ち上げるだけで腕が震える。

『いけません！　バラン！　逃げて！』

竜の牙内の精霊が必死に声を荒げるが、バランはもはや腹をくくってしまった。

もともと逃げることを良しとしない武人氣質。

部下や仲間には、無理をせず逃げるよう促すこともあるが、

自分自身は死を恐れず向かっていく闘将タイプ。　これも当然の帰結といえた。

「ぐふふふふふふふふ………我は冥王………死を司る者なり」

黒一色で塗りつぶされた視界の向こうから、恐ろしげな唸り声でそう告げる。

「冥王……!? やはり冥竜王の追手か！ 姿を見せる!!」

「ぐふふふふふふ………半分は正解だ………」

姿など貴様に見せる必要はない………おまえの相手は我が手先ども。

可愛い我の駒が………貴様を冥界に誘う………ぐふふふふふふ」

冥王の声が途切れると同時に、地面を持ち上げる低い音がバランの耳に届く。

そして肉の腐る不快な臭いも鼻に届けば、冥王の手先とやらが何なのか自ずと判明する。

「アンデッドの……群れ………こ、この数は………」

闘いの遺伝子を持つバランには即座にわかる。

今も響き続ける土が盛り上がる音。 強くなる腐敗臭。

「さあ者共！ 黝れ！ いたぶれ！ 手足を引き裂け！

貴様らの旧主………ヴェルザーの仇を討つが良い!!」

一斉に襲いかかるアンデッドの群れ。

寸前で躲すバランが見たのは腐るドラゴンの巨大な前腕。

そして苦しそうな竜の咆哮。



間違ひなくその者達は、かつてヴェルザー一族であったドラゴン。

「き、貴様！ 己が主の仇を討つのに仲間の死を利用するのか！」

反撃をドラゴンゾンビへと叩き込みながら、 balan は憤る。

「ぐぶぶぶ……この者らは、この冥王に感謝の涙を流しておるぞ。

自分と主の命を奪った貴様を殺すチャンスをくれて、ありがとうございます、とな

……

グブブブブブ……！」

冥き瘴気の中に響く怨嗟に満ちた竜達の咆哮。

それらは明らかに苦しみ、痛がっている。

命を縛る地獄の鎖を痛がっている。

精霊と balan にはそれがわかった。

「お、おのれえ……！ 外道が!!」

怒る balan の気配に、一瞬、一際濃い瘴気が捉えられた。

(親玉か!) そう判断した balan は、八相の構えで瘴気濃き場へ地を蹴って跳ぶ。

疲労の極致にあるとは思えぬ凄まじい跳躍。

この場を指揮する者を打ち倒さねば勝機は無い…… balan のイチかバチかの賭け。

『ダメです balan!』

天の精霊の制止も僅かに遅く、

「な、なに!？」

竜鬮気も呪文も籠められていない…現状で放てるバランの渾身の一撃は、

呆気無く異形の細腕に食い止められた。

その腕は、蟲を思わせる節と爪を持つ化け物のそれであった。

「見事……… さすがは竜の騎士よ………」

渦巻く瘴気に視界を奪われながらも、我に一撃を見舞うとは」

「ぐっ…け、剣が!？」

バランが消耗しているのとは別としても、この異形の細腕は見た目以上の脅力を持っていた。

オリハルコンの刃を掴み、びくともしない。真魔剛竜剣がミシミシと悲鳴を上げる。

そこに、

「うぐ!?! か、鎌!?! じ、地面から……ガハッ!!」

ズブ…とバランの腹を、大地から突如生えてきた大鎌が貫いていた。

『バラン!!』

瞬間、バランの腰が……竜の牙が輝き出す。

「こ、この光は……!!? く?!? うおおおお!!」

突如、そこから強力な聖の光が放たれると冥王を遥か後方へ弾き飛ばし、場を埋め尽くす大量のアンデッド達をも消し去ってしまった。

バランを守るように淡い光を纏った乙女が3人、忽然と立ち塞がっている。薄い聖法衣を纏った、とんがった耳が特徴的な美女。

「君ら……精霊か……忌々しい天界の犬くんは、ちよつと黙つててくれるかな?」

大地の中……大鎌の向こう側から、冥王とは別の邪悪な声。

『そこか… 魔の者死すべし! 邪悪よ消え去れ!!』

精霊の1人が、全生命力を注いだ光の闘気弾を大鎌付近の地へと放つ。

「く……こ、この……! 精霊風情が!」

隠れ潜んでいた死神は吹き飛ばされつつも、

『ああ!? バ、バラン様! お逃げくだ、さ……』

手に持つ大鎌を高速で投げつけ天の乙女を胴切りに処した。

「せ、精霊よ……! が、がふ……!」

腹からおびただしい血を流しながらもバランは立ち上がるようにするが、もはや膝を地から離すこともできない。

視界も歪み、仲間の精霊の姿ですら正確に認識できていない。

完全に限界であった。

『バランス様……！ 今より我らの最後の力で、あなたを祠までお届けします！』

「待て！ お、俺もとも、に戦う……ぞ！ 仲間を見捨てて……いけるか!!」

『あなたは竜の騎士！ このような所で朽ち果てる天命ではありません！』

「逃すわけがないだろう?」

いつの間にか舞い戻った死神が、薄ら笑いを浮かべながら2人の聖乙女へと迫る。

死神から何か素早く投げつけられ、

それは2人の精霊の間をすり抜けバランスのすぐ側の地面へと突き刺さる。

「キルトトラップ……本来は仕掛けて使うものだが、こんな風にも使えるんだ。

クラブの5……おバカさんを捕まえるのにはピッタリのカードだ」

トランプカードが不気味に光り強力な魔力率が展開され始める。

だが、

『邪なる威力よ、退け！マホカツール!』

乙女が唱えし破邪呪文が、障壁となつてキルトトラップの完全発動を拒み、

突つ伏すバランスと精霊達を聖なる結果が覆い守る。

もはやそのような呪文を使うMPはないはずである。

「チツ……先に君らを始末しなきゃだめみたいだね」

『無駄です！ この結界には邪悪なる力が入ることは出来ません』

確かに精霊が張った破邪呪文は強力だ。

(結構厄介だな……ヴェルザー様との死闘で弱り切っているだろうに……)

すでにこの抵抗が、奇跡だ。だから天界の奴らは好きになれない)

「奇跡などというまやかしに頼るその姿は……虫酸が走るね」

キルバーンが大鎌を振り上げると同時に、

「ぐぶぶぶ……光葬魔雲…… 聖なる光よ、消え去れ!!」

先程吹き飛ばされた冥王の方角から、恐るべき黒き力が放たれた。

『ああ!! そ、そんな!』

鉄壁の破邪呪文が、暗黒弾にぶつかった瞬間に爛れて溶けて、

結界は跡形もなく消滅し、

「グッドタイミングだ」

振り下ろされる死神の大鎌。

麗しの聖乙女の首が、胴を離れて魔界の空を舞った。

バランスを守る精霊は、あと1人。

「グブブブ……天の精霊よ。

我のものになるのなら命だけは助けてやってもよいぞ?」

「フフ…本当いい趣味してるね……でもバラン君は君にあげるんだから、

そっちの娘はボクにくれよ。ボクの特シャルメニューで歓待してあげたいんだ」

すでに冥王もこの場に戻った。

しかも、2人の魔人は全くの無傷。

至近距離から聖なる光を浴びせたのに……、

姉妹の1人が全生命力を捧げた光の闘気弾を直撃させたというのに…である。

だが、天界から降臨し竜の騎士に全てを捧げて仕える彼女らは、

決して邪の者には屈しない。

『姉妹らが、私に時間をくれました。』

魂と魔力を高める時間を。

魔の者らよ……貴様らの思い通りにはならぬ!』

最後の乙女が全てを振り絞る。

「っ!! 殺せ! キルバーン!」

気付いた冥王が叫ぶが、死神が鎌を振り下ろすよりも速く

『バシラー!!』

既に意識が混濁したバランを、最後の魔力で弾き飛ばす。

精霊は、次の瞬間には両断されていた。

ずるり、と乙女の右半身がゴルゴナ側へ崩れ、左半身はキルバーンへともたれかかる。「本当に足掻く奴らだねエ……」

なんでこうも無駄な努力ばかりするんだい？ コイツら」

ホコリを払うように精霊の死骸を手荒くのけると、そのまま死骸は消滅して霧散する。

精霊らの死とはすなわち消滅。

すでに血溜まりだけを残して3人の乙女は消え果てていた。

「足掻かねば廻りがいもなからう？」

「そりやそうだ……ウククク」

嘲笑う冥王と死神は、すぐさまバランを追う。

キルバーンのトベルーラと冥王の神仙術による飛行は、

全力を出すと凄まじい速度となる。

それこそ、全生命力を込めたバシルーラにも追いつける程に。

「ぐぶぶぶ……竜の騎士よ……！ 今、我が手に……！」

ゴルゴナの三本の爪が、バランの足を掴んだ。

と見えたその刹那……。

「な、なんだと!？」

「ううう!? これは!!」

眩い聖光が、バルンの全身を覆い尽くし、

冥王と死神を力強く押しつけて地面へと叩きつける。

すぐさま瓦礫を魔力で消し飛ばし起き上がる両者だったが、

「く……ば、バカな……! 我らを寄せ付けぬ力など、残っているはずはない!!」

「……精霊の血だ。 バルン君の体に付着した精霊どもの血飛沫が……、

ボクらを拒む最後の結界になったわけだ……。

これは、奇跡などでは……断じてない……。」

バシルーラの閃光の軌跡を追うと、そこには崩れた祠の残骸が転がるのみ。

「旅の祠………修復したとて、もはや扉がどこに繋がっていたかまではわからぬ」

「こんな神代の遺産まで持ってきていたのか。」

「……ここにバルン君が飛び込んだとして、一体誰が祠を壊したんだろうねエ」

「バルンが飛び込んだ衝撃……それによって崩れたのだ……。」

とてつもない強運………とでも言うべきか。 それこそ奇跡的な確率の、な

得体の知れぬ、理不尽な運命。

首の皮一枚で繋がり続ける、勇者たちの未来。

可能性が一厘でもあれば、それが叶う力。



黒き魔人達は、神々の奇跡に翻弄される。

## ムーの7賢人

竜の騎士には逃げられたものの、

戦場にはおびただしい量の血痕が残されている。

魔界そのものの瘴気とゴルゴナが纏うそれに晒されて、

バランと精霊達の聖なる血はダメージを受け劣化が見られるが、

それでも研究に耐えられぬ程ではない。

生き延びたバランが、

魔界に対する警戒を今後も緩めることがないであろう事は懸念材料だが、

バーンにとっては血を得たことのほうが意義が大きい。

ゴルゴナは早速キアラと共に研究に打ち込みだした。

その間にはぐれ魔族のハドラーがただの人間の勇者に敗北したらしいが、

魔界樹の葉と聖なる血の解析に没頭するゴルゴナにとって益体もない出来事だ。

「……やはり一筋縄ではいかぬな。」

まずは血の状態を回復させねばならん」

「うーん……やっぱり彼らの力が必要じゃないですか？」

「……ツークーマン達か」

「はい。魔界樹の葉の数にも余裕がありますし…。」

不死人形の質を高めるためにも聖なる血は必要です。

彼らを復活させれば進捗状況は間違いないと好転しますよ」

ゴルゴナの八つ目が魔界樹の葉を収めた無機質なボックスに注がれる。

「……………ウム…、では…貴様に任せるぞ。」

こいつらの心身の核は、既に我が体内から取り出し二番ポッドに保存してある」

「はい、お任せを。」

…ああ、ゴルゴナ様。彼らを甦らせても、私が二番目に偉いんですよ？

だって、ずっとあたし一人でゴルゴナ様を支えてきたんですから、

ムー時代の序列は有効じゃありませんよね？」

にこにこ笑顔で権力の保持を嘆願するキアラ女史。

権勢欲もなかなか豊かだ。

「ぐぶぶ…欲深な女だ…。」

それでよい……貢献を考えれば妥当であろう。私も貴様には感謝している」

「あはっ、やったー！だからゴルゴナ様大好きです」

黒髪の美少女が跳ねて喜び、そのまま黒衣の大蜘蛛へと抱きつくくと、

虫特有のクチクラ質ちつくな外骨格に覆われた頬へと頬擦りする。

「えへーかたーい。あたしの美肌が削れます〜」

「……だったらさつきと止めんか」

世の中広しいえども、大きな蜘蛛の化け物に頬ずりして喜ぶ

変態の領域に片足突っ込んだフェチ美少女はキアラくらいだろう。

しかもその大蜘蛛の能力と性格は、魔界全土でも屈指の悪辣さなのだから。

その後、キアラは10分近く頬擦りを続けた。

数ヶ月の後、ゴルゴナの大研究室に一同が揃っていた。

一同とは、冥界の大蜘蛛ゴルゴナとキアラ。

そして蘇生に成功した古代ムー人達…、

ツーカーマン、オテイカワン、トピアポ、フロレンシア、ポポルヴーの計6人と1体。

「誠にお久しゅうございませぬゴルゴナ様」

後頭部・側頭部がでっばった老人が深々と礼をする。

「ぐぶぶ……オテイカワンよ……百ウン十年ぶりか。

皆も息災で何よりだ……トピアポもな」

かつて、勇者ロトの末裔アルスらとの戦いで一人、真つ先に脱落した長頭のとピアポ。導師タオの神仙術による一撃で致命傷を負った彼は、切り離され見捨てられた経験がある。

「あ、あの時は……押し寄せる死に怯えるばかりでした、はい。

しかし、今はこうしてゴルゴナ様の御力で……

別個の体まで授けて下さり無事に甦りました。

思い出してみれば、あそこで私を切り捨てたのは好判断でございます。

感謝こそすれ、怨みには思いませんぬ」

「よろしい……その言葉聞けて我は満足だ。

未だに我を恨んでいるようならば、相応の対処をしたが……賢明だなトピアポ……グブブ」

無感情なゴルゴナの単眼に見つめられたトピアポは、

「は、はい」と小さい悲鳴のような返事をするのに精一杯である。

(やはり、ゴルゴナ様は恐ろしい御方だ)

と、その様子を見て思うのはツークーマン。

短い小ざっぱりした髪を持つ長身痩躯で、エラが張った角ばった顔の男。

「キアーラから大体の事情は聞きましたわ。

それで：わたし達は新たな主、大魔王バーン様の元で研究に励めばよいのですね？」

黒々とした美しい長髪を掻き上げながら、澄ました声で言うのはフロレンシア。

キアーラとは毛色の違う、高飛車な雰囲気にする美女で、

その近寄りが見たい薔薇のような美貌に反して、

ムー崩壊の折に飛び立つ太陽王の飛空艇の衝撃波から

同性でか弱い（とフロレンシアが思い込んでいる）キアーラを庇ってやるなど、

意外に面倒見が良くて常識人である。

「目覚めてみればまさか異世界の、しかも魔界とは驚きましたが、

わしらがこうしてまた全員無事で相見えようとは嬉しい限りじゃ」

うんうんと笑顔で頷く恵体の研究員・ポポルヴー。

「我ら、ムーの叡智を極めし7人……1万2千年の時を超え：死を超越せり。

憎き導師タオ……太陽王ラ・ムーの裁きをも物ともせず我らは甦った。

我々の勝ちぞ……ぐぶぶぶぶ。

タオの歯軋りする様が目に浮かぶわ……」

黒き冥王は肩を揺らし、唸り笑う。

その様を魅りし5人は少しの冷や汗をかきながら見つめ、

キアーラは心底嬉しそうに微笑んでいた。

「では皆さん、今後はあたしがナンバー2ですからそのようにお願いしますね。

何と言いましても私が真っ先に復活して、魔王軍への貢献も頭一つ抜けていますから」

早速に主張するキアーラに、

「仕方ないのう。

ゴルゴナ様はお忙しいようだし、誰かがわしらをまとめた方が効率も良からう。

本来なら一番の年長者であるわしが務める所じやが、キアーラの方がここでの実績は勝る」

オテイカワン老が応えた。

皆、若輩のキアーラがリーダーとなることに若干不満気で、

特にフロレンシアは同性の後輩が上に立つことに強めの嫌悪を抱かないでもない。

しかし彼らの最大の欲求は神の叡智に迫いつき追い越すこと。

完全なる不老不死。究極の生命。極限の進化。時と空間の究明と支配。

古代ムーで頓挫したそれらを追い求めることが出来るのなら、

誰がゴルゴナの代理を努めようが些細な事なのだ。

「皆の者……大魔王様から賜りし御力でもって……」

古に失われし異界の超文明ムーの力を甦らせるのだ」

ぐぶぶと愉悅に満ちた笑いをあげるゴルゴナ。

大魔王軍は、ムーの更なる超科学を手に入れようとしていた。

ミストバーンが最重要で監視している人間の1人、

勇者アバンが拾った少年を弟子1号として教育し始めたという、

ゴルゴナにとって極めてどうでもいい情報が魔界にもたらされた頃、

「ゴルゴナ様……また失敗です。5割を超えて力を発揮させると崩壊が始まります」

これで何度目のトライ・アンド・エラーだ。

軽く千を超えた失敗の数々に、

ゴルゴナの無表情な虫の顔に“不快”が浮かんでいるように見えた。



実を言えば、不老不死のゴーレムの開発は完了したのだ。

ムーの7賢人が揃った今、

かつて偶然とはいえ成功させたゴーレムの再現は比較的容易かった。

しかし、今ゴルゴナが求めているのは更なる高み。

「竜魔人と不老不死、不死身の両立が困難なことは当初から分かっていたこと。

しかし、ムーが誇った貴様らならば不可能ではない筈……………」

何のためにうぬらを甦らせたと思っている……………」

黒のローブから見え隠れする蜘蛛の瞳は、

射抜くようにキアラを見据えていた。

「も、申し訳ありません……………」ですが、魔界の瘴気と魔力を吸って育った魔界樹は、

世界樹の性質を有しているながらもその属性を聖から邪へと変えております。

竜の騎士と精霊の聖なる血に強い拒否反応を示すのです」

キアラの提示した問題はゴルゴナもとつくに知っていることだが、

どうにも解決したい難問としてムー人達の前に横たわっている。

葉と血……………」どちらも属性を弄ると品質が著しく劣化するのだ。

あちらを立てればこちらが立たず……………」なのであった。

「我らが用いている理論は、そもそも異界のものである。

その世界にはその世界に合うコトワリが存在するものだ。だというのに、我らはこの世界の理にやや疎い……………」

現地人の頭脳が欲しいな……………」魔界に生きる研究者などおらぬものかのう」年長者オティカワンの意見は的を得ている。

ゴルゴナも既に多くの時をこの魔界で過ごしてはいるが、根本的には超時空を支配したムーの技術を使っている。

「ええ、なるほど……………」確かに。

魔界の技術と知恵に精通した者が必要ね。

バーン様は魔界において全知全能というに相応しいが、

その本質は研究者ではない。あの方はあくまで支配者であり為政者。わたし達の求める解答を出せる分野の人ではない」

とは、フロレンシアの言。

「うむ……………」魔界の賢者の件は、いずれバーン様に聞いてみることにしよう。

不老不死については成果がでているのだ。色良い返事が期待できる……………」

だが、竜の肉体…魔の力…人の心。

それらを反発させることなく両立させている竜の騎士は素晴らしい。

成功例の一つとして……………」やはり入手しておくべきだったな。

参考程度にはなつたかも知れぬ……」

「そういえば……ミストバーン様がバランの行方を掴んだそうですねゴルゴナ様」  
穏やかな笑みを浮かべつつキアーラが言う。

「ぐぶぶぶぶぶぶ……生きたサンプルが欲しいかキアーラよ」

「はい欲しいです♪」

にこやかに即答するキアーラ。

大量に投入された悪魔の目玉と、

更に追加されたメドーサボールらの昼夜を問わぬ地上監視によつて、

地上で傷を癒したバランが、

魔界に未だ脅威あり……と警戒を解いていないのはバーンも知るところである。

地上のミストバーンからの報告で、

アルキード、テラン周辺の悪魔の目玉らが徹底的に排除されているのが発覚して  
り、

目玉の真空地帯に何者がいるのかを察するのは容易い。

殺気を放たず気配を殺して潜む目玉らを発見し、

魔王軍に気付かせずに始末できる存在など限られているのだから。

ゴルゴナの陳情による、

「バラン捜索のための地上への“炙り出し”は、バーンによって許された。というのも、バーンは既に

天界が地上と魔界への大きな介入力を喪失していると確信したからである。ヴェルザーの地上への大規模侵攻を察した天界が起こした行動も、

バランと精霊達の派遣、そして神代のマジックアイテム貸与程度であった。

太古、世界創世の際に振るった全知全能・森羅万象を司る万能の力は、もはや多くが失われ残った搾り滓が奇跡の術である。

そして、その“奇跡”もバランを虫の息で地上へ逃すのに精一杯であったのは、先の戦いで証明された。

バーンは自身の揺るがぬ勝利を確信したのだ。

竜の騎士も神の奇跡も、もはや自分を打ち負かす決定打足り得ないと。

地上消滅計画は大魔王の悲願であるが、

それですら遊び心をもって成すべき事と、バーンの価値基準が改められた。不死のゴーレムにも目処がたった現在、

計画が失敗する確率が0になったとバーンが確信してしまったのだから、ある意味で興冷めなのは仕方なかったといえるだろう。

であるならば、せめて楽しまねば。それが大魔王の答えだった。

「…許す。ゴルゴナよ。」

再び竜の騎士に挑み、捕獲を試みよ。

そのためには、地上はおまえの好きなようにして構わん。

ただし、ハドラーが目覚めるまでの12年間だ。

ハドラーが目覚めた時……余は地上破壊計画の本筋を実行する」

「ハドラー……………?」

あの魔王を拾っていたのですか……?」

彼奴程度が、どれ程バーン様のお役に立つというのです」

ゴルゴナの疑問ももつともだろう。

ハドラーは確かに優れた戦士ではあるが、

戦力としての総合力は3人の側近、ミストバーン・キルバーン・ゴルゴナに大きく劣る。

人間の勇者程度に敗れた三流魔王の命を救ってやる必要は無いように思えた。

「ハドラーは軍勢を率い、人間世界を大いに混乱させた。

その指揮力は一定の価値がある……。」

だがそれ以上に余が評価しているのは奴の潜在能力だ。

ハドラーはまだ若い……化けるやも知れぬ」

将来性は、確かにある程度ハドラーにはあるだろう。

自分も含め、ミストバーンらは完成した強さを既に持つっており、

そうそう簡単にレベルアップは出来ないだろう、と冥王も納得する。

「天界に通用する最強の軍団を育成するには、

成長する指揮官が相応しい……ということですかネ？」

大魔王と冥王のやりとりを見守っていた死神が口を挟んだ。

軽く指先から魔力を放った死神が大水晶の映像を切り替えると、

そこには傷付いた体を蘇生液で癒やす屈強な魔族の姿。

「そういうことだ。

………おお、そうであった。

ゴルゴナ、おまえが地上へ“狩り”に出ると同時に、余も大魔宮<sup>バンパレス</sup>へと居を移す。

balan 捕獲の成否に関わらず……一旦ことが終われば、おまえも大魔宮へと帰還せよ。

お主に作ってもらいたい玩具があるので……フフフ」  
下がって良い、と最後に呟いた大魔王に、

「ははっ」

即座に頭を垂れて冥王は拝命する。

「ボクもバーン様にくつついてくから、君とは地上でまた会うことになるかな。

シーユーアゲイン、ゴルゴナ」

ひらひらと手を振る死神に「ああ」と短く返答しゴルゴナは玉座の間を退出する。

(バーン様とキルバーンも地上へ……)

我が作る玩具とは……大魔王の再改修か……？

不死の竜魔人の研究を後回しにしても良いとは……

バーン様の遊び心も過ぎるというものだが……ぐぶぶぶ。

まあそれもよからう。どの道我らの勝利は揺るがぬのだ……焦ることもない)

魔王軍の全ての者が、魔界の神の絶対の勝利を信じていた。

それを揺るがすことは神でさえもはや出来ない。

それは天の神々の1柱・聖母竜でさえも認める事実だった。

だが、これと時を前後して、天と魔、それぞれの神の予想さえ覆す

恐るべき小さな魔神がテランの片隅で産声をあげていたのだ。

その名はディーノ……アルキード王国の古き言葉で“強き竜”を意味する、  
竜の騎士バランとアルキードの姫ソアラの子。  
後の勇者ダイである。

「……ああそうそう。バーン様経由で君に頼まれてた魔界の賢者だけどね」

ついでとばかりに、背を向けて去りゆく冥王にキルバーンはその名を告げた。  
一人息子と僻地に隠れ住んでいる魔族で、

あらゆる生物の利点を詰め込んだ究極生物の研究に打ち込んでいるらしい。

(近いうちに我のもとに連れてくる必要があるな……ぐぶぶぶ)



大変な大蜘蛛に目をつけられたのであった。  
その名はザボエラ。  
後の不幸人である。

## アルキード滅亡

田舎の村、と言つても差し支えない寂れた国テラン。

その王都郊外に一組の若い夫婦が越して来ていた。

夫婦はともに容姿が整い、それでいて健康的で学もあるようだった。

子宝にも恵まれたばかりの、まさに幸せの絶頂にいる新婚夫婦。

「ディーノ……、ほら。パパだぞ！」

な、なあソアラ。 少しいいから私にも抱っこさせてくれないか？」

ちよつとだけ髭をはやし始めた夫を、

少女と言つても可笑しくないほどに若く美しい妻が

「だめですよ。だってディーノはパパよりママの抱っこが好きですよのね。」

軽くあしらつて、太陽のような笑顔で赤子をあやしていた。

「な、なんだそれは！ そんなことないぞ！」

なあ、ディーノ、パパの抱っこだつていいよなあ」

赤ん坊の頬を優しく突つつきながら父親が拗ねる。

こう見えても、一年程前まで魔界で死闘を繰り返していた伝説の竜の騎士であるが、

今は愛する妻と子を持つ新人パパに過ぎない。

農作業は強靱な竜の騎士の力を持ってしても腰に疲れを溜める恐るべき仕事で、素人が手を出してもろくな作物はとれない。

竜の騎士バランと王族のソアラに、いきなり一人前の畑仕事は不可能で、バランが副業として手をだした伐採業の方がテランの人々に喜ばれている。

老夫婦宅に大量の薪をお届けすると、

「おやバランさん、今日も薪割りありがとね」と言つて

ベテランお手製の良質野菜を分けてくれる。

中年夫婦宅に自宅修繕の為の材木をお届けると、

「ああバランさんじゃないか、いつもながら凄い怪力だなあ。本当に頼りになる」と

言つて

新鮮な米を分けてくれる。

肉だけはバランが自力で調達できる。

今ではこの辺りで“木こりで狩人のバランさん”といえは知らぬ人はいない。

しかし、だからといって普通の村民の生活に染まりきって腑抜けているわけでもない。

ヴェルザー討伐の直後に味わった辛酸。

未だ魔界には恐ろしい魔族がバランを狙っているというのがはっきりわかった。地上では自然発生ではあり得ない数の悪魔の目玉がうろついている。

目玉系のモンスターが高位魔族の使い魔として活動しているのはバランも知る所で、それは即ち…強力な魔族が地上を伺っている証拠だ。

ひよつとしたらあの時のヴェルザー残党が、竜の騎士である自分を探しているのかも  
しれない。

そう考えると、バランはいつまでもこの幸せに浸かってもいられぬ…とも思うのだ。  
しかし、だからこそ今だけは、今ぐらいいは。

「ソアラ……私は、幸せだ」

バランは幸福を噛み締めていた。

ディーノを抱かせてもらえず拗ねていた夫が、

急に真面目顔でそんなことを言い出すものだから新妻も

「バラン…私もよ」

ディーノを2人で包み込むように、優しく抱きあう。

祖国を捨てて逃げ出した姫と、たぶらかした魔物の男……と決めつけているアルキード王は、

いつか必ずこの幸せを壊しに来るだろう。

そして、王女の身でありながら果たすべき責務を放棄した自分は、

いつかきつと報いを受ける……いや、受けるべきだとソアラは思っていた。

だからこそ、彼女もまた……今だけはこの幸福に包まれていたいと願うのだった。

2人はこの幸せがいつまでも続かぬことを心の何処かで理解している。

バラとソアラの願いは唯一つ。

「私達の子が、強き竜のようにどのような困難にもめげず、幸せになってくれますように」

ただそれだけだった。

そして、そんな2人の予感はやはり正しかった。

竜の騎士という存在を、運命が放っておくなどあり得ないことであった。

「た、大変だあー！ モンスターの群れだー!!」

数日後、テランに大量の魔物が突如押し寄せる。

魔王ハドラーが暴れまわっている頃から、

テラン周辺に大規模な魔物の群れが現れたことはない。

テランの、数少ない兵士や若者らに混じって balan もまた手近にあった鉄剣で応戦し、

「お、おお！ 只者じゃないと思ってたが、balan さんほとんどもなく強えな！」

「これならいけるぞ！ 今のうちに女子供を城に避難させろ！」

モンスター達をアツという間に切り伏せ皆を自然と勇気づけていた。

（どういふことだ…？ 魔王の邪気が消え去った今、モンスター達が集団で暴れだすな  
ど……。

しかもハドラーが健在だった頃より見逃されていたテランの人里にまでなだれ込んでくるとは。

……………ハドラー以上の邪気の持ち主が…地上に現れた…ということか）

テラン城へソアラとディーノを送り届けた balan は、城周辺のモンスターを全滅させる  
と

そのまま気を抜かず警戒を続け見回る。すると、

「……………何者だ！」

森の向こうから気配が漂い、茂みをかき分ける騒がしい音が近づいてくる。

殺気はない。乱れ、弱った足音からしてもモンスターの残りではないだろう。

がさりつ、と勢い良く飛び出してきたその者は、

「むー！ その鎧の紋章は……アルキードの兵士か！」

思わずバランが構える。

見ればその兵士は傷だらけで憔悴し……明らかに切羽詰まった様子だが、自分とソアラへの追手ならば始末する心積りもあつた。

「はあ……はあ……はあ……、あ、あんた……テランの兵士か。」

テ、テラン王に……きゅ、救援を……ア、アルキードに……アンデッドの群れが！  
俺は海路を使ったからなんとかここまでこれたんだ！

た、助けてくれ！ 頼む……！ 王都にはまだ家族がいるんだっ！！

本当に、本当に凄い数なんだ！ 助けてくれよ……頼むよ！！」

「な、なんだと!？」

バランの不安が、段々と明確な形をなしてくる。

アンデッドとは、魔界奥地ほどに濃い瘴気と邪気が渦巻く土地に現れる。

地上では殆どの場合、創造主がいてこそ存在できるモンスターだ。

魔王が倒れた今となつては、地上で活動できるはずはない。

アルキードに攻め寄せてきたというモンスター群が、本当にアンデッドであるならば、

それは魔王の復活を意味している。

或いは、全く別の邪なる存在。

それに加え、ベンガーナほどでは無いにせよアルキードは軍事力に優れた国家で、その兵がテランなんぞに

ベンガーナを越えて海路から救援を要請しに来るなど常識で考えてあり得ない。

(あり得ないルートを通る羽目になった…ということか)

バランは考える。

テラン国は、老賢王フォルケンの信念の元、国是を非武装非暴力としている国で、アルキードとの戦力比は100:1と言ってもまだ足りぬほどの弱小国家だ。

軍事力に優れた妻の祖国、我が子の祖父の国がアンデッドに襲われ…:

そして恐らく滅亡の危機に瀕している。

歴戦の竜の騎士は瞬時にそれを理解した。

(助けに行かなくては！)

自分を迫害し、追いやった国。

自分を魔物と罵り蔑んだ国王。

だが、アルキードのことをソアラはまだ愛している。

そしてバラン自身、アルキード国と王に対して複雑な恩義を感じている。



初めてあつた時、ソアラの父王は自分に優しく微笑んでくれたのを覚えている。

単純な性格が災いして、周囲の讒言で豹変してしまつたが、

根は善良な人だと……バランも少しは信じているのだ。

(ソアラを生み……育んでくれたあの国を、見捨てて置けるものか！)

決意したバランの行動は早かつた。

近くのテラン兵に、アルキードの伝令のことを任せ、自身は郊外の自宅へ文字通り飛んで帰り、

室内の片隅に立て掛けられていた相棒を手取る。

すつかり傷の癒えた真魔剛竜剣を背に括りつけ、

愛用の鎧を着こむと、ドラゴンファンク竜の牙を左目に装着する。

タンスの奥からありつただけの薬草を掻き出して、腰の道具袋へ詰め込む。

「ソアラ……ディーノ。おまえ達の故郷は、私が守ってみせる！」

一人呟いたバランの顔は完全に戦士のそれとなり、良き夫良き父の顔ではなくなつていた。

しかし突然、

「バラン！」

空耳ではない。愛する妻の声が聞こえてきて、バランの顔が僅かに緩む。

「ソアラ!? デイーノまで連れて……!」

何をしている! なぜ城を抜け出してきた!

大人しく待っていると言っただろう、ソアラ!

テラン城に送り届けたはずの若妻がそこにはいた。

「あなたが心配で……、ごめんなさい。

バラン……ここに来る途中、アルキードの兵士を見かけたの。

父が……来るのかしら?」

やや青ざめた顔のソアラの、我が子を抱く手に自然……力が込められる。

「そうではない。 義父上は……アルキードは魔物の群れに襲われているのだ」

その言葉に、ソアラはショックを受けたように動揺を隠せない。

「魔王の残党か……或いは私を狙う魔竜の手先かもしれぬ。

私は……おまえの国を巻き込んでしまったのかも知れない……。

義父上や、大臣達が言っていたことはある意味正しかったようだ……。

私を迎え入れてくれたばかりに、アルキードにモンスターを引き寄せてしまった。

テランに押し寄せた魔物も、私を狙った刺客かもしれん」

竜の騎士など魔物と同じだな、と自嘲気味に微笑んだバランに、

「そんなことを言わないで……!」

あなたが竜の騎士であるとか、人間じゃないとか…私には関係ない。バランは、バラン。私が愛する不器用で優しい、ただのバラン。

この子の…：：：ディーノのたった一人の父親よ」

おでこをくつつけ優しく微笑む。

彼女に抱かれるディーノも、当代の竜の騎士に微笑みかけ、勇気づけているように見えた。

暖かい。

太陽のように慈愛に満ちた彼女の心が、

我が子の心が熱となって伝わってくるようだった。

「ああ、そうだ…：：：そうだったな！」

私はおまえの夫で、ディーノの父親だ！

私が人間でなくとも、その事実は決して変わらない！」

バランの表情は再度、戦士のそれとなる。

そして今度は先程以上の闘志がみなぎっていた。

「ソアラ…：：：周辺に魔物の気配はないが、念のためまた城に戻っている。

私は義父上とアルキードを救う！」

「はい。…武運を…」

愛する妻と我が子の見送りを受けて竜の騎士が飛び立つ。

引き絞られた矢のような勢いで、バランは空を駆けた。

風を切り、ぐんぐんと雲が後ろへ流れる。

ベンガーナ王国を眼下に見ると、兵達の動きは忙しないように感じられる。

隣国がこの動き、となるとやはりアルキードは危険と見るべきだった。

風の妖精の囁きすらも置き去りにして竜の騎士はルーラを全開にし続けると、

アルキード王都は、すぐにバランの視界に入ってきた。

静か過ぎる王国。

人っ子一人、動きが感じられぬ王都。

「アルキードの首都に……誰もない」

繁栄する国の、無人の都。

降り立ったバランがどれだけ目を凝らしても、虫一匹動くものが感じられず、

しかも建物の被害は驚くほど少ない。

とてつもない異常事態が起きたことは明らかだ。

「アンデッドの群れ……どこへ消えた？」

誰も生き残りはいないのか……死体すら見当たらぬとは」

城下都市の大通りを走りぬけ、王城へ向かう。

城門は開け放たれていて、橋も降りたままになっており、ほぼ無傷の城内にはやはり生命の気配がない。

大階段を駆け上がり、生存者を探しつつ義父の……アルキード王がいるであろう玉座へ駆けこむ。

「ハ、国王陛下!？」

そこにはアルキード王がただ一人で座っていた。

まるで何事もなかったかのように、ソアラの父がただ静かに玉座に腰掛けていたのだ。

バランの姿に気付いたのだろう……アルキード王のうなだれていた顔がゆっくりと持ち上げられ、

「おお……おお……バランか……」。

もっと、近う……近う……。近う寄れ……。その顔を見せてくれ、媚殿よ!

虚ろな視線を投げかけながら、ポツポツと喋りだしていた。

(明らかに……おかしい)

一目見れば子供でもわかる、王の顔色の悪さ。

濁った瞳。そして、今となつては決して王が口にせぬ優しげな言葉。

豪剣を構えなおして、バランは様子見に徹する。

「なぜじゃ……なぜ来ぬ……。 王の言葉に従わぬのか、バラン。

やはりおまえは、わしに叛意を持っていたのだな。

やはり人間ではない貴様は……魔物と同じだったのだな。

疫病神め。 疫病神め。

ソアラを返せ。 わしのソアラを。

貴様が魔物を連れてきたのだ。 あの恐ろしき黒い悪魔を。

貴様などいなければよかった。

そうすれば……ソアラも、わしも、この国も……無事だったのに。

アルキードは滅んだ。 全ての者が死に絶えた。

おまえが殺したのだ……全ての民を……そして、この…………わしも!!」

叫んだ王が勢い良く立ち上がると、体が突如崩れ出す。

皮膚が剥がれ、肉が腐り落ち、髪がボロボロと落ちていく。

眼球がべちやりと落下して、少しの肉がへばりついた骨だけの姿となると、

そのまま力無く玉座にもたれかかるように倒れ、

王冠が虚しく頭蓋骨に残っていた。

「つ!! ……悪趣味な真似を!! 貴様だろう、死霊使い!!」

私を追って地上まで来たか!」

最愛の人の実父の成れの果てを、

僅かな冷や汗を垂らしながらも見守り続けたバランが吠える。

バランは確信していた。

あの時、魔界で襲ってきたアンデッドを使役する魔族であろうと。

生き残った仲間を皆殺しにした憎き敵！

「ぐぶぶぶぶ……私の催し物は気に入ってくれたかな、竜の騎士よ」

アルキード城の玉座の間に、あの時間いた醜悪な声がどこからともなく響く。

「またも姿を見せぬ気か！　だが、あの時とは私も違う……！」

——そこだああ!!」

万全のバランならば、見えぬ敵を捉えるのも不可能ではない。

叫びながら、後ろを振り向いたバランが、そのまま跳びかかり剣を振り下ろす。

いつかの時とは違う、竜鬨気に満ちた一撃。

怪しき黒衣の魔族は、大きく背後へと飛び退くと、

「ぐぶぶぶぶ……　気の早いやつだ！」

そのまま城外へ瞬間移動を断続的に行い、一際高くそびえる塔の頂点へ飛び移った。

バランは即座に追撃の姿勢をとるが、

「慌てるな……おまえの相手は我ではない……！」

冥王が腕を振るうと、濃霧の如き瘴気が辺りを包み視界を奪う。

しかし、並みの生物ならば

触れただけで死に至る黒き幕霧も竜鬪気が完璧に防ぎ、

「小賢しいぞ！ ドラゴニックオーラッ!!」

それを高めるだけで瘴気は払われるのだ。

だが、竜鬪気によってクリアになった視界に飛び込んだのは、

「グブブブブ！ 開け…冥界の門……！」

業火に焼かれし腐敗の竜よ！ 生きとし生けるものを食らうべし！」

暗黒の術式を完了した冥府の王の姿と、

邪悪の渦から徐々に迫り出してくる腐敗の巨竜だった。

「グオオオオオオオオオオオオオオ!!」

神代の頃より威を誇った古の雷帝が狂った雄叫びを上げながら、現世に舞い戻る。

「な、なんだアレは!? 貴様は…これほどの死者を縛るのか!!」

「そやつは古代、魔界においてヴェルザーと覇を競った知恵ある竜……。」

もつとも…百年の苦役に、既に知恵を喪失しておるがな。

竜の騎士には相応しい相手であろう……！」

古の魔界の猛者を使役する眼前の魔族に、バランでさえ背筋が寒くなる。



「おのれ…外道め！ 許さぬ!!」

だが、感じた僅かな恐怖さえも義憤で飲み込み、 balan は竜の騎士の天命を果さんとし、

「ギガデイン!!」

力強く握る真魔剛竜剣に最強の呪文を降ろす。

初手から最強の技をぶつけるのが最善と、彼の内の闘いの遺伝子が告げていた。

「うおおお、ギガブレイク!!」

八相の構えから猛然と突き進み、渾身の必殺技を巨大なドラゴンゾンビへと叩き込んだ。

しかし、

「ギャゴゴゴグオオオオオオ！」

ギガブレイクの威力に吹き飛ばされたのは、僅かに右側頭部から右腹部まで。

アンデッドに対しては不十分なダメージであった。

「なんだと！ こ、これはまさか！」

予想を遥かに下回るギガブレイクの威力に、balan は驚愕し、そしてすぐに察する。

「ぐぐぐぐぐ…！ そうだ！」

そのドラゴンゾンビの生前の名は雷竜ポリクス！

雷竜にデイン系など通じぬ！ おまえのギガブレイクの威力は半減する……！」  
そして、と続ける冥王。

「貴様の生半可な反撃は……雷竜より新たなアンデッドを生み出すのだ……！」  
飛び散ったポリクスの肉片からゾンビどもが這いずりでてき、  
唸り嘲笑う冥王の姿がそのまま薄くなっていく。

「!! 貴様！ 逃げるか!!」

「ぐぶぶぶぶぶぶぶ……貴様は私の傀儡どもと遊んでいるがいい。

その間に、我は更なる趣向を凝らさねばならん……。」

貴様という貴賓を持って成す、遊戯を……な……グブブブブ」

「待て……」

バランスが消え行く冥王に向かおうとした瞬間、

「ぐ、ぎぎ……ガアアアアア……ぎ、がでイン……！」

口腔を開け放つ雷竜からとてつもない雷撃が放たれる。

極太の雷が幾筋もアルキード全土に降り注ぎ、バランスの視界を閃光で埋め尽くす。

百年の苦痛の果てに知恵を失った腐敗竜は、

その代償として無尽蔵の破壊のエナジーを得ていた。

（なんとという呪文の威力！ 範囲！、これが真竜の闘いを演じたポリクスの底力な

のか！

たった一撃の電撃呪文が、私のギガデインの何発分だ!!)

おぞましき黒衣の魔族を追うことは、ボリクスゾンビを滅しなければ不可能だ。バランは、真魔剛竜剣を強く握りしめた。

## 独りになった竜の騎士

狂った雷竜とバランとの戦いは、まさに激闘であつた。

王国全土を焦土にする規模のボリクスのギガデインをかくぐり、

十太刀ほども剣撃を浴びせたが、

闘気剣で斬りつけるだけではただアンデッドの異種再生を誘うだけだ。

得意とするギガブレイクは、ボリクスには効果が薄い。

紋章閃での貫通は異種再生の誘発こそ少ないが、

闘気の消費と与えるダメージの効率が悪すぎた。

「く……！ ヴェルザーに匹敵するか……！」

いや、あの死霊使いの力が付与されている分、こいつの方が厄介だ！

バランは奥の手のマックスバトルフォームを出し惜しむ。

魔獣の形態をとれば敵を全滅させるまで変身は解除されず、

彼の思考は闘争一色で埋め尽くされ、辺りは破壊に包まれる。

ボリクスのタフネスと再生能力、

そして雷竜の周囲に大発生しているアンデッドの群れを考慮すると、

竜闘<sup>ド</sup>気砲<sup>ル</sup>呪文<sup>オー</sup>を使いた<sup>ラ</sup>い所ではあつたが

あれは手加減して撃てるような呪文ではなく、  
戦場であるアルキードは……どれ程かはわからぬが甚大な被害をうけることは間違  
いない。

妻の記憶にある風景は全て失われるだろう。

「ぎ、ギギイ……！　グルオオオオオオ!!」

“激しい炎”を腐敗臭とともに吐き出す爛れた口。

自らが生み出した亡者ごとバランを焼き払わんとするが、

「紋章閃!」

圧縮された闘気の閃光が炎を切り裂きそのままボリクスの腐肉を穿つ。

低く唸る雷竜が、痛みによって更に怒ると、

「イ、痛イイイイ……グアアアアアア!　ギガ、デインツ!!」

開け放った大口に唱えた電撃を受けた。

猛り狂い、雷と暗黒闘気を纏った口牙で

バランを食らおうとするボリクスの一撃はさしずめ雷竜版ギガブレイク。

アルキードを消し飛ばす覚悟がつかぬバランは、

「ぬう……！　ギガデイン!」

もつとも頼りになる技で迎え討つ。

(ボリクスの雷牙……！ 極めてギガブレイクに近い性質の必殺の牙……！)

「ならば！ 私のギガブレイクを上乗せしてやる！」

ドラゴン  
竜の騎士の闘いの遺伝子が、ドルオーラを用いぬ突破口を見出す。

自分の経験とセンスがあれば、ボリクスの雷牙にギガブレイクを合わせ

その力をボリクスの口内で暴発させることも可能。

そう判断した balan は突進し、

「ギガブレイク!!」

高められた竜闘気と暗黒闘気、そして2つのギガデインがぶつかり合う。

真魔剛竜剣とボリクスの牙の間に激しいエネルギーの奔流を生み出し……

弾けた。

轟音とともに強力な閃光と爆発が起きて、balan を遙か後方に弾き飛ばす。

ボリクスの巨体と重量に遮られた衝撃波が逃げ道を balan に求めた結果である。

しかし、

「……勝った！」

ダメージは全てボリクスへと流れていた。

首どころか、上半身全てが吹き飛んだ腐敗竜。

残された後ろ足と皮一枚で繋がる尻尾が、だらりと垂れ下がっていた。空中に静止していたボリクスのそれらも、

やがて力を失って眼下のアルキード城へと墮ちていった。

大物を倒した今、残すは異形の雑魚どもだけだ。

10秒もかからず雑魚を瞬殺したバランは、そのまま残心し感覚を研ぎ澄ますが、

「……………心配がない。」

あの死霊使いは……………いつたどこへ消えた？

趣向を凝らした遊戯……………と言っていたが、一体……………」

不吉な風がアルキードの荒野に吹いた。

結局、アルキード周辺を探索したがあの黒い死人使いは見つからなかった。

バランは、一抹の不安を覚えながらもルーラでの帰還を選択した。

行きと同じように眼下に望むベンガーナを見ると、人々はバランが来た方角……

アルキード王国がある南方を見ながら大変な騒ぎ様だ。

ベンガーナにもアルキードからの使者は来ただろうし、

しかも先程バランとボリクスが起こした雷光はこの国の人々にも確認できただろうから、

この騒ぎっぷりもしかたないだろう。

(ベンガーナにも……アルキードの者の血縁は、きつといるのだろうか。

そしてその逆も……。私が間に合わなかったばかりに……)

空を駆けながらそこまで考え、すぐにバランは考えを改めた。

いや、改めざるを得なかった。

「!? な、なんだ……あれは！　そ、そんなバカな!!」

もうじき見えてくるはずのテラン王国。

寂れた……しかしのどかで平和な、愛する家族が待つ優しい国。

のどかな風景が、一変していた。

「ば、馬鹿な!!　こんなバカなことがあるものか!!」

おお、聖母<sup>マザ</sup>竜<sup>ザ</sup>よ!　神よ!!」

テランの空が煌々と明るい。

それは、日が沈み夕焼けが空を染めているから、だけではない。



テラン王国の全てが紅蓮に包まれ燃えていた。

既にこの距離からでも熱風を感じる。

火事……ありえない。

放火……それでもありえない。

戦争……それでもここまでにならない。

王国の全土を焼くなど、人智を超えた所業であつた。

それができるのは、竜魔人となつたバランか先のポリクス……或いは強大な魔族。

「ソ、ソアラあああ!! デイーン!!!」

バランの耳に、今にも奴の“唸り笑い”が聞こえてきそうだった。

彼は確信した。この悪魔の所業は、『奴』の仕業であると。

迫る炎など物ともせずバランは大火に飛び込む。

地表を飛翔トベル呪文で滑り飛ぶバランの鼻に、肉の焼ける臭いが否が応でも感じられる。

原型を留めぬほどに破壊された人の死体が、そこから中で燃え盛っていた。

今もなお隆盛に燃え続けるテラン城に辿り着くと、

その正門付近に投げ捨てられるように倒れた人間達の姿が。

「近衛と……フォルケン王!」

急ぎ駆け寄るバランが素早く彼らの状態を診てやると、

〔近衛達は……もうダメか……！　だがフォルケン王はまだ助かる！〕

バルンは腰袋内の薬草を引っ掴むと、

己の血を葉になすりつけてからフォルケンの痛々しい傷口に貼り付け、口にも含ませる。

死者をも蘇生させるといふ伝説の竜の血の力が、薬草の回復力を助けているはずだ。

「う……バ、バルン殿か。我が国に来てくれた……物好きな若者と……思っておったが……急に体が楽になつてきた……あ、貴方は何者だ……？」

弱々しく目を開いた老王は、100人にも満たない己の国の国民の名を全て覚えてい

る。  
若夫婦がテランに越して来たと聞いた時は随分喜んだものだ。

「私のことは後で説明しよう。」

そんなことよりも！　これは一体どういうことなんだ、フォルケン王よ！

「そ、そうじゃ……！　し、城には……まだ生きている民が……！」

く、黒い魔族が……テランを襲つたのだ……！　奴は……まさに……あ、悪魔。

奴は、まだ城にいるはずだ……た、頼む、バルン！　我が民を助けてくれ！

そなたの妻……ソアラと、赤子も……！」

「!!」

バランの顔色が変わる。

思わずフォルケンを抱える腕が振るえ、老王を落としそうになってしまったがグツと堪え、

フォルケンを地に優しく寝かせると、「その女！」と叫ぶ。

「は、はいい！」

と狼狽えながら物陰から飛び出してきたのは幼子を連れた初老の女性。

「名は！」

「ナ、ナバラでございます！」

「よし…ナバラ！ フォルケン王を頼む！ 瞬間移動呪文ルを使えるのならそれで逃げるのだ。

使えずとも、できるだけ遠くに…：…街道沿いをひたすら歩き、テランから離れろ！」

初老の女性に、ろくに動けぬ老いた傷病人を連れて歩いて逃げろ、というのは些か酷だが。

ナバラと幼子がこくこくと頷いたのを見て、バランは城内へ駆け込んでいく。

「ソアララー!! デイノー!!」

城内には女子供が避難していた。

己が妻子以外にも生き残りがいないか気を配るバランだが、

その目に写るものは……死体、死体、死体、死体。

焼け爛れた死体達は、皆、一樣にその胸に何かを抱きすくめた姿で炭化しつつある。我が子を最後まで守り死んでいった母親達のそれであった。

「——ッ!!」

バランの心に“込み上げてくる”ものがある。

それは母達への称賛であり、それでも守りきれなかったという事実への憐れみの情。この凄惨な光景を生み出した“あの死霊使い”への留まることを知らぬ怒り。

そして……焼死体の中にソアラとディーノがいないことへの安心。

(私も……随分と醜い)

醜い感情を自覚しながらも、

それでも格別に愛しい妻子を最優先としてバランは城内をくまなく探す。

焼け落ちてくる瓦礫を払いながら突き進むと、

やがて地下の宝物庫に辿り着き……

「ソアラ!! ディーノ!!」

扉を開け放ったバランの声に喜色がにじむ。

が、すぐにそれは悲痛な色を帯びた。

ソアラは床に倒れ、そして彼女が常に慈しんで抱いていた赤児が……

我が子ディーノの姿がどこにも見えない。

「ソ、ソアラ!!」

バランの声に反応したソアラが臆気に意識を取り戻す。

叫んで駆け寄ろうとしたバランに気付いた彼女は

苦しそうに頭だけをもたげ、

「来てはダメ!」

「なにを言う!?!」

「そ、そこに罨が! 気をつけてバラン!」

咄嗟に足を止め、素早く足元を注視するとそこには半透明状の魔糸が張り巡らせていた。

うぬ…!とばかりに一気呵成に魔糸を豪剣で切り裂いたバランだったが、

「余計なことをしてくれる……手間を掛けさせおつて」

「あ! ああああああ!!!」

聞き覚えのある邪悪な声が聞こえた直後、

ソアラに激しい黒きスパークが襲いかかりその美しい体を蝕んだ。

「ソ、ソアラ!! やめろおお!!」

瞬時に気配を掴んだバランが真魔剛竜剣を下段に構え跳び進む。

が、

振り上げようとした剣をピタリと止めた。

ズズズ…と、徐々に空間にハッキリと姿を現しだす黒き背虫の魔族の姿。

「き、貴様…!!」

その魔族の異形の虫腕にかかえるように抱かれているもの。

白い布に包まれた、人の赤ん坊。

見間違えるはずがなかった。

それは間違いなくバランの一人、デイーノ。

「ぐぐぐぐぐぐ…よくぞその剣を止めたな。」

あと少し遅ければ、貴様の子が真つ二つになつていたぞ？」

肩を揺らす冥王を、射殺さんばかりの怒気が籠められた視線を向け、

すぐさま左腕を伸ばし我が子を取り戻さんとしたバランだったが、

「ぐぐぐぐぐ…無駄…無駄…!」

フツ、と消えたゴルゴナはそのまま宝物庫の鉄扉付近まで瞬間移動し、

薄気味悪く笑い続ける。

ゆつくりと大きく鋭い爪を布上で滑らせ、抱きかかえるデイーノの柔らかな頬へ浅く

突き刺す。

「ふう、ふえええええ！　ふあああああ！」

ほんの少しの血が柔肌に滲み浮かび、赤児が泣く。

「やめろ！　その子はまだ赤ん坊だぞ!!」

「あ、ああ……！　お願い……やめて！　私ならどうなつてもいいからデーノだけは！」  
必死の父母を嘲笑う冥王のくぐもつた声と幼子の鳴き声が、宝物庫に虚しく響く。

「グブブブブブ……！」

アルキード王を拷問したらあつさりとその女のことを知ることが出来た。

あの男は、軍勢を整えテランへおまえを討伐しに行くつもりだったようだぞ……バランよ。

地上の希望……竜の騎士を討伐しようとは、

人間の愚かさの……なんと愛おしいことか」

バランとソアラの表情は、心中の複雑さを物語っているようだった。

冥王の虚言かもしれない。　そうであると信じたい。

だが、その一方で2人は……アルキード王ならばそうしかねない、とも思っていた。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ………そして、テランに来てみれば、

その女が竜の騎士の子を産み落としているというではないか……。

運はこちらにあるようだな……。

balanよ……我が子が大切ならば、私の軍門に降るがよい。  
断れば……………」

大蜘蛛の三本の爪が、ゆつくりとデイーノの産毛しか生えていない柔らかな頭に添えられ、

「熟れたトマトのように、我が子の頭蓋が弾けるのを見たくはあるまい？

……………我に従うならば、その意志を見せるのだ。

真魔剛竜剣をこちらに投げ渡せ」

張り詰めた糸のような緊張が部屋を支配し、

デイーノの恐怖に染まった泣き声だけが響き渡り続ける。

泣き叫ぶ我が子を抱きしめることもできないソアラは、

ただそれだけで拷問を受けているかのような心持ちであった。

そして、それはbalanも同じなのだ。

「……………」

黙って、右手の豪剣を緩慢な動作で持ち上げ、そのまま冥王へと放り投げると、重々しい金属音がデイーノの泣き声を僅かにかき消した。

足元に転がってきた『それ』を冥王は2本の左腕で拾い上げ、

「ぐぐぐ……………」それが真魔剛竜剣か。



素晴らしい輝きだ……王者の剣とは趣を異にする見事な業物だ」  
バランは機を伺っているが、

しかし、剣に魅入っているように見えて冥王は僅かの隙も見せてはいない。

このままではズルズルと死霊使いの言いなりになっってしまうが、  
しかし、バランはそれでもソアラとディーノを守りたかった。

「我には分かるぞ……おまえの葛藤が。」

だが、安心するがいい……我ら魔族は人間とは違い、流れる血で差別はせん。  
力あるものは全て受け入れる……。

魔王軍に忠誠を誓い続けるならば……おまえも、おまえの妻子も……

魔王軍が保護してやろうではないか」

闘志を失いつつある竜の騎士が、冥王の言葉にぴくりと反応した。

「魔王軍？ おまえはヴェルザーの残党ではなかったのか？」

「ぐぶぶぶ……ヴェルザーは我が軍にとつても、いずれは倒さねばならぬ敵であったのだ。」

我は魔界の神に仕える冥王・ゴルゴナ。

そして、我の主の名は……大魔王バーン。

竜の騎士である貴様ならば、名前くらいは聞いたことがあるだろう」

大魔王バーン……。その名は、確かにバランスも聞いたことがあった。地上への野心を見せたことはなく、“魔界の秩序を保つ生き神”。

むしろヴェルザーの地上進出の野心を封じ込めてきた“天界側”の若き魔界神である、

というのが竜の騎士の代々の認識であり、それはつまり天界の意識だ。

「なるほど……。どうやら、三界の神々は見事に欺かれていたというわけだな。

……天が力を失っている証拠、か」

俯くバランスが、力無く呟いた。

未だ隙を探しだすのを諦めてはいないが、闘志は確実に萎えてきている。

「お前の愛しき者の身の安全は、この冥王が保証してやる……。ぐふふふ。

“落ち目”の天界よりも：我らとともに覇業をなそうではないか。

大魔王様とともにな」

守られるかどうかもわからない冥王の口約束。

それでもバランスは従うしかない。

バランスにとって、ソアラとディーノの方が全世界よりも尊い。

人間の愛を知った竜の騎士は、愛を守る為に無限に強くなれる…。

が、愛の為に世界を滅ぼす選択もできる自由意志を手に入れていた。

バランは瞳を閉じると、

跪き、倒れるソアラを優しく抱き寄せ肩を抱く。

ソアラは泣いていた。

伝説の竜の騎士に、悪の道を選ばせつつある

自分と我が子の存在に……罪悪感に押し潰されそうになりながらも、

無力な自分は夫に縋るしかできない。

「自分はどうなってもいい」と、そう言つて悪の道を思い止まらせたいが、

デイーノの命がかかっている今はソアラでさえも黙っているしかなかった。

ソアラはただ魔王軍の悪魔の如き所業に涙するしかない。

竜の騎士とアルキードの王女が、冥王に屈服するように共に俯いていた。

「ふっ………ようやく諦めたか。それでよい。

では………我らの居城へと案内しようではないか……

竜の騎士バラン……奥方………そして亡国の王子・デイーノ殿下………ぐぶぶぶ」

勝利を確信したゴルゴナが、デイーノの頭から爪を退け、

己の黒き衣の中に赤児を包み隠そうとした時、それは起こった。

「むっ！」

バランがいち早く“相棒”の動きを察知した。

「ゴルゴナの左腕に掴まれていた真魔剛竜剣が突如強烈な光を放ち始めたのだ。

「な、なんだと!? これは……ぐあああああ!! 我が……や、焼ける!!

この光は、あの時の……バ、バラン!! 貴様何をした!!」

それは真魔剛竜剣が、かつて天の精霊の血を浴び内包していたモノ。

意思ある剣が、死した仲間から受け取った力を解放したのだ。

死して尚バランを守ろうとする精霊と、無二の友を守ろうとする神剣の意地の反撃であつた。

そしてそれを見逃すバランではない。

「う、うぐおおおおおオオオオオ!!!?」

即座に跳躍し、全開の竜闘気で満ちた手刀で2本の左腕を瞬時に切り落とし、

「真魔剛竜剣よ…… お前にはいつも…… 助けられてばかりだ!」

宙へ投げ出された豪剣を掴むとそのままディーノを掴む右腕へ気合一閃。

「ぐあああああ! ば、バカな!」

一秒にも満たない間にゴルゴナの腕が3本、宙を舞っていた。

解放されたディーノの小さな体を、バランはしっかりと掻き抱くと、

竜闘気が籠った蹴撃をゴルゴナの顔面に叩きこみ、

そのまま冥王の体を床に叩きつけると膝で頸部を締め上げる。

片手でディーノをしつかりと抱き上げ、  
右手だけで真魔剛竜剣を高々と掲げると、

天上を吹き飛ばし地下まで届いた稲妻が剣に炸裂するのだった。

(は、速くなっている!? しかも……この地下にまでギガデインを！)

「ギガブレイクツ!!!」

「う、うおおおおお!!」

間髪入れず、至近距離からゴルゴナの顔面に自慢の必殺剣を見舞う。

構えと助走距離：闘気と魔力の練り込みも不十分の、万全ではないギガブレイクで

あつたが、

それでも直撃すればただでは済まない。

剣圧が冥王の顔を切り裂き瞳を一つ潰すと、

闘気と魔力の爆発が彼を遥か上空に吹き飛ばし巻き上げた。

「うぐ、ぐ……! おのれえい! この冥王がただでやられるか!

我に楯突いたこと……後悔させてやるぞ……バラン!!」

竜闘気の渦の中で、残った手に瞬時に力を集束させ

「死ねい!!」

闘気とも魔法力とも違う神仙術の破壊光弾をカウンター気味に冥王が放つ。

大ダメージを受け体勢を崩されながらの冥王の反撃。

冥王の攻撃は毒を持っていた。瘴気と邪気というとびきりの毒だ。

そもそもゴルゴナ自身が瘴気を纏い、腐毒を放ち続けている。

呼吸をするだけで…近くにいただけでか弱き者は生命力を徐々に削られてしまうのだ。

ディーノは竜の騎士の血が流れているとはいえ、まだ乳飲み子で脆弱そのもの。

今もバランスの腕の中でディーノは、確実に泣き声は力を失い顔色も悪くなってきている。

避けなければマズいが、我が子を庇いつつ片手でギガブレイクを放ったバランスもまた、

冥王同様に体勢を崩してしまっていて、

しかもギガブレイクの余波が

宝物庫の床に幾筋もの亀裂を生じさせて、それに拍車をかけていた。

(しまった！ マ、マズい!!)

これ以上はディーノの身が危うい！)

バランスが竜鬨気を纏って己を盾に我が子を守っても、

ディーノへ届く衝撃と瘴気の全てを完全にキャンセルすることは出来ないのだ。

迫る光弾を見つめるバルンの瞳。

その時、視界が突如ブレた。

「っ!?!」

バルンの体が真横に突き押されて、破壊球の着弾地点から大きくズレていく。

そして、バルンを押し出し：代わりにその場にいたのは…。

「ソ…ソアラアアアアア!!」

目があった彼女が、最期に儂げに笑った。

愛する夫と我が子の窮状を理解した彼女は冥き稲妻と瘴気にその心身を蝕まれなが

らも、

最後の力を振り絞りその身を盾とした。

光飲まれていき、直後に爆発が起きる。

ややあつて爆風が消え去ったその跡にはクレーターがあるのみで、

もはやソアラの痕跡はこの世から消え失せていた。

啞然とする竜の騎士。

バルンは信じられなかった。

あれ程愛し、守りたかった者が目の前で消滅してしまったことを。

何を犠牲にしても守りたかった幸福が、永遠に遠のいてしまった。

もはや、ソアラはその太陽のような笑顔をバランに振りまくことはない。

「ソ……ソアラ……！！ ソアラ！！ う、おおおおお！！！！」

限らない怒りが、バランの人の心を覆い尽くす。

湧き出る憎悪が、バランの人の心を染め上げていく。

底なしの悲しみが、バランの人の心を引き裂いていく。

（ちっ……あの女！ 無駄に自己犠牲精神を発揮しておつて……！！）

大人しくしていれば殺さずに済んだものを………。

いつそ、原型が残るように真つ先に殺すべきであつたか。

あのザマではアンデッドとして使役もできぬ………）

地下宝物庫から望める空は、すでに日が沈みきつて夜の帳が下りており、

大きな月を背後に背負った冥王が、邪悪な雲の上から七つ目を光らせながら考えていた。

ゴルゴナは、最初からバランの妻子を殺すつもりはなかった……というのが本音だ。

彼は人の心の機微というものを理解している。

愛するものを持つ人間の制御は容易い。それをこちらで捕らえてしまえばいいの

だから。

かつて、魔人王ジャガンを誕生させた折にも



ジャガンの母、王妃フレイアを捕らえ…それによって父王ローラン4世を意のままにしたのだ。

このバランスにも似たことが出来るはずだったのだ。

だが、ゴルゴナは竜の騎士の妻を甘く見ていた。

アルキードにて温室育ちの姫との情報を得て、

その先入観からあそこまで能動的に動く人間とは思っていなかった。

だが、今思えば男を作り駆け落ちするような女だ。

その行動力は並ではないと予想できたはずだったが、できなかった。

せめて、骨や肉でも残して死んでくれていれば地獄の秘術によって甦らせることもで

きるが、

見ている通り消滅して死んでしまった。

霊魂だけを縛り、ゴーストとして使ってもいいが肉体のあるなしは人の心に大きく影

響する。

(ソアラのゴーストを使っても…バランスを制御できるとは思えん。

人は良くも悪くも“肉”に支配されている……。それは生命の繁殖として正しい。

だからこそ目に見えるよう、見知った人間の姿形が、

おぞましく腐り果て苦しむ姿を見せるのが効果的なのだ。

不確かな靈魂だけでは、バランスのような強靱な精神の持ち主は迷いを断ち切つてしま  
う。

……………認めねばなるまい……………私の読みが甘かった)

ここで冥王は策を転換する。

ソアラとディーノを人質としてバランスに恭順を誓わせるのではなく、

彼の腕の中にいるディーノを敢えてバランスに守らせ、

動きを制限し徹底的にバランスをいたぶるのだ。

そして全ての抵抗の手段を奪い、その肉体を得る。

(それならばまだ容易い……………もはや邪魔立てする精霊もない。

だが、真魔剛竜剣……………どうやら魔剣ネクロスと似た存在……………魔剣族に近いものか。

神々が自ら創りし神剣とは伊達ではないな……………自我を持つオリハルコンの剣とは。

二度と復元できぬよう、打ち砕き…消滅させてくれる。

神の奇跡として……………可能性が0ならば助けようもあるまい……………。

貴様を助けるあらゆる可能性を潰し、その肉体をホルマリン漬けにしてやるぞ、バラ

ン)

左腕を2本、右腕を1本、瞳を1つ失い、全身を聖光と電撃呪文の魔法剣で焼かれ…、

最善の策が潰れてもゴルゴナの戦意は衰えていなかった。

しかしそれはバランとて同じ。

寧ろ愛する人を目の前で殺された彼の戦意は、既に殺意にまで昇華されゴルゴナの抹殺だけを望む殺戮生物へとその心を変貌させていた。

バランは空いた腕で左目の神器をもぎ取り…、

「貴様だけは必ず殺す…ゴルゴナ！」

血が滴るほどの歯軋りをしつつドラゴンファングを掲げようとした時、

「だめよ、バラン」と……優しげに言う妻の声がはつきりと聞こえた。

「っ!!? ソアラ！」

バランの手がはたっ、と止まり…

その時、バランの腕の中で弱々しくデイーノが「ふあああ」と泣いた。

力のない弱りきった我が子の声。

バランの狂える怒りを、デイーノへの愛が抑えこみ、

(そ、そうだ…私は何をやっている…!!)

竜魔人となれば、この子を巻き込んでしまう。

そして、そうなればデイーノは確実に死ぬ！

ソアラを失って悲しむあまり…ソアラが残した宝を……私は失う所だった！

今は…戦ってはならん……この子はすでに限界だ。

私にできること……それは、逃げて逃げて……逃げ切ることだ！

魔王軍の手が届かぬ所に……！)

ゴルゴナからの再度の“逃げ”を選択させた。

「ルーラー!!」

飛翔呪文を遙かに上回る速度と、

竜の騎士バランが初手で逃げをうつ……という予想外の行動は、

ゴルゴナの眼前を通りぬけることを成功させた。

「なんだと?! まさかいきなり逃げるとはな……!」

竜魔人化は思いとどまるだろうとは思ったが……」

瘴気の黒雲から飛び降りたゴルゴナは、神仙術による飛行に切り替えこれを追う。

速度だけならこちらの方が優っているからであった。

闇夜の空を、赤児を抱いた竜の騎士と、それを追う異形の魔族が駆ける。

普通の人間ならば呼吸困難になりそうな風圧で、空を飛び続ける両者。

だが、弱っているデイーノにとってこの速度は危険だ。

しかし弱めればゴルゴナに追いつかれ、彼の射程に入ってしまう。

「く………! しいい奴だ!」

「ぐぐぐぐぐぐ……世界を震撼させる竜の騎士にそう言ってもらえるとは光栄だな。

返礼として、面白いものを見せてやろう」

「なにいい?」

見よ、とゴルゴナが指さした方角。

バランが冥王から気を逸らさずに僅かに視線を向けると、

「あ、あれは……! バカな! 奴は昼間、確かに倒したはずだ!!」

月明かりに照らされた”それ”は闇夜を巨大な翼で飛翔する腐敗竜。

「ポリクスゾンビ!!」

「ぐふふふふふふ…… その通り。」

私の従僕を滅ぼしたいのなら、灰も残さず消し去るべきであったな。

討ち漏らしがあればそこから再生し……あの通り五体満足となる……グブブブ!」

まさに前門の虎、後門の狼。

退がれば冥王に……進めば雷竜に補足される。

「ぐふふふふ……逃げ惑え!」

「グオオオオオオッ!! ギガデイン!!」

背後から無数の光弾がばら撒かれ、

進むべき空路には極大の電撃が網のように降り注ぐ。

「う、く……くそお!!」

巧みな魔力放出によって軌道をかえる balan だが、

その度に小さく苦しそうに呻く我が子に気が気でない。

(ディーノ…すまん！ もう少し耐えてくれ!!)

だが、回避行動に僅かとはいえ専念したばかりに、

ゴルゴナが一気にその距離を縮め、

「ぐぶぶぶ！ 捉えたぞ!! ていやあぁー!!!」

一際巨大な光弾を残った両手に発生させ、balanへと叩きつけるように撃ち放った。

(なんたる威力…! ドルオーラには及ばぬが、小島程度なら消し飛ばぞ!!)

「くっ…!」

いつの間にか海面となっていた眼下に着水し、そして…

「うおおお?!」

けたたましい音とともに大爆発が起きる。

巨大な水柱が空に昇るように吹き上がり嵐のような大粒の雨が降りしきると、

ざあつと辺りを濃厚な水霧が覆い隠し視界を阻害する。

そこに、

「ギャゴゴオオオオオ、オオオオ!!」

「!? し、しまつ——」

間近まで迫っていた雷竜が巨大な前腕を振り下ろし、バルンの腕を深く爪が切り裂くと、

バルンの腕から赤児が零れ落ちてしまうのだった。

「デイ、デイーノオー……!!!」

脇目も振らず、海中に突撃するかのような速度で降下しようとしたバルン。

だが、前腕を振りぬいたポリクスは、そのまま回転するように巨体を捻り続けると、バルンの背に暗黒闘気を帯びた尻尾を叩き込んだ。

取り乱してしまった瞬間に直撃した尻尾は、

バルンを海中深くまでふき飛ばす痛恨の一撃となってしまう。

急ぎ海中で体勢を立て直そうとしたバルンを追って、

雷竜が腐った巨体を派手に海に沈めてき、そのまま巨大な口でバルンを挟み込むと、噛み砕こうと万力のように絞め上げてくる。

だが、

「邪魔をするなあー……!!!」

デイーノ探索を妨害され続けた竜の騎士の逆鱗に触れた。

急激に噴出した莫大な竜闘気に、

ポリクスは頭部をミンチにされ海上までその巨体をふっ飛ばされる。

海中から巨大な水柱が、再度立ち昇る。

と、その水柱が内側から破裂し、

そこには猛るバランスが怒りの形相で周囲の海面を見渡していた。

「む……」

幕霧が晴れ、

その光景を見たゴルゴナは全てを察した。

「バランスめ……ディーノを落としたな……」。

あまつさえ見失うとは情けない奴……だが、これはいかんな」

これで、もはや次善の策も潰えてしまった。

更なる策が無いでもないが、既に“退き時”に彼には思えた。

王手までかけた絶好の機会を、続けて二度も失敗しているのだ。

一度目は気絶していたはずのソアラが目覚め、バランスに罠を教えてしまったこと。

焦っていたバランスは彼女が言わなければ間違ひなく引つ掛かり、

雁字搦めの状態異常に侵され魔牢に囚われていただろう。

二度目は真魔剛竜剣の横槍。

あれが無ければそのまま竜の騎士一家を魔王軍入りへと導けたはずだ。

オマケのラスト、三度目。



ソアラが自棄となって消滅して死んだ。

(運は我にあると思つたが……ままならぬものよ)

そして今また、ディーノという枷が消えてしまった。

これ以上の攻撃はバランの怒涛の反撃を誘発してしまうだろう。

日も高い内から連戦に引きずり込み体力と魔法力も大いに消耗させてはいる。

偶発的とはいえ妻ソアラを殺害し精神的にも追い詰めた。

だが、バランにはまだ

竜魔人化する体力は残されており余力はある……という冥王の見立てであつた。

全力戦闘が可能な竜の騎士と正面切つて戦うなど、ゴルゴナは御免なのである。

「……………我が事は敗れた……………」

ボリクスゾンビめ……余計なこととしてくれたな。

“知恵足らず”めが……………帰るぞ”

雷竜への言葉は半ば八つ当たりであつたが、

そうと決めたゴルゴナの撤退は速かつた。

腕を一振りし、半壊した雷竜を冥界へと仕舞い込み、自身はリリルーラでかき消える。

後に残されたのは、我が子を必死に探し続ける竜の騎士のみ。

この、たった一日のうちにバランは……想い出深い土地と妻子を失つた。

今日という日を、バランは絶対に忘れないだろう。  
仲間、故郷、家族を奪った

異形の黒き魔族・冥王ゴルゴナの名も、バランの魂に刻み込まれたのだった。

## キングとじじい

死の大地地下に埋め込まれている大魔宮バーンパレスに帰還したゴルゴナは、

ある程度の“お叱りの言葉”や同僚からの“嘲りの視線”を覚悟していた。

だが待っていたのは、

「戻ったか……ご苦労だった。

英雄バランを相手に、なかなか善戦したではないか」

という大魔王の言葉。

「……………」

「策士策に溺れる……って感じだったねえ。ご愁傷さま。

まあ……バラン君の目の前で女を殺したり、

アルキードに瘴気撒いて滅ぼしちゃうのプラスだったよ。ボクとしてはね」

ミストバーンは沈黙で、キルバーンは陽気にゴルゴナを迎えていた。

「……申し訳ありません。バランの捕獲にも、引き入れにもしくじりました。

バーン様の名まで出してしまい……結果は竜の逆鱗に触れたのみ」

冥王が自らの失態を詫びる。

自分の戦いは、張り巡らせている“悪魔の目玉包囲網”によって彼らに知られていないはずで、

内容も事細かにいちいち言わずに済むので楽は楽である。

「仕方あるまい。あそこまでいけば余とて部下にできると思うであろう。

フツフツフツ……真魔剛竜剣が独自にあそこまでできるとはな。

……確かにおまえはミスを犯したが、同時にバランスの底力を見極める良い働きもした。

それに、技術面での功績が大であることは、この2人も知る所。

そう気に病むこともないが……

挽回したいというのなら、早速にでも動くがよい」

ゴルゴナとて本気で気に病んではない。

むしろ、これはこれで

『竜の騎士ともある程度（搦め手込みで）対等に戦える』というアピールになったと考えている。

頭脳面のみでしか活躍できない、

などと思われては今後魔王軍での活動に支障ができるのは想像に難くない。

基本的に、力を信奉する魔族においては戦える力を有していることをアピールするの

は重要だ。

それは、異魔神時代：未熟だった頃の魔人王と、詰めが甘かった竜王を見ても明らかなのである。

幸い、今回の失態は大魔王と同僚達はさほど重要視していないようなので、ゴルゴナとしては一安心であったが、

(新参の我が……これ以上失態を重ねることはできん)

という思いもある。

「畏まりました……………汚名を返上してごらんにいれます……………」

して、私の成すべきこととは？」

「ミストバーン。ゴルゴナにあれを見せよ」

大魔王の言葉を受けて、沈黙の影が音も無くひれ伏す冥王へと寄ると、ス……と暗闇の懐中から一枚の凶面を取り出した。

「これは……………城の設計図……………いや、移動要塞でございませぬ」

「その通り。おまえにはそれを建造してもらいたい。

ムーを知ってお主ならば、色々と気づく点もあるう。

基本形はそれとして……………あとは好きに手を加えて構わぬ。

その名も鬼岩城。……………余の期待を上回る玩具を期待するぞ？」

ククク、と笑う大魔王は老練な威厳を纏いながらも

どこか少年のような雰囲気的笑みを浮かべている。

それ程に、この「鬼岩城」なる物が楽しみなのだろう。

「ははっ……。しかし、取り掛かる前に一つ……やらせて頂きたいことがございます」

「ほう……言うてみよ」

「我と、部下達……ムー人はこの世界に流転してきた客人。

現世のコトワリに疎いところがございます……」

それを補うためにも……魔界の賢者を得たく思い……ぐんぐんぐんぐん」

「以前、キルバーンが見つけた男か。

よかろう……だが、お主自らが出向くこともあるまい。

その者を召し出し、おまえの元に遣わそう」

バーンの心は既に鬼岩城へと傾いている。

大魔王としては、ゴルゴナにはさつきと建造に着手してもらいたく、

賢者ザボエラのもとにはバーンパレスで暇を持てましている者が使者として赴くこ

ととなる。

こうして、鬼岩城建造計画が始動したのだった。

魔界の辺境にある地下迷宮。

己の研究を守るための罫がそこかしこに設置してある鉄壁の研究所兼自宅。

その最下層に彼と息子はいた。

今日もいつもの通り研究三昧の平穏な日々である。

「キイッヒッヒッヒッ。この研究が完成した暁には、どっちに売り込もうかのう。」

冥竜王様か大魔王様か……どちらがわしの研究の素晴らしさを理解してくれるか

の、ザムザ」

「……父上は、もう少し外を出歩いたほうがようございます。

冥竜王ヴェルザーは……たしか、1、2年前に死にましたぞ」

「な、なんじゃとお!? ヴェルザーといえば、あのボリクスを下した不死身の化け物じゃ

ぞ!?

「死んだのか!？」

「あ、ああ、いや…正確にはたしか封印されたのです。

竜の騎士に敗れて石にされたとかネズミにされたとか、金色のスライムにされたとか…。

まことしやかに噂されておりますよ」

どれがホントかはわかりませんがね、と世間の適当さにやや皮肉気味に笑う若い魔族。

そんな彼に“父上”と言われた魔族は、背も小さく顔もしわしわの老人で、

2人は親子というよりジジイと孫といったほうがシツクリくる。

そんな2人の研究室には大量の大型カプセルがズラリと並べられていて、

その中には多種多様なモンスター達が保存液に浮かんでいた。

「ザムザよ。不確かな情報に躍らされるのは負け犬のすることだ。

それに封印されたことを、死にました…などとわしに報告するとはどういうつもりじゃ。

学者なら正確性をもっと重視せんか、正確性を！ まあったく、おまえという奴は」

ザボエラが飛び上がると、手にしていた杖で息子の頭をぽかりっ！とぶっ叩いた。

こうでもしないと背の高い息子の頭に届かないのだ。

「いたっ」



「無駄に背ばっかり伸びおつて！ その頭は空っぽか！ んん!?」

わしの息子の割に笑い方くらいしか似ておらんのだからなあ、不出来な息子じゃ」

「ひ、酷いモノの言われようですね………………。 ん？ あ…ち、父上」

「なあんじゃ！ まだ何かあるか！」

「索敵晶に反応があります。 何者かが迷宮に近づいてました」

「なんじゃと！ わしの研究を狙うネズミか!! どんなやつじゃ！」

「今、入り口の悪魔の目玉の映像を出します…………」

ザムザが索敵晶と呼んだ人の頭程度の水晶球に並ぶ大きな水晶。

それに迷宮の玄関口の映像が映し出されると、

「もしもし！ もしもくくし！ 我輩は偉大なる魔界の神バーン様の使者！」

キング!! マキシマム!!! 扉を開けられたしっ！

大魔王様の御用であくくする！ 開けくくい！」

ザボエラ特性の大扉をガンガン殴り鳴らす、大柄の金属生命体があった。

「ぬううくく！ これで何度目のノックだと思っっているんだ！」

全くこれだから田舎もんは嫌なのだ。

わざわざキングであるこの我輩が来てやっているとこの……」

大げさな動きでマキシマムとやらが無駄に太い腕を腰にあててため息をつく。

「だいたい我輩はバーン・パレスの無敵の守護者。

なんで魔界の田舎に來なきやならんのだ。

だいたいバーン様もバーン様であるなあ。

あんな不細工で卑しい新参者のゴルゴナとかいうよくわからん

自称・冥府の主の代わりに我輩をこゝんなカビ臭いとこに使いに出すとは！

ええい！ 思い出したら腹が立ってきた！

こうなつたら我輩のこのオリハルコン製の剛腕でええ、

こんな安っぽい扉ぶつ壊してくれるわ！」

間抜けなちよび髭のすぐ下にある口をあんぐり開けて、

握り拳にハア〜と息を吹きかけ温める仕草。

果たして金属生命体の彼がそんなことやって意味があるのかは不明だ。

「…おつとその前に。

万が一ということもある。この扉にとんでもないトラップが仕掛けてあるかもし

れん！

また、この扉がとんでもなく硬くてタフだった場合…。

我輩の剛腕で一撃で碎けぬ、

というとてもかっこ悪いことになってしまつてはキングの威厳に関わるからな。

ヌウン！ キイイングスキヤアアアン！！  
ピカアアアアつと派手に光る彼の目が眩しい。

「トラップはない……うむ。」

むむ…扉のHP400……よんひやく!?

しゅ、守備力は……げえ!? 190!!

高過ぎるだろう!! 一撃ではとても碎けんぞ!

ザボエラとかいう田舎者は何を考えているのだ!

こんな田舎の迷宮の扉をなんでこんな丈夫にしているのだ! バカではないか!?

真正正銘のバカにバカと言われては心外だろう。

呆気にとられて見ていたザボエラ親子が、ようやく口を開いた。

「おい、その木偶の坊。」

見るからに脳みそが空っぽのようじゃが、

さつき言っていたことは本当か?

「む! いったいどこから声が……! 面妖な!」

「(い)じや間抜け! 上じゃ! 上を見んか!!」

キョロキョロしていた無駄にオリハルコンなマキシマムが扉の縁の出っ張りを見る  
と、



「うん? ……!? うぎよええええええええええ!!?!」  
像の口からたつぷりと業火が吐出された。!!」

「き、貴様らああ〜〜! 我輩は客人だぞ!!」

大魔王様からの使者の我輩に炎を浴びせるとは何事だあ!!」

「おお! 父上! 燃えませんぞ!」

「むむ! まさか本当にオリハルコンなのか。

これは驚いたのう。 どうも本当に大魔王様の使い走りらしい」

「使い走りではない!

今回は特別なのだ! 我輩に仕事を押し付けてサボった冥王がおるのだ!

我輩こそバーンパレスの真の守護者! キング!!! マキシマム!!!」

胸を張り、腰に無駄に太い腕をあてて勇壮にポーズを決める。!!」

「ああ、わかったわかった。 いちいちやかましい奴じゃ。

まっつれ。 今支度をする」

「ようやく父上が日の目を見る機会が巡ってまいりましたね!

大魔王様に召しだされるなんて大変な名誉ですよ!」

そこでぶつり、と目玉の通信が切れた。

「フフン。 なんと、早くもスカウトが成功してしまった。

我輩、こんなヘッドハンティングの才能もあつたのだなあ。

自分の多才っぷりが恐ろしい……ふっ」

髭を優雅に撫でる仕草は妙に様になっているリビングピースである。

自称・バーンパレスの守護者の、見出された新たな使用用途。

それは使い走りであつた。

が、後に彼の更なる使用用途が外道の大蜘蛛から提案される。

手足を切り取ってベホマをかけて再生させまた切り取るオリハルコン生産工場。

彼を待ち受ける運命は過酷だつた。

## 冥王とキングとじじい

ゴルゴナはバランと人類の関係を拗れさせる小細工も既に弄している。

アルキードとテランを滅ぼしたのは、

アルキードの姫を奪って逃走した非人間の男が深く関わっている……という噂を流しているのだ。

ゴルゴナを見た人間が生きているとしても、

人という生き物は真実よりも都合の良い与太話を信じるものだ。

得体のしれない恐怖に対しては、安心できる事実を早々に求める。

だから冥王がそれを与えやるのだ。

ほんの少し……妖術によって邪心を後押ししてやるだけで、後は勝手に転がっていくのが人間だ。

バランという危険な力を持った男が彷徨っているのは真実で、

そういう噂があれば……国が何らかのアクションをしてくれる確率が高い。

まあ、あまり宛にはしていないのだが、少しでも人類とバランの関係が悪化し、

少しでもバランの動きを妨げてくれればそれで良いのである。

今は、冥王は鬼岩城の製作総指揮をとるので忙しいのだ。

当初の仕様とは大分変わってきているので、

外見以外はバーンが想定していたものとは全く別物であるといえる。

その外見も、造形は変わらぬが色味はやはりバーンの思うものとは異なる結果になるだろう。

仔細はこれからキアラ達と詰めていくことになるが、

大まかな変更点は下記の通り。

城本体の外壁を3mmのオリハルコン板で覆う総鉄板張り。

『玉座の間』入り口・顔面口腔部に

収納型『いかづち』砲台設置。(ムーの飛空艇の大魔砲と同型)

胸部・背部の大筒92門の電磁投射砲化による射程と威力の増大。

(ポリクスの細胞を使い電撃呪文供給生物を創造・設置し電力の確保。

また、その為には腐敗しているポリクスの完全蘇生を

バーン様の超魔力により実行していたが必要がある)

また、暗黒闘気圧式機銃を開発し、185門を大筒と大筒の間に新たに設置。

『心臓の間』の機能増設……

呪文契約は副次的なものとして、主に上記の電力発生生物の間に変更。



両肘・腰部の魔法動力球（エンジン）の補助をさせ、

“心臓”の文字通り巨大人型兵器時の出力増加を図る。

『<sup>ラフグ</sup>肺の間』の生産工場強化……

“よろい系”モンスターだけでなく、

死体保管庫と邪悪の六芒陣の設置によりアンデッド軍団の無限生産も同時に目指す。

『<sup>ライトシールド</sup>右 肩の間』の機能増設……

アンデッド無限生産の為の死体、及びよろい系モンスター生産の為の金属を

戦場から回収することを主任務とする飛行型アンデッドの発着場、及び待機所を設置。

6枚の連装式カタパルトを取り付け飛行型アンデッドの同時展開数を可能な限り増加させる。

常備アンデッド数は108を予定。

『<sup>レフトシールド</sup>左 肩の間』の機能増設……

作戦会議等のための円卓の間。

その上部に飛行型アンデッドの待機所と4枚の連装式カタパルトを設置。

常備アンデッド数は72を予定。

『中央の間』の機能増設……

正門広場床部にトベルーラ付与魔法陣設置。(平時は機能OFF)

歩行型モンスターに短時間ながら飛行能力を与え、

地上への安全かつ円滑な歩兵隊の展開を可能とする。

これらの仕様変更と強化を行い、複雑化するであろう機構の制御の為：

玉座の間上部・脳にあたる場にキング・マキシマムを設置し生きた演算処理機とする。

……予定である。

全てが可能かどうかは時間と資材と相談することになるだろう。

とりあえずは、死の大地に建造中のオリハルコン精錬場：

人造湖の建造を急がねばならない。

大魔王バーンのGOサインは出ているので、

後はマキシマムを“説得”でき次第、装甲板の製造にはいる手はずとなっている。

勿論、オリハルコンの切り出しには細心の注意を払うので

マキシマムのコアを傷つけてうっかり殺す…などという事故はありえない。

マキシマムは材料としては貴重なのだから。

それに、鬼岩城の頭脳として組み込むとはいっても分離合体ができるように配慮し、

いざという時はマキシマムを緊急排出し脱出できるようにする。

なにせ彼は材料としては貴重なのだから。

「ふざつけるなああああ~~~~!!」

叫ぶリビングピース。

ここは魔界の第7宮。

金属生命体のマキシマムが首尾よくザボエラを連れてきたというので、  
ゴルゴナがリリルラで魔界に一時帰還している。

「……会うのは初めてだな……」 生きた駒のマキシマム。

我が名は冥王ゴルゴナ………以後、お見知りおきを……ぐぶぶぶ」

「おお、これはご丁寧に……。我輩がかの有名なキング・マキシマムである。

何を隠そうバーンパレス最大最強の守護者とはこの我輩のこと——

——つて違ああ~~~~う!!」

そして大広間で2人は初めての接触。

存在は知っていたもののお互い顔を合わせるのは初めてであった。

「して……おまえの後ろにいる老爺がザボエラか」

「人の話を聞けい！ 我輩のほうが先輩なのだぞ!？」

挨拶にすら来ない新参者めが！

それに聞いたぞ!!

第7宮でおまえを待つ間にバーン様からお達しがあつたが、あれはどういうことだ!!

我輩の至高の手足をもぐという恐ろしい発想がいったどこから生まれるのだ！  
小柄な冥王にぐいぐい詰め寄る大柄オリハルコン。

「おまえの切り出しには

極限まで圧縮された暗黒闘気による刃で慎重に行う予定になっている。

ミストバーンも立ち会う……………。

勢い余っておまえのコアを切ることはないから安心するがいい……………ぐぶぐぶ  
くだらぬことを気にする、と言外に嘲っている冥王である。

「安心できんわ！ おつつそろしいわ!!」

ノコ引いて我輩の体をゴリゴリ削り切るのか!?

ナチュラルに切り出しとか言うおまえの精神構造はどうなっている！

我輩は生きているんだぞ?!」

「なればこそ回復呪文で復元する。良かったではないか」

「暗黒闘気によるダメージは回復が鈍るって有名ではないか!」

「鈍るだけで死にはせん……………おまえはメタルスライム系と似た種族だ。

手足を切り取られて長時間放置しても、流血による失血死の心配もなければ…………

傷口が腐敗することもない……………あくまでオリハルコンだからだ……………。

なにも問題はあるまい?」

「問題だらけだ！　むしろ問題しかない！！  
なんて大それた奴だ！

バーン様に直訴して撤回していただく！」

「……………その大魔王様から、許可を頂いている……………」。

「貴様へきた」お達しも、我に協力するように……………という内容であったはずだが……………」

「ぎ、ぎ、ぎ……貴様ア……………」

ぐ……ぬ、ぬう！　た、頼む……お願いだ、やめてくれ！」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……………それが物を頼む態度か？」

表情など読み取れないはずの大蜘蛛の八つ目が、

サディステイックに笑っているようだった。

歯軋りするマキシマムは体全体をわなわなと震わせている。

「お、おのれ……………」

お……お願い……します！　やめてください！」

頭を下げるオリハルコン。

「ぐぐぐぐぐぐ……………ダメだ」

あっさりとは跳ね除けた。

「お、おとおお！…なんて外道だ!! やってられん！」

我輩は逃げる!!!

さらばだ!! デュワ!!!

お辞儀の姿勢から一転して、

後退り…第7宮の庭園へ諸手を上げて颯爽と飛んで逃げようとしたオリハルコンを、

「…………キア—ラ」

「はいはい」

物陰から突如現れた1人の美少女が投げた超粘着の網が捕らえる。

「ぬ、ぬわあああ!?…なんだこれは！…だ、だがこの程度で我輩が止められると思うな！

そんな非力な女1人のパワー！…引きずって逃げてくれるわ!!」

絡まる粘着糸にめげず、力づくで逃げようと試みたが

「あたしの改造まだらくも糸からは逃れられませんよ〜。えい」

にこやか笑顔でおっとり告げ、何やら手元の機械をいじると…

「うぎよええええええええええ!!!」

あがががががががが!!! うごごごげげげげ!!

お(ぎ)ぎ(ぎ)ぎ(ぎ)ぎ(ぎ)ぎ(ぎ)!!!」

恐ろしい電圧が動くオリハルコンに襲いかかった。

「ぐぶぶぶぶぶぶぶぶ………魔力による電撃ではない。

純粹な機械の力による高電圧だ。少しは効くだろう?」

痙攣しまくるマキシمام。

を青ざめた表情でザボエラとザムザは眺めていた。

たつぷり10分ほど機械の限界まで電圧が流され続けたマキシمامは、

キアーラがスイッチを切るとズズウンと糸が切れた人形のように倒れこみ……

ピクリともしなかった。

「よし………キアーラよ………切り出し場へ運んでおくのだ」

「おまかせください。みなさーん」

キアーラが指を鳴らすとわらわら奥から走り出てくる悪魔神官達。

巨体なマキシمامをずりずりと大人数で引きずっていくのだった。

倒れるオリハルコンへ向けられていた冥王の瞳がザボエラ達へ向けられ、

「さて………つまらぬものを見せてしまったな……。

よくぞきた………賢者ザボエラ………一子ザムザ。

魔王軍へようこそ………ぐぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ」

黒衣の冥王が、恐ろしげな唸り笑いを広間に響かせる。

(か、帰りたい……!!)

ザボエラ親子の心底の思いだった。



## キングの尊い犠牲

知性溢れる老人が盤上の駒を眺めている。

彼の忠実な側近達はチェスを嗜まない。

指す相手がいなくなつて久しいチェスを一人で楽しむのが最近の彼の日課である。

そんな主をミストバーンは静かに見守り、

キルバーンは…

「おや？ その駒……その輝きはオリハルコンですか？」

バーンの持つ僧正ビショップの駒の異様な煌きに気付き思わず聞いていた。

「うむ……マキシマムの能力から生み出された駒だ」

「ああ……あのキングの。彼の忘れ形見つてわけですね……」

「……………あの掃除屋は、自分の身の丈にあつた役目を見出したようです。」

あちらの方が、バーン様のお役に立てるでしょう……」

まだ死んではいないので忘れ形見ではないし、

ミストバーンの数年ぶりの発言も実に薄情なものだ。

キルバーンの肩では一つ目ピエロのピロロが「面白いやつだったのにな……」と涙ぐ

んで

「泣くのはおよしよ、ピロロ。彼はボクらの心の中に生きているよ」と  
死神から冥竜印のハンケチを渡されるといふざけっぷりである。

「ふ……、ゴルゴナから渡された真・鬼岩城建造計画書……」。

あれが実現する日が待ち遠しい。

ここまで心躍るのはいつ以来か……。

マキシマムを我が臣としておいて良かったと……今ようやく思えた」

掌で駒を転がし、弄ぶバーンの顔は満足気だ。

部下の適材適所は大切である。

今まで“オリハルコン製の金属生命体”という希少種である

マキシマムを持って余していた大魔王。

本来なら前線で将兵として存分に使いたかったが、

いかんせんマキシマムは馬鹿すぎた。

情報の集積と相手の能力を見抜くスキャン能力、そして生み出した駒を自在に操る  
力。

どれも素晴らしいが……どれも全く活かせないのがマキシマムであった。

いつかは成長するかもしれないと長い目で見てきた大魔王であったが、

(マキシマムの使い方は、ゴルゴナのやり方が良いかも知れぬな)とも思い出している。バーンとて、マキシマムからの“オリハルコンの採取”を思ったことはある。

あるのだが、そこまでして必要か……と問われれば、バーンには必要ないのだ。三界で最強の剣は己の手刀であると自負しているし、

現在の老人形態でも光魔の杖を使用すればオリハルコンを上回ることにはできる。

それに、加工方法も面倒なのだ。

魔界の名工ロン・ベルクならば比較的容易く行うだろうが、

彼は偏屈な男でしかもバーンのもとを死を覚悟で去っていった。

安々とは戻らないだろう。

バーン自身の超魔力を使えば、

加工は不可能ではないがさすがにロン・ベルクほどの鍛冶技術はない。

オリハルコン製の二流武器など創出しては、大魔王の沽券に関わる。

つまり、手間を考えるとオリハルコン製の武器など割にあわないのだ。大魔王に

とっては。

だが、それも今までの話。

今はムーの技術を持つゴルゴナがいる。

彼は、効率のいい精錬方法を熟知しているし加工技術も修めているのだという。

そしてそれを用いて、大魔王の密かな夢……決して果たせぬ遠い夢……己の最強の姿であるはずの鬼眼王を模した玩具を、とびきりの逸品に仕上げてくれるという。

バーンの心は少年のように高鳴り……有り体に言えばわくわくしている。ゴルゴナの、“マキシマムからの切り出し”など二つ返事で許可である。

「酒が美味い………」

片手のワイングラスが、もう空になっていた。

最近の大魔王の酒量は右肩上がりであった。

数日後、大魔宮の一室にて。

「えーそれでは不死生物研究にかかりきりのオテイカワン、ツークーマン兩名を除き、

我々で鬼岩城建造計画修正会議を行います」

頭が長いタレ目のトピアポが進行役をやっている。

本当は6人衆のリーダーは自己主張していたキアラなのだが、面倒臭いからトピアアポさん任せます、という押し付けにより彼が務めている。見た目通りに気弱で押しが弱い彼は、昔からこういう役割であった。慣れたもので卒なくこなしている。

ちなみにゴルゴナはミストバーンと一緒に

どこかにオリハルコンを切り出しに行っていて不在である。

「まずは建造場所の再確認だけ……ギルドメイン山脈に囲まれた盆地のままでもいいのよね」

とはフロレンシアの発言。

「そうです。ギルドメイン大陸南東部……旧テラン東部のギルドメイン山脈です」  
頷きながらトピアアポが肯定した。

「そういうえば、ギルドメイン中央にゴルゴナ様は面白い種をばら撒いたらしいな」  
愉快そうにポポルヴーが笑って言う。

「うふふ……なんでもベンガーナ王国は、

南のアルキード……北のテランからのアンデッド大軍団に

南北から攻め立てられて毎夜激戦を繰り返しているそうですよ。

常に腐臭が風に乗って王国全土に漂っているとかで……

疫病が絶えず自慢の経済力もガタガタで国力も見る見るうちに低下してるとか。

ベンガーナ王国のアダ名が疫病王国になったらしいです」

にこにこのキアーラは何故か誇らしげだ。

「カール王国が自慢の騎士団をベンガーナに増援として出したようね。

勇者アバンは子供のお守り……英雄バランはお尋ね者にされて消息不明。

アバンは子守してる場合じゃないでしょうに。

そんなにヒュンケルとかってガキが可愛いのかしら……確かに子供ながらイケメン  
だけど」

フロレンシアもくすくすと笑う。

雑談に花が咲きかけたところで、

「皆さん。 鬼岩城会議は始まったばかりですよ。

さあ、こつち見てください」

トピアポが伸縮棒でホワイトボードを叩いた。

キアーラとフロレンシアの「はーい」という間の抜けた美声がトピアポのやる気を削いでいく。

が、1万2千年前からいつものことなのですぐ回復する。

話し合いは5時間におよび、途中休憩を2回挟んだ。

結果としては、

城本体を一回り巨大にし、武装の積載量を増やしつつ快適な居住性も維持する。

(浄水施設を置き、シャワーと風呂を完備する……とは女性陣の強固な意見)

身長145mから160mに……重量も増大する為、

下記する浮遊機能による補助で、歩行時、土中に沈み込まないようにする。

起動毎に岩石のみで生成される腕部と脚部に、攻撃用魔法球を埋め込むようにし、

腕部外苑・指先・掌・脚部スネ・脚部フクラハギからの光線攻撃を行えるようにし、

全方位攻撃を可能とする。

頭部・玉座の間・下部に可動機構を施し眼部光線砲と大魔砲『いかづち』を可変砲台にする。

城側面から生産工場からでる廃液を放出する機能を取り付け、

城内を清潔に保つと同時に、地上の毒の沼化による環境汚染攻撃を行う。

弾幕を腕部と脚部で補う代わりに胸部の電磁投射砲を削減し、

国家消滅砲・開閉式超高压縮暗黒闇気砲を搭載する。

(使用時は「肺の間」の暗黒闇気供給機を

フルでこちらに転用するため歩兵の生産はストップせざるを得ない)

増大する本体重量を支え自重崩壊を防ぐ為オリハルコン製の支柱を通し、

巨人形態時を考慮し骨格状に配するムーバブルフレームを採用する。

これによって堅牢性と機動性の向上が見込まれる。

我らが偉大なる主、大魔王バーンの最終目的を考慮し、

鬼岩城に単体飛行能力を付与する。

ムーの飛空艇の技術を転用すれば改造は容易であると思われる。

3mmオリハルコン装甲だけでは竜魔人バランに対する備えが不十分である。

異魔神が竜王に与えたメカバーンのマホカンタコーティングを鬼岩城外壁に施す。

また、オリハルコン装甲と壁面の吸着力を高めると同時に

被弾時の衝撃を吸収する目的で、

装甲・壁面間に不死のゴーレムの細胞……イマジン細胞（仮称）を敷き詰める。

超装甲と超火力を誇る鬼岩城だが

城内に敵勢力の侵入を許した場合の防備が不十分である。

反乱・侵入者対策としてザボエラの体内から搾取した魔香気を

ガス状に噴出するダクトを取り付ける。

最後に……超火力、超装甲を誇るムーのオーバーテクノロジーを搭載した本要塞が

敵の手に渡った時の為の機密保持として、

大魔宮のピラア・オブ・バーンに搭載されているものと同型の黒の核晶コアを搭載し



自爆機能を取り付ける。

※自爆機能の存在は演算処理機マキシマムには秘匿すること。

という改善？案がまとまった。

「こんなところかしらね」

「シャワー機能は必須ですよね」

「当然ね」

と女性陣が笑っている。

男性陣は男性陣で、

「うぐむ……肘部の魔法動力球の出力をもっと上げれば、

腕部を高速で打ち出す質量兵器にもなるはずなのだが」

「それには動力球の出力が現状の2倍以上必要ですよ？

残念ながらそれを求めるとコストが増大しますし……」

などと未だ盛り上がっていた。

マキシマムと、さり気なくザボエラまでが著しい人権無視の嵐に晒されそうな未来で

あった。

だが、生ける駒と魔族は人ではない。仕方ない。

しかもムーの変態科学者達は、祖国が滅びるのも厭わず研究を続けた筋金入り達であ

る。

仕方ない。

後日、この改修案を提出されたバーンは、たいそう喜んだという。

某所某日……謎の切り出し場にて。

「いやあああああ!!! もうやめてえええええ!!!」

字面だけ見れば艶かしい悲鳴だが、

実際は野太い声で叫ばれているため少しも嬉しくない。

そんな叫び声を上げているのが、

「我輩もう死ぬ! いい加減もう死ぬかもしれん!

痛いのだぞ!?! 金属生命体とはいえ痛いのだよおお!!!」

拘束具に押さえつけられ一切の抵抗手段を失ったキング・マキシマム。

そしてそんなオリハルコンを冷淡に見つめる者が2人。

ミストバーンとゴルゴナである。

「……………時間だ」

ミストバーンが告げると、ペアあつとベホマの光が生けるオリハルコンを覆いだして、

達磨のオリハルコンに見る見るうちに手足がうのようによ生えてきた。

暗黒闘気刃による切断に伴う、回復の遅延効果。

それが切れた途端にかけておいたベホマが効果を発揮しだしたのだ。

そして、

「ぐんぐんぐんぐんぐん……………ザボエラ。 やれ」

今度は冥王が告げると、青ざめつつ鼻水を垂らしている老人が

「は、はいいい！ ただいまー！」

と震えた声でレバーを引く。

すると超高速で回転する暗黒の刃が喚くマキシマムに迫り……。

「のおおおおお!!? ストオオオオップ!! ストップ!!!!」

ひ、ひいいいいいいいいいい!!?!!」

甲高い金属の摩擦音がその部屋に響くのだった。

今日のノルマはあと2トン。 マキシマムの悲鳴が途切れることはない。

## 冥王の暗躍

地上世界は4つの大陸がある。

北のマルノーラ、南東にホルキア、南西にラインリバー。

そしてそれらに囲まれた海洋に最大の大陸、ギルドメイン大陸が中央に横たわる。

最大の大陸の東部で延々と連なる大山脈がギルドメイン山脈。

ギルドメイン大陸の背骨ともいえる大山脈地帯である。

その一際高い峰の頂……

広がる雲海とほぼ同じ高さに、純黒のロープを纏う冥王が佇んでいる。

冥王の隣にはミストバーン。

2人揃って眼下に広がる光景を見下ろしていた。

そこにはアンデッドとモンスター達が昼夜にわたって忙しく動き回る様子が広がっている、

大魔王の壮大な玩具“鬼岩城”の建造が始まっていたのだった。

西方でベンガーナ王国をアンデッド軍団に襲わされているのは、

鬼岩城建造を隠す意味合いも強い。

近いうち、ゴルゴナは他国にもアンデッドと瘴気をばら撒いてやるつもりで、さらにもう一つ火種をこさえて、こちらは既に大火となった。

人間の相手を務めるのは、やはり人間が向いている……という考えを元に、ゴルゴナは建造の合間……暇な時間を見つけて

妖術を駆使してギルドメイン山脈北方に位置する城塞王国リンガイアに潜り込んだ。リンガイア王の寝室まで忍び込み、夜な夜な妖術をかけ心神を徐々に喪失させ更に弁舌巧みに悪意を掻き立て邪心野心を煽っていた。

守衛達を幻術で夢の中に誘い、

「ぐふぐふぐふ……リンガイア王よ。

おまえは古今稀に見る勇者にして賢王……。

何故に、このような辺境の地で燻っているのだ？

貴国には難攻不落の城塞在り……抱える騎士団は勇猛にして死を恐れぬ。

誠……西方のカール王国にも勝る騎士団……。

更に、勇者アバンにも劣らぬ勇者……バウスの忠誠をも獲得しているおまえが、名も無き有象無象とともに歴史に埋もれていくのを見るのは僥びぬ……。

神も無情なことをするものだ……ぐぶぶぶぶぶ」

こういった甘言を毎夜のように心神喪失の権力者に聞かせたのだ。

そしてリングアイア王は、

「う……う、うあ……わ、わしは……わしは……」

そうじゃ……わしは、勇気も……知恵も、ある。

我が王国は……要害堅固……我が部下達は、皆、勇敢な戦士だ……

我が国は……もつと……もつと富を得る権利がある……そうだな……黒の賢者よ」

「ぐぶぶぶぶぶぶぶ……そうだ……賢き王よ。

おまえはもつと多くを望む権利がある……

おまえはもつと多くの民を庇護下に置き……幸福に導く義務がある。

尊き者の義務を果たせ。

選ばれし者は起つ運命にある。

カール王国は既に野心に囚われ騎士団をベンガーナに派遣した。

カール本国は手薄になっておる……おまえならば容易くカールの王座を奪える。

……カールの花、フローラ王女は大層美しい姫君だという……

美しき高貴な花には相応の護り手が必要だ……リングアイア王……おまえのような、

な」

ある日、ギルドメイン統一の為の兵を挙げ、突如としてカール王国に兵を進めたのだ。カールの進撃に全世界が驚嘆した。

まさに青天の霹靂であった。

魔王が滅び去って、まだ3、4年。

アルキードとテランが一夜にして滅び、

アンデッドが軍団となり組織的に動いているということとは、

魔王が早くも復活したか、或いはそれに代わる強大な悪しき者が現れたのは明白。

そしてリンガイア王が暗君ではないというのは各国の王の誰もが知る所。

だというのに、突如の挙兵である。

人間同士で領土の奪い合いを始めようというのだ。

各国は、一気に互いを不信に思いだす。

どの王も、いつ、どの国が自国に侵略しに来るか戦々恐々の日々を送りだし、

カールとリンガイアは全面戦争に陥ったのであった。

また、一方的な攻撃に怒ったマルノーラ大陸のオーザム王国が、

カールとの同盟を宣言しリンガイアに攻撃を開始する。

自慢の海軍でオーザムは海上での決戦を望んだが、それに乗るリンガイアではない。

バウスン将軍率いる主力がカール遠征で出払っていたが城塞を頼みにして籠城。

オーザムは、主力不在の内に……とギルドメイン大陸に上陸し力攻めを行ったが、リンガイアの城塞はびくともせず

「リンガイア戦士団の主力、帰還せり」の報を受けて挟撃を恐れ撤退した。

当然の如く、リンガイアとカール・オーザム連合の国際感情は最悪となったが、そんなことを歯牙にも掛けず、リンガイア王は野心の炎を更に燃え上がらせる。近々、カール攻略の前に

“喉元にある邪魔な骨”であるオーザム攻略に乗り出す予定であるらしい。人と人が争えば、

将来、魔王軍に歯向かうかもしれない人間の兵士達は潰し合い消耗し、戦場に散乱する死体は全てゴルゴナの駒となる。

平和を愛するロモス王国までもが税率を引き上げ軍備を拡張しているという。それも、魔王軍に対する備えではない……人間に対する備えで、だ。

先の魔王大戦の英雄達も、大小様々な国から仕官を要請され、勇者達を戦争に巻き込む気がどの国も有り有りであった。

この一連の策で、現在、魔王軍は悠々と建造に専念できていたのだ。



鬼岩城の建造は非常に順調で、1年と少しで3割以上の進捗である。作業を眺めていたゴルゴナが、そういえば……と切り出し

「アバンの弟子を拾ったらしいな………ヒュンケルとかいったか。あの小僧は」

「……………」

ミストバーンが無言で頷く。

「ミストバーン……………おまえの『教育』は少々甘い……………ぐふふふふふ。」

おまえの技の教え方に不満はないが、ヒュンケルに対する内面の躰が不足しておる」  
ミストバーンはただ黙って首をゴルゴナに向けた。

付き合いがそこそこ長い冥王は、こういう時は肯定的な感情の時である、と理解していた。

自分の話を聞く気があるらしい。

「戦闘技術など後からいくらでもついてくるものだ……………」

重要なのは……………ヒュンケルに闇の心を植え付けることだ。

それも、決して消せぬ……………深い所に……………ぐふふふふふ」

「……………暗黒闘気を奴の心身に馴染ませている……………問題は無い」

最近では、ゴルゴナの前でも口を開く機会が増えていた。

それでも数ヶ月以上声を聞かぬことはザラであったが。

「ぐふふふふふふ……そうではない。

アバンの教えもあるが……ヒュンケルの生まれ持った性質は光であり善。暗黒闘気を外から染み込ませるだけではすぐに内から喰われるぞ……。

鍵となるのは、心……ヒュンケルの心に闇を根付かせるのだ……。

決して消えることのない悪夢を……罪を……奴の魂に刻印する必要がある」

ミストバーンが沈黙を保ちながら、光る目でゴルゴナの単眼を見つめる。

続きを言え……と言っているようだ。

「ヒュンケルの強さは既に大人を軽々と打ち負かす。

……今、地上は人間達が共喰いを繰り返しており……獲物には事欠かん。

……ヒュンケルに人間を殺させる。

一人で村一つ……滅ぼさせるのだ。

戦う術を持たぬ老人も……女も……赤児も……奴の手で殺させる」

「……」

ミストバーンの光の瞳がやや見開かれる。

「ぐふふふふふふふ……ヒュンケルは、決して父バルトスへの愛を忘れぬ。

アバンを慕う想いも消えぬ……それは、ヒュンケルが人間だからだ。

誰かを愛する心を知りながら……それでも奴が……

血の涙を流しながら、何の躊躇いもなく女子供の首を捻じり切れるようになるまで……。

まずは村一つ。次は街一つ。次は都市を。やがては王国を……

ヒュンケル自らの手で殺し尽くさせるのだ」

「……………それが、元人間としての経験から来る……………私への助言か」

白い影の問いに、冥王はくぐもつた笑いを返すのみ。

「善と悪……………聖と邪……………光と闇……………その両面を持つ人間の弱き心こそが……………

おまえの与える暗黒闘気の力を極限まで高めるだろう。

その時、ヒュンケルは無敵の魔戦士となる……………グブブブブブブ」

ゴルゴナの言わんとすることは、ミストバーンも共感する点も多い。

闇に負けまいとする光の闘気は、例えば細くとも魂の奥底で燃え続け、より大きな炎となる。

ヒュンケルのアバンから与えられた光……………、

ミストバーンから与えられた暗黒は、ヒュンケルの中で競り合い続けている。

故に、光に……………

アバンへの愛情に負けまいとする憎しみの心が、強い暗黒闘気を生み出している。

光が消えぬというならば……………、

「なるほど………試してみよう」

闇の師は、愛弟子を殺戮劇に駆り立てることとしたようだった。  
血塗られた魔剣戦士が生まれる日も近い。

## 復活の雷竜

魔界樹のエキスから創りだした不死ゴーレムは一応の完成を見た。

しかし、その肉体強度は当初ゴルゴナが目指したものに比べると大分見劣りする。

竜魔人の血と精霊の血……それらとの完全融合は叶わず

“強いモンスター”といったレベルで落ち着いてしまった。

例えるなら“不老不死で不死身のエリミネーター”といったところであろう。

つまり……寿命や病で死ぬことはなく無限のスタミナを誇り、

魂・自我がなく主の命ずるままに行動し、

“HPを0にしない限り次のターンには全回復するエリミネーター”というわけである。

ゴルゴナと6人のムー人は、不死ゴーレムの筋肉組織丸出し……といった外見を、  
安布のマスクとパンツ、マントで覆い隠し

斧で武装させ、そのまま“エリミネーター”として献上したのだった。

大魔王の側近2名がマジマジと新型モンスターを観察している。

謁見の間の、硬質そうに見えてその実かなり座り心地の良い玉座に深く腰掛けた大魔

王は、

僅かに嘆息すると始めこそやや落胆し、

(この程度ではミストのスペアはとても務まらん……やはりヒュンケルが第一候補か)

と思いつつ、黙って跪く6体のエリミネーターを眺めていたが、

よくよくゴルゴナの説明を聞けばとんでもなく効率のいい雑兵であることを理解した。

「疲れず……老いず……感情を持たず……」

驚異的な再生能力を持つ大量生産が容易な有機ゴーレムか。

「エリミネーター」……優秀な兵士と成り得るな」

「ぐんぐんぐんぐん……はい……大魔宮バーンパレスの生産能力で一日に約500体を造ることが可能です。

魔界の各宮殿での製造も許して頂けるならば……」

一日に4000体以上は確実に揃えてみせます」

その報告にさすがのバーンも、そしてミストバーンらも少々驚いたようだ。

キルバーンが感心したように、

「4000！へえ、そりやすごい……このレベルで大量生産できるんなら脅威だね」

「こわいこわい、と肩を竦めてみせる。

大魔王も同意であるらしい。口の中でくつくつと笑い出すと、

「……………ふっ……………はっはっはっはっ……………」

それは愉快な話だ……………これほど手軽に日々4000の兵が手に入るとはな。

しかも、どのような命にも服し日々の維持費も“置き場所”が必要な程度か。

単純な労働力として考えても……………おまえのアンデッドに劣るものではない」

「我のアンデッド以上でございませう。

あれらは腐臭を漂わせ“疫”を引き寄せます……………ぐぶぶぶぶ。

労働力として使うと……………下級のモンスター達の中にはそれだけで死ぬ者もおりますからな」

冥王流のブラックジョークであるが、さっぱり笑えない。

アンデッド達は病を誘う。腐敗した死体なのだから清潔なはずがない。

疫病にかかるのはモンスターも同様で、人間と比べて速いか遅いかの違いしかない。

ゴルゴナのアンデッド達と同じ現場で働かせられると、

そのモンスターは高い確率で病を得るのだ。

当然ゴルゴナは治療などしてくれない。死ねばアンデッドにするだけなのだから。

「これが優秀なのは分かった……………」

だが、おまえの旧主……………異魔神はこのゴーレムを用いてムーを崩壊に追いやったと聞

くが……。

この程度でそれが可能なのか？」

バーンの疑問ももつともだろう。

エリミネーターは優れているが、自分にとって雑魚の領域を出ない。

異魔神がボディとして使用しても、とても超文明を一晩で滅ぼせる性能はない……と  
思えた。

「異魔神は、無限にして不滅の精神を持った破壊神……。」

そして……我らの創りだした不死人形は大ダメージを追わぬ限り不滅。

それはつまり、一定の条件下では無限に細胞分裂を繰り返し増殖する……ということ。  
と。

我らムー人の制御下においていた無限増殖が、異魔神の無限の精神によって暴走し  
……………

不滅にして究極の肉体へと変貌させたのです……………ぐぶぶぶ」

己の祖国、ムー滅亡に繋がる話だというのに、語る本人は何故かやや愉快そうである。  
ゴルゴナにとっては、超文明を滅ぼすほどの破壊神のボディを創った……  
ということの方が誇りであるのかもしれない。

「ムー滅亡の直接の原因は、不滅の肉体ではなく……………」



それを得たことで異魔神が不滅の精神を遺憾なく発揮したこと。

彼奴の超高密度魔法言語の発動をムーはあらゆる手段で阻止しようと試みましたが、不滅の肉体の中でそれを唱える異魔神を止めるなど不可能！

我の不死人形の前に我が祖国は敗れ、滅んだのです……グブブブブブブ！」  
異魔神は俺の最高傑作だ。

そう言わんばかりのゴルゴナの笑いであった。

そんな冥王を見るバーンの目には好奇心という感情しか浮かんでいない。

「……そうか………つまり余の精神のみがおまえの不死人形に入れば、

その肉体は不老不死にして不滅。

そうなるというのだな？」

「バーン様の精神が、異魔神と同レベル以上ならばそうなります……ぐぶぶぶぶ」

冥王の返答は、暗に「バーンの魂が異魔神以下ならば不滅を得られない」と言っている。  
る。

しかもそれを全く悪びれず、恐縮せず言うのだから、やはりこの大蜘蛛は大物だろう。

「クククククク………ぬかしおるわ。

もう一つ聞いておこう………おまえの創造したエリミネーター。

その「イマジン細胞」を他生物に移植して不老不死と不死身を得ること………。

結局のところそれは可能になったのか？」

バーンの最大の関心はそこであった。

大魔王が真に求めるのは自分の肉体そのものを不滅とすることで、

強大な不死人形はあくまでミストのスペアを求めていることだ。

「現段階では不可能でございます……」。

バランと精霊から得た血……魔界樹の葉……

その両者を繋ぐ触媒があれば不死人形は完全なものとなり、

その時……初めてイマジン細胞は完成するでしょう……。

ザボエラが持ち込んだ“超魔細胞”……未完ながら素晴らしいものでございま

た。

あらゆる生物の長所を取り込む、という発想は……竜魔人に近いものがございます。

す。

超魔細胞は竜の騎士から聖の力を取り除いたものに似ており……、

全てを繋ぐ触媒として期待できます……ぐぶぶぶぶ。

イマジンと超魔が完成したその暁には……既存生物の不死化は成りまする」

そう断言する冥王には自信があつた。

ザボエラが研究に加担したことで発想の幅が非常に広がった。

地上と魔界のほぼ全ての生物の特徴を知り尽くしているザボエラは、極めて優秀な生物学者だ。その息子も十分に及第点。

自分と部下の7人のムー人に不足していた現地知識を

同分野から補ってくれる貴重な人材達で、彼の提唱する超魔生物が完成すれば、竜魔人の生け捕りという危険過ぎる任に労を割かずともよいのだ。

ゴルゴナのその自信に大魔王の口角の端がやや釣り上がる。

「ほう……おまえは大分ザボエラを評価しているようだな。

おまえがそこまで言うのだ。不老不死……期待して待つこととしよう」

「お任せください……ぐんぐんぐん」

背虫を更に屈ませて“礼”をとる冥王は、

不死関連の報告を一先ず終えエリミネーターを後方に下げるとそのまま、

「次に……鬼岩城に関して、バーン様をお願いしたき儀がございます」

玩具についての報告兼陳情に移行した。

「申してみよ」

「はっ……鬼岩城の“心臓の間”に使用する発電生命体の製作には、

雷竜ポリクスの細胞を使用するのが最も適しています。

我が秘術にて甦らせたポリクスはあくまでアンデッド……。

その細胞は研究に堪えられる鮮度ではありませぬ。

バーン様には是非、このポリクスゾンビを一個の生命として再誕させて頂きたく……………」

伏して申す冥王の願いだが、それは大魔王のより良い娯楽に直結することだ。

大魔王に否はない。

「よかろう。然しもの余も、あれ程の大物の命を創造するのは骨が折れるが……。

余も、あやつには用がある。好都合だ。

おまえの術で“下拵え”は成っているしな……。

最後の一押しに余の力があるのみ……………容易いことだ。

冥界門を開けよ」

「……」

是を受け取った冥王だが、

最後に大魔王が発した一言に推移を見守り続けていた2人の大幹部も、

そして冥王も少々驚愕する。

「……で、……いますか？」

冥王が逡巡する。

ポリクスは強い。それはこの場の誰もが知る所だ。

大魔王と比肩した魔界の実力者ヴェルザーと同格であったボリクスは、ヴェルザーに敗れこそのしたものの、

間接的にはあるがバーンと近い実力を有している……と言うのは少々過言だが、それでも広大な魔界で確実に十指に入る強者だろう。

それも数百年前の当時の話で、

今は理性を失う代わりに魔力・体力・精神力が上昇し再生能力まで有している。

ヴェルザーも、そして勿論バーンも当時と同じままの強さというわけはなく、常に己の力を増大させることに貪欲であるからレベルアップはしている。

だが、既に完成している強さである彼ら<sup>クラス</sup>級は上昇率が低い。

しかしボリクスの能力の上昇率は、ゴルゴナの外法によって高まっており想像以上に厄介だ。

狂乱に陥つていながらもバランと一対一で戦えたのがその証拠だろう。

重臣一同に、バーンに万が一があつては……という思いが走つたが、大魔王は、

「……では狭かろう。知恵ある竜どもは総じて巨体だからな」

そんなことを歯牙にも掛けていない様子で、

軽く腕を振るうと玉座の間の一同を瞬間移動させてしまう。

「ここは……………魔宮の門手前のホールですね。」

確かにここならボリクス君が大暴れしても大丈夫そうだ」

キルバーンが周囲を見回しながら言う。

「ここならばヴェルザーの好敵手を丁重に出迎えるのに丁度いい」

バーンが一同を見ながら答え、さあ冥界門を開け、と改めてゴルゴナへと命じる。

冥王が応じ、邪悪な文言を詠唱しだすとドス黒さと濃紫が入り混じった渦が空中に生じて、

低く唸る狂獣の如き声がそこから漏れ出す。

邪気、瘴気、溢れ出る暗黒闘気、そして臭気が濃密に交じり合った物が溢れ出て、

「グ、オオオオオオ……、イタ、イイイイ！オオオオオオ！！」

濁った眼をギラつかせる腐敗の雷竜がバーンパレスへと解き放たれる。

「グアアアア！ギ、がデ——」

そして開幕早々に電撃呪文をぶつ放そうと試みるも、

主からのテレパシーによる「封殺せよ」との命を受けたミストバーンが突風のように踊り出て、

腐竜の顎に思い切りの良い掌打を繰り出した。

ポリクスゾンビの巨体が掌撃の威力に浮きあがり、

次の瞬間には上方に回り込んでいたミストバーンの肘が腐竜の眉間に打ち込まれ、そのまま轟音とともに地面へと叩きつける。

「——ッグ、ゴオオオオオ!!」

「ふむ……やはりゾンビだけあって俊敏さに欠けるな。

だが、ミストバーンの打撃すらあまり効かぬその打たれ強さは素晴らしい」  
バーンは「やはり並の竜ではない」と感心する。

床面へとめり込ませた頭は意識を失うことは無く、

憎悪が満ちた白濁の瞳がミストバーンを見つめ続けていた。

ポリクスゾンビがゆっくりと鎌首をもたげ始め体勢を整えた瞬間、

大魔王の額から一筋の光が撃ちだされ腐竜の巨体を貫いた。

「ツ!!オオオオオオオ!!ア、アツイイイ!!」

腐竜がもんどり打って苦しみだし翼と尾をぶん回してはそこら中に無差別に叩きつ

ける。

その度に腐肉が剥がれ落ちては飛び散り、  
スカルサーペントやカパーラナーガとなって生産されるが、  
殆どが次の瞬間には暴れ狂う腐竜の巨体に押し潰される。  
そして、

「……………おお……腐り落ちた肉の下から……新たな肉体が！」

ミストバーンが感嘆する。

いつ何時、何度見ても、己の敬愛する主人の起こす超常なる事象は感動モノであった。  
ドクリ、ドクリ、と脈打つ桜色の肉が腐竜の体幹から湧き出てくる。

剥き出しのくすんだ骨が鮮やかな白色へと……濁りきった眼球が鮮やかな黒へと変  
貌していく。

「グオオオ……オオオオオ……いい、痛い！体が……焼けるようだ!!」

割れていたやうなくぐもった腐竜の咆哮が、クリアーな威厳あるものへと変質してい  
く。

「……………素晴らしい……これがバーン様の御力か……………」

神代の腐竜に新たな命を吹き込むとは……………」

死者を操る術に長けるゴルゴナすらも羨望を禁じ得ない光景。



アンデッドとして甦らせ使役することをノースク且つ大規模で行える冥王だが、死者を完全なる生者にすることは彼も不得手である。

キルバーンも口笛を吹いて疎らかな拍手で大魔王の所業を称賛していた。

「ぐ、ぐ……ぬうう……ぐおおお……お、オレは……オレは一体……」

真新しい皮膚と鱗に覆われた、生前の姿そのものの雷竜がそこにはいた。

有り余る力を鬨気と、微弱な電撃として放電し続けるボリクス。

強靱な鱗の周りに雷のバリアーが薄く存在しているようなものだ。

自分の真新しい肉体を「信じられぬ」といった表情で見続ける雷竜だがやがて、

「貴様を覚えているぞ……冥王ゴルゴナ!!」

長き暗闇の中でのあの痛み! 苦しみ!! 我が雷によって消し炭に——」

ゆっくりとその視線を黒き冥王に向けると怒りに任せ莫大な放電を溢れさせる。

バリバリと激しいスパーク音が雷竜の全身から響き渡るが、

そこで雷竜はたと何かに気づき動きを止め、

「——う、うう! お、おまえは……何者だ……!」

こ、この魔力は……この威圧感は……一体!?

ヴェルザーにも劣らぬと自負するこのオレに畏れを抱かせるとは!」

ゴルゴナの背後に控える枯れ葉のような老人を見て狼狽しだす。

(いや……この年寄りだけではない……)

奴の両側に立つ奴らも……恐ろしく強い……。

ゴルゴナー人とて手に余るというに……お、おのれ……

竜族の頂点を極めるオレやヴェルザーに匹敵するやもしれぬ者がこれ程存在しようとは！)

大魔王バーン、ミストバーン、キルバーン、ゴルゴナ。

この4人を前にして萎縮せぬ者などこの世にいないだろう。

ヴェルザーを除けば、天空の神々でさえも裸足で逃げ出す魔界最強最悪の4人であろうから。

それだけに、この雷竜ポリクスが畏れながらも踏ん張り勇と誇りを維持し続けているのは、

さすが冥竜ヴェルザーと一歩も退かぬ“真竜の闘い”を演じただけはあった。

「控えろ雷竜よ……。大魔王様の御前である」

闘気の放出と放電を繰り返し“威嚇”を続けるポリクスに、

ミストバーンが静かに……だが力強く告げた。

「だ、大魔王……!? 魔界の神、大魔王バーンとでもいうのか!」

かつて冥王が語った大魔王バーンとは……貴様のことであったのか!」

驚愕するボリクスに、

「へえ、さすがはヴェルザー様と死闘を演じたボリクスだ。

バーン様のこともよくご存知のようだね……フッフ」

地力では劣るであろうキルバーンも余裕綽々である。

冥王と死神は搦め手と邪悪な策謀が前提の闘法で、

それをフルに活用すればゴルゴナとキルバーンは雷竜ボリクスに勝るだろう。

そのキルバーンが、裏ではヴェルザーに忠を尽くし続けるのは

冥竜王ヴェルザーが力だけではなく権謀術数にも長ける知恵ある竜だからだ。

神々の奇跡の術に敗れたが、その魂と陰謀は未だ生き続け、

大魔王バーンに対抗し続けている。

キルバーンとしても主とほぼ同等の力を持つもう1頭の知恵ある竜に思う所がある

のだろうか、

彼のからかいの言を制して大魔王がその口を開いた。

「雷竜よ。100年ぶりにおまえを甦らせたのは他でもない。

おまえを余の幕下に迎え入れようと思つてのことだ。

お主には、いずれ余が組織する6つの軍団の内の1つを任せようと思う。

かつてヴェルザーと名勝負を演じたおまえだ。悪いようにはせぬが……どうかな？」

「おや……それはボクも初耳だ」

大魔王の誘い文句に、死神が少しだけ仮面の下の目を大きくする。

ミストバーンとゴルゴナも初耳である。

言われた当の本人もやや戸惑い気味だが、

「……このオレに、貴様の手下になれというのか……！」

ヴェルザーにも屈しなかったこの雷竜ボリクスに……、

そのような言葉を口にする輩が存在するとは思ひもしなかったぞ……！！

オレは誰の風下に立つ気もない！」

やがてふつつと怒りが湧いてきたのであった。

魔界の全竜族の王となることを望んだ雷竜もまた、

ヴェルザーに負けぬ程の自信家であったのだ。

しかし、彼とヴェルザーとは決定的に違うことがある。

「だが、おまえは敗れた」

「……！！」

そう……ボリクスは歴史の敗者であり、既に覇権を望める位置にはいない。

大魔王バーンのもとより、冥竜王となったヴェルザーも当時よりも高みにいる。

もつとも、ヴェルザーはバランと精霊に敗れて封印されているが、

彼が築いた一大勢力は未だ消え去っていない。

「おまえが敗れてから数百年の時間が流れている。

既にお主が入る余地は魔界のどこにもない……。

魔界の大部分は既に余の掌中にあり……

残りはヴェルザーの残党が主人の帰りを待つて守っている。

それほどの忠義者達だ……今更のこのご復活してきたおまえに尻尾を振ると思うか

？」

バーンの宣告に雷竜が唸る。

「又ウウ……、数百年だと……?」

アンデッドとされた100年すらも超える時の流れがあつたとは驚きだが、

……だからと言って貴様に仕える理由にもならぬ……!

オレは雷竜ボリクス!王となる竜よ!

冥竜が既にいらないのならば奴の領地をオレが引き裂き奪い尽くしてくれ!

貴様に頭を垂れるオレではないぞ……大魔王バーン!!」

吠えたボリクスが、再び体中に鬨気と雷を満たし、その目に殺気を漲らせていく。

しかし、

「知恵ある竜よ……貴様は存外に愚かだな。」

実に簡単なことだと、余は思うがな……………。  
断ればおまえは死ぬ。

そして、死ぬば余の臣たる冥王ゴルゴナにその命と誇りを再び弄ばれるだけだ。  
うぬはそれを永劫繰り返すだけの、腐り果てた竜となるのを望むのか？

あれが過去に冥竜王と覇権を競った末に敗れた負け犬の成れの果てと……  
魔界の者全てに憐憫の情を抱かれることを望むのか？

それが魔界の勇者の姿か？」

大魔王の更なる言葉に、攻撃体勢に移りながらやはり実行できない。

なぜならば、大魔王の言葉通りになるであろうことを容易に想像できるからだ。

雷竜ボリクスは強い。確かに強い。

だが、今この場において、勝機は0だ。

逃げに徹しても絶対に逃げられぬであろうことは、ボリクス本人とて理解している。  
死んでも膝を屈したくない……と思うが、ゴルゴナ相手にそれは通じない。

死んだら膝を折られるのだ。

過去の栄光も誇りも失って、美しき鱗も醜く腐り落ちる爛れた肉体に変えられて、  
そして知恵すら奪われ下等な野獣以下の駒にされる。

その時の記憶は明確には残っていないが、臃気ながら実感がある。

遠い現の夢のように、思い出せはしないが、確かに見た」といえる悪夢であった。ボリクスが低く口惜しそうに喉を鳴らし唸った。

「ボリクス……余のもとで新たな栄光を掴むのだ。

余に仕え……共に天界の忌まわしき神々を葬ろうではないか。

そしてその後……存分に己を磨き充分にレベルアップをしてから、

冥竜王となったヴェルザーに再戦を挑むもよし。

このゴルゴナに復讐を挑むもよし。

……余の寝首をかくのでも構わぬぞ？ 出来るのなら、な……ふつつつつつ

マントの下から細い老人腕をゆるりと出すと、美しい髭を撫でる老帝は、

不敵な笑みを浮かべながらボリクスを冷厳な瞳で見つめ続けていた。

部下や自分に齒向かうのも、将来的には良し……と言う大魔王の姿はとてつもなく大

きい。

そしてバーンの発言を聞いても些かも揺るがぬ側近3名を見て、心を決める。

「……………いいだろう。」

その言葉を忘れるな、大魔王。

オレは、いつかきつと貴様らを超えてみせる。

覚悟して待っておれよ……冥王！ 大魔王！

その時までには……貴様らに……おまえに従おう、大魔王バーン。

オレを使いこなしてみせるがいいわ」

バチバチツ、と激しい放電が起き、熱風のような闘気も一瞬吹き荒れた。

それは雷竜ボリクスの怒気の現れだ。

死すらも奪われ、何も抵抗できぬ不甲斐なき己へ怒りと……

高みへ昇った宿敵、冥王、大魔王への挑戦……という興奮。

怒りと同時に挑戦者特有の、目標が有るが故の向上心も湧き水のように溢れでて来

て、

雷竜ボリクスの心を満たしていく。

この日、魔王軍に甦りし雷竜ボリクスが加わったのであった。



## 魔劍戦士、始動

魔王軍の新型モンスター“エリミネーター”は早速量産が開始された。

まずはゴルゴナのラボが整っていた大魔宮と魔界の第7宮にて生産が開始され、完成したエリミネーター軍団をムー人が率い、

魔界の各宮殿に施設を建造して回る作業から始められた。

魔界のバーン勢力圏内の宮殿に生産施設を増築するだけの安全な作業で、

1年を待たずして4000体の量産体制は整ったのであった。

本格的な量産開始から更に1年が経ち、

エリミネーター軍団は鬼<sup>デーモン</sup>兵団の名がゴルゴナより与えられ、

現在稼働している150万近いエリミネーターの内、

9割が広大な魔界での各作業……ヴェルザー領への威力偵察や国境警備、

バーン領内における都市整備や治安維持に従事することとなり、

地上に割かれたエリミネーターは約15万。

生産は今も行われているが、ヴェルザー残党との小競り合いでの消耗も意外に多く、需要と供給は安定している。

消耗するはずだった魔界の魔族・モンスター達が温存できたと

大魔王もほぼ無限であるデーモン兵団を評価していた。

来たる天界との決戦においても、

(ミストバーンの暗黒闘気体軍団……ゴルゴナのアンデッド軍団……

そしてムーのデーモン兵団。

3つの無限の軍勢は……神の軍団にも対抗し得る……)

大いに役立つであろうことを大魔王は予想する。

無限の兵は得た。

ならば、後は神にも対抗できる魔の勇者を育成するべきだろう。

創生を予定している6つの軍団は、

競い合わせ互いに互いを喰らい合い、より強い力を手にする為の蠱毒としよう。

そんな“悪戯心”のような暗黒道の英雄育成計画が大魔王の頭の片隅によぎったのだった。

なにせ地上破壊など、既に成ったも同然なのだから。

3人の側近が静かに佇む中、バーンは玉座にて美酒を片手に静かに笑うのだった。

某日、魔界第7宮の研究施設にて。

「ザボエラ」

「は、はいいなんでしょう?」

黒衣に身を包む大蜘蛛に呼び止められ、覗いていた顕微鏡から目を離す魔族の老人。冥王の低く唸るようなくぐもった声を聞くと、

いつもザボエラの小さなハートは恐ろしさに震える。

彼自身はそんなに恐ろしい目に合わされていないのだが、

なにせ初対面が……自分をスカウトしに来た案内役の凄惨な捕獲劇と、

それに続く“手足”の採掘の手伝いという事実。

ザボエラの根っこに怯えが植え付けられても仕方ないだろう。

「貴様の毒をもらおう」

「え?」

突然の冥王の言葉にザボエラの思考がやや追いつかない。

僅かに沈黙が流れた後、

「おっ、お待ちくだされえ! ゴルゴナ様!

わ、わしに何か落ち度がございましたか!? わしはただ懸命に超魔の研究を  
！」

青い顔で脂汗を浮かべながら研究椅子から飛び退いて、

土下座をする勢いで必死に助命嘆願する。

(マ、マキシマムのように……絞り尽くされ鬨り殺されるうう!!) という思いが、

ザボエラの心を埋め尽くしていた。

！  
(出世はしたい！その為には誰だつて利用してやるが……！ゴ、ゴルゴナは相手が悪い

此奴はわしを目障りと判断すれば、間違いなく即座に殺す！か、勘弁じゃあ!!)

体力の劣る魔法使い体質で、

魔族にしても老齢な者とは思えぬ速度で頭をぺこぺこして床に擦り付けている。

「……………腕を出すのだ」

「ひ、ひ……!!」

恐怖のあまりルーラで研究室の扉へと飛んで逃げようとしたザボエラを、

「……………手間を掛けさせるな……………何、痛い思いはさせぬよ……………ぐふふふふふ」

神仙術にて金縛りにして宙に固定してしまう。

「う……………ひ、ひい……………あわわわ！お、ゆ、る……………し、を……………!!」

声さえ自由に出せなくなってきたザボエラは、ガクガクと震え涙と鼻水で顔面を汚す。

哀れな小さい老人へゆつくりと大蜘蛛の爪が伸びてきて……、プスリ、とザボエラの腕に注射を挿すと、

数十mmの体液を抜き取ってあつさりと注射器を抜き去った。

ザボエラの体の金縛りが解け、どすん、と床に落下すると

「あたっ！」という悲鳴が小さく聞こえた。

「……………何を勘違いしていたのかは知らぬが……………」

毒の元を採取すれば、後はこちらで培養する……………おまえはマキシマムとは違うからな。

奴は曲がりなりにもオリハルコン……………我でも複製はできぬ。

なればこそ奴そのものから切り出す必要があるのだ。

それに、奴は多少手荒く扱っても死なぬ……………バカだが丈夫だ」

「ひ、ヒヒヒ……………そ、そ〜でしたか〜！い、いやいやお恥ずかしい……………キィ〜ヒヒヒ……………」

半笑いでほりほりと頭髮が薄くなった頭を指でかくザボエラ。

珍しく少々恥ずかしがっているようにも見える。

「……………貴様の頭脳は貴重だ。そうそう簡単に切り捨てはせぬ。

先日おまえがポポルヴーと話し合っていた集束呪文……これも良い発想である……。魔導及び生体研究の手腕………これからも期待しているぞ……。

大魔王様には、おまえの功績はあまさず報告しておいてやる……

安心したか？………ぐぶぶぶぶ」

後で魔香気の配合レシピを提出するように言われ、あっさりとはザボエラは解放されたのだった。

ザボエラは立ち上がると膝を叩いて埃を払う仕草だが、

ゴルゴナから預けられた研究室には埃なんぞ一片も落ちていない。完全なポーズである。

（ぬ、ぬう〜。お、おのれゴルゴナ………わしに恥をかかせおつて〜……。

だが………うむ………初めてわしをまつとうに評価することが出来る奴が現れたようじゃな。

ゴルゴナの部下とかいう得体の知れん6人の人間も、

話してみると中々小気味良い、話のわかる連中じゃったしのう。

冥王の奴が、ちやくんと大魔王様にわしの手柄を報告しとるんなら……

まあ、大人しく従つてやらんこともないがのう………。

まったくそれにしても紛らわしい！ゴルゴナの奴ももうちよい愛想よくすべきじゃ

！

そそくさと椅子に戻り、

視線を注ぐ助手の悪魔神官達を「ごほんっ！」と咳で誤魔化すと研究に没頭するのだつた。

鬼岩城建造には遅れが出ていた。

軽視できない課題や思わぬ構造上の問題が浮上し、

まず、ギルドメイン山脈の剣山のように鋭い峰々に囲まれた盆地に収まりきらぬ巨体は、

山腹を一部削る必要に迫られ作業スペースの確保に時間が取られた。

また建造途中で既に超重量となっていた結果、

地面の岩盤が崩壊し鬼岩城の土台が土中深くに埋もれる事故も起き、

オテイカワンとザボエラが、

「だから地盤の強度は限界だと言ったじゃろう！」

先に飛行魔石を組み込み浮遊機関を完成させるべきだったのに  
おまえがチンタラしてるからじゃ！」

「飛行魔石はデリケートで錬成に時間がかかるんじゃ！」

強度を充分に上げるまで建造をストップすべきと進言したのに

「工期がおしておるのじゃ〜」と泣き言いつつたジジイはどこのどいつじゃ！」  
「何を言うこの魔族の老いぼれ！」

「おまえこそ人間のくせに1万2千歳のジジイじゃろが！」

わしなどおまえに比べたらピッチピチのボーイじゃわい！」

と、事故時の現場責任者だったジジイ同士で大人げない喧嘩をしたりもしたが、

ムー人全員の全力の神仙術と、エリミネーター土木軍団で土台を掘り返し事なきを得た。

この事故の後、2人のジジイは「やはり不死研究チーム専属が此奴らにはあつてい

と  
ゴルゴナに判断され、それ以後鬼岩城には関わらせてもらえなくなった。

当初、3年以内で終わると思われた建造は現在伸びに伸びているのであった。

大魔王も楽しみにしていた玩具の完成が遠のきやや不機嫌……



かと思いきやそうでもない。

もともと数千とも数万とも言われる時を生きてきた大魔族だ。

地上破壊計画を数千年に渡って辛抱強く遂行してきた彼の忍耐力は、

たかが数年の延長など蚊に刺された程のこともないのだ。

それに、その間に面白いことがいくつか起きていて大魔王を楽しませる。

一つは、

竜の騎士バランが徐々に動きを見せてきたこと。

悪魔の目玉の監視網にちよこちよこ引つかかるようになってきており、

これはつまり、バランの体勢がある程度整ったということなのだろう。

ヴェルザー戦で失った竜騎衆の補充の目処でもたつたのかもしれない。

各国にバランの大まかな居場所を密かに漏らしているので、

その内バランと人間との間で何か起きるだろうと予想される。

二つは、

人間の勇者アバンが城塞王国リングアに単身潜入し、

大立ち回りを演じたこと。

恐らく、リングア王と接触し拳兵の真意を確かめるべく行動したのだろうが、

その後のリングアとアバンの動きを見るに失敗したのだろう。

王宮の警護をしていた近衛相手にほぼ無傷で切り抜け脱出するなど、やはりアバンは警戒すべき人間といえた。

現在はリンガイア発給で国王暗殺未遂の指名手配犯としてアバン探索の網を広げているが、

アバンは世界中にファンが多く、リンガイアに差し出す者はそう多くないだろう。

それと関連するだろうが、カールとリンガイアの関係はより険悪となっている。

王女フローラは自制しているようだが、

戦士ロカの後を継いだ若き騎士団長ホルキンスは、

公然と「リンガイアの悪漢ども」と憤っているらしい。

そして三つめ、

魔王軍の期待のホープ、魔劍戦士ヒュンケルの最終仕上げである。

17歳となる彼は、年が明けたこの日に魔界第7宮で大魔王と謁見し仕上げの儀式を授かるのだ。

大魔王は限られた者にしか出入りが許されておらず、現在、自由に出入り出来るのは

大魔王バーン、ミストバーン、キルバーン、ゴルゴナ、ボリクス、マキシマム……

それに特例として技術全般を司るムーの6人。

それ以外の者は存在すら知らない。ザボエラ、ザムザ親子も魔界第7宮での勤務が主

だ。

地上の主拠点となる鬼岩城も未完であるため、第7宮での謁見となっていた。

第7宮玉座の間……薄いベールで遮られた向こうに、大魔王バーンが座している。

そしてその前に、どこかオドロオドロしい全身鎧で身を隙間なく包んだ者が

跪いた姿勢のまま微動だにせず主の言葉を待っていた。

「ヒュンケル……面を上げい」

ベールを越えて、威厳ある声が玉座の間に響く。

ゆつくりと頭を持ち上げる彼こそが、

人間の身で驚くべき戦闘能力を身につけた青年……ヒュンケルである。

彼の師であり養育者であるミストバーンも、主と弟子の謁見を静かに見守っていた。

「今宵から、おまえが真の戦士となる目出度き儀式が始まる。」

それを成し遂げた時、神をも恐れさせる魔剣戦士が生まれるだろう……」

「……俺は既に無抵抗の女子供でさえ斬り殺すことが出来ます。」

この身と心はもはや立派な魔界の戦士だ。

今更儀式など必要ないでしょう」

最低限の敬語で、ふてぶてしく大魔王に返すのは

若さゆえの怖いもの知らずか、それとも彼の胆力の凄まじさか。

だが、大魔王はその程度の無礼は意に介さない。

「フ……そう言うな。」

儀式とはこなす事に意義がある……それに、おまえも気に入ると思うがな」

「ほう……」

「簡単なことだ……いつも通り村を皆殺しにしてくるだけに過ぎぬ。」

だが、その村にいる者が少々特殊でな……。

ネイル村……そこには勇者アバンのかつての仲間、戦士ロカと僧侶レイラがいる」

「なに!？」と叫んだヒュンケルが、思わず立ち上がる。

ミストバーンが目をギラリと光らせて傀儡掌で座らせようと僅かに動くが、

「良い、ミストバーン」と忠臣を遮ったバーンは、

「ふふふ……興味が湧いてきたようだなヒュンケル。」

ネイル村に血の雨を降らせよ……そして、アバンの仲間共を血祭りにあげるのだ。

勇者アバンに一泡吹かせ……元勇者一行の心臓を供物として余に捧げよ。

そうして儀式が完了する……その後、ゆるりと宴席でも開いてやろう。

魔界の勇者誕生を祝してな……フフフフ」

武者震いする青年を愉快そうに見つめていた。

「願つてもないこと……!!」

アバンを苦しめるためなら、俺は女子供も喜んで殺そう!

戦士ロカと僧侶レイラ……ネイル村を鼠一匹住めぬ廃墟にしてくれる!」  
憎しみを奮い立たせて己を鼓舞する若者が、

そのまま踵を返すと足早に立ち去ろうとするが、

彼の前に音もなく闇の師が瞬間的に移動してきて、

すう、と無言の内に暗黒の懐中から一本の剣を取り出し、彼に差し出した。

それは黒く……どこか生物を思わせる意匠を凝らした剣。

「なんだそれは？」

俺にはバーン様から頂いた、この鎧の魔剣がある。

そのような剣……かさばるだけだ。要らぬ」

突っぱねるヒュンケルであったが、

「そう言うなヒュンケルよ……ミストバーンもお主を心配してのこと。

それに、その剣は唯の剣ではない。

余の臣にして、ミストバーンの友……冥王ゴルゴナがお前のために創り出した魔剣。  
冥王の妖力によりその刀身は邪悪の黒に染まっではいるが……

気付かぬか?……ヒュンケルよ」

訝しげにミストバーンに握られた黒剣を数瞬見つめたヒュンケルは驚愕する。

「こ、これは……………まさか！この輝きは！」

オリハルコン!!」

「その通り……………」

同じ材質ならば魔界の名工ロン・ベルクが作った鎧の魔剣が数段上であろう。

だが、その剣はオリハルコンを材料とし、

冥王が秘術を用いて存分に妖力を注いだ生きた魔性の剣。

その名も魔剣ネクロス……………必ずや、おまえの役に立つであろう。

ミストバーンの親心だ……………受け取っておくがいい」

(俺の父さんは地獄の騎士バルトスただ一人……………誰がおまえなど！)

心でそう悪態をつきながらも、

「生きた魔剣……………確かに……………これ程の物ならば、鎧の魔剣に劣らぬでしょう。

鎧の魔剣は、剣手に取れば顔面の防御が弱まりますから……………頂きましょう」

大魔王にまで言われればさすがに断れない。

ミストバーンからもぎ取るように魔剣ネクロスを受け取ると、

ギ、ギ…ギイと小さく唸ってヒュンケルの背に、

爪のような鍔ですがみつくように自ら括りつけられるネクロス。

「い、これは……なるほど……まさしく魔剣、というわけか。」

面白い……！俺の足を引っ張るなよ……ネクロス」

ヒュンケルが兜の下で歪んだ笑みを作り、笑う。

勇者アバンの仲間を殺せると思うだけで、

少年のあどけなさが未だ残る青年の心は異常なほど高鳴るのだ。

それは彼が自分自身に、

催眠暗示のように言い聞かせ続けた、仮初めの憎悪の結果であった。

1人と一振りがネイル村に現れるまで後僅かである。

## 消える命

「いい？ よく聞きなさいマアム。

魔の森をずっと北に抜けて、ロモスの王都の東の山へ向かいなさい。

そこには……お父さんとお母さんの友達が住んでいる。

道はわかるわね？」

黒いややくせつ毛の長髪を垂らした、大人の色香を少し醸し出す清楚な女性が、桃色の髪をした美少女に言って聞かせている。

真剣な顔つきのその女性……レイラに対して、少女は泣きじやくりながら

「やだよお！ お母さんも一緒に行くようよ！

私一人じゃそんなとこまで行けないよお!!」

母の胸に飛び込み、力一杯抱きつきながら懇願する。

だが、片手で抱きついた為に完全にその身を母に投げ出すことはできない。

マアムと呼ばれた少女の右手には幼い娘の左手が握られているからだ。

涙で目を腫らし、決して離れまいとする我が娘ともう一人の幼娘にレイラは、

「マアム……あなたは優しくくて、とても強い子。



アバン様の特訓だつて乗り越えちやう頑張り屋さんで、ママとパパの自慢の子よ。大丈夫……アバン様の首飾りと、魔弾銃マダンガンがマアムを守ってくれる。

ママとパパが、村を襲う悪い奴なんてやつつけちやうからね！

だからそれまでミーナと一緒に、ママとパパのお友達の所に避難してて。ブロキーナつていうとつても優しいおじいちゃんよ。

心配ないわ……すぐに迎えに行くからね？」

優しく言い聞かせ、抱擁する。

それはまさしく慈愛に満ちた母の優しいぬくもりであつた。

子供にとつて母のぬくもり程安心できる物はない。

母の暖かき。お日様の匂いがいつもする母の香り。母から聞こえる鼓動の音。

それらがマアムから不安を取り除き、安心をもたらしてくれる。

「ほんとに……ほんとに迎えに来てくれる？」

「ほんとよ」

レイラが茶目つ気たつぷりに答えた。

「悪い奴に勝てる？」

「もちろん！ ママが嘘ついたことある？」

レイラが元氣いっぱい聞き返す。

村全体から漂う異常な緊迫感と悲壮感を吹き飛ばす母の優しくも強い笑顔に釣られて、

マアムにも自然薄い笑みがこぼれた。

「ない……」

「そうよね！ ママはとっても正直者の良い子だもん！

マアムだってママの子なんだからとおくくつても良い子よね？」

「うん……、わたし良い子……だと、思う」

「それに強い子よ。 後、とっても可愛いわ」

「うん……そ、そうかな」

「もう10歳……じゃなくて11歳のお姉ちゃんになったんだから。 ね？」

ミーナのことを守るって、この子が生まれた時言ってたじゃない。

ほら、泣き止んで……。 マアムが泣いていると、ミーナも寂しくなってしまう」

レイラがミーナの柔らかい頭を優しく撫でると、

そのまま我が子の額へ軽くキスをしてやる。

「うん……！ 泣かないよ。 私、ミーナを守る！」

未だしやくりあげているが、それでも涙を拭いたマアムは優しいだけでなく気丈である。

11歳の子供にしては出来過ぎだろう。

未だ大泣きするミーナを今では慰めてやっている。

「大丈夫……あなた達は大丈夫よ、マアム……ミーナ。

アバンの印がきつと2人をお守りくださるわ。

私の可愛いマアム……元気で……また、後でね」

「うん……お父さんと一緒に迎えに来てね？」

待つてるからね……お母さん！」

最後に母の頬へとキスをした愛娘は、

ネイル村村長の孫娘……幼娘のミーナを連れて魔の森へ駆け出していく。

「振り返っちゃダメ……走るのよ！ マアム！ ミーナをお願いね！」

今になってレイラの瞳にも涙が、ほんの少し滲む。

きつとこれが娘との今生の別れだろう。

ネイル村の生き残りは、マアムとミーナだけになってしまっだろう。

それを覚悟するくらい、突然に村を襲った魔剣士は強かった。

村の若い男手はほぼ全てがロモスの王都に徴兵され、残ったのは死病を患った口力だけ。

後は老人と子供だけで、あの邪悪の剣士は子供すらも容赦なく切り捨てていった。

村長が命をかけて守った孫のミーナと、自分の娘を逃せただけで御の字であろう。

「ロカ……！　今行くわ！」

病に倒れ、娘に武芸のイロハを教えることも出来ないぐらいに弱ってしまった夫は、アバンが訪ねてくれた際、娘に指導する親友を見て実に朗らかな……

そして少しだけ悲しそうで悔しそうな顔をしていたのを、レイラはよく覚えている。病程度に負けた不甲斐ない自分を責めていたのだろう。

そして、人生最高の親友に衰弱した自分を見せるのも辛かったに違いない。

それ程に死病に深く侵されたロカが、

村で誰よりも一人、善戦している。

娘のため……妻のため……一人の戦士としての己のため……、

ロカは残り少ない命を今まさに燃やしていたのだった。

「はあ……はあ……はあ……！　つ、強い……！」

それに、この剣技……………アバンの奴とそっくりだ……………まさか…」  
中年になりかけた、かつて精悍だった男が鋼の剣を構えながらも息荒く両肩を上下させる。

彼の前に立つのは全身を威圧的な鎧で覆った青年。

いや、見た目からは人族か魔族かすら分からぬが、とにかく彼の発する声は若々しい。

「ふっ……………戦士ロカよ……………褒めてやろう！」

そのように衰えた体でよくも俺とこうも斬り合う。

そして、さすがはアバンの仲間……………カール騎士団の元団長……………よくぞ見抜いた。

俺の剣の流派……………、それはアバン流刀殺法！

俺は……………アバンの一番弟子、魔剣戦士ヒュンケル!!」

「な、なにい!？」

親友の名を、突然村を襲った悪の剣士の口から聞き衝撃を隠せない。

だがロカが愕然とする最中にも弟子を名乗った魔剣士の攻撃は緩まず、

「そらそらそら! 伝説の勇者の仲間はそんなものか!」

「ぐ…、くそ!なんて鋭さだ……………!」

寧ろ苛烈さを増していく突きの嵐に、歴戦の戦士ロカが防戦一方となる。

純粹な腕だけでもヒュンケルは凄まじい天賦の才能を見せつけている。

ロカが病を得ていなければ、膂力と経験は圧倒的に優っているはずであったが、今となっては経験以外の全てが劣る。

それにもう一つ。ヒュンケルの剣の異常な切れ味である。

（くそお……！まともにあの剣を受けちまったら俺の剣じゃすぐに叩き切られる！

あの剣は尋常な代物じゃねえーぜ!!）というわけであった。

ロカは、ヒュンケルの剣を一目見た時から、その危険さを理解していた。

魔剣士の鋭き突きを、ロカは流すように捌き自分への致命傷を避け続けているが、なにせ鏢迫り合いすらまともに出来ないので。

ロカの精神的圧迫は大きかった。

（だ、ダメだ……！う、腕が言うことを聞かねえ！）

体力が限界に達しそうになったその時、

「バギマ!!」

「うっ！ぬう!?!」

魔剣士の横合いに刃の突風が吹きすさぶ。

ヒュンケルの鎧に魔法は効かず風の刃は意味をなさないが、

バギ系が巻き起こす風圧はしっかりと彼を押しつけ目に砂塵を運ぶ。

その隙を逃すロカではない。

「つ！ 助かったぜ、レイラ！ どりゃあああ!!」

渾身の二撃を急所であり鎧の隙間である首筋めがけ叩き込む。

しかし、咄嗟に身を引いたヒュンケルの首を切り落とすことは叶わず  
鎧の胸元に掠るのみに終わるが、

「速いな……！ だが、アバン流殺法はてめえだけの専売特許じゃねえぞ！

ぬうう……!! (アバン……！ 俺に力を!!) グランドクルス!!」

鋼の剣を地に突き立てたロカが、柄と鏢をクロスに見立て闘気を集束させると、  
光の闘気が破壊的な光線となって飛び退いたヒュンケルを追撃する。

それは、ロカが現状で放てる限界の闘気。

「なに!？」

まさか一目見て半死人と分かるロカから

闘気の遠距離攻撃が来るとは思っていなかったヒュンケルは回避が遅れ、

「うおおお!!」

けたたましい爆発に飲まれていった。

すかさずにレイラがロカへ走り寄ると、ベホイミの光で夫を癒やす。

「ふう〜、助かったぜレイラ……」。

アバンの奴に昔、教わったってよかったぜ……。

「どうだ……？ 俺も、まだまだイケるだろ。ちったあ惚れなおしたか？」

往時とは比べ物にならない程、痩せこけてしまった愛嬌のある凛々しい夫の顔。こんな時でも、ロカは元気いっぱいであった。

そんな夫を見て妻もまた微笑む。

「ずっと前から惚れっぱなしよ。 10年前からずっと……ね」

「……へへっ、そうか！」

いい歳になっても、病人になっても、ロカの笑顔は悪ガキに似たそれであった。

しばし見つめ合う2人。だが、

「驚いたぞ。まさかそんな体で闘気を使えるとは」

「！！」

突如聞こえてきた声の方……ロカが放った闘気光が作った爆煙が晴れていくと、

そこには……魔剣士が無傷で立っていたのだった。

彼の鎧が効かないのは、村長が今際の際に伝えてくれていたが、

「と、闘気も効かないのか……！」とロカが驚きの声を上げると、

「ふん……そうではない。」

俺の鎧は魔法のみを弾く。物理攻撃や闘気技までは無効化できん。

鎧の魔剣とて、強度以上の衝撃には耐えられん……。



それが……まともな威力を持つていれば、の話だが」

「な……!!」

魔劍士が否定する。

それは、ロカの戦士としての死刑宣告……終焉の宣言であった。

「哀れだな、ロカよ……」。

貴様が死病に侵されていなければ、

或いは俺は今の一撃で大ダメージを負っていたかもしれない。

残念だ……全盛期の貴様と闘い、そして俺が上だと証明してやりたかったがな。

もはや貴様の生命の全てをかけても、俺を倒すことは出来んということだ」

「な、なにを!!」

ロカが、ろくに力も入らぬ膝を無理矢理に立たせ剣を構える。

もはやその剣の重みさえロカの病み衰え消耗した体には重荷であった。

レイラが支え、今ではベホマを当ててロカの負担を軽減しようとしていて、

ロカがチラリと、視線だけでレイラに何事かを語りかける。

それは最後の別れであり、謝罪であり……二度目の愛の告白でもあった。

(レイラ……俺の最愛の人よ。 済まない……あいつを止めるには俺だけじゃ無理だ。

マアムのためにも、おまえを残しておいてやりたかったが……その命、くれ!

娘を守るためにも……!」

一瞬の視線の交差で妻は察する。　コクリと頷き、

「ブロキーナが、きつとマアムを守ってくれる。

私は……アバン様の仲間であり戦士ロカの妻!　どこまでもあなたと一緒によ!」

2人は全てを理解し合った。

「……女に支えられねば立ち上がることもままならんとは。

それ以上の醜態を晒すのも辛かろう。

……今、楽にしてやる!」

兜から覗く眼光が一際険しくギラついたと見えた瞬間、

ヒュンケルが魔剣を突き構えで大きく引き始める。

「この技で死ねる貴様は幸運だ。

これはアバンを殺すために俺が編み出した秘技!

死ねい!　ロカ!」

弓のように引き絞られた全身のバネが一気に収縮を解放し、

「ブラッデイスクライドオツツ!!」

立つので精一杯のロカへと超高速回転の魔技が迫る。

もはやロカに為す術はなく、

ズシヤリ!と鈍い穿孔音が辺りに響き、ロカの土手っ腹を魔剣が深々と抉っていた。  
だが、

(こ、こいつ……! なぜ避けん!! ……ハッ! お、女が!)

ヒュンケルが気付いた時には、レイラが己の頭部めがけて飛びかかってきて、  
「ロカを囷に!! お、おのれええ!!」

ヒュンケルの兜を、一線を退いた女とは思えぬ力で掴みかかる。

オリハルコンに次ぐ硬度を持つフルフェイスの兜がミシミシと悲鳴を上げる。  
魔剣士が即座に剣を引き抜こうとすると、

「おっと……! に、逃がさんぜ!! ヒュンケルさんよ……!」

「お、おのれい!! くっ! は、はなせ、ロカ! 死に損ないめ!」

ロカがヒュンケルの腕を最後の力で掴み、離さない。

「貴様らは無駄死だど何故分からん!

自己犠牲<sup>メ</sup>呪文<sup>テ</sup>狙いだろうが……俺の鎧に魔法は効かぬのを忘れたか!!」  
「舐めないで! 全生命力を捧げる最終魔法……! 非力な私でも!!!」

叫んだレイラの指に命を交換した更なるパワーが宿り、  
信じられぬことに女の細指が兜に孔を穿っていく。

だが、

「こ、この……!! 舐めるなア……!!」

ヒュンケルが頭を振り上げた瞬間、頭部から触手のように波打つ刃のムチが、しがみつくレイラの胸へ蛇のようにしななって襲いかかり、

「!? あっ!」

レイラの心臓を貫き、彼女にか細い悲鳴を上げさせた。

しかし、

「レイラ! は、離すな……頑張れ!! お、俺もついてるぜ!!!」

共に死にゆく夫から血反吐混じりの声援が届くと、

彼女は最後に夫を見てニコリと笑う。

「あ、あなた……愛してるわ、永遠に……!」

そう告げたレイラ、そして告げられたロカ。

両名の脳裏に様々な記憶が花火のように瞬いては消えていく。

カールでおちやられるアバン。怒る大臣。笑うフローラ。

魔王ハドラーの襲撃と、そこからの二人旅。そしてネイル村で、ここで僧侶レイラ

と出会い……。

スケベで偏屈な大魔道士マトリフ、武神・拳聖プロキーナらを加えて魔王と決戦。

……の直前にロカとレイラが密かな、しかしバレバレの恋愛の末にマアムを授かり

……。

悪い思いの全ても良き思い出となって駆け抜けていく。

(マアム………母さん、約束破っちゃったね……ごめんね………)

「メ ガ ン テ !!!!」

僧侶レイラの最後の魔法が発動する。

「う、うおおおおおおおおお!!!」

全ての命の力が破壊の力となつて、敵を襲う。

ニヤリと笑った口かど、微笑むレイラ………そして魔剣士が光の渦へと消えていき、命の光が轟音と共に天へと昇っていった。

## 灯りだす希望の火

勇者アバンは旅の途中で押し掛け弟子となった、

ギルドメイン山脈は麓ランカークス村の武器屋の倅を伴い、

人間同士の争いを止めさせる不毛な旅を続けているらしい。

カール王国のフローラは、

昔馴染みであり想いを寄せているアバンの言葉に真摯に耳を傾けているようだが、  
国と政治は個人の感情ではどうにもならず……

武力でもって侵攻してくるリンガイアには相応の対応をせざるを得ない。

カールの同盟国である極北の王国オーザムもまた

「悪はリンガイアにあり、こちらから剣を収めるなど有り得ない」の一点張りで、  
最近では攻められているのにも関わらず消極的な対応に終始するカール王国に  
不満を述べているらしく、リンガイア王の乱心をこれ幸いとばかりに、

豊かなギルドメイン大陸に自国領を拡大したいという野心が有り有り見え始めて  
いた。

リンガイアは当たり前のように聞く耳を持たず、寧ろアバンの首に賞金をかけてくる

始末。

ベンガーナ王国はアンデッドの群れとの終わりの見えぬ泥沼の戦いによって、もはや王国領の隅々は全盛期の見る影もない。

ギルドメイン大陸には安全な土地などどこにも無くなってしまった。

一連の騒乱は同時期に起きており、

背後に大きな影が潜んでいることを想像するのは容易である。

かつて倒した魔王ハドラーとは比べ物にならないくらい巨悪を予感させ、

アバンは各国の首脳陣に、

「今は人間同士で争っている場合ではありません！」

私達を争わせる何者かの陰謀に乗っては敵を利するばかり……！！

どうか休戦の会談の場をお設け下さい！」

と必死に説き周り、ギルドメイン大陸中を東奔西走していたが、

やがてそれに限界を感じた彼は大陸を越え南下することを決意した。

力なき正義が無力であることを知っている彼は、戦乱を収めるために武力を選択したのだ。

カール、オーザム、リングアイアの争乱を解決し、

ベンガーナの危機を救うには南方の2大王国の助力が必須。

そう考えたアバンは自身の勇者としての名声を最大限利用し、ラインリバー大陸のロモス王国……ホルキア大陸のパプニカ王国の両大国首脳と接触。

中央大陸の争乱への介入に消極的であった両国王を説得し、両大国連合の平和調停軍を起こしてギルドメイン大陸に出兵を宣言させた。

世界中が更なる驚愕に包まれる中、

調停軍は旧アルキードに進軍し、居座るアンデッド達の後背を強襲した。

アンデッド軍はベンガーナとの戦いである程度数を減らしていたこともあるが、なにより調停軍との相性が最悪で、その急襲で大打撃を受ける。

と、  
パプニカが誇る、大司教テムジンと賢者バロンに率いられた魔法隊のニフラム攻勢

ロモスの持つ品質の良い大量の聖水に不死者達は散々に打ち破られたのであった。旧アルキードに進駐した調停軍を、

数年に渡るアンデッドからの包囲圧迫を受けていたベンガーナは心底歓迎した。

ベンガーナ王都は疫病が蔓延していながらもちよつとしたお祭り騒ぎになり、

国王クルテマツカ7世は、調停軍が拠点とした旧アルキード城に

少ない供回りで自ら赴き、涙を流しながら謝辞を述べたという。



そんな、争乱に幕を引く光明がアバンによつて照らしだされ始めた時である。世間話に興じていた兵達の声を、

いつものように聞き流しつつ重要な噂がないか気を配っていたアバンの耳に衝撃的な話が飛び込んできた。それは……。

「ネ、ネイル村が……全滅!？」

ど、どういうことですか!？」

調停軍の兵士の一人の肩を掴み思い切り揺さぶりながら尋ねる。

後ろで「わ、わわ! 先生落ち着いて下さい! その人すつげえ頭揺れてますよ!」と慌てる魔法使いの弟子の制止が耳に入り、コホンつと一つ咳払いをすると、

「これはすみません……、少々取り乱してしまいました。

……あの村には私の親友がいた。

彼は重い病にかかっていました、

それでも並のモンスターや野盗に遅れを取る男ではありません。

……それに、彼の妻子も弱くはない。

お聞かせもありませんか? ……ネイル村に一体何が起きたのか」

アバンの眼鏡の奥に光る強い決意に押された兵が、

自分の咎ではないが申し訳無さそうに口を開く。

その村に友がいたと言うなら尚更シヨツキングに思うであろうことを、伝説の勇者に伝えねばならないのだ。

その男が語るには、こうである。

半年以上前、ロモスの王都にネイル村から駆りだされた男が故郷へ手紙を書いた。しかし、一月二月三月待てども返事が来ない。

配達人に確認をとった所、ネイル村に向かった所員は行方不明で、

それを確認にいった傭兵も帰ってこない。

そこでロモス軍の小隊がネイル村に派遣されたが、

村は毒の沼に半ばまで埋もれ腐った死体が徘徊する……

無残な風景に変わり果てていたという。

村の近くには白骨化した所員の死体と、

腐乱し、ゾンビになりかけた傭兵が確認された。

危険な土地でのやっとの調査では、

村は1年以上前には滅んでいたらしい……ということだけしか分からなかったという。

アバンは、

「な、なんということだ……」。

ロカ……レイラ……マアム……」

男の話を聞き、天を仰いで嘆息した。

自分が王国に派兵を依頼したせいで、ネイル村がそんな憂き目に遭遇したのでは、そんな思いがアバンの鋭利な思考を一瞬走るが、

ロモスもパプニカも、リンガイアが挙兵した時から積極的に軍備を拡張していた。

徴兵による地方の男手の減少……

村々の自給・自衛能力の低下という問題は、前々から起きていたことだ。

アバンの咎は少ない……どころか、その状況を将来的には打破しようと努力している。

魔物とは勝手の違う人間の“エグ味”を相手に良くやっていて、

称賛されこそすれ非難される謂れはない。

だが智勇兼備というだけでなく、優しい、そして自分に厳しい責任感のある男であるから、

それでもアバンは自分を責めずにはいられない。

ネイル村の惨状を、親友一家の安否を確認しに行きたくても、

アバンは調停軍のアドバイザーのような立場にあり、

奮起を促した張本人として勝手に旧アルキードからいなくなるわけにはいかない。

ギルドメイン大陸は少しの気の緩みも許されない、非常に危険な……

闘争心に満ちた人間と邪悪な勢力とが入り乱れる戦乱の地なのだ。

見上げた空から、ポツポツと雨が降り出してきて、

それはまるでアバンの心を代弁するかのような篠突く雨であった。

(ロカ………すまない。今は無理だが、いつか必ずネイル村に行く……約束しますよ)

村を襲った災いは何なのか、アバンには見当はついても真実はわからない。

死病を患っていたロカは、災いを逃れても死は免れないのはほぼ間違いない、

先に逝ってしまったであろう元氣印の親友を思い、誓う。

だが、調停軍はこの後……ベンガーナ、カール、オーザムと同盟を結び、

リンガイアとの戦いに突入していくのだが、

慣れぬ北国の寒さと、戦い慣れたリンガイア戦士団らに大いに悩まされることになる。

る。

リンガイアの名将バウスンと、

僅か13歳で初陣を飾るなり50の首を獲ったといわれる一子ノヴァは一筋縄では

いかず、

特にノヴァはカール王国の誇る騎士団長ホルキンスと30合ほど打ち合った末に、

ホルキンス優勢でありながらも引き分けに持ち込むという末恐ろしい少年だ。

バウスン親子という“矛”と城塞という“盾”を持つリングアイアは、カール王国の名声をも超えて最強の王国となりつつある。

だが、リングアイアが一国でここまで粘れるのは、

なにもリングアイアが飛び抜けて強国であるからではない。

ロモスとパプニカがリングアイアに比べて弱兵、且つ戦慣れした将に欠け、

ベンガーナは疲弊の極致に在り兵は出せていない。

また、オーザムが大陸領の切り取り取りに執心で、連合を出し抜こうとしている節があり、

足並みが乱れがちであること……などが主要原因であった。

身内に不和があり、人間同士の戦に慣れている名将バウスンが相手では、

さすがのアバンも苦戦を免れないのであった。

カール、ベンガーナ、オーザム、ロモス、パプニカの5大王国連合は、

地上に更なる一大事変が起きる3年後まで……

リングアイア一国相手に翻弄されるのであった。

旧テラン王国の首都は湖畔の都である。

その自慢の湖に突き出すように竜の祠が安置されており、

かつて王国が健在であった頃には

そこに火炎草を詰めた竜の装飾が施された皿を供えて竜の神を祀っていたものであつたが、

王国が滅び去つた今では焼けた祠と崩れた王城だけがその名残を残している。

旧テランの王国領全土は、黒衣の魔人によつて業火と瘴気をばら撒かれて

今もなお土地そのものが荒み病んでおり、腐敗した木々と大地の回復は遅い。

だが、襲撃の中心地であつた王都内の湖周辺だけは

邪気が払われ土地が清められ始めている。

その理由は湖中に沈む遺跡……竜の騎士の聖域である“竜の神殿”の魔を払う浄化作用だ。

神殿は、湖中深くに隠されていたために冥王の魔手を逃れた神々の遺産である。

本来は竜の騎士しか立ち入ることの出来ぬ聖域であるが、

当代の竜の騎士・バランの意向で、

現在この神殿には3人の人間、1人の半魔族、2人の獣人が住み込みをしている。

竜水晶の間を囲むように廊下があるだけの神殿なので、

自然と皆が暮らすのは竜水晶の間となるが、

広い大部屋なので6人で暮らしていても狭くはないのだ。

意思ある水晶、竜の神殿の番人である竜水晶は、

「神代の頃から神殿を守り、竜の騎士を見つめ続けてきたが……

竜の騎士以外を迎えるのも、

私の間がここまで生活感溢れることになったのも、おまえの代が初めてだ……バラ

ン」

と、普段と変わらぬ機械的で冷静な口調で、

愚痴るような雰囲気を含ませつつ感想を漏らしたのは既に10年近く前のことだ。

今では竜水晶も諦めの境地に至り、馴染んでいた。

ゴルゴナとボリクスとの戦いを終えた後、

ソアラを失いデイーノまでも海上で見失った balan は絶望の縁に叩き落とされたが、

冥王への復讐を心に誓い、

それを生き甲斐としてアルキード北端の“アルゴの丘”付近の奇跡の泉へと帰還し

た。

ここはバランとソアラが初めて出会った思い出の地であり、竜の騎士の傷を癒やす神域で、

心身が傷付いたバランを癒やすには持つて来いの地であった。

そしてそこで、バランは予期せぬ人間らと再会した。

テランから逃がしたフォルケン王と占い師のナバラ、そして孫のメルルである。

3人は戦争に明け暮れる北方を避け、

また、アンデッドに蝕まれているベンガーナ王国に行くことも出来なかった。

かといって、パプニカやロモスへ行く手近な海路はベンガーナ発のものしかない。

漁村で手に入るような小型船では、物騒な海路をゆくのはこの3人では不可能だっ

た。

彼らが選んだ避難ルートは、アンデッドが多いベンガーナ中央以西（王都寄り）を避

け、

東端の森林地帯沿岸をずっと南下していく道筋であった。

そこをゆけば竜の騎士の聖なる泉へ辿り着くはずで、

そこならばアンデッドも近づけぬだろうし戦禍も及んでいない。

古の神話や竜の騎士の伝説に詳しいフォルケンだからこそ思いつけた避難先であった。



森を延々と歩き南下した老人2人と子供1人。

着いた頃には疲れきって、泉付近に倒れるように休憩していたところに、竜の騎士バランとの再会である。

彼らを見捨てておけなかったバランと、すぎる彼ら。

そこからバランと彼らの共同生活と逃亡が始まったのだ。

そしてある日、バランがモンスターを退治しつつ世情を探っていると驚愕の情報を入手した。

バランと思しき人相と情報が記載された手配書が出回っていて、なんとアルキードとテランを滅ぼした張本人とされていたのだ。

バラン一行は、急ぎ身を隠した。

バランと行動を共にしている

テランの元国王フォルケン老に釈明してもらうことも可能だが、それで簡単に解決するとはバランは思っていない。

なぜなら、世間的にはフォルケンは王国と運命を共にしたと思われるので、

“なんらかの大いなる悪”が動いていると世界中に認知されている今、  
「国王1人だけが奇跡的に生き残りました。」

そして手配書の男は人類の味方です。

真犯人の正体はわかりませんが他にいます」

と言ったところで、信じてくれるお人好しが果たしてどれだけいるだろうか。また、国民と土地をほぼ全て失った身寄りの無い老王には大した価値も無く、保護してやったところで、亡国の老いた王を保護した優しき人格者”

という評判が得られるぐらいが精々だ。

フォルケンに残されたのは優れた人格と深い知識・経験からくる知恵だけ。

そしてその知恵すら多くの国家経営者にとっては要らぬものだ。

フォルケンは国家を衰退させた稀代の失政者で

非暴力主義者の理想家……というのは有名だ。

実際に会えば、フォルケンの深い見識と広い器に多くの者が惹かれるだろうが、病床に臥せていたため国外の王達とも付き合いが浅く、

フォルケンの本当の為人ひととなりを知る者は少ない。

期待できる見返りは少ないのに、

そうやって動き回れば逆に大魔王の勢力に感づかれる危険性だけが増す。

そう考えたバランスの判断によって、フォルケンはバランスに匿われ続けた。

フォルケンは、冥王襲撃時にバランスから薬草とともに摂取した

“竜の血”の効果で存外元氣であつたが、

それでも万が一の時を思えば、世話係が必要であった。そこでバランは緊急時の措置とはいえ

フォルケン王を託した辻占い師のナバラとその孫娘を頼り、そのまま共に行動してくれるよう頼んだ。

ナバラと孫のメルルに事情を説明し、

「お前達も巻き込まれるかもしれないが」と言うとき快く引き受けてくれて、邪悪な勢力が狙ってくるかもしれないと言われましても、

既に世はどこもかしこも殺し合いばかり。

貴方様が竜の騎士だというのなら、この方がいつぞ安心ですじゃ。

一度は祖国テランを捨てようと思っただしがないババアですが、

これでも竜の神を信仰してた端くれ……………。

フォルケン様のお世話……孫のメルルと共に引き受けます」

「お仕えいたします、竜の騎士さま」

祖母共々幼いメルルがペコリと頭を下げてくれたのだった。

それがもう10年近く前の話。

大魔王と人類から隠れつつ、色々として……また色々起きた。

ナバラの占いで我が子デイーノの行方を探しまわってみたり、

9年前……我が子が見つからず、

代わりに魔族と人間の混血児・ラーハルトを見つけ保護したり、

7年前……スカイドラゴンと共に人間の里を襲っていた凄腕の鳥人ガルダンディーを懲らしめ、

バランの圧倒的な強さと男らしさに惚れ込んだ彼が、命乞いがてらそのまま

「バラン様！ 今日から俺ア心を入れ替える！ ほ、本当だ！」

ルード共々あんたに、いや貴方様にお仕えする！」

とせがまれ無理矢理ついてこられたり、

5年前……人間の戦争に巻き込まれ大怪我を追って北方を追われ、

海流に乗って南まで流されてきていた瀕死のトドマンを拾って彼に感謝され、

「このボラホーン、人間は憎いが貴方から受けた恩義には報いたい！」

バラン様に拾っていただいた命だ……どうぞこの俺を使ってください！」

とやはり半ば無理矢理従者になられてしまったり、

であった。

次代の竜騎衆探しが難航していた為に、

バランは丁度良いとばかりに素養を感じた彼らを鍛え出し始めた。

次期竜騎衆に相応しい戦士とすべく、その訓練はまさしく地獄で、

他人を鍛えたことのない balan は大魔王勢力と人間への苛立ちも手伝い一切の加減もなく、

彼ら3人はほぼ毎日死にかけた……………。

が、それでも毎夜、特訓の最後まで倒れず食いついてきたのがラーハルトである。

彼の balan を慕う気持ちはガルダンデーとボラホーンを大きく凌駕し、

また天賦の才能にも恵まれた彼はめきめきと頭角を現した。

闘気技を苦手とするが、それを補って余りある圧倒的な神速を手に入れ、

また、彼の父が残してくれた魔族の血が功を奏してか、魔法を扱う才にもある程度恵まれ、

不得手ではあるが

初步的な攻撃魔法やルーラ系を会得できたのは大きなアドバンテージであった。

訓練の夜、ヘトヘトのラーハルトに、

「義兄<sup>にい</sup>さん、お疲れ様です」

「……………ああ、ありがとう。メルル」

と義理の兄妹のような関係になったメルルが、

冷えたタオルや飲み物をラーハルト……………、

ついでに獣人2名に差し出すのがいつもの光景となっていた。

最初は人間に対して頑なであったラーハルトも、

メルルの、誰に対しても控えめな心配りを忘れない優しさと誠実さに

心を開いていったようで、今では本当の兄妹のようだ。

人間をバカにしていたガルダンディーと、人間を憎んでいたボラホーンもそうである。

メルルの優しさに触れ、少しずつ少しずつ人間に好意的になってきていて、

今では「メルルに色目を使うとナバラ婆さんとフォルケン爺さんがおそろしい目で睨む」

と冗談めかして言うほど彼らと打ち解けていた。

次期竜騎衆達も着実に育ち、

隠れ住む「運命共同体」の人間達とも極めて良好な関係で順調である。

しかし、バランスの大本命はそうではない。

この世の何をも犠牲にしても見つけ出したい肝心のディーノは未だ見つからない。  
い。

一時はその生存すら諦めかけたが、

ナバラの占いでは「死」を暗示するものは見られないとの結果で、

バランは未だに一縷の望みを捨ててはおらず、

「ソアラの忘れ形見を、絶対に見つけ出す」

というのは、もはやバランの人生の命題である。

「それではバラン様。 偵察と物資の補給に行つてまいります」

人間と魔族の混血児である青年が、恭しく頭を下げながらバランに声をかける。

大部屋の奥……簡単な板で仕切られた仮想プライベートルーム。

バランは木製の立派な机と対になる椅子に腰掛けながら、

読んでいた本を。パタリ、と閉じる。

青年の端正な顔をチラリと見ると、

「うむ。 最近、人間どもがアンデッドの群れを破つたとの噂もある。

ここらも人間共が増えるかもしれない……気をつける、ラーハルト」

鼻下の髭も大分豊かになってきたバランがそう告げた。

「はい……、しかし魔物だけでなく人間にも警戒せねばならぬとは。

人間共は真の敵が誰かを見抜くことも出来んようですな……。

相変わらずバカな連中だ」

青年が羽織るマントに付属するフードを深く被り、皮肉気に答えた。

半魔族の証である紫蒼の肌と尖る耳を隠さなければ、

人類を守護している彼も人間からの迫害の対象となるのであった。

「では、メルルを連れて行きます」

ラーハルトがそう言つて、「メルル」とその名を一声呼ぶと、

「はい、お義兄様。支度は出来ております」とお淑やかな返事が返ってくる。

2人が揃つて出立しようとする、

「メルルに変な虫を近づけないよ、ラーハルト！」

「ラーハルト君……すまんが古書店で買ってきてもらいたい本があるんだが……」

「おいおいラーハルト、義妹だからって仲良すぎじゃねえか？ ん？」

「メルル殿はラーハルトと一緒に出かける時はいつも嬉しそうだ！ 仲が良くて大変結

構！」

「気をつけて行くのだぞ……魔族の血を引く子よ」

すかさずナバラ、フォルケン、ガルダンディー、ボラホーンらから色んな言葉が飛ん

でくる。

何故か竜水晶からも。

ラーハルトとメルルは確かに行動を共にすることは多いが、

それは、2人が若く健康で、



ラーハルトはフードで耳を隠せば肌の色をメルルからの化粧で誤魔化せば何とかならし、

メルルは正真正銘の人間であるから、兄妹なり若夫婦なりで旅人に化けやすいのだ。しかも最近ではメルルの占いや予知が精度を増してきて、

偵察で非常に重宝するようになってきた。

2人は腰袋に、変装用の化粧道具が入っているのを再確認し、

「ナバラ婆さん、心配するな……メルルは俺の義妹だ。いもうと 守ってみせるよ。

フォルケン殿、本の題名を記したメモを頂きたい。

ガルダンデー、ボラホーン……今晚の組手を楽しみに待っている。

竜水晶殿、扉の制御……いつもすまない」

と、フォルケンから紙切れを受け取りつつ同僚2人を軽く睨みつける。

「バランス様、それでは行つてまいります」

「いつてまいりますね。バランス様、おばあさま」

ラーハルトはそのまま外の湖底へ向かい、

メルルは耳栓を自分の耳に詰めながら義兄の後を追う。

そう……神殿を出るといつもそのまま着衣泳になるのだ。

慣れたとはいえ、年頃になってきているメルルは、

(この服……濡れると肌に張り付いて……体の線が見えてしまうのよね。

ちよつと……うん、かなり恥ずかしい……)

意外に素晴らしいプロポーションを義兄に晒す度、

顔を真赤にしてしまうのであった。

だが、そんなことでヘコタレていられない。

バランから、少年少女であつた頃の寝物語に一度だけラーハルトとメルルが聞かされた話。

ソアラとディーノのことを思えば……未だ見ぬ義弟のことを思えば……、

その程度、彼女にとって何てことはないのだ。

「どうした？　メルル」

無骨な義兄が足を止めた彼女に何かあつたのか、と氣遣うと、

「お義兄さま……いつか必ず、ディーノ様を……」

私達おとうとの義弟を見つけ出しましょう！」

メルルの言葉を受けたラーハルトも静かに義妹の瞳を見つめ返し、

兄妹は互いに静かに力強く頷くのだった。

## その頃の人間達&魔王の目覚め

偉大なる助平爺……大魔道士マトリフ。

世界で1，2を争う程に優れた頭脳を持つであろうこの男は、

現在完全に世捨て人になっていた。

ハドラー出現時にマトリフにヘーこらして戦いに駆り出したパプニカの貴族達。

終戦後には懇願されてパプニカ王の相談役に収まったマトリフだが、

今度はヘーこらしていた貴族達が手のひらを返して彼をいびりだした。

イジメなど屁でもなく、寧ろやり返してやったマトリフだが、

人間の……その余りにも身勝手に都合の良い身替りの速さに、

人の魂の奥底に潜む”ドロドロ”した……ヘドロのような心を感じてしまって、

それ以来人間を生理的に受け付けなくなってきた。

世界が謎のアンデッドに蝕まれようが戦争をしようが興味はなく、

滅ぶなら勝手に滅べ……

とすら思えるのは彼が100に近い老齢だから、というのもあるだろう。

そんな彼だが全ての人間が嫌いなわけではない。

共にハドラーと戦った4人の人間のことは大好きであった。

そしてそんな友の2人……………

ロカとレイラ、そしてその娘のマアムの元へ遊びに行こうと気まぐれに思い立ち、

「なんでえこりやあ……………」

久々に洞窟を出てネイル村にやって来てみれば、そこで驚愕の風景を目の当たりにしていた。

素朴ながらも美しかった村は腐毒に浸かり、

風が吹けば木々と花と洗濯物の匂いで満たされるネイル村特有のいい香りは、

目も痛くなるような腐れた土と肉の臭いに取って代わられていた。

徘徊する腐った死体やアニマルゾンビ共をメラ系とイオ系であしらうマトリフだが、

「ヒアエェ」としやがる。

腐った死体共に残った傷は……………死因は恐らく鋭利な長い刃物による斬撃。

どの死体も首や心の臓を一突きか……………ロカの剣技とは違うな。

病気でやけっぱち起こしてイカれたロカが犯人じゃないようで一安心だが、

とんでもなくやり手の剣士が相手だったのは間違いないねえ。

ロカとレイラがいるネイル村を単身……………多くて2人3人程度で攻略しちまうとは

何者だ……………?

……この足跡は新しいな。お揃いの靴を履いた複数人……兵士共だな。

こいつらは白か……連絡がないもんで調べに来たロモスの兵隊さんつてどこか。

……漂う邪気と毒は……人間のもんじゃねえ」

原型を留める腐った死体や家屋の損傷を観て当たりをつける。

ゾンビ共をよく観察すれば生前の面影をちらほら発見できて、

そこに親友の遺体が混じっていないことに、

ホツとするような……不安が増長するような複雑な心持ちであつたが、

邪気と毒が人間の手では発せられるものではないと察してからは不安しかない。

(太刀筋はどれもこれも似たもんだつた……最初の襲撃者は恐らく1人。

そして、二度目に違う誰かがこの村に来た……)

そいつは……とんでもなく邪悪で外道な野郎だ)

恐らく生き残りがいないかを確認し、毒と邪気を撒き散らした。そして……

(ロカとレイラ……マアムの死体。或いは瀕死のあいづらを持って帰つた?)

何のためだ……と沈思する。

もう一つ二つの可能性としては、

彼らが死体も残らぬ方法で殺されたか、

村を滅ぼされてしまったがロカ一家は何とか全員で逃げ延びた、ということ。

「できれば、後者がいいがね……………」

呟いたマトリフだが、その可能性は少ないと思えた。

なにせこのネイル村には口力がいたのだ。

病で臥せていた彼だが、村が襲われでもしたら真っ先に飛び出し、  
そして決して諦めずに最後まで戦うだろう。

「……………そういやロモスにはあのジジイがいたな。

<sup>ブロキーナ</sup>大将に聞いてみるか……………何か知ってるかもしねえ」

親友のジジイの住む山奥は、そういえば一度も行つたことがない…………

と思いつ出したマトリフは、ルーラじや行けねえじやねえかよ、と頬を指でかくと、

トベルーラでロモス山を上空から探すが、

2、3時間経つてもブロキーナを見つけれなかったマトリフは、

「チ……………ダンジョンに籠つて修行でもしてんのか？」

仕方ねえ。この辺りの岩肌でっかく書き置きでもするか」

と山の崖に向かってメラゾーマを連続で放ち、溶かし抉るとデカデカと文字を彫る。

“マトリフ参上！ これ見たら山の麓で酒買って待つとけ大将”

という、なんとも自己主張の強いものだった。

ちなみに……ブロキーナはそのメッセージを見たのだが、理解することはなかった。何故ならバラバラに砕け散り幾らかの文字が消失したからだ。何故砕けたのか……その理由は、

「武神流……猛虎破砕拳!!」

どごん、という轟音と共に岩盤を内側から砕き、

夕日が差すなだらかな山の斜面に飛び出してきたのはパツと見幼い少女。

おさげにした髪がよく似合う可愛らしい容姿で、

将来は間違いなく美少女になると予感させる充分な素材を持っている。

そんな彼女を、薄暗い洞窟の中から拍手して祝福する者達が3人……いや2人と1匹。

「おめでとう、ミーナ！ たった1日でトンネル開通しちゃうなんてやるわね！」

私でも最初は2日かかったのになあ〜」

「僕なんて3週間はかかりましたよ！ いやあさすがママムさんの妹分！」

さすがは僕の姉弟子たち！ くうくう美してかっこいいくう!!」

桃色の髪をした豊満な体つきの美少女と、

ミーナと呼ばれた少女以下の身長しかないチビの大ネズミ。

そして、

「こりや、ミーナ。ダメでしょ……この程度で猛虎破碎拳つかっちゃ。

おまえはもつと技の怖さを理解しなきゃいけないね。

大きな力には大きな責任が伴う。ゆめゆめ、忘れちゃいけないよミーナ。

……それに、あれぐらいパツと普通のパンチで壊さなくちゃ

アツという間に“ヒジがイガイガ病”になっちゃうよ？　ゴホゴホツ……ほら、わしみたいに」

松明を持った、黒丸メガネをかけた胡散臭い老人。

彼らこそ至高の拳聖・武神ブロキーナとその弟子達である。

わざとらしい咳をしながら、

「わしってしづい？」と大ネズミのチウに聞くその姿はトボけたものだが、

年端のいかないミーナがたった一人で、

人1人通れるトンネルを拳だけで山腹をぶち抜いて作ってしまうのだから、

それを指導しているブロキーナの実力は本物である。

開通したトンネルの内側で

漫才染みたりとりを始める老人とネズミをとりあえず放っておいたマアムは、  
疲れたであろう大切な妹分にベホイミをかけてやろうと近づくが、



「あれ？ マアムお姉ちゃん。

あの岩の破片……文字つぽくない？」

そう言われてミーナが指差す岩を見ると、そこには……

「……本当ね……文字みたいだね。えくと、なにになに……。

ト、リ……酒……買つ、て……。

トリ酒買つて？ トリつて……鳥？ なにこれ？」

無残に粉々になった岩片を並べるマアムとミーナだが、さっぱり意味が分からなかった。

どう並べ替えても「トリ酒買つて」以上に意味のある文章にはならず、

「ねー、ブロキーナおじいちゃん。これつて何だと思う？」

とミーナに尋ねられた老師も、

「……モノ好きな酒屋行商人の宣伝？」

と3人と一匹で頭を捻るのだった。

そんな事情により、マトリフとブロキーナの合流は叶わぬのであった。

リングアを囲んで1年と十月ほどが経った頃、

ロモス王とパプニカ王が自国に帰還すると言いだした。

ロモスの理由は、本国からの報せによると、自国に勇者候補の男が訪ねてきているので、

伝説のゴールデンメタルスライムを捕らえてみせると豪語する精悍な若者らしく、

王自ら未来の勇者を見分し、出迎えたいとのことだったが、

本音を言えば、疲れた部下を祖国に帰して休ませたいのだろう。

王本人も、孫までいる年齢で年甲斐もなく自ら兵を率いて出陣などして、

しかも精強なリングア相手に思わぬ長陣になって疲れきっている。

ゴールデンメタルスライムの件を伝えた伝令将校を即座に帰還させ、

本国に交代の将兵を派遣させるという。

そしてパプニカ王。

彼は祖国に残している一人娘の大事な儀式を執り行いたい、とのことで、

それには大司教テムジンと賢者バロンも欠かすことは出来ないと言い、

こちらは中々の戦巧者であったバロンの帰還も伴うからロモスよりも離脱が痛い。

両国とも、確かに一国の王が1年以上もの間、玉座を留守にするのは少々不味かろう。

それに、もともとロモスは弱兵に区分されてしまう質の兵で、しかも疲労が溜まっていて士気も低い。

これ以上はリンガイアにとって“鴨が葱を背負って来る”といった感じで、確かにロモスとパプニカは退き時であるとアバンも思う。

無理強いは出来ぬ状態だし、さてどうするか……とアバンがウンウン唸っていると、勇者殿の側にいるだけでそなたの勉強になる、

と一人ベンガーナから送り出された騎士アキームが、

「我が国の軍団が再編成され、

出陣が可能な状態と……先日我が王から連絡がございました。

ロモス、パプニカ両国が抜ける穴は、ベンガーナ軍がお埋め致します！」と提案してくれた。

ハッキリ言って、ベンガーナ軍はロモス・パプニカ連合より強い。

立ち直ってくれたのなら、これほど心強い援軍はない。

アバンとフローラは諸手を上げて喜び、オーザム王は渋い顔をしながらも承諾した。

オーザムとしてはあまり自分達以外に活躍されると、

戦後の領土分配で不利になるという勘定から、あまり強い援軍に来て欲しくはなかつ

たが、

フローラ、シナナ、パプニカ王……そして大勇者アバンに賛成されては、  
正当な理由もないのに反対も出来なかったのである。

(……ふう、オーザム王の野心を抑えるのは中々骨が折れますね。

リングイアの城壁も、生半可な魔法や闘気技ではびくともしませんし……。

パウスン將軍やノヴァ君も恐ろしく手強い。

どちらも打ち破る方法はないこともないですが巨悪が迫っていることは明らか  
……………。

できれば双方これ以上の血を流さずに、味方に引き入れたい。

むむむ！

隠遁生活を決め込んでしまっていますがマトリフか老師にご助言を仰ぎましようか  
ねえ。

もう歳だし、ゆっくりはさせてあげたいのですが……)

口力達を失った心細さと寂しさもあるだろう。

アバンは旧友の老人達に会いたい衝動に駆られるのであった。

人間達がギルドメイン北方で右往左往している一方で、

魔王軍は悠々と陣容を整えていて……

かつての魔王が魔軍司令ハドラーとして強化蘇生され目覚めた。

バーン最大のお気に入り、鬼岩城も落成まで後1年を切っており、城としての機能は既に完成していて、

ハドラーは鬼岩城の居住区画にある指揮官用の部屋の中でも

飛び切り豪華な一室を大魔王より賜った。

自室となったその大部屋の、

棘や爪と見事な金の装飾で飾られた椅子に腰掛けたハドラーは考えに耽っていた。

謁見の間にある新魔王軍のシンボルマークである

“バーンの顔”から大魔王よりの勅命を早速に受けていたのだ。

「ハドラーよ……よくぞ目覚めた。おまえの目覚めを余は長らく待っていたぞ。

早速、お前に任務を授けよう……。

余は、地上を侵略するにあたり、

邪悪の六芒星を象徴する最強不滅の6つの軍団を望んでいる。

6つの軍団とは即ち……

不死騎団・氷炎魔団・妖魔士団・百獣魔団・魔影軍団・超竜軍団、  
この6つである。

これらの内……氷炎魔団と百獣魔団の軍団長となる者が未だ見出されておらん。  
相応しき将器を持つ者を探しだし、最強の6軍団を完成させよ。

これがおまえの最初の任となる……。

軍団の詳細は、追って遣いの者を寄越す故、その者に尋ねるがいい。

期待しておるぞ、魔軍司令ハドラー……。」

ハドラーの頭の中で反芻される大魔王の指令。

(既に軍団長の4人までが決まっている……。

これは、大魔王様が直々に選ばれた実力者と見て間違いない。

………チツ、俺の息がかかっていない実力者などやり難いだけだ！)

内心で、早速愚痴をこぼす。

ハドラーの言うことも正しくはあり、

大魔王が直々に選んだ者に命令するなどやり難いことこの上ない。

だが、ハドラーの成長をやや歪んだ形で期待している大魔王バーンは、

肉体と魔力で勝るハドラーがアバンに敗れたのは精神の脆さが主原因である……

そう考えていて、敢えてハドラーの精神に揺さぶりをかけているのだ。精神的圧迫に耐えて一皮むけて欲しい……と同時に、

才気溢れる若き魔族の心が打ちのめされる様も楽しみたい。

……………それが大魔王の望み。

腕を組み、瞑目していたハドラーの耳に、

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ……魔軍司令ハドラー………バーン様の遣いである。

扉を開けられたし……………」

唸るような、笑うような……低く、おぞましい声が飛び込んできたのだった。

(何とも薄気味悪い声だ) とハドラーは思うが、

それをおくびにも出さず、

「……………入れ」

殊更強い口調で己の威厳を示し、入室を許可する。

すると、誰も触れていない扉が重々しい鉄音を軋ませながら一人でに開いていく。

開け放たれた扉の前にいた者の、邪悪な声に似つかわしい姿。

そして魔力の放出も感じられないまま扉を開けた、という事実には、

(な、なんだこの男は……薄気味悪い奴……)

そう思いながらも、やはり表情に出ぬよう抑える。

「初めまして……………と言っておこう、魔軍司令殿。

我が名は冥王ゴルゴナ……………。

妖魔士団を預かり、おまえの傘下に入る者だ……………以後お見知り置きを……………ぐぶぐぶ  
ぶ」

黒の装束で全身を隙間なく覆った背虫の男の発言に、

「そ、そうか。妖魔士団長はおまえか……………期待しているぞ。

では早速だが我が軍の特徴、他の軍団長などを教えてもらおう」

とりあえず社交辞令を述べるハドラー。

魔王時代ならばいざ知らず、今は偉大な魔界の神のもと部下達をまとめねばならぬ

……………

と理解しているため、そこまで唯我独尊に振る舞うつもりはなかった。

どれだけ気味が悪かろうと、どれだけ気に入らなかろうと、

大魔王が定めた将ならば上手く付き合えるよう努力はするつもりハドラーである。

「まずは不死騎団……………アンデッド系モンスターを集めた軍団である。

数としぶとさ、そして『疫』を引き寄せるその性質……………

人間共を真綿で絞め殺すように屠るのに最適だ……………ぐぶぐぶぐぶ。

魔剣戦士ヒュンケルが不死騎団長を務める」



「ヒュンケル……？ どこかで聞いた名だ」

「伝説的な魔界の剣豪の名であり……」

おまえのかつての部下、地獄の騎士バルトスが拾った人間の子の名前でもある」  
どこか引つかかったその名。

ゴルゴナがあつさりと解答を示すと、

「あ、あいつか！ まさかバルトスの子が生きていたとは……！」

ぬうう………バルトスの子を、我が部下に迎えようとはな。

フン………父親のように仕事を投げ出す奴でないことを祈るか」

腕を組み直し、やや前のめりになった上半身を再び背もたれに乱暴にもたれる。

ゴルゴナは僅かに肩を揺らして低くくぐもった声で笑いを返すのみで、

「続けるぞ」との一言でさっさと次へ進む。

「氷炎魔団……フレイムやブリザード、溶岩魔人、氷河魔人を代表とする

炎、氷属性のモンスター………岩石生命体などで構成されている。

軍団長は未選出………

魔軍司令殿に決めてもらおう軍団長の一人はここに属することとなる」

ふうむ、と顎をさすりながら考えこむハドラー。

なにやら腹案があるらしい。

「次いで、魔影軍団。

大魔王様から頂いた魔気を生命とするモンスター達の軍団……。

さまよう鎧、スモーク、怪しい影、ギズモなどが主な構成員だ。

魔影参謀ミストバークが率いる……ぐぶぶぶ」

ゴルゴナの含むような笑いと、『ミストバーク』という名前がやや気になり、

「ゴルゴナよ。ミストバークとはどのような者だ。

バーク様が禁呪法で生み出したモンスターか？」

部下となり大魔王より預けられた軍団を任すのだ。

魔軍司令として、その為人は知<sup>ひととなり</sup>っておかねばならない。

「その正体は謎である……。また、その詮索も無用。

だが、その実力と任務に対する忠実さは確かだ……ぐぶぶぶぶぶ。

非常に寡黙な男で、一度口を閉ざせば数十年は声を聞けぬ。

参謀と銘打っているが、ミストバークの意見は聞けぬと思っておくがいい」

なんだそれは、と小さな声が漏れてしまう。

それでなぜ参謀なのだと、頭の中から疑問符がとれぬハドラーであったが、

そんなハドラーを置いて冥王は話を進める。

「……超竜軍団……最強のモンスター、ドラゴン族が属する。

雷竜ポリクスがその長となり、ドラゴンをまとめる」

さりとて言うてのけたゴルゴナに「ま、待て！」と魔軍司令が待ったをかけた。  
「ポリクスと言ったのか？」

雷竜ポリクスとは……………あの“真竜の鬨い”のポリクスか!？」

「そうだ」と軽く返事をする冥王に、

「そんな馬鹿な！　ポ、ポリクスはもう何百年も前に死んだ伝説上の魔竜だ！  
なぜそんな化け物が!!」

「大魔王バーン様の超魔力に不可能はない……………ということだ。

ハドラーよ……………おまえも死の淵から救われた身。

理解できるであろう？」

かく言うゴルゴナも、死という底なしの深淵から掬い上げられた身である。  
大魔王の桁違いの超魔力と、その魔力を存分に活かす魔力操作の技術は、  
天の神々の“奇跡”にも劣らぬ事象を人為的に起こすことを可能とする。  
もつとも、ポリクス復活に関しては、

冥府よりの魂の引き寄せと肉体の不完全な再生成という

8割方の作業を冥王ゴルゴナが行っていたのだが。

「まさか……………あのポリクスを甦らせ……………俺の部下としてあてがうとは……………」

それは背筋も寒くなる恐ろしい事実である、と同時に、  
堪らなく甘美な響きもするように、ハドラーには思えた。

(伝説の雷竜を、俺の部下に！ ボリクスを俺の手足として使えるのか！)

という喜びと、

(だが、ということは……)

俺自身にボリクス以上の器量と実力を求めておいでなのか……バーン様は)  
という途方も無いプレッシャー。

伝説に謳われる魔界の英雄の一人を従えねばならぬ、  
という現実にはハドラーは戦慄した。

「そして妖魔士団。

悪魔の目玉、メドーサボール、悪魔神官、エビルマーヅらが我の軍団に所属する。  
魔法に優れるが肉体は脆弱なモンスターが多い。

前線で自ら出張るよりは、他の軍団を支援することが妖魔士団の主任務となろう。  
軍団長はこのゴルゴナである………グブブブ」

ハドラーの頬に、一筋の冷や汗が伝う。

得体の知れない、底知れぬ不気味さを外見以上に気配で醸し出しているゴルゴナは、  
どう見ても己の部下に収まる器には思えなかった。

「最後に、百獣魔団………獣系のモンスター、

そして他の軍団に属さぬモンスター達は全て百獣魔団に分類される。

スライム系もこの所属だ。

軍団長は、未だ定まっておらぬ………。

百獣魔団と氷炎魔団………2人の軍団長を見出すのだ」

うむ、と短く返答し、頷くハドラー。

ゴルゴナは彼に、

「鬼岩城の完成の暁には、6大軍団長を集結させ落成式を行う予定である……。

期限はおよそ1年………。

今日より我はおまえの部下だ……魔軍司令殿の命あらば、可能な限り力を貸す故、

選考に詰まるのなら悪魔の目玉に語りかけよ………馳せ参じよう………ぐぶぶぶぶ」

それだけ言うとはドラーの目の前でフツ、と音もなく消える。

1人になった部屋で、ハドラーは考えれば考える程、

呼吸が苦しくなるほどの精神的圧迫を己が臓腑に感じるのであった。

自分に反逆したバルトスの子、ヒュンケル。

バーンの名を冠していることから、大魔王のお気に入りなのであろうミストバーン。

魔界の伝説に残る知恵ある竜、雷竜ポリクス。

大魔王その人の言葉を己よりも多く知る冥王ゴルゴナ。

この者達を率いることが既に決まってしまうているのだ。

残り2人の軍団長は、

(絶対に俺に忠実な、心許せる奴にせねば……！)

そう心に固く誓う魔軍司令であった。

## 真の不死と獣王と氷炎の誕生

魔軍司令が目覚め、2将軍を探し始めた頃、

ゴルゴナとミストバーンは魔界の第7宮へとやってきていた。

その研究機関の一室に2人は用がある。

幾重もの扉を通って行くと、

そこにはカプセルに満たされた蘇生液に浮かぶ3人の人間がおり、

中央のガラスの筒の中には銀髪の青年がいた。

彼こそが不死騎団長への就任が決まっている男……魔剣戦士ヒュンケルだ。

彼のカプセル前では、

端末を操作し様々な計器を見比べる小柄な老魔族と

大きな水晶に浮かぶ棒グラフ、円グラフの数値を読み上げる青年魔族がいて、

その2人へと、

「ザボエラ……ザムザ……ヒュンケルは未だ目覚めぬのか」

独特なその声で話しかける冥王。 ややビクツとしたザボエラ親子だったが、

「おお……冥王様！ 父上、冥王様とミストバーン殿がお越しです」

「これはゴルゴナ様……………それにミストバーン殿も、よういらっしやいました。キイクヒツヒツヒツヒツ」。

まだ目覚めてはおりませんが、ヒュンケルの強化蘇生は順調ですぞ。

蘇生自体は魔界樹の葉で一発でしたわい。

イマジン細胞を馴染ませる必要が無いのでしたら

すぐにでも目覚めることが可能ですじゃ」

少々慣れたのか、振り返るとすぐに

喜々として己の仕事の順調つづりをアピールするのであった。

「ぐんぐんぐんぐん……………」

人間のボディがイマジン細胞とこうも相性がいいとはな……………。

もつとも……………適合する才能を持つ者は数十万に1人いるかどうかだが……………。」

ゴルゴナもまた、探求者としての面が喜色に染まり、

「その才を持つ人間は魔族の肉体より、応用力、発展性、柔軟性に勝る。

ヒュンケルがそうであったとは僥倖である……………。

人間故、さすがに超魔への適合性は無かったが、

不死人間のプロトタイプとなるのは名誉なことぞ……………。

ミストバーン……………さすがおまえの弟子だな……………グブグブグブ」



さも愉快そうに冥王が笑う。

ミストバーンは沈黙でそれを受け止めるが、

彼は、本来ならば己のスペアとなるかもしれないぬ

ヒュンケルを実験台になどしたくはなかったのだ。

だが、儀式の最終局面……ネイル村襲撃の最後に予想外のことが起きた。

彼が魔法の効かぬ鎧で全身を覆っていたのが仇となり、

鎧は、兜側面から流し込まれたメガンテの効果を内側へと閉じ込めてしまい、

本来なら外へ逃げていく破壊エネルギーが残留し続け、ヒュンケルへと降り注ぎ続けたのだ。

肉体こそそこまで損壊しなかったのはさすがヒュンケルであったが、死は免れなかった。

いや、ゴルゴナが回収した時には一応生きてはいたが、

心臓は惰性で動いているような状態……瀕死と仮死のさらに上に行くような状態で、

もはや生者とはいえぬ有様であった。

バーンから命令が下り、ヒュンケルの治療を試みたゴルゴナであったが、

その過程で彼のイマジン細胞への適性が認められ、

それを大魔王へと報告すると、

「ヒュンケルが不老不死になる可能性、か……………ふむ、実験台には丁度良からう。

どのみち“壊れかけ”だ。許可する、ゴルゴナ」

との言葉を貰い、現在に至る。

ミストバーンの暗黒闘気での蘇生や、ゴルゴナのアンデッド化での蘇生も可能であるし、

バーンは将来を見据え「ダメで元々……………」とヒュンケルの不死化を命じ、

失敗したとしてもミストバーンには気の毒だが、

所詮、最優秀のスペアが失われるだけのこと。代えはきく。

これが成功すれば、いずれは大魔王自身の不死化にも繋がるかもしれず、

そちらの方が重要なのは言うまでもない。

「キイクヒツヒツヒツヒツ！ いやまったく！

このヒュンケルとか申す人間は実に優秀な肉体を持つておりますなあ。

既に彼の細胞の全体の7割までが、分裂限界を突破いたしました。

不老不死人間の完成は間近ですじゃあ~~~~!!」

ニンマリ笑顔で興奮するザボエラの後ろで、ザムザもまた嬉しそうである。

喜ぶゴルゴナ、ザボエラ、ザムザの3人を見ながら、

(……………科学者・研究者という人種は、どうも好きになれん……………)

ゴルゴナとは何故か一定の友誼があるが……、と己でも不思議がりながら、自分のスペアをモルモット扱いするザボエラを軽く睨む。

(だが、ゴルゴナが評価する程の頭脳……需要はある。

……大魔王さまのお言葉は全てに優先する……。

バーン様が望まれたのならばヒュンケルをも生け贄に捧げよう。

……それに、もし……こやつが本当に不老不死となれるのならば、

私は永劫、バーン様にお仕えすることが出来ると確約されるのだ。

(これ以上の幸福はない……)

透明のガラス容器に浮かぶ魔剣戦士を凝視する。

ミストバーンは彼の目覚めを一日千秋の思いで待つのであった。

魔軍司令ハドラーが新たな軍団長に求めた絶対条件。

それは忠誠心である。

ゴルゴナは集めていた地上の資料を漁り、

それを元に自分自身の目で悪魔の目玉を齧り付くように見て探し、  
そしてとうとう彼を見つけた。

ハドラーが求める条件にドンピシャな男……その名を“魔の森の獣王・クロコダイ  
ン”。

ハドラーは自らロモスの洞穴へと足を伸ばし彼のもとを訪れ、

「邪魔をするぞ、クロコダイン」

「むー！ 貴様……何者だ！ この洞窟を俺の寢座と知ってやってくるとは……！」  
堂々とその住処に足を踏み入れた。

「俺の名は魔軍司令ハドラー。大魔王様に仕える最高幹部である！」

クロコダイン……おまえの強さ……武人としての心意気。  
気に入ったぞ……俺の片腕にもなれる逸材だ！

俺の部下になれ！

大魔王バーン様の名のもとに、地上から愚かな人間を一掃しようではないか！

ハドラーが覇気を漲らせ誘い文句を力強く述べると、

「ハドラー……？ まさか、かつて魔王であった……？」

戦斧を構えつつクロコダインが驚嘆する。

まさか前大戦時に活躍した魔王本人が来るとは思っておらず、

「そうだ……俺がそのハドラーだ！」

という肯定を聞くと、僅かに冷や汗をかきながら「なんと……」と小さく呟いた。しばしハドラーを値踏みするような視線を投げかけていたクロコダイナだったが、無骨な斧を徐々に下ろしながら

「なるほど、その身に宿る魔力……闘気……並々ならぬものがある……！」

俺もひ弱で身勝手な人間共は好かん。

魔王軍に付くのは構わんが、一つ聞きたいことがある」

それでも僅かながら殺気を放ち続けている。

（腕試しでもしようというのか？）とハドラーは思ったが、そういう雰囲気でもない。

「……構わん。言ってみるがいい」

万が一を思い、黒いローブの下で何時でもヘルズスクローを展開できるような気を漲らせる。

「しからば……この魔の森の程近くにネイル村という人間の集落があった。

そこを滅ぼした者がいるらしくてな……だが、それはまだいい……取るに足らんことだ。

しかし！

よりにもよってその方法が毒をばら撒く……などという大それたもののようにでな。

毒が風にのって魔の森全体に影響を与え始めている……。

俺の部下のモンスターにも被害が出ているのだ！

俺のテリトリーの側で、この俺の顔に泥を塗るようなことを……！

あれ程に強力な毒霧と毒沼……：只の人間に出来る筈がない！」

斧を握る手の力が、少しずつ大きくなり……、

僅かだった殺気が再び膨れ上がる気配が見え始め、

「さあ答えろ！ 毒を撒いたのは貴様ら魔王軍か！」

返答次第では、俺は貴様を許しはせんぞ！」

鋭く力強い眼光がハドラーを射抜く。

ハドラーの焦燥が大きくなり始め、それが表に出ぬよう必死に抑えるが、

(まさか……：ネイル村は、確か……：ゴルゴナの資料に載っていた、

俺が目覚める前に行われたヒュンケルの儀式に使われた地……：！

もしや……：だ、だが！ 俺は毒のことなど聞いておらんぞ！

だ、第一俺が命じたわけでもない！ 俺は関与せぬことではないか……：！

く、くそ……：何たることだ！ ヒュンケルめ！ あいつのせいだ!!)

洞察力に人一倍優れていたかつてのライバル……、

アバンならばハドラーの目が泳いでいるのを瞬時に看破しただろう。

動揺を悟られぬよう隠しつつ、

クロコダインが納得出来るだけの理由をでっち上げなければならなかった。

「ふ、ふはは……はははははははは！」

な、何を言うかと思えば……そのようなことか。

いいかクロコダイン！

我ら魔王軍はそのようなことはせん！

何故ならば必要が無いからだ。脆弱な人間を殺すのに毒など用いるわけがない。

殴り殺すほうが余程早く、確実よ！」

咄嗟にここまで言えるハドラーは優秀である。

疑っていたクロコダインも「確かに……」と表情で語っていて、

「クロコダインよ……」

人間共がここ10年ばかり、全世界を巻き込み

戦争に明け暮れているのは知っているだろう。

奴らはその間にあれ程の毒を作り出すことも出来るようになったようだな……。

戦争は文明の母とは良く言ったものよ。

ネイル村は、ロモス王国に楯突いた為に毒を撒かれたと調べが付いている。

戦争のために税と男手を奪われるのを嫌がった村への見せしめというわけだ！

脆弱で愚昧な人間だからこそ毒などに頼ったのだ」

急場しのぎの嘘にしては上出来であろう。

ハドラーは自分で自分の頭の回転の速さを褒めたい気分であった。

「むむ………ハドラー殿のおっしゃること、一々ごもつとも！

疑って申し訳ない……！」

そうか………人間があれ程強力な毒を、な。

吹けば飛ぶような脆弱さ………そして恥知らずな小細工に長ける人間らしいわ！

よし！ 俺の腹は決まったぞ。

ハドラー殿のもと、大魔王バーン様の為に戦うことを誓う！」

こうして、なんとかクロコダインを引き入れるのに成功したハドラーであった。

百獣魔団の長に相応しい男は手に入れた。

これで安心して兜の緒を緩めるわけにはいかないが、

氷炎魔団軍団長については、もはや手に入ったも同然である。

何故なら、ハドラーは禁呪法により

その地位に相応しき将を作り出すことを決めていたからだ。

（氷炎将軍………といったところだな。

炎と氷に特化した軍団ならば、その両属性に長けていなければ話になるまい）



という至極単純な発想と、

そして禁呪法によって生み出された生命体は

作成者に逆らえないという法則が決め手となった。

かき集めた溶岩魔人、氷河魔人の岩石……

フレイム、ブリザードの炎熱と凍結のエネルギー。

それらに自身のありつたけの魔力を注ぐと、

見る見るうちにそれらが人型となり、

左半身がマグマの岩石、右半身が凍てつく氷石の岩石人間が完成し、

「フフフフ………いいぞ。 予想よりも良い手応えだ……い！」

おまえの名はフレイザードとしよう！ さあ、目覚めるのだ、フレイザード!!」

ハドラーが叫ぶと、閉じられていた鋭い眼が勢い良く開かれて、

フレイザードの体中から灼熱の炎と凍てつく氷が噴き上がる。

“ 予想よりも良い手応え ” と評したハドラーの更に予想を上回るパワーの奔流に、

「うおお!!」と思わず後ずさってしまふ。

フレイザードの創造を行っていたハドラーの自室が、あつという間に燃え、そして凍る。

「い、いかん！ フレイザード！ さっさと意識を覚醒せんか！」

大魔王様より授かった俺の部屋を焼くとは何たる奴だ！

鬼岩城を火事にしたいのか!!」

落成間近の鬼岩城を、自分が生み出した部下の不始末で全焼させるなど、

冗談でも想像したくない大失態だ。

これ以上パワーを垂れ流すようなら「は、破壊せねば!」という結論に至るが、

「クククク……クカカカカカ! クワワーハッハッハッハッ!!」

大口を開けてフレイザードが笑い出すと、

炎と氷の嵐はピタリと止むのだった。

「おいおいハドラー様。 生みたての息子をいきなり破壊しようたあ物騒だな。

安心してくれよ……。テメーの炎と氷くらいは自在に操れるさ」

言いながら、焼ける調度品に“氷の息”を……

凍りついた扉に“火炎の息”を吹き付けて鎮火と解凍をしてやると、

それを見ていたハドラーは、

「ふ、ふふ……フハハハハハ。 知性、能力、どちらも申し分ない!

上出来だ……禁呪法は成功した!

氷炎將軍フレイザードの誕生だ! ここに6大將軍は揃った……!」

歓喜に打ち震えた。

過言ではあろうが、かつて生み出した最高傑作の一つ、バルトスと……生まれ<sup>レベル</sup>たてのフレイザードは既に並んでいるように、ハドラーには思えた。

それ程のポテンシャルを秘めていると予感させる出来栄で、

その事實は、作成者であるハドラー自身の大幅なレベルアップを物語るものでもあるのだ。

「クウクッククック………精々楽しませてやるぜ？　ハドラー様よお」

フレイザードは、愉悦を覚え笑うハドラーに獰猛に笑い返すのだった。

今日という日を、大魔王は柄にもなく楽しみにしていた。

これ程の喜びは何時以来だろうか。

かつて、自分の肉体を分け凍れる時の秘法を用いた不老不死を實現した時……。

かつて、秘法の中に封じた肉体を安心して預けることが出来る忠臣を得た時……。

かつて、魔界で自分とヴェルザーに続く第3の実力者と言われた魔神を打ち破った時

……。

それらには少々劣るだろうが、

それにしても全知全能に近い能力と永すぎる人生を持つバーンが

これ程に嬉しがっているのは珍しい。

今日この日、鬼岩城は完成する。

鬼岩城の玉座の間に創設された6大軍団の長が集い、

そして城外の大広場には凄まじい数のモンスターがひしめき合い、

落成式の始まりを今か今かと待ち焦がれていた。

城外の熱気とざわめきが、玉座の間の魔軍司令と6将達にも伝搬する。

「バーン様のお言葉を拝聴するまでには、まだ少し時間があるな。

6将が一堂に会するのは初めてのこと……。

お互い顔や名前ぐらいは既に知っているだろうが……丁度良い、皆に挨拶をしておこ  
う。

俺の名はハドラー。大魔王様より魔軍司令の座を与えられた。

俺の仕事はおまえ達を指揮し、逆らう人間共を一人残らず始末し地上を支配することだ！

よいな！ 我ら魔王軍に負けは許されん！ 全員その心積りでおれ！」

ハドラーが一同を見渡すと、

それぞれが頷いてみせて一応の服従の姿勢を見せるが、

「ふん………魔軍司令殿に言われずともその程度心得ておるわ。

あなたこそ………精々、無様な指揮を見せぬよう気をつけた方が良いでしょうな。

下がいくら強かろうと、

それを指揮する者が無能であつたら勝てる戦も勝てんのだからな」

全身鎧で身を包み禍々しき魔剣を背負う青年が、

尊敬の欠片も見せぬ反抗的な態度で、各将達の面前で堂々と魔軍司令を侮つてみせる。

「よさぬかヒュンケル。ハドラー殿に無礼であろう！」

ハドラー殿は十数年には地上制覇まで後一步という所まで独力で来た御方だぞ。

その指揮つぷりに間違いないなどあろう筈がない」

青年……ヒュンケルの無礼を咎めたのは巨漢のワニ獣人。

クロコダインは自分を見出してくれたハドラーへの忠義故に同僚をたしなめるが、  
「フ…………その地上制覇が挫折したからこそ、

指揮能力に問題があるのではないかと言っているのだ。

そもそも魔軍司令殿がアバンなんぞに負けていなければ…………、

人間風情に我が物顔で地上を闊歩されることもなかったのだ」

外の熱気に充てられているのか、普段は水面下に閉ざしていたハドラーへの憎しみ  
…………

“ハドラーが弱く、殺されたせいで彼から生み出されたバルトスは死んだ”という捻  
れた怒りが

強く表層に出てきてしまっているようだった。

ヒュンケルは知る由もないが、

バルトスの死の事実とは異なるが、ハドラーが原因であるのは間違いない。

クロコダインがなおもヒュンケルを宥めようと口を開く…………よりも速く喋りだした  
者がいた。

「ククククク…………だがよオ…………

ハドラー様が負けた原因の1つは、

五体満足なアバンの野郎と戦うハメになったからじゃねえのか。

ハドラー様が殺られちゃったのも……、

どつかの誰かさんがテメーの仕事もろくに遂行出来なかつたからじゃねえのかい？」

炎の左半身と氷の右半身を持つ怪物、氷炎將軍フレイザードである。

生みの親であるハドラーの残酷さに加え、炎のような凶暴性と氷のような冷酷さを持つ。

そのフレイザードの言葉に、

「何だと……？」

不死騎団長の声に冷たさが生まれる。

「ハドラーの間」へ続く地獄門を、

たかだか剣の勝負で負けたくらいで降伏して通すなんざよオ！

腑抜けもいとこだぜ！

俺だったら嘯み付いてでもアバンの指の一本でも食い千切ってやるがね……。

根性ねえよな！ ギヤハハハハハハ!!」

ヒュンケルに見せつけるようにケタケタと獰猛な高笑いをし続けると、

次の瞬間には魔剣戦士が右腕を掲げその掌を開き、

「ネクロス!!」

冗談では済みそうにない殺気を放ちながら背の魔剣を召還した。

さすがにすぐには斬りかからなかったものの、

「デメエ……やろうつてのか」と氷炎將軍までも殺気を放ち始めて、

大魔王バーンへの6大將軍、初お披露目でこの有様はあまりにも不味過ぎる。

そう判断したのかミストバーンがヒュンケルを、

ハドラーがフレイザードをそれぞれ抑えこむ。

「うぐ……！ と、鬨魔傀儡掌……か！」

ヒュンケルの両腕が強制的に下ろされる。

ミストバーンに勝るとも劣らぬ暗黒鬨魔の使い手であるヒュンケルならば、

無理をすれば傀儡掌を破れなくもない……だが、

さすがに身内同士でそこまでして殺しあうわけにもいくまい……。

そう考えるだけの冷静さは彼には残っていて、大人しくミストバーンの傀儡掌に従う。

フレイザードも、

「そこまでにしておけ、フレイザード。大魔王様が直に御出でになるのだ。

つまらぬことで目くじらを立てることもあるまい」

内心ではフレイザードの暴言に溜飲を下げていたハドラーにたしなめられ、

小さく舌打ちしながらも引き下がる。



生みの親には一応忠実であった。

それら一連の醜態を見ていたドラゴンのビジョンが、

「フフ……ハハハハハ！ 中々面白い見世物だったな。

くくくくく……滑稽、滑稽……」

これはたまらぬ、と吹き出すように笑う。

ポリクスは、その巨体故に玉座の間の門を通り抜けることが出来ない。

そのため、自身の胸像を投影したものででの出席で、

彼自身は鬼岩城

ライトシヨルダー

右肩の間”の可動甲板の半数を廃止して改造した

彼専用の間でくつろいでいる。

これは余談であるが……ポリクスの巨体を聞いて、

ムー人達は仕様変更は避けられぬ、と察して泣く泣く徹夜をした。

突然の改造を押し付けられたのはトピアポとツークーマンであったらしい。

クロコダインが他の将を見やって、

(……初日から何たる有様だ。このようにいがみ合っているのは、

いかに強大な力を持つともも綻びが生じるぞ……いかな)

溜息を付く。

と、その時……、

「一同、静まるがいい……………大魔王様がお見えになられる……………ぐふふふ」

騒動に「我関せず」でいた冥王ゴルゴナが口を開いた。

本来ならミストバーンの役目だと冥王も思っているが、

彼は喋るのを嫌うためにゴルゴナが代弁する機会が多いのだ。

急ぎハドラーが先頭に立ち、

6将がその後ろに横一列に整列する。

しばしの静寂が謁見の間を包み、やがて玉座後方…………

大六芒星中央のバーンのエンブレムの瞳が光りだすのを確認したハドラーが、

「偉大なる大魔王バーン様……………今ここに邪悪の六芒星を司る最強の精鋭達が揃いました。」

この鬼岩城を拠点とし、再び世界を暗黒に染めバーン様に献上する所存にございます  
！」

6軍団の結成を高らかに宣言すると、エンブレムの眼光がより強く輝く。

「うむ……………見事だハドラー。実に頼もしい顔ぶれ……………」

余は大変満足しておる……………」

「ハハハハッ」

恭しく頭を下げるハドラーは、

(無事、任務を成し遂げた……) という安堵に包まれたが、  
「では6団長の誕生を祝して余が特別に褒美をとらせよう……」

思いがけぬことを大魔王が言い出すのであった。

ハドラーは、

「……褒美……?」

思いがけぬ大魔王の言にやや驚くが、心の中は

(フッフッフ…… これで魔軍司令としての面目は立つな……)

ヒュンケルの青二才めが……俺に対するバーン様の御信頼を見たか!

優越感で満たされ始めていた。

しかし、突如……ハドラーの後方間近で豪炎が立ち上り、

轟々とした灼熱の柱が渦巻きだしたのであった。

そして、炎の渦の中にはバーンのエンブレムが刻まれたメダルが揺蕩い、

「ウウツ!」

「(っ……これは……!?)」

クロコダインが驚嘆し、

ビジョン越しに炎の凄まじさを解したポリクスも驚きの声をあげる。

「これは『暴魔のメダル』……いわばこの余への最大の忠誠心の証だ。

さあ、我にと思わん者は手にとるが良い」

自分に与えられるとばかり思っていたハドラーの当ては完全に外れてしまい、  
（く、くそ……俺は軍団長と同列扱いか……！）と密かに憤慨するやら赤面するやらであった。

これは大魔王の“悪戯”に近い催し物で、  
バーンとしては、

自分の最大の忠臣・ミストバーンと、最高の功臣・ゴルゴナの反応を楽しみ、

そのついでに皆の反応を見て楽しめればそれで良く、

そしてポリクスが見せたしかめっ面は早速に面白いものだった……と大魔王はほくそ笑む。

雷竜はバーンに対する忠誠心を見せよう、などとは思わないだろうが……、

プライドの高い彼のことだ。

格下としか思っていない他の将（2名除く）に遅れを取るの是我慢ならぬだろう。

投影したビジョンでしかない彼に、メダルを挿むことなど出来ないのだから。

ミストバーンはためらった。

自分が、主人から預かっている肉体は決して傷が付かぬと理解しているが、

それでも万が一を思ってしまう腕を伸ばすのが遅れた。

肉体に施された凍れる時の秘法を超えて、

傷付けられる可能性を持つ者はこの世でたった一人……

そうミストバーンは思っている。

それは当然、彼の主である大魔王自身で、バーンの召喚したこの業炎ならば、ひよつとしたら“この肉体”を焼いてしまうのでは……と考えてしまったのだ。

(バーン様から与えられた試練……)

しかし、バーン様より預けられたこの御体を、その試練で傷付けるのは……

や、やはり許されぬ……どうすれば良いのだ……!!)

生真面目な彼がそう思ってしまうのも無理はない。

そしてゴルゴナは、というと……

(ぬう……!! 我の仙術でもビックともせぬのか!?)

驚愕していた。

バカ正直に腕を突っ込む気などさらさら無かった冥王は、

小さな島すら自在に空中を飛ばす己の念動力でメダルを搔つ攫おうとしたのだが、

やはり大魔王バーンは一枚上手で、

しつかりと自分の部下の性分を見抜き、その異能への対策をされていて、

「欲しければ自らの腕で取れ」ということらしかった。

(むう……し、しかし……この凄まじい炎の中では……!)

ハドラーが、

(だ……だが、なんとしてもこの場でバーン様への忠誠心をお見せせねば!)

クロコダインが、

(ええい……ま……ままよ!!)

ヒュンケルが僅かに鼻白み、

皆が意を決し一斉にその手を伸ばした、その時。

「「ううっ?!」」

暴魔のメダルは、紅く煮えたぎる赤炎の掌の中であつた。

「クツ……クツクツクツ……!!」

氷炎将軍が、氷の半身の大半を溶かしながらも炎の腕で栄光をもぎ取っていた。

「……見事なり、フレイザード!」

座興に過ぎぬが、予想外の者がメダルを手にしたことで大魔王も素直に称賛する。

ハドラーが作り上げてから1年弱の未成熟なモンスターであるフレイザードの、

自分の身すら安々と危険に晒すその果断さに……

その場の全員が思い思いに驚嘆し羨望し……或いは妬みの眼差しを送った。

「よもや生まれて1年足らずのお主が暴魔のメダルを手にするとは……余も驚きを隠せ

ぬ。

素晴らしいぞ、フレイザード。選りすぐられた諸將を出し抜くとはな……。

これからも期待しておるぞ………」

「お、おお！ 俺の体が一瞬で元通りに！」

あ、ありがとうございますバーン様！ 必ずやご期待に伝えてみせます!!」

バーンが、シンボル越しに魔力を送り手ずから回復してやる。

“お褒めの言葉”といいその回復といい、破格の労いであった。

フレイザードの心に、

（奴らの驚く顔が……！ 皆の羨望が俺の心を満たす！ 俺を見ろ……俺を認めろ!!

もつとだ……！ 俺はもつと“これ”が欲しい！ 俺が求めているのは“これ”な

のだ!!）

かつてない程の充足感が広がり、浸透していく。

「クククククク……ッ！ カーツカツカツカツカツカツ!!」

高々と掲げられたメダルが、燃え上がるフレイザードの炎に照らされ怪しく光つてい

た。

## 恐怖!機動鬼岩城

「パプニカでクーデター未遂?!」

「ええ……なんでもバロンさんとテムジンさんが、

パプニカ王の一人娘、レオナ姫を儀式にかこつけ暗殺しようとしたそうです。

魔王の遺産……『キラーマシーン』まで持ちだしたそうですよ」

リンガイア王都にほど近い連合軍の陣幕。

ベンガーナの鎧を着た兵士達が戦車に砲弾を積む様を横目で眺めながら、

弟子のポップに変事を説明してやるアバン。

アバンが受け取った書簡にはパプニカ王家の紋章が刻まれており、

それが信頼性の高い情報であることを証明している。

何度かバロンらと顔を合わせたことのあるポップは、

「へえ、確かにちよつと人相悪かったし……やつぱ人間、顔に出るんすねえ」

うんうんと首を縦に振りながら何やら一人納得するが、

それを見たアバンは、

「ポップう〜? そのような曖昧な要素で人を判断しちゃいけません……、



つて確か先週の座学の授業でも教えましたがね……？

見た目だけでの判断では思わぬ落とし穴にハマりかねません。

モシャスの実演もしてみせてあげたでしょう？」

メガネをキラリと光らせて、弟子へ口頭注意。

ポップが「あんれえ、そ、そうでしたっけ？　へへ」と

口笛を吹きながら素知らぬふりをして誤魔化す。

困った子だな……と心で溜息をつきつつも、アバンのポップを見る目はどこまでも優しく、

出来ない子ほど可愛い、といったところだろうか。

「さて、本題はこれからです。

パプニカからの書簡によると、レオナ姫の推挙で

是非とも私に家庭教師を任せたい逸材を見つけた……とのこと。

とゆーわけで……早速荷物をまとめますよポップ」

両手でほれほれ、と急かすアバンに

「ええ？　今からパプニカくんだけまで行くんですか先生？！

アバン先生がここ離れちゃ色々とまずいんじゃない？」

フローラ様も黙っちゃいませんよ、と心配事を提起する。

カール王国のフローラ王女とアバンがただの君臣の間柄でないことは、他人の恋路に敏感なポップにはとくにお見通しであった。

というより、アバンとフローラの仲は公然の秘密……、

国際的公認の仲という感じで、

「なんとまだ結婚していなかったのか、それはいかん。早く責任をとりなさい」といった認知である。

当人同士はきちんと公私を分けているようだが、

これだけ長期にわたって共に政治やら戦争やらでがつちりタッグを組んで行動していれば、

周りも（もしかして……？）と勘ぐる空気を感じ取れたのは一度や二度ではないだろうし、

なにより周囲の者の多くが二人がさっさとくつついてくれることを願っている。

ハドラーの乱からこっち、地上世界は乱続きである。

カール王国唯一の正統王位継承者であるフローラが、

20代後半に入っただけのお独り身であるのはカール王国にとって冗談では済まない。

王国を揺るがす一大事になりかねないのである。

フローラの想い人がアバンであるというなら、昔からの誼もあるのだし

大勇者アバンはさっさと観念すべきだ。

そんな視線を最近ヒシヒシ感じるアバンなのであった。

“ハドラーを打倒した勇者と結婚しその力を一国家の為に専有した”と、

国際感情の逆撫でを憂慮していたが故に

フローラと添い遂げることを半ば諦めていたアバンだったが、

そんな配慮も魔王を倒せば

人類同士の摩擦にさえ気をつければ平和になる……と信じていたからで、

現状においてはフローラとアバンの婚姻は自他ともに望むところで、Xデーは近いように思える。

だが今は、

「大丈夫ですよ。フローラ王女にはちゃんと事情を説明しましたし……、

不幸中の幸いにも今は戦況は膠着状態。

ダイ君の修行が長引くようなら彼を連れてまたここに戻るつもりです。

もちろんダイ君と親御さんが望めば、ですが」

アバンにそんな暇がないのであった。

明らかに色恋話に持って行こうとしていた弟子の額に

「ていつ」とデコピンしながら言ったアバンに、

「ダイい〜? なぁーんだ男か〜!

ちえつ、女の子なら楽しい修行生活になると思ったのになぁ」

師の発言から男性名であろうと当たりをつけたポップが落胆する。

そんな弟子に、

「ポップう? さつきも言ったでしょ。

人を一つの側面だけで判断してはいけませんよ。

ダイ君が男の子だなんて、いつ私が言いました?」

と言つてやると

「え、ええ!?! お、女の子なんですかつ?!」

あからさまに喜色を浮かべてアバンに飛びついてきた。

「男の子です」

すつてーん、とその瞬間ポップががに股を綺麗に天へ向けてすつ転ぶ。

すぐにガバツと起き上がり、

「ひどいっすよ先生! 一瞬期待しちゃったじゃないっすか!」

やけに真剣な顔で抗議してくる弟子を見ながら、

修行に關してもこんな顔で本腰を入れてやってくれたらなあ、と思う勇者の家庭教師

であった。

アバンらは、以前に言ったことがある。パプニカ王国まで瞬間移動呪文<sup>ル</sup>で飛び、そこから船で海洋を一路デルムリン島へ向かう予定である。

パプニカに到着した時点で、デルムリン島へルーラすれば手間も時間も短縮できるだろうが、

ルーラを習得できている者は案外少ない。

かの有名なパプニカ三賢者ですら全員は習得していないし、

ルーラを使える者でも自分一人が飛ぶのが限界………という者も少なくない。

三賢者の上役であった賢者バロンは当然優れたルーラの使い手で、

デルムリン島へ行つた経験もあるドンピシヤな人物だったが

暗殺未遂事件の主犯の一人であり当然案内など頼めない。

一刻も争う昨今の世情だが、

パプニカに到着した後は少々のんびりした船出にならざるを得ないのであった。一時的にアバンがデルムリン島というド田舎へ隔離されたのと時を同じくして――

——ベンガーナ王国上空50Km。

成層圏を、ゴウンゴウンという重低音を響かせながら飛行する巨大な人影があった。  
鬼岩城。

新生魔王軍の巨大人型機動要塞が今、その悪魔の如き産声をあげようとしている。

「座標……ベンガーナ上空………予定地点到達しました」

「高度50Km………姿勢制御、Xプラス2、Yプラス1、Zマイナス1………鬼岩城、安定しております」

「肺の間、稼働率100%………」

工房を停止させます。暗黒闘気、国家消滅砲へ収束を開始」

「射角よし。目標、旧アルキード王都。チャージ5%………10%………15%」

「生命反応索敵………本城周辺には反応皆無………敵影無し」

玉座の間の周囲………外壁付近に設置された椅子に座しながら  
不気味な機械類を操作するムー人らが次々に報告を上げる。

中央の玉座でそれら聞くは妖魔士団長・冥王ゴルゴナ。

玉座の間・上方に映し出される眼下のビジョンを、

外骨格を歪め不敵な笑みを作っているように錯覚しそうな貌で見つめていた。

「グブブブブ……落成式など鬼岩城にとってはただの余興。

鬼岩城の真価はこれより試されるのだ。

バーン様も注視しておられる……ぬかるでないぞ」

「もちろんです。鬼岩城の処女航海……必ずや成功させてみせますわ」

玉座の隣に立つキアラが自信たつぷりに応える。

この度の鬼岩城の起動。

当然のように、魔軍司令ハドラーは知らない。

そもそも、彼は鬼岩城が機動要塞であることも知らず、

ただの地上侵攻の本拠地としか認識していない。

新生魔王軍を纏める総司令とは言っても、

“この事実”がハドラーへのバーンの信頼の程度であった。

遙か上空に、ただ駆動音を響かせるだけの鬼岩城は、

地上の人間の誰にも知られることもなく悠々と飛び、

まったく危うげな事もなく肺の間から暗黒闘気を砲へと充填している。

兵団を安々と産み出す量の暗黒闘気が怒涛のように蓄積され、

心臓の間から生み出される電力によって激しくピストン運動を繰り返す圧縮機が、

莫大な暗黒闘気を窮極に圧迫しブラックホールの如き暗黒弾を形成しだす。

「チャージ50%突破……55……60」

ポポルヴーの読み上げは淀みなく進み、

カウントが進む度にムー人達の喜色は強くなっていく。

そして……死の大地・大魔宮バーバレスから

水晶を通して見ている大魔王もまた同じであった。

老王の側に控える死神が、

「フフ……国家消滅砲……ボクも凄くワクワクしてますよ。

名前負けしてないといいですがねエ」

なんとも楽しそうに笑っている。

「……余の肝いりの鬼岩城。

フツ……この程度で躓いてもらっては困るな」

紅の美酒に酔いながらバーンもまた口角を釣り上げていた。

「80……85……90……95……100%。

国家消滅砲……発射準備宜し」

ポポルヴーのGOサイン。

「総員、耐ショック」



キアラが告げ、

「発射」

ゴルゴナがただ一言命じた。

その瞬間、開放されていた胸部装甲中心の砲身が、

全ての光を塗り潰さんばかりに漆黒に輝く。

悪鬼の腹底から響いてくる呻き声を髣髴とさせる低音が天に木霊し、

暗黒弾が彼方の地平へ放たれ……数瞬後。

黒黒とした激光がアルキード領を包み込み、一拍置いて大地を裂く振動と轟音。

衝撃波がやがて鬼岩城まで届き、その巨体を僅かに揺らしたが、

総オリハルコン張りの装甲と異魔神の細胞がそれらを防ぎきる。

「……演算機マキシマムによる各部チェック……オールグリーン」

圧倒的な殺戮劇を前にフロレンシアは淡々と鬼岩城の状態を検査し、

「お、おお……素晴らしい……っ!!」

ツークーマンは感嘆し、

「かつてのムーの超兵器にも劣らない!」

トピアポが賞賛する。

「オテイカワン、旧アルキードはどうなっておるか」



小型の黒の核を何度も撃てるのと同義です。ねアレは……最高に物騒だなア！  
ウクククククククク！」

可笑しくて仕方がない、といった風のキルバーン。

ピロロと共に彼らもケタケタと不気味に笑っていた。

「うむ………今宵は酒がすすみそうだな。

余の鬼岩城………まさに匠の逸品と言えよう。

人間と天界共への宣戦布告に丁度良き狼煙だとは思わぬか、ん？」

死神にオモチヤの感想を求めると、

「仰るとおりで………」

キルバーンも全面的に賛成であった。

と、大破壊の様子を写していた映像にゴルゴナが割り込み、

「バーン様……鬼岩城は極めて良好でございます………」

如何なさいますか………このまま成層圏からの地上全土の狙撃も、鬼岩城ならば可能ですか」

お手軽な地上殲滅プランを提案するも、

バーンはふむ……と軽く思考して、

「……ゴルゴナよ、それでは些か芸が無い。

鬼岩城は実に素晴らしいが、いくら気に入ろうが遊び過ぎれば飽きもする。

地上は、あくまで6軍団の食い合いの場。

それが終われば……地上フタを除けるのに手段は問わんが、な。

どちらにせよ、鬼岩城なりピラア・オブ・バーンなりでの掃除は後のことだ。

そなたらはギルドメイン山脈に帰還せよ」

オモチャを大事に仕舞い込むことにしたようだった。

冥王が短く了承し、キアールに鬼岩城の帰還を命じると自身は一足先にリリルラで姿を消した。

この日、地上から旧アルキードが永遠に失われ残滓も残らず、

国家消滅砲の余波によって復興しつつあったベンガーナは甚大な被害を被った。

そして、アルキード消滅の暗黒光を宣戦布告代わりに

世界各地に大魔王6軍団中、5つの軍団が一斉に侵攻を開始。

北国オーザムに氷炎魔団。

勇者の国・カール王国には超竜軍団。

ベンガーナに魔影軍団。

ロモス王国には百獣魔団。

パプニカ王国は不死騎団。

そして、本人のたつての願いもあつてアバンのもとに魔軍司令ハドラー。

リンガイアを除く5大国に魔物の群れが襲いかかる。

世界の破滅の序曲が始まったのである。

## 連合崩壊

リングアイアの大城塞を包囲し、

徐々にリングアイアを疲弊させていた連合軍であったが、

本国から火急の伝令が次々に各国首脳の元に駆け込んできて、

それぞれの王や将軍達は顔を青くしたり赤くしたり嫌な汗をかいたりで

各軍が急ぎ撤退の準備を始める。

事実上、ここに連合軍は解散となりリングアイアは窮地を脱することになる。

しかも、主要な国々はどこもモンスター達に襲われているのに

リングアイアには組織的に動くモンスター軍団はやって来ておらず、

「大魔王軍何するもので。」

カール騎士団率いる連合軍さえ敵わなかった我らに恐れをなしている」

という認識を国民の多くに植え付けてしまった。

会議の場にて大將軍パウソンは、

「これを気に講和の道を模索すべきです。

大勇者アバンは敵でありながらも信じるに足る将。

彼に仲介を頼めば悪いようにはならぬでしょう」

と血気にはやる諸將をたしなめる。

しかし、

「百戦百勝のバウスン殿の言とも思えぬ！ 何を弱気な！」

「そうだ。連合は散り散りになって本国に帰還しだした。」

今追撃をかければ間違ひなく精強なるリングア戦士団は奴らを打ち破る」

「我らには將軍の一子、北の勇者ノヴァ殿もいる。」

大勇者をも降して、返す刃でモンスター共を倒せば、

「世界は我らリングアの手の中に転がり込んでくるのだぞ！」

「さよう。これは世界を掴む千載一遇の好機。講和などんでもない」

連合にも長年屈しなかった諸將の自信と、

連合と長く争った彼らの“敵国”への憎しみはなかなか根深く、

2つの要素が彼らの視野を狭くしていた。

「魔王軍に世界が滅ぼされれば何もかも終わる。」

世界制覇どころの話ではない！

今は人間同士足並みを揃えねば、我がリングアとて危ないのだ！」

繰り返しバウスは抗弁を試みるが、諸將の反応は芳しくない。

リングアイア随一の名将であり功臣であるバウソンは大権を有しているが、さすがに単独講和などできるわけもなく、

「……………魔物共のことは心配いらぬ。我らリングアイアは連合の後ろを突く」

今まで沈黙を保っていた王の一言で大勢は決した。

バウソンが顔色を変えて、

「王！…（ぎ）再考を！…モンスター共は話の通じる連中ではありません！

どのような根拠でもって魔物が動かぬと断じるのですか！

魔王軍は人類の敵！今は他国と協力して——」

尚も抗議を続けようとしたが、

「話し合いは終わった……………既に動く段階であるぞ？　バウソンよ」

取り付く島などなかった。

（陛下は変わってしまった……………一体どうしたというのだ）

そう思い、祖国と主に一抹の不安を覚えながらも

仕事に一途な真面目人間であるバウソンは国王の命に服するのである。

野心がなさすぎるが故に命令に逆らってまで王をたしなめる…

という発想が生まれないのが彼であった。

早足で廊下を歩き兵舎に向かうバウソン。



と、彼の視界に壁にもたれてこちらを見てくる若者が一人。距離が縮まると自然、その若者が口を開く。

「父さん。陛下はなんと?」

「……ノヴァか。陛下は……連合軍の追撃をお命じになられた」

バウスの表情は暗く、冴えない。

しかしノヴァは、

「……いったいどうしたんです。元気がないな。」

父さんらしくもない。連合共は僕らの不倶戴天の敵。

城壁を頼りに防戦一方だった鬱憤を晴らすチャンスじゃないか。

自分達も疲れている時は相手も疲れている……父さんの教えですよ。

リングアイアは限界だったが、連合も苦しかった筈……そこに魔王軍の決起。

これは勝機でしょう?」

勝つことしか考えていない。

負けることを考えて戦いに臨む者などいない。ノヴァの姿勢も正しいといえ

しい。

やや置いて「………思えば」と、徐ろにバウスンが言い出した。

「お前は幼い頃から戦ばかりだったな………」。

お前の才に頼り、戦場に引つ張りだし……多くの人間の首を討たせてきた」  
ノヴァは怪訝そうな顔で、

「それがどうしたのさ。今の世じゃ別に珍しくもないだろう。

それに……僕はバウスの息子で、才能がある。戦う才能がね。

これで戦場に出ないほうが、むしろ国に対して不忠だと思うけど？」

僅かに過剰な自信と確固たる信念を覗かせる。

そんな息子の様子を見てバウスは、嬉しくもあり同時に少し不安であった。

「国か……私もリンガイアに……王に剣を捧げた身だ。

祖国とそこに住まう民を愛している。

だが………モンスターが動き出した今、

一国家の思惑を超えて手を取り合うべきではないか……。

私はそう思っている」

「リンガイアには魔王軍は現れてないだろ。

大城壁と父さん……僕。精鋭揃いのリンガイア戦士団。

魔物共もバカじゃないってことさ………知っているんだ。

リンガイアが落ちやしないことを、ね」

「古今落ちなかった城はなく、滅びなかった国はない。アルキードは記憶に新しいだ

ろう？

ノヴァア……………カールのホルキンスに、お前が負けたように上には上がいる」

「……………」

表情に“ナマイキ”が若干浮かんでいた若者の表情が  
ややムツとしたものに変わり、それ以上に引き締まる。

「リングイアを滅ぼす自信があるから魔王軍は動いていないと？」

「分からない。だが、陛下には自信があるようだった。

まるで……………モンスター達が動かないことを知っているかのような……………、

いや、そんなわけがないな……………。

だが、ノヴァア…覚えておいて欲しい。

私は英雄だ何だと過大な評価を皆に貰っている。

陛下も私を信頼してください……ありがたいことだ。

だが、私は国を超えて動けない。

私の生涯はリングイアとともに在る……それが私の視野の狭さであり、限界だ。

しかしお前は、国家に囚われるな。世界を見て欲しい。

お前は……………それが出来る天賦を持っている」

「何だか気味が悪いな……………父さんが僕を褒めるなんて。

明日は槍の雨でも降ってくるんじゃないか？

……まあやってみせるさ、僕は“北の勇者”だからね。

でも、とりあえずは出陣だろ？

陛下のご命令だし……連合に勝たなきゃ、魔物対策もできやしない」

「……………そうだ、な。」

今は、目の前の戦に集中すべきだ」

その日、リングギアは主だった將兵全てを追撃戦に投入した。

バウズンを総指揮官としたリングギア軍の烈火のごとくの強襲に、

アバンを欠いていた連合軍は散々に打ち破られた。

数で圧倒的に上回る大軍、長陣からの撤退直前、本国の襲撃という動揺、

事ここに至って人間同士で争いはしないだろうというある種の樂觀。

それらが連合軍に重大な隙を産んでしまった。

リングギア王の人間性を信頼しすぎてしまったとも言えるし、

王の野心を甘く見ていたとも言える。

ホルキンスとアキームの必死の防戦によってフローラは無事に乱戦を離脱したが、

オーザムは王が戦死し軍団も壊滅、カール騎士団とベンガーナ戦車隊は3割を喪失

し、

残留していた。パプニカとロモスの少数の将兵は全滅した。それに引き換え、リングアアの損耗は1割強で、

十倍とも二十倍とも言われた戦力比をひっくり返しての歴史的な大勝利であった。しかも、敗北した連合諸軍を待っているのは、懐かしき安全な故郷ではない。魔物が跳梁跋扈する滅びつつある故郷。

5 大王国は一転して崖っぷちに追い込まれたのである。

——深夜……リングアア王の私室——

「黒き賢者よ………そなたの言うとおりに、なった………」

我らリングアアは勝った………そなたは………そなたは………、  
まさ、しく………リングアアの守り神………、

どうすれば、あなたのこと………大恩に………報いること、が、出来ようか………」  
ゆらゆらと頭を揺らした初老の男、リングアア王。

しかしその見た目は実年齢以上に老けて見える。

髪はか弱く細くなり色素が抜けてすっかり白髪頭となり、皮膚には水気がなく深いシワがそこかしこに刻まれて、目は落ち窪み唇は乾燥しきつている。

瞳はもうどこを見ているのかもわからぬぐらいに焦点が合っていない。

声もしわがれて、本当に生者なのか疑わしいほどであった。

そんな生ける屍の如くの王の目の前に立つは、黒いローブで全身を包む背虫の魔人。

「ぐんぐんぐんぐんぐんぐん……見事であつたぞ、リンガイア王よ。

そなたの所業に我が偉大なる神もお喜びである。

王の威光は遍く大陸に行き渡り、魔物達もひれ伏すであろう。

もはや魔物は王の味方……。

お前は天命に選ばれたのだ……それを自覚し、神の声に従え。

さすれば、リンガイアは……貴様は永遠に讃えられる存在に昇華されよう」

「神……の……こゝ、え……」

「左様……天界をも掌中に収める、魔界の神……」

天、地、魔を従えし大魔王……貴様の主の名を讃えよ……」

「う……あ……我が……ある、じ……」

「その名は……大魔王バーン……！」

「バー、ン……神……バーン……我が主……大、魔王、バーン……」

明くる日、リンガイア王から衝撃的な発表が国民にもたらされた。

リンガイア国、魔王軍と同盟す。

同時に国内のモンスター達を国民として扱い、人と魔の理想郷とする旨が通知されたのである。

## 勇者 v s 魔王

デルムリン島——怪物島の異名をもつ南方に浮かぶ大きな離島である。

前大戦時に魔王が死んだことでその意志から解放され、

ハドラー軍の幹部・鬼面道士プラスが平和を望むモンスター達を率いて隠れ住んでいた。

人間の赤子を拾い、心優しいモンスター達と平穏に暮らしていたが、

魔王の復活：大魔王の出現に伴い

邪悪の意志がモンスター達を蝕み苦しめていた……のも3日前までのこと。

今では家庭教師アバンが張った大結界・破邪呪文マホカトルによつて平和を取り戻していた。

ダイ少年の前に現れたアバンは勇者の家庭教師として彼に特別スペシャルハードコースをオススメし、

ハンコまでもらつてバツチリ契約したのでそれはもうぶりばりと特訓を始めた。

修行開始から3日目にしてアバンの

火竜ドラゴン変化呪文から繰り出される激しい炎を切り裂いたダイは、



これで海波斬を習得し、大地斬と合わせ既にアバン流刀殺法を2つまで修めたことになる。

プラス、ゴメちゃん、ポップ、そしてくたくたのダイを前にして  
鼻つ柱から血を垂らしつつ、

「ダイ君はすでに海波斬のコツをつかんでいます！」

この調子なら「特別ハードコース」の達成も夢ではぬわあいつ!!」  
と力説していた。

その表紙にツツつとケガから垂れてくる血が鼻血のようになり  
少々カツコ悪いことになってアバンは、

「あつ……………ポップ……………バンソーコー持つてませんか？」

のんきに治療の要請を弟子にしたものだから思わず皆も破顔して、

「…しまんねえなあ……………先生…」

ポップもお茶目で敬愛できる師をからかうようにわざと小馬鹿にするような発言。  
長年のバカ愛弟子に言われてアバンも、

「うゝゝゝん、まったくカツコ悪いですね……………なっはっはっは」

カンラカンラと大笑いであった。

和やかな空気になっていた洞窟内。

アバンの表情が一瞬強張る。そして……………。

ほんの微かに空気が震え、地が揺れる。

少しずつ大きくなるそれらに、流石にダイ達も気づきだし、

ゴゴゴゴゴゴと揺れる大きな地震レベルまでに振動が膨れ上がった。

「じ、地震だあッ!!」

「なんじやつ!? 火山の爆発かつ!?!」

ダイとブラスが慌てるが、アバンが即座に否定する。

この振動の性質は己が張った結界を無理矢理に突破しようとしているもの。

並のモンスターでは一歩たりとも入れぬと自負しているアバンには、

この邪悪な波動と相まって確信めいた予想が脳裏をよぎる。

振動と邪気がより強まると、ブラスが頭を抱えて苦しみだし、

ダイもまた強大な悪のエネルギーを感じ取っているようだった。

「どうやら不安が的中してしまったようです……………!」

アバンが身構えた途端、洞窟の天井部が吹き飛び陽の光が注ぐ。

そこには……………、

「クッククック……………貴様の魔法陣にはなかなか骨を折らされたぞ……………」

アバンとブラスにとって忘れようもない一人の魔族が宙に浮かんでいた。

「やはり復活していたか……魔王ツ、魔王ハドラー……!!」

つい数分前までのおちやらけた雰囲気とはうってかわって、

アバンが伊達眼鏡の奥から眼光鋭くかつての魔王を睨みつけている。

宿敵の視線を受け止めつつハドラーが、

「久しいな……勇者アバン……!!」

寧猛に笑いつつ言葉を投げかけ続け、

「かつて貴様は、このオレの野望をことごとく打ち砕き……あまつさえ我が生命さえも奪った！」

あの痛みと屈辱は決して忘れん……!!」

鬼のような形相でアバンを見つめ、宿敵のかつての“不敬”を咎める。

だがアバンはその傲慢さをせせら笑うように、

「おまえはその数百倍にも及ぶ人間の命を奪ったではないか……!」

言い放つ。と、ハドラーもまた即座に持論を述べた。

「フン! 笑わせるな……人間など我々魔族に比べれば家畜のような存在にすぎん!

たとえ数万数億集まったところでオレの生命いのちとは釣り合わんわ!」

「……変わらん。いや、以前にもまして愚劣極まりない性格になった……!」

こういって言い合いでは昔から切れ者のアバンがハドラーを圧倒する。

ハドラーは「なんだとおく！」と顔をしかめ怒りを示すが、はつきり言うくと2人の舌戦は

獅子同士の甘噛のし合いとでも言おうか、慣れ合いの感も含んでいる。

が、それも一段落すればよいよ力と力の背比べ。

双方の気力と魔力は急上昇し、アバンはダイ達を洞窟外へ出るように指示し、

ダイが一緒に戦うと言い張るもそれをポップが制し、

彼はブラスを抱えダイの手を引くと迅速に脱出した。

(先生の凄さは戦争でも見てきた！ 大丈夫だ……魔王なんざに負けねえ！)

ダイよりも長く、より身近に接してきたポップは

かつてのアバンが勇者であることも知っている。

只々、師の勝利を信じるのみであった。

“外野”が外に避難して一呼吸後、洞窟内で立て続けに爆発が起こる。

熱風と爆音が入り口から溢れでて、

かつての魔王と勇者の激闘を容易に想像させた。

剣と拳、魔力と魔力が真正面からぶつかり合い、周囲の空間を激しく破壊する。

しかし、その拮抗にハドラーは狼狽えた。

「はあー、はあー、バ、バカな！ パワーアップしたオレと互角だというのか！」

肩で息をする程に消耗して尚、アバンに致命傷を与えられない。

それどころか己の呪文全てを完全に海波斬で切り払われて、アバンはほぼノーダメージ。

「残念だったなハドラー。」

私としては不本意だったが、衰える暇もなかったものでね」

「く……………」

ハドラーは完全にアバンを見誤っていた。

短命な人間種ゆえ、月日が勇者を衰えさせていると予想していたが、

以前と変わらぬ……………いや、下手をすれば昔よりも強い。

（く、くそお……………アバンめ……………、

まさかここまでレベルアップしていたとは完全に予想外だ！）

度重なる戦争をぐぐり抜けたアバン。

寧ろかつてハドラーと相対した時は若すぎたと言えよう。

アバンの全盛期は“今”なのであった。

油の乗り切った肉体、充分な経験。

現在のアバン……………その年齢は31……………レベルは46。

間違いなく地上最強の人間であった。

ギリリツ、と歯噛みしたハドラーが、

「こうなったら………オレの最強の呪文で一気にケリをつけてくれるわ!」

叫びながら両の手を広げ構え魔力を蓄え、

「むうううんツ!! くらえイ! 極大爆烈呪文<sup>イオナズン</sup>ー<sup>ン</sup>ー<sup>ン</sup>ー<sup>ン</sup>ツ!!」

渾身の力で撃ちだした。

だが、ハドラーが両手を広げたその時に、

既にアバンもまた自身最強の奥義の構えに移行していたのだ。

「アバンストラッシュ<sup>ン</sup>!!」

地・海・空を切り裂き、そして全てを切り裂くアバンストラッシュが、

魔王のイオナズンを切り裂き、そして、

「う、うおおおおおおおおおおおお!!!」

屈強な魔族の肉体を深く切り裂く。

魔族の蒼い血が胸板に刻まれた斜め一文字から噴き上がり、

ハドラーを大きくよろめかす。

さすがのアバンも、

ハドラーのイオナズンを無効化しきれず衣服や皮膚がやや焦げ付き、

軽くはないダメージを負いはしたがハドラーに比べれば大分マシだ。

「ぐはッ……ぐ、あああああ……、まさ、か……！　こんな!!」

「はあ、はあ、ハドラー……！　この場でおまえを倒し世界の暗雲をはらしてやる!!」

ぬううう！　ベ・ギ・ラ・マ……ッ!!」

ハドラーの胸元の傷めがけ閃熱呪文を放つ。

イオ系ギラ系を得意とし、その体に耐性も持つハドラーとはいえ、

当時よりも強力になったアバンの魔力で放たれたベギラマは、

傷ついた体では（危うい……！）と判断し、

「ぬ、ぐうう！　ベギラマア……ッ!!」

咄嗟に勇者のベギラマを撃墜する。

ベギラマ同士の誘爆をモロに受けたハドラーは、

深手と体力の消耗によってとうとう片膝をついた。

その様子を外から見ていたポップは、

「い、いやあったああ!!　さつすが先生！　いよつ、現役勇者!」

と、師の勝利を確信し歓喜していた。

だが、アバンもハドラーも……双方全く気を緩めず互いから意識もそらさない。

「つ、強い……！　認めねばならんようだな……昔よりも腕を上げたではないか。

だが、オレが負けるはずはないのだ!!」

バーン様よりいただいたこの肉体が、貴様なんぞに劣るはずはない!!」

再び気を漲らせガツシリ立ち上がるハドラーの、その言葉。

「バーン……?」

ハドラーが「様」付けて呼ぶ聞き慣れぬ単語にアバンが片眉をややピクリとさせる  
と、

「知りたいか……? 知ればきつと後悔するぞ……」

ニヤリとハドラーが笑みを浮かべる。

(……今は少しでも時間を稼ぎ、体力と魔力を整えねば!)

というハドラーの目論見通り、アバンはハドラーの言葉に耳を傾けているようだった。

「……貴様は相変わらずオレが魔王だと思っているらしいからな……」

「なんだと……?」

「オレはある御方の力で再びこの世に蘇ったのだ!」

以前よりも強力な肉体を与えられてな……」

「何者だ……そいつは……!」

ニヤリとハドラーが笑う。

「大魔王………バーン………!!」



今までの地上の混乱はハドラーの好みではないことを見抜いていたアバン。やはり、より強大な闇が潜んでいたのかと合点がいく。

「貴様に敗れ死の世界を彷徨っていたオレを蘇生させて下さった偉大なる魔界の神だ!!

……バーン様に忠誠を誓ったオレは、

大魔王の片腕として魔王軍の全指揮権を与えられた!

今のオレはバーン様の全軍を束ねる総司令官……!

魔軍司令ハドラーだ!!!」

大口を開けて宣言するハドラー。その心中では……、

(フフ……よくし、いいぞ。呼吸も整ってきたわ!)

虎視眈々とアバンの隙を狙っている。

だが、

「ふっ……なるほど。大魔王の使い魔になり下がったということか。

世界の半分を与えるなどと言っていたお前が、落ちたものだなハドラー!」

アバンがずばり痛いところをついてくる。ハドラーは一瞬、沸騰し、

「な、なんだとオツ!!? 使い魔あ……!!

貴様……ツツ!! このオレを! 大魔王の使い魔とぬかしたなあ……ツツ!!

激昂してヘルズクロードアバンに斬りかかった。

「凶星をさされたみたいだな……」

不敵にアバンが微笑んで、オマケの挑発も忘れない。

「だまれエツッ！ 殺してやるぞアバン！ 弟子の見ている前で……串刺しにしてやる！」

身体能力の限りを尽くしてハドラーは駆けだし、

洞窟の壁をさも地面かのように走ってアバンの左側より襲い来るも、

「そこだ！ 海波斬！」

動きと素早さを予期していたアバンに、最速の刀殺法で斬り込まれて、

「うぐおおおおー……ッ!!」

ハドラーの左腕を斬り飛ばし、宙を舞わせた。

だが、（……むっ!? 止まらない!）

ハドラーはそのまま突進を続け腕一本を犠牲に

右拳をアバンの土手っ腹に打ち込むつもりであったのだ。

「左腕の一本などくれてやるわッツ!! もらったぞ!!」

「くっ!」

アバンはそのまま左肘を振り下ろし肘打ちをする形で

ハドラーのヘルズクロウをあえて左腕に貫いにいき致命傷を避ける。

「ええい、臓腑は貫けなんだかッ!! やるなアバン!

だが貴様も左腕は使い物にならんだろう!」

距離を詰めての格闘戦ならば未だ互角とみたハドラーは

そのままアバンへと肉薄しつつ激しい拳打と襲撃の弾幕を浴びせるも、

アバンもまた流れるような体捌きでそれらを躲して、

「おまえもやるじゃないかハドラー!」

挑発に乗ったように見せかけて、その実クレバーとはベリーナイスですよ!」

まるで生徒に話しかけるような口調で言ってる。

少しでもハドラーの集中力を乱す心積もりであると同時に、

旧友へ語りかけるような気軽さも含んでいた。

互いに疲労の色も濃くなってきて、戦況はハドラーが圧倒的に不利である。

というのも本人同士の実力は伯仲しているが、

アバンには未知数の実力である弟子2人が背後に控えている。

ハドラーとしてはこれは不気味であった。

(ちっ………単騎で挑んだのは浅はかだったか。

せめて部下を連れていけば小僧どもを抑えて安心して戦えたのだが……)

どのみちマホカツールが邪魔で、魔王クラスでなければデルムリン島で戦うなど出来

ないのだ。

ハドラーは潮時であると悟った。

「……アバン……その首、しばらく預けておくとしよう。

だが覚えておけ！ 次こそは、必ずやお前を殺すツ!!

メラゾーマツ!!」

「うっ！」

ハドラーは残った魔力を全てメラゾーマとして撃ちだし、

周囲を地獄の紅蓮で包み込む。

アバンは咄嗟に海波斬で切り抜けるが、ハドラーのメラは地獄の炎。

一度燃え移れば生半可なことでは消えはしない。

洞窟内から炎が溢れでてデルムリン島の自然を焼き始める。

「ポップ！ 急いで消火してください！ ハドラーのメラは危険です！」

自身もヒヤダインを唱えて必死に鎮火作業。

ポップも慌ててヒヤダルコを連発してそれを手伝う。

ダイも一緒になってヒヤドを撃つも、

ポンッ、

と見るも悲しい氷粒が一欠片飛び出るだけだった。

鎮火が一段落した頃には、当たり前だがハドラーの姿はない。ルーラかカメラのつばさで、どうやら逃げたらしかった。

(ハドラー……………そして、大魔王バーン。)

どうやら、ダイ君とポップの修行を急いで完成させねばならないようですね……………)

ヘルズクローによって穴が空き、

だらりと力なく垂れ下がる左腕に

プラスのホイミを受けながらアバンは固く心に誓った。

「ヒュンケル様……………。パプニカの地下宝物庫で、何やら変わった鎧が発見されました。トロールやゴレム並の巨体で、2本の腕と4本の足……………

およそ人間が着るものではない、とのことです」

チリーン、と涼やかな鈴の音を響かせながらくさった死体の執事・モルグが言った。万全の装備で腕を組んだまま報告を受け取った不死騎団長は、

「……………恐らくそれがキラーマシンだろう。」

ゴルゴナの奴は気に食わんが、バーン様の命とあらば仕方ない。

運び出し、鬼岩城まで輸送する。手筈は任せたぞ、モルグ」

燃え盛るパプニカ王都を見つめながら、

ミイラおとこやがいこつ達が逃げ惑う人々を斬り伏せる様を観察していた。

泣き叫ぶ少女がミイラおとこに捕まり、その怪力で胴を千切られる。

身の毛もよだつ金切声の断末魔と光景。

それらを見ても不死騎団長の心は波風一つ立たぬが、今は別の理由で些か苛立っている。

「ふん………ゴルゴナの策だか知らんが、リンガイアめ……。」

奴らのせいで全く歯応えがない」

主力不在で王国襲撃は敢行され、帰還してきた主要な騎士団も疲弊しきっていて、

ヒュンケル率いる不死騎団の敵ではなかった。

既に王と側近達は首だけとなっており、

地下牢の司教と賢者も膺切りにして海にばら撒き、魚の餌にしてやった。

後はパプニカの首脳といえはレオナ姫と三賢者のみであるが、

その発見も恐らく時間の問題だろうとヒュンケルは考える。

(つまらん仕事だ………)

少女の千切れた死体を見て、そう思った。

フレイザードが受け持った極北のオーザムは、

パプニカ以上に呆気無く終わった。

なにせ王も將軍達も〝リングイア会戦〟で討ち果たされ、主力が壊滅しているのだ。  
氷炎將軍は、

「王も騎士どもも情けねえ!! リングイア程度に全滅させられてりや世話ねえぜ!!」

と、折角の初陣を味気ないものにしてくれたオーザムの不甲斐なさに激怒していた。

こうなりや…と半ば八つ当たりでフレイザードは、

「人っ子一人生かしちゃおけねえ………老人も、子供も、家畜も………!!」

人間の痕跡一つ残らず破壊しろ!!

オーザムだけじゃ物足りねえ…マルノーラ全土で殺し尽くすのだ!」

との厳命を下し、その言葉通り徹底的な人間狩りが行われ、

オーザム王国は勿論、マルノーラ大陸に点在する村々の存在も許さず

大陸全土から人の文明の痕跡を根絶やしにしまった。

オーザムとパプニカの呆気なさとは比べて、

ロモス王国は弱兵ながらよく持ちこたえている。

というのも氷炎魔団や不死騎団と違い、団長が先陣を切っていないからであった。

ただでさえ弱国（それでも大国である）のロモスをあてがわれて「つまらぬ……」と思っていたところに主力の疲労である。

パプニカとロモスは一足先に本国に帰還したとはいえ、

一部を包囲網に残していたし更に別働隊を旧アルキードに駐留させてもいた。

トータルで人的被害はカールやベンガーナに並ぶ。

（自分がいなくとも部下だけで充分……）と判断した獣王は己の森の洞窟で寝こけており、

百獣魔団は一糸乱れに乱れた乱雑な攻撃を個々に繰り返しているだけで、

それだけでロモスはもうぼろぼろなのである。

クロコダインが先陣にて指揮を振るっていたら

ロモスもまたパプニカ同様数日で滅んでいただろう。

どう転ぼうともロモスの滅亡はもうすぐそこなのだ。



カールとベンガーナは共に大国の中でも頭一つ抜けた強国であったが、カールは魔王軍の中でも最強と謳われる超竜軍団と雷竜ボリクスが来襲しており、空から雷を国土全土に降り注ぐボリクスには、リングアア会戦を生き延び更にレベルアップした騎士ホルキンスといえども手も足も出ない。

見る見るうちにその国土は破壊されていった。

ベンガーナもまた長く続いたアンデッドの疫病と、

立ち直りかけたその時に発生した謎の衝撃波で国は深く傷ついており、

また、南方の旧アルキードが大陸ごと消滅したという情報も相まって

多くの国民の心は既に挫けていた。

クルテマツカ7世の優れた手腕を持ってしても、

もはや衰退は押しとどめることは出来ないだろう。

襲い来る魔影軍団は、不死騎団ほどでないにせよ

高い不死性と無尽蔵のスタミナを有した暗黒生命体達で、

先のアンデッド包囲網の如くのいつ終わるともしれぬ“王国封じ込め”を敢行され、

トラウマが蘇る形でベンガーナはさらに疲弊していく。

もはや人類に逃げ場なし。

どの大国、強国も虫の息であり、

人々は肩を震わして身を寄せ合い逃げ隠れするのみであったが、

その中であつて唯一、平和と富貴を欲しいままにしつつある国。

それがリンガイア王国であつた。

阿鼻叫喚地獄に陥る隣国達を尻目に、

リンガイアは“魔界の神のお告げ”によつて

税を始め国民の負担が格段に軽くなるよう取り計らわれ、

また不足がちであつた物資もどこからかじゃんじゃんとして持ち込まれていた。

さらに領土を温暖で豊かな南方まで広げており、旧テラン領を中心に大幅な領土を接収。

アルキードの消滅……大魔王6軍団の一斉侵攻から1ヶ月も経っていないが、

周辺国から逃げてくる人間をどんどん迎え入れその国力は急速に膨張している。

当初こそ魔物達を受け入れるのに戸惑い、怯えた人間たちであつたが、

税と兵役を全てモンスター達が肩代わりするのだと

国王からの布告があつてからはそこまで悪い気はしない。

仲が良くなつたわけでもないし、かといつて奴隷代わりにこき使うことも出来るわけがなく、

目の前を歩いていても干渉しないことで共存の形が出来上がっていた。

だが、国民達は知らない。

既に国王の魂は破壊しつくされ、

バウスン親子を除いて殆どの大臣や将軍が魔物と置き換わっていることを。

## ロモス決戦 その一

ギルドメイン山脈・鬼岩城。

現在、魔王軍のこの大拠点に2つの軍団が帰還していた。

氷炎魔団、不死騎団である。

早々に担当の王国を滅ぼしてしまった彼らは残敵掃討を部下に任せ、

主力軍団と共に一足先に骨を休めていた。

だが、フレイザードとヒュンケルは軍団長内でも屈指の仲の悪さで有名で、

鬼岩城内はどこかピリピリした空気が満ちている。

(い、居心地が悪い……)とガーゴイルAは思ったが、

それは城内の全モンスターも同様である。

両軍団長も左<sup>レフトショルダー</sup>肩の間の円卓で軍団長同士

交流を深めるなどという素振りも微塵も見せず互いに自室に籠もりきりであった。

そんな鬼岩城にハドラーが帰ってきたとの報が飛び込んできたのはつい先程のこと。

重大事があるので左肩の間に来るように、との早速の魔軍司令の命が下った。

そして今、作戦会議室の円卓には

ヒュンケルとフレイザードがブスツとした仏頂面で腰掛けていた。  
(やれやれ……)とハドラーが内心溜息をつくが、

「まずはお前達の功績を労おう。

この短期間によくぞオーザムとパプニカを滅ぼした。

大魔王様もお喜びであろう……よくやったぞ2人とも」

僅かに笑み作って賞賛してやる。

ハドラーもヒュンケルには思うところがあるが、公平な信賞必罰を心がけてはいる。  
だが、

「ありがとうございます……だが、ハドラー様。

オレあオーザムの王族を根絶やしにしてやったが……、

不死騎団長殿は未だにパプニカの姫さんを発見できてすらいねえ。

同列で褒められちやかなわんですなア」

ヒュンケル嫌いを隠そうともしないフレイザードは皮肉げに笑う。

ヒュンケルは瞑目しながら、

「ふん……リンガイアで野垂れ死んだ雑魚共の国が、

確か氷炎將軍殿の受け持ちでしたな。

兵のいない国の攻略は、さぞかし骨が折れたことだろうよ……」

盛大に皮肉を返す。 と、

「てめえッ!!」

肩を震わせながら円卓に勢い良く両腕を叩きつけ、フレイザードが立ち上がる。すぐにハドラーが見咎めて、

「よさぬかフレイザード！ 熱くてかなわん！」

氷炎將軍を押しとどめるが、

グツグツと煮えたぎる炎の半身が円卓を赤炎に染めて室内の温度を急速に上げる。

それを見て、（……息子の躰くらいはしっかりしたらどうだ）

とヒュンケルは言つてやろうとも思ったが、さすがに発言は控えた。

バルトスの件での皮肉にも繋がりフレイザードを更に挑発できる悪口雑言だが、

これ以上ハドラーとフレイザードを煽るのは流石にやり過ぎだろう……と思う冷静

さは

ヒュンケルにはまだ残っており、魔軍司令の発言を待つ。

暫くヒュンケルを睨んでいたフレイザードであったが、

どつかと席についてようやく落ち着きを取り戻した。

ハドラーは二度目の溜息を早速心中にする羽目になったが早速本題に入る。

「…………お前たちに出陣命令を下した後、俺は勇者アバンのもとに一人赴いた」

閉じた瞳を開けたヒュンケルが、ハドラーの話に食いつきだす。「だが、さすがかつてオレの命を奪った勇者だけはあった。」

アバンは予想を遙かに上回ってレベルアップをしており討ち漏らした。

だが、此度の襲撃でアバンの力量はわかった。

妖魔士団、氷炎魔団、不死騎団の3軍でロモスに赴き、アバン一行を仕留める！」

（ふっ……魔軍司令とは言ってもその程度か。）

アバンに再度負けるとは学習能力が無いと見える）

ヒュンケルが心で嘲笑う。　フレイザードも（情けねえな……）と思わないでもないが、

ハドラーを侮る以上にアバンの強さに興味があったようで、

「勇者アバン……なるほど大した金星みてエだな。」

ロモス……つてことは現地で百獣魔団と合流するわけですな」

冷静に戦略の狙いを問うとハドラーが「そうだ」と肯定する。

ヒュンケルもすぐに思考を切り替えて

「半数以上……4軍団を投入とは恐れ入る。」

だが、肝心要の超竜軍団は何故使わぬのです。

必勝を期すのならば欠かせぬでしょう」

不死騎団長の疑問ももつともであった。

ハドラーもその質問は予期していたようで、

「……………お前たちは”竜の騎士”というものを知っているか？」

たつぷりと間を置いてから返した。

「質問の答えに繋がるのでしような…？」

無論知っている。天界が作りし三界の調停者。

神々の裁きを下す最強の騎士……………でしよう？」

「はーん！ くだらねエお伽話だな」

ヒュンケル、フレイザードの各々の反応であった。

「その竜の騎士が出現し、カールの超竜軍団と交戦状態に入ったのだ」

「なんですと？」

「ほう？」

“伝説”の出現に2将とも興味を隠せない。

「それは確かなので？」

偽物や見間違ひ……………いくらでも伝説なんざ騙れる」

フレイザードが氷のように冷めた鋭さで思考を巡らす。

だが、



「雷竜ボリクスはかつて竜の騎士と相まみえたことがあるという……。」

竜の騎士が天界の伝説ならば、ボリクスもまた魔界の伝説。

そのボリクス自身がはつきりと報告をいれてきたのだ。

“ 竜の騎士バランがやってきた ” とな

ハドラーが報告の信頼性を保証した。

フレイザードが、

「なら、人間の勇者なんぞ捨ておいてそちらに総掛かりすべきだ！

どちらがデケエ大金屋か、ガキでもすぐわかるぜ！

バランとかいう竜の騎士の首をボリクスに譲ろうってんですか！」

すぐさま目標の変更と全軍出撃を提案するも、ハドラーが渋い顔となって、

「そうしたいところだが……、」

アバンは放っておけば何をしでかすか分からん男だ。 早々に叩き潰さねばならん

！

ベンガーナの魔影軍団をすぐさまカールに派遣し

超竜軍団と魔影軍団で竜の騎士を抑え……その隙に残る軍団でまずはアバンを叩く

！

忌々しげに声を荒げる。

余程アバンに敗北したのが効いているのだろう。

何としてもアバンを仕留めたいという私情もあるだろうが、

それ以上にアバンの恐ろしさを骨身に染みて理解しているからでもある。

それに何より、アバン抹殺は大魔王の勅命なのだ。

「アバンを仕留めてからすぐさま軍を反転させ竜の騎士めも屠つてくれる！

これで我ら魔王軍の邪魔者は消える……勝利は揺るがぬ！」

（アバンがさらに強力になり我ら魔王軍の目の前をうるちよろしているのも

邪魔くさいというのに……このタイミングで竜の騎士だと!?

くそっ!! ふざけるなッ!! 初っ端から余りに逆風ではないかッ!!!)

勝利は揺るがぬ——

そう言い切ったハドラーの精神は焦燥で満たされ逼迫していた。

ハドラーのデルムリン島襲撃から早くも幾日が経過し、

そこら中に放たれていた悪魔の目玉がようやくアバン一行を捉えた。

アバンらは既にラインリバー大陸に上陸しており、真つ直ぐにロモスの王都へ行進していると報告された。

ギルドメイン西部ではボリクスとミストバーンが

竜の騎士バランと竜騎衆達相手に激闘を繰り広げており、

いかな彼らでもこれ以上は危ない。そうハドラーは考えている。

(さつさとアバンを倒さねばならん！)

魔界の英雄ボリクスとバーンの名を冠するミストバーンを万が一にも失えば、

魔軍司令の座は勿論……下手をすれば首を、物理的に切られるだろう。

魔軍司令率いる4軍は既にラインリバー沿岸に上陸、集結し……

ハドラーは早速に悪魔の目玉を通してクロコダインと通信を開始し、

「クロコダイン……我らは上陸を完了した。後、2日もすればロモス城に到着する」

「おお、お早いお着きですなハドラー殿。これはオレもうかうかしておれん。

さつさとロモスの人間共を掃除して皆を迎える準備をせねばな！」

「うむ……アバンと戦う際にロモスが健在では何かと面倒だ。

早急に王都を占領しろ。

時間のロスは避けたい……逃げる奴らは放っておいて構わん。

残党など後からゆつくり根絶やしにすればいいのだ」

「おまかせあれっ！」

決戦の場となるであろう王都の確保を命じると、そのまま全軍に進軍を通達。空と大地を埋め尽くす魔王軍はゆっくりとその歩を進め始める。

不死騎団、氷炎魔団、妖魔士団。

率いるはヒュンケル、フレイザード、ゴルゴナ。

そして全軍をまとめるは魔軍司令ハドラー。

現地の獣王クロコダインを率いる百獣魔団と合わさればその総数は12万程となる。

(……………ぐぶぐぶ……………ハドラー。 お手並み拝見といこうか……………)

これで勇者を始末できねば……………貴様は無能だ)

静かにハドラーに付き従う妖魔士団長は、八つ目を不気味に光らせた。

## ロモス決戦 その二

百獸魔団が占拠したロモス王都に、9万の軍勢が入りその総数は12万。クロコダインは抵抗する者は容赦なく殺したが、逃げる者は見逃し、

投降する者はそのまま捕虜として受け入れ手酷い扱いを与えることもく虜囚とした。ロモス城の地下牢はそこまで広くはない。

とても全員は地下牢に入らぬので、

比較的レベルの高い兵士や騎士、貴族達を地下牢に放り込み、

民については、戒厳令の下それぞれの家に引き続き住むことを許可している。

降伏した者が多いのは、

「わしは降伏する……い。わしはどうなってもいい！」

だから頼む……これ以上国民に無体はやめてくれい！」

と言つてシナナ国王とその一家が降つたからである。

長く続いた戦争に疲れ、そして新たな脅威：魔王軍による虐殺を散々見せつけられ、しかもまともな反撃が何一つできなかつた国王はどうとう降る決心をし、

国民と兵にも抵抗をやめるよう布告をだしたのであつた。

ハドラー率いる援軍が迫りその重い腰をあげ陣頭指揮をとつていたクロコダインは、「良かろう……お前の王としてその責務を果たそうとする姿……敗者とはいえ見事！」

素直に魔王軍に降伏する者に関しては助命を約束しよう」としてそれを受け入れた。

ハドラーの意思通り逃亡者は捨ておいているが、

12万に膨れ上がった魔王軍が王都に入り、

国民は心底から震え上がって大人しくなっており叛意や不満は全く噴出していない。

(今はアバンが最優先……)

そう決めているハドラーは、王城に入りきらぬ大軍団を都の大通りまで使つて整然と待機させている。

打つて出るか、王都に籠城して迎え撃つか、

現在ロモス城では4人の軍団長と魔王軍司令によって作戦会議が行われていた。

「籠城などと悠長なことを！ 第一、王都にひしめくモンスター群れは遠目からも一目でわかる。」

勇者アバンは切れ者。この大軍に正面から乗り込んでくるわけがあるまい。

打つて出るべきだ！」

アバンをこの手で殺すことを望み、またハドラーに劣らずアバンの為<sup>ひととなり</sup>を知るヒュン

ケルが強く主張した。

クロコダインとフレイザードも、

「この軍勢ならば身動きのとりやすい草原などに出るべきですな。

王都に籠っていては大軍なのがかえって動き難い」

「勇者一行など3人程度……消極策なんざとつてられつかよ。

魔の森から出ていねえのは悪魔の目玉の監視ではつきりしている。

ルーラを使われた形跡もねえ……魔の森を包囲した後、主力を突っ込ませりやい

い」

出撃を主張していた。

もともと小細工を弄するより前線で暴れるのを好むハドラーは、

クロコダイン程ではないが武人氣質である。

3人の言に頷き、出陣の号令を下そうとしたその時、

「……………ぐんぐんぐんぐん」

打って出たところで勇者とその使徒を捕捉するのは容易くはない。

魔の森を包囲しても、氷炎將軍が懸念した通りルーラを使われれば意味は無い。

が、奴らは使わぬ。

奴らはルーラを使えないのではなく、使わないのだ。

それは何故か……それは奴らが正義の心を持つているからである……。ロモスには人間の生き残りが多くいる。

人々を救いたい、解放したい……。そう思っているからこそ、奴らは逃げぬのだ。奴らは我らの所に来たいと願っている。

だが、出撃し不用意に追い詰めれば奴らは逃げるやも知れぬ。

打つて出る必要はない……。グブブブブ」

黒き冥王が発言した。

フレイザードが素早く反応し、「確かに……」と小さく頷く。

ヒュンケルが、

「ならばアバンが我らに挑むのを待ち続けるのか？」

アイツが挑んできた時……。それは付け入る隙を見出した時だぞ。

アバンが我らの弱点を見出す……。或いは作り出すまで待てというのか」

やや語気強く反論する。

だがゴルゴナは悠然と、

「勇者どもに時間は与えぬ。

陣容整いし我らの軍団の中に、自らの意思でお越し願おうではないか」

さらに返すのであった。



不死騎団長が小さく鼻で笑い、

「バカなことを。アバンをどうやっておびき出すのだ」

無理に決まっている、と頭から否定してかかっていた。

しかしゴルゴナは、

「ぐぐぐぐぐぐぐ……奴らは正義の使徒。

そのようなこと、実に容易い……魔軍司令殿……、

ロモスに捕らえし人間共の処刑を進言する。

我らが魔王軍に逆らった者がどうなるか……声を大にして喧伝し、

精々派手に殺そうではないか……まずは国王一家を処刑するか……

あるいは未だ人間達が多く住む住宅街に火を放つても良い。

奴らはやってくる。そして国王を、人々を手遅れになる前に助けようと必死にな

る」

不気味な“唸り笑い”を漏らしながら可能と断じる。

だが、今度は獣王が怒りも顔に席を蹴りあげて

「ゴルゴナ！ お主、何を言うか！

ロモス王とその民は武器を捨て軍門に降つたのだぞ!?

無抵抗の者を手に掛けるなど言語道断！

オレの名で降伏を受け入れたからには貴様に勝手な真似はさせんぞ！」  
嚴重な抗議を寄越した。

「クロコダイン……お前の名が汚れようと、

それはただ人間共からの評価にすぎぬ。

我らが魔王軍に、勝利のために邁進する者を糾弾する者はおらん。

敵からの汚名、悪評などはかえって誉である……グブブブ」

「バカな！ 例え敵とはいえ約定を違えれば、それは約束を守らぬ卑劣漢！

そのような者は、いつか味方さえも謀り切り捨てる……と部下や仲間に使われよう。

今はそう思われずとも、いずれはそれに繋がる。

そうなつてはもはや味方同士で結束などできん。

結束なき群れに……軍に勝ちはないぞ、ゴルゴナ」

冥王を見つめるクロコダインの視線は厳しい。

クロコダインの抗議は、何も己のプライドに傷がつく……ということだけではない。

味方の士気を慮つてのことでもあった。

だが、そもそも末端の兵の意思や士気など気にかけるつもりもないのが冥王である。

「ぐんぐんぐんぐん……」

悪魔の目玉は既に勇者一行を見失った。

魔の森にいるのは確かだが、軍を出すとすれば深き森を探索しつつの行軍。時間もかかる。長期戦は魔軍司令殿も望むところではないのでは？

森は隠れ潜んでの奇襲にこれ以上ないほどに適している。

一騎当千の勇者が籠もれば厄介なことになるぞ」

ゴルゴナが尚も処刑の利を述べ続けているが、クロコダインは頑として譲らず、どうやらハドラーもその策に乗り気ではないのが一目でわかる。

ならば森を焼き払うか、とも提案してみるが

「貴様……！」

本気で言っているのか!? 魔の森は百獣魔団の重要なテリトリーだ!

魔王軍に生きるものの家を、故郷を奪おうと言うのか!」

より激しく反発した。

百獣魔団に属するモンスターの多くが魔の森出身なのだから、

獣王の反発も理解はしていた。

なので、

「……ならば処刑を実行に移さずとも、

“魔の森から出て我らと決戦せよ。さもなくばロモスは血の海に沈む”

とキメラ達、飛行系に叫ばせればよい。

さすれば……奴らは出てこざるを得ない。

例え嘘と見抜こうが……万が一にも真実かもしれぬ限り……

絶対の不利を悟っていても尚、

無価値な他人の血の為に、己が血を流すのが勇者という人種よ」

代案を出してやる。

これにはクロコダインも渋い顔ながら反論の気を弱めていた。

投降した者達との約定を破らず、魔の森の被害も少なくなる。

そして、勇者達は逃亡することも出来ず自ら死地に飛び込んでくる。

「……………処刑の宣伝は、あくまでポーズだと言うのだな？」

「ポーズで済むかどうかは勇者どもの正義感次第……………」

奴らが日限を守らねば、処刑するしかないであろうな……………ぐぶぶぶ。

だが、その心配はあるまい……………奴らは『勇者』だ」

獣王の確認に、勇者を強調して太鼓判を押してやる。

ゴルゴナはある意味で勇者という存在を信頼し、そして熟知していた。

（ロトの子孫・アルスもそうであったが……………、

奇跡などという得体の知れない神の加護だけが奴らの恐ろしさだ）

そう理解していても、

その奇跡がどうしようもないほどに厄介であるから勇者が恐怖なのだが。  
「ケツ…………魔の森を焼き払うってんなら、

氷炎魔団が一肌脱いでやろうと思つてたんだがな…………！」

ニヤニヤと笑いながらフレイザードが獣王へと野次を飛ばす。

それに、ギロリツ、と視線だけで返してやるクロコダインは、

「何はともあれ…………魔の森が無事であるならば我ら百獣魔団も安心できる。

処刑の約定も…………実行する、しないは魔軍司令殿に従おう」

面子と軍全体の利を比べて納得できたようで、ドカツと椅子に腰掛けた。

鬼岩城の椅子ではないので、獣王の巨体が勢い良く降つてきたことで

椅子が悲鳴を上げたが、なんとか壊れずに耐えたようである。

一同を見渡したハドラーが、

「ヒュンケルもそれで良いな」

と確認すると「異存はない」と短く応え、

「よー」

ならばゴルゴナの言を取り入れる！

クロコダイン、人語を操れる飛行系モンスターに先の通りに叫ばせ

魔の森上空を飛ばすのだ。

………各軍の準備をせよ！ 日が沈むとともに出陣する!!」

魔軍司令の号令が下る。

それぞれが立ち上がり準備に取り掛かる。

(……ハドラー達の手腕に期待するか)

ゴルゴナとしては、“他者の盤上遊戯を観戦している”にすぎない。

もともと、余りでしゃべるな、と大魔王から言われている彼だ。

ある程度の助言、助力はするが、

自らの身に危険が及ばない限り彼の命令通り動くだけだ。

4軍からそれぞれ5000を出し、ロモス城守備の総勢は2万。

獣系、鳥系、虫系、スライム系……、

アンデッド、岩石生命体、エネルギー生命体、悪魔神官、サタンパピー……などなど。

様々なモンスター10万が魔の森へと進撃していく。

その威容を、ロモスの民はただただ震えて眺め、見送るしかなかった。

## ロモス決戦 その三

太陽が天の最も高い位置で輝く昼時分。

キメラ達が喚いていた一方的な刻限を

律儀に守った勇者の師弟が魔の森からしつかりとした足取りで歩いてくる。

アバン、ダイ、ポップの3人を出迎えるのは、10万の魔王軍。

王都と魔の森の間に広がる大して広くもない平原を雲霞のように埋め尽くす魔物。

中央にハドラーと百獣魔団、

平原の東……アバンから見て右にアンデッドの群れ、不死騎団。

平原の西、左側に炎と氷と岩石達……氷炎魔団。

そして右左翼の両軍団の背後には二手に分かれた妖魔士団が魔法支援で陣取っていた。

ハドラーへ向かいゆっくり歩を進めるアバン。

その距離が100歩程のところまで足を止め、勇者はかつての魔王をしつかり見据えて、

「約束は守ってもらおうぞハドラー。」

これで、ロモスの人々に手出しはしない……そうだな？」

固い意思の込められた口調で“あの約束”の確認をすると、

「ふふふ……相も変わらさず甘い奴だ。

だが、ノコノコと現れた愚直さに免じてあの家畜どもは生かしておいてやる。

オレが欲しいのは貴様の首一つ！ あんな虫けらはどうでもいいわ！」

拳に力を漲らせつつ魔軍司令が言い切る。

(……これでロモスは安全だ……ハドラーは残酷な男だが約束は守る)

と、最低限の武人の矜持を持つ目の前の魔族を、アバンは一応信頼していた。

かつて自分を誘った謳い文句も、“自分の部下になれば世界の半分を与える”という

もの。

そこにはアバンの生命の保証は一言足りとも触れられていない。

つまり、いずれ必ず殺す……と言っているのも同然であった。

だが、逆に口にした約束は守るのがハドラーだった。

この“意地になりやすく、どこか子供っぽいプライドの高さ”は

アバンが散々、戦いで利用させてもらった欠点でもあり美点でもある。

沈黙しつつ、アバンが魔軍司令を鋭く睨み続けていると、

やおらハドラーが邪悪に笑い出し、



「くくくく、アバン……懐かしいとは思わぬか？」

3人パーティの貴様らと、それを囲む我ら魔王軍……。

17年前に戻ったようではないか。

だが、今日は皆既日食ではなく……そして貴様の味方は未熟者2人！

そしてオレの戦力は当時の比ではないぞ！

それぞれ得意分野ではオレを上回る軍団長が4人！

率いるモンスターは10万だツ！！

どうだ？ いつかの時と同じ言葉をいま一度貴様に贈ろうではないか……。

オレの部下になれ！ そうすれば世界の半分を与えてやるぞ……！！」

見渡す限りの魔物の軍勢。

空と大地をこれでもか言うほどに埋め尽くした光景に、

以前とは比べ物にならない程に肝が座ってきていたポップもちびりそうであった。

逃げ出さないだけかなりマシではあるが、

それは心から敬愛し信頼するアバンが一緒にいるからである。

ダイは、という兄弟子と違いモンスター軍団を睨みつけ闘志に満ちていた。

デルムリン島にいた時とは

一目見て違いが分かるほどに鍛え上げられたダイとポップ。

体は一切の無駄なく引き締まり、ポツプからは魔力が、ダイからは闘気が満ちているのが感じられる。

そして当然アバンも、経験値が貯まり難い領域にまで成長している己に敵しい特訓を課して僅かに1レベルだが成長していた。

ダイとポツプに『特別』<sup>スペシャル</sup>“ベリー”ハードコース』と補習まで教え込んでいる状況で、だ。

漲る闘気を送らせてアバンが、

「……………断る！」

もしYESと答えても、いずれは私の生命を奪うだろう！」

十数年前と変わらぬ答えをハドラーに突きつけた。

それを聞いてハドラーは、

「フフン、答えは変わらんか……………オレの情けが分からんとはなあ……………！」

いいだろう！　ここが貴様の墓場だ！

弟子と仲良くあの世で学芸会でも開くが良い!!」

どこか嬉しそうにしつつ、「百獣魔団!!」と名指しで号令し……………

その瞬間、

「オオオオooooooooooooッ!!!」

空気を震わす遠吠えをあげつつ突っ込んできたのが巨漢のリザードマン。地響きをたて、部下の軍団とともに走ってくる獣王が、

「我こそは百獣魔団の長、獣王クロコダイン!!!」

勇者アバン、素っ首貫い受けるッ!!!」

斧を振り上げながら叫んだ。

しかし、

「お前の相手はおれがする!」

小柄な少年がパプニカ王家のナイフを構え、獣王の行く手を阻む。

「貴様如き小僧がこのオレを止められると思っっているのか!」

むうんッ!!!」

雲霞を振り払うかのように斧を薙いだが、

少年は軽々と飛び上がりそれを避け、越える。

そして、

「大地斬ッ!!!」

クロコダインの頭上目掛け力の刀殺法が振り下ろされた。

獣王は咄嗟に、

「な、なんとッ!?!」

左腕を頭上に突き出して、刃を手甲で受け止める。

ナイフが手甲を軽々砕き、獣王の鋼鉄の皮膚を引き裂く。

「ぬうッ！」

気合とともに左腕を大きく振るうと小柄な少年は木の葉のように振り回され、骨近くまで突き刺さっていたナイフがずりりと抜けてすっ飛んでいったが、

彼は器用に空中で身をひねるとそのまま危なげなく着地するのだった。

クロコダインが、

（なんとという小僧だ……！ 身のこなし……パワー……太刀筋の鋭さ……どれも一流ではないか！）

驚愕し目を見開いた。

腰をやや低く身構え直した獣王は、

「オレの名はクロコダイン。お前の名を聞かせてもらいたい」

油断と侮りを消してそう尋ねた。

もはや子供、小僧として見ておらず、獣王の目には手強い戦士として写っていた。

「おれの名はダイ！ アバン先生の4番弟子だっ！」

少年……ダイが力強く名乗り返すとクロコダインは、

「……アバンの使徒……というわけだな……！」

ニヤリと笑い鬨気を漲らせた。

怒涛のように押し寄せる百獣魔団を、時に切り伏せ時に魔法で一掃しているアバンは、

器用に動き回りながら後衛のポップを匠に守っている。

守られるポップも的確なポジション取りと援護を行っていて

イオラの連発で雑魚をまとめて倒し続けている。

大物がダイに行ってしまったことで少々焦りがあるが、

それ以上に……

(ダイ君の、難易度をさらに上げての修行はほぼ完了……)

卒業試験がわりに丁度いいかもしれませぬ)

という期待があった。

「ポップ！ ダイ君の一騎討ちに邪魔が入らないよう

モンスターを近づけさせないで下さい！ 雑魚は私達で引き受けます！」

ダイは、師のその声を聞いてさらに勇気付けられ、

(先生とポップが、おれのために頑張ってくれている！)

気力が充実してくるのを実感するのであった。

僅かな間も休ませまいと襲い来る百獣魔団。

それ以外の軍団が動く気配がないのは、ある意味当然で

アバンらの周辺は獣、鳥、虫、スライム系で埋め尽くされて

他のモンスターが入り込む余地などない。

魔法の援護射撃なども勇者よりもモンスターに命中する確率が遥かに高い。

(まずは百獣魔団とやら……私達がこれを凌げば間髪入れずに氷と炎の群れか、

あのアンデッドの群れが来るのでしようね……

やれやれ……これはなかなかベリーハードですよ)

アバンは己の懐中の“聖石”の数を確認する。

聖石とは、かつて2番弟子であるマアムに卒業と同時にプレゼントした

魔弾銃まだんガンに使用した魔力を蓄える魔法石のことである。

魔力回復アイテムとして多忙の合間を縫って製作したが、

アバンのしるしに使用されている輝聖石の簡易版でもある聖石は、

輝聖石ほどではないが作成しても熟成に時間が掛かる。

結局完成したのはポップが5個、自分が5個の計10個。

ハドラー曰く10万の軍勢相手では何とも心許ない数である。

勿論、薬草や聖水やら毒消し草やら満月草やら

大量にアバン秘蔵の“ふくろ”に詰め込んでいるが、それでも不安は拭い切れない。

その間にもダイとクロコダインは一進一退の決闘に従事しており、アバンとポップはもはや数えきれない程のモンスターを倒していた。

すでに1000匹は超えたと信じたいところであったが、怪しいところだ。体力や傷、魔力は回復できるが精神はそうではない。

いつ死ぬかもわからぬ真剣勝負を

何時間も連続して行い続けるのは厳しいものがあり、

しかも相手はまだまだ9万倍以上いる。

事前に数を教えられないよりは幾分気が楽ではあったが。

万が一の可能性として、

ダイと激しく切り結んでいる獣王を倒せば軍団が瓦解する可能性も、無くはない。

だが総司令官であるハドラーが現場で指揮をとっている以上、

そのままハドラーが百獣魔団をまとめ上げる可能性の方が強い。

(だが、クロコダインを倒せば士気の低下は否めない！)

頼みましたよダイ君！)

アバン、ポップの師弟コンビは見事なコンビネーションで戦い続ける。

そして、その期待を受ける少年……ダイはというと、

「ぐ、ぬう……！……、小癩な……！」

スピード主体の攻撃でクロコダインを翻弄していた。

手数の多さに斧で受け切れなくなったクロコダインがたまらずに、

「く……、唸れ！ 真空の斧よ！」

叫んで武器から突風の刃・バギを放ってダイを吹き飛ばそうと試みたが、  
「来たっ！ 逆にここがチャンスだ！」

アバン流刀殺法、海波斬!!」

アバンに徹底的に鍛えられたダイの身体能力と判断力は、

歴戦の勇士・クロコダインの隙を見逃さない。

ナイフから放たれた真空波が逆に獣王のバギを真つ二つにし、

「ウオオツ!!? 風を裂いて……!!?」

ぐっ!!!」

獣王の鎧をも一文字に切り裂き、

臓腑に響く重い衝撃に思わずクロコダインがよろける。

そしてその隙を逃すダイではない。

パプニカナイフを素早く逆手に持ち替えると右手と刀身に光の闘気を充填させ、

「アバンストラッシュュッ!!!」

己を弾丸のよう加速させ瞬時にクロコダインの胴へと肉薄し、



「ッ!!」

鋼の肉体を深く斬って駆け抜ける。

瞬間、クロコダインの胴から血が吹き出し、

彼は呻きながら先程とは違い大きくよろけ後ずさる。

「ぐお、おおお……み、見事、だ……」

弟子風情と……悔る心が、あ、あつたとは思わん……！ お、俺の敗けだ……！

それでも斧は手放さず、また膝も折らない。

深手を負ったとはいえ、クロコダインのタフネスの前に

完成されたアバンストラッシュでもその生命を奪いきれてはいなかったが、

紋章の助力無しでここまでの破壊力を発揮できたのは、

偏に特別ベリ<sup>スベンシャル</sup>ーハードコースの鍛錬のおかげであった。

傷口を抑えながら獣王が、「オオオオ……ッ」と吠えると、

百獣魔団の絶え間ない攻撃が止み、アバン達を覆っていた囲みも徐々に緩む。

クロコダインが、

「さあ、俺の首を獲って手柄としろ……！

ダイ………未来の勇者よ……お前にならなくてやつても惜しくない」

斧を投げ捨てて、息も荒くダイへ言う。

遠巻きに観ていたフレイザードは、

舌打ちを一つし「まだ戦えるだろうが……!」と苦々しげに一人呟いていた。クロコダインも、この戦いが後のないものであったり仲間の命を賭けたものであったなら、

どれほど無様であろうとも諦めずに喰らいついて戦うだろうが、

魔王軍の他の軍団長達は皆、無双の実力者であり、

(自分だったら負けはしない……) という自信家達でもある。

敗残者へ向ける視線は冷たく厳しいものがあり、

自分が死んだとて大事はないという思いと、

敗けて醜態を晒すならばいつそ英雄たる勇者の手で散りたいという願いが、クロコダインに(さっさと首をくれてやる……)という答えを出させていた。

ポップはその決着をみて、

「よっしやあ! さすがダイだぜ! おくし、とつととやっちまえ、ダイ!

これで残る軍団長は3人! やりましたね先生!

とはしゃいでいたが、その瞬間

「フィンガー・フレア・ボムズツ!!!」

巨大な5発の火炎球がダイ、アバン、ポップらを襲い、

それだけに留まらず周囲のモンスター達をも爆炎で包み込んでいた。当然、ダイの近くにいたクロコダインも、

「ぐおおおおつ!!? こ、この技は!!」

フ、フレイザードツ!!? 貴様、味方ごと!!」

その身を焼かれながら火炎球の弾道を辿り、

その先に殺気すら込めた視線を投げかける。

獣王の言った通り、そこには

「クカカカカッ!! すまねえな、クロコダイン。

助けてやろうと思ったが、ちよいとばかり狙いがそれちまったぜ」

行く手を塞ぐ獣の群れを蹴散らし走り寄って来ていた氷炎將軍が

少しも悪びれることもなく立っていた。

「き、貴様ア~~~~ツ!! オレの部下をよくも!!」

自身が5発のメラゾーマの巻き添えになったことよりも、

道中蹴散らされ、また目の前で焼き殺された部下達のことを思い怒る。

しかし、

「クククククククッ! 落ち着けよ……てめえが不甲斐ないのがいけねえのさ。

諦めが良すぎるってもんだぜ、クロコダインよ。」

それに……………しびれを切らしたのはオレだけじゃねえ」

フレイザードが指差した先……………、そこには

「ヒュ、ヒュンケル！」

道を塞ぐ百獣魔団を、読んで字の如く道を“切り開いて”きた魔剣戦士が佇んでおり、

彼の手には今しがた首を跳ね飛ばされた暴れザルの生首が握られていた。

「お前までも……………！ よ、よくもオレの部下を……………味方を！」

「ふん……………クロコダインよ……………」

アバンの弟子に死を懇願するとはな……………失望したぞ。

それほど死にたいのならば、このオレが引導を渡してやつてもいいぞ？」  
ルーラを唱えたでもない2将は、

味方を背後から焼き凍死せしめ、あるいは斬り捨てながら  
極々短時間でかなりの距離を踏破しここまで来ている。

アバンも、デルムリン島にてモンスターを蹴散らしながら

高速で全力ダッシュをした例があるにはあるが、

常人ではおよそ信じられぬ事実である。

血を垂れ流しながらもクロコダインが、

「なるほど……オレを処刑しようというのか……！　だがッ！」

左腕に渾身の鬨気を溜め、その腕を一瞬肥大化させる。

だが2将は動じることなく、

「おいおい、落ち着けよ。　てめえを処刑しようってんじやねえ。

ハドラー様の命で連れ戻しに来たのよ……、

ヒュンケルツ!!」

フレイザードがクロコダインの気を引き、

その隙をついて、

「海波斬!!」

音速の剣撃波をクロコダインの足元に放ち、煙塵を巻き上げ、

視界とバランスを奪った挙句に、

「おネンネしてなッ!!」

懐に潜り込んだフレイザードの爆炎<sup>フレア</sup>パンチを、

死んでも構わないとばかりに鋭くみぞおちに打ち込まれて流石の獣王も昏倒した。

犬猿の仲である氷炎と不死の団長であるが、その割には良いコンビネーションと言えた。  
突然の仲間割れに呆気にとられたアバン達……、

であったが、それ以上に衝撃的なことが目の前で起きて、一同は啞然とした。

「ア、アバン流刀殺法……………!!?」

「な、なんで先生の技を!!」

「まさか……………その名、その声、その太刀筋……………!」

似ている……………!! ヒュンケル、あなたなのですか!!?」

ダイの、ポップの驚嘆。そして……………、

余りに突然の、意外な場面での1番弟子との再会。

常に冷静さを失わないアバンでさえも

一瞬思考が止まる程の……………まさしく青天の霹靂。

「……………久しいな、アバン。」

そうだ……………! オレはヒュンケル……………!!

貴様の1番弟子にして、魔王軍6団長の1人……………、

不死騎団長ヒュンケルだ!!!」

瞳の輝きしか覗けぬその兜の隙間からは、

憎悪の眼光がぎらぎらと燃えたぎっていた。

## ロモス決戦 その四

瀕死に追い込まれ意識を刈られたクロコダインを肩に担いだフレイザードは、狼狽え動揺していた百獣魔団のケモノ達に獣王を放り投げ、

それを見た巨大なガルードが慌てて飛んできてクロコダインを空中でキャッチする。

「おまえらのご主人様はリタイアだ！」

魔軍司令からの命令を伝える！

百獣魔団は後方にさがり妖魔士団の元で休むこと……わかつたな！

疲弊した兵なんざ邪魔なんだよ！ とつとと下がりやがれ！」

睥睨すると、獣王が倒れたこともあって氷炎將軍に怯えた百獣魔団は、

アバンらの囲みを完全に解いてゆつくりと後退していく。

そして……当然、勇者達を休ませる気のないフレイザードは、

「氷炎魔団!! 前へ!!」

氷の右手を掲げ、振り下ろすと、

「カカカカツ！ フレイザード様のご命令だあ〜！」

「シャシャシャシャ〜！ 氷炎魔団、前進〜！」

陽気なフレイとブリザード達が踊るように宙を舞い、  
爆弾岩や溶岩魔人、氷河魔人らが地を進む。

「クカカカカカー！ツッ!! お次は我ら氷炎魔団が相手してやるぜえ！」  
意気揚々と笑うフレイザードだったが、

軍団に命令を飛ばしている隙に何やら事が進んでいたのだった。

軍団長を倒せば僅かなりとも軍団に隙が生じる。

一度、混乱すれば人間として軍団を立て直すのは難しい。

群れの中を素早く引つ掻き回すように動き乱戦に持ち込めば

指揮官をうしなつた魔物の軍団は、

強い闘争本能も手伝って流れ弾などから同士討ちもあり得る。

それに乗じて3人一丸となって魔軍司令ハドラーに突撃し、討つ。

アバンはこれを、割りと分が悪くない大逆転の戦法だと計算していた。

もしハドラーを倒すのに失敗する……あるいは魔王軍が瓦解せず、

そのままアバンらを狙って猛攻を仕掛けてくるようなら、



その時はバシルーラで弟子2人を逃すつもりであった。

が、アバンもダイもポップも、その打ち合わせ通りには動かなかった。

いや、動けなかった。

「ヒュ、ヒュンケル……!」

「い、一番弟子……だつてえ!」

「先生……! いったいあいつは!」

全身鎧の男……魔劍戦士ヒュンケルはマントをなびかせながら、

「くくくく……懲りずに”勇者の家庭教師”か。」

気をつけたほうがいいぞ、アバン。

卒業と同時に、そいつらがその首に刃を突き刺すかもしれないぞ……。

それとも、オレの時のように返り討ちにするか?

ならば、今度はとどめを刺すことを忘れぬ方がいい。

オレのように……正義の非力さに失望する前に、な!!!」

言い終わるやいなや頭を振り上げ、

兜の鍬形のような波打つ飾りがより大きくしなつたかと思うと、

鋭くうねつてムチのようにアバンらを薙ぎ払う。

「どえええ!」の、伸びたあ!」

「危ないポツプ！」

「二人共伏せなさい！ 海波斬!!」

即座にアバンが反応し、ヒュンケルの蛇腹剣を真空の刃で撃ち軌道をずらすと、そのまま魔剣戦士の頭飾りはあらぬ地面を抉るのだった。

鎧の魔剣を撃墜したその腕前を見てヒュンケルは、

「ほう……なるほど、腐つても元勇者。」

ハドラーを退けたのもまぐれではないらしい。

歯応えがありそうで安心したぞ……すぐに死なれてはつまらんからな」

くぐもった笑いを漏らすと、ヒュンケルのやや後ろから

「てめえヒュンケル！」

抜け駆けしやがって……マヒヤドツ!!!」

怒鳴り声が聞こえてきて、声の主はそのまま

大範囲に氷の猛吹雪を巻き起こし、不死騎団長ごと勇者たちを凍てつかせる。

当然、ヒュンケルに魔法が通じないと知ってのことだが、

(ケツ、このまま凍てつてくたばっちゃうえばいいのによ)

という思いもまた当然のようにこの怪物は持っていた。

「ブリザードども!! てめえらも攻撃だ！」

この戦場を凍りつかせてやりなツツ!!」

との掛け声とともに、「シャシャシャシャッ!」と猛った氷のモンスター達が、一斉にヒヤド系とこおりのいきを撒き散らして、

瞬く間にロモス南部にマルノーラ大陸が如き極寒を再現してしまう。

「フレイザード様ア~~~~」

はやく行きましょう! 不死騎団長に手柄をもつてかれちやいますよ」

わあわあと騒がしく口を開いたブリザードBが、

己の軍団長の性格を知っているが故の提案を述べると、

「はん……まあいいさ……やらせとけ! ……百獣魔団どもの戦いを見たが、

勇者どもは強エ……それにクロコダインが早々に手を引いちまったから

連戦の後とはいえ未だ奴らは余力がある。

ヒュンケルを先にだしときやいい感じに下拵えをしてくれるだろうよ。

勇者どもがもつと疲れるまでオレ達は”待ち”よ……………」

炎のような凶暴性と、氷のような冷徹さを見せながらフレイザードは笑うのであった。

そんな怪物が原因となって吹き荒れる猛吹雪の中で、

「ふんツ、フレイザードめ……オレごと氷雪呪文を……………まあいい。

見て分かる通り、オレにはこの吹雪も意味は無いが、  
貴様らには応えているようだな」

せせら笑っている魔剣戦士が見つめる先には、

あまりの寒さに意識を失いそうになっているポップ。

と、それを覚えたてのメラで必死に温めてやるダイがいて、

「おい、ポップ！ 寝ちゃだめだ！」とビンタまでしていた。

アバンにも冷気のダメージは入っているようだが、

しつかりとした様子で立ち続けて一番弟子を見つめ返しており、

「なぜあなたが魔王軍にいるのか……………」

薄々とはありますが想像はつきます……………」

ですが、ヒュンケル……私が憎いのならば、私だけを狙えば良いはず。

なぜ、無関係の人達にまで牙を向くのですか！」

アバンの、かつての弟子を見つめる瞳は何とも言えぬ感情をはらんでいる。

愛情、懐かしさ、悲しさ、焦り、同情、戸惑い、怒り……。

だが、怒りに限ってはヒュンケルにだけ向けられたものではない。

むしろヒュンケルへの怒りは微々たるもので、その感情の大半は己へと向けられたも

の。

(なぜ……この子がこうなってしまふ前に、私は……救つてあげられなかったのだ！  
バルトスさん……私の力が及ばなかったばかりに……)

ヒュンケルに修羅道を歩ませてしまった……どれだけ謝つても足りはしない……)  
アバンは心の中であつてない程に嘆き悲しむ。

紙でできた星の首飾りを誇らしげにかけていた地獄の騎士は、

今もあの世で……きつと自分以上に悲しんでいるのだ。アバンにはそう思えた。  
深い葛藤に苛まれるアバンを見て、魔剣戦士へと堕ちた弟子は愉快そうに笑う。

「フハハハハハ！ それだ！

その顔が見たかつたぞ、アバン！

なぜ無関係の人間を巻き込むのか………教えてやろうツ！

それは貴様が苦しむ顔を見たいからだア……ツ!!」

「うっ!？」

再度振り回される兜飾りの蛇腹剣が、ビュウビュウと風を切つてアバンとその使徒達を襲う。

メラの温もりと葉草の一気食いで、猛吹雪の中かろうじて態勢を立て直したポップが、

「うわわっ！ ま、またかよー！」

「ポップ！ おれの後ろに隠れて！」

ばりばりの前衛である弟弟子の後ろに慌てて回り込む。

アバンが襲い来るムチの刃を鋼の剣で絡めとり、

「むっ……！」

ヒュンケルの動きを僅かに制限する。と同時に、

「ダイ君！ 今です」

既に逆手持ちに切り替えていた戦闘センスの塊たるダイへ言うと、

「アバンストラッシュッ！」

猛吹雪の向こうに見える人影に向かって、

ダイが速射性と射程に優れるAタイプアローのストラッシュを仕掛ける。

だが、圧倒的な即座で背の剣を抜き放った魔剣戦士は、

そのままの勢いでアバンストラッシュを抜刀斬りで“叩き斬り”霧散させてしまう。

ダイは驚愕し、

「ああ!? アバンストラッシュが……！」

アバンもまた、

（ダイ君のストラッシュは、既に私にも劣らない……いや、むしろ単純なパワーは上。

それをいとも簡単に斬って払うとは……………）

あの子がそれだけ腕を上げたのもあるでしょうが……、それ以上にヒュンケルが手にした剣のあの異様な輝き……そして、邪悪さ……！なんと恐ろしい業物を手に入れたのですか……ヒュンケル）  
驚嘆しつつも幾らか冷静さを取り戻し、分析する。

「くくく……アバンストラッシュか……」。

だが、この邪剣ネクロスの前では敵ではない。

鎧の魔剣とネクロス……

そしてこのオレの天賦が合わさった時……オレに敵はないッ!!」

ヒュンケルが荒々しく言い放ち思い切り良く頭を仰げ反らせると、

「っ!？」

パキインッ、とアバンの剣が巻き付いた蛇腹剣によって斬り割られ寸断され、雪に埋もれつつある大地をドンツと蹴って魔剣戦士が駆け出す。

その速度はまさに突風。瞬間的に距離を詰め、

「大地斬ッ!!」

唐竹割りにネクロスが打ち下ろされアバンを両断……

したと思えたがその像はすぐに掻き消えて、

「うっ!？」

ヒュンケルの背後から彼の足元へ鋭い蹴撃が襲い、

魔劍戦士の視界が一瞬、白い空だけになると

「てやああ!!」

掛け声とともにダイが宙から斬りかかる。

だが、ヒュンケルはまたも首をしならせ蛇腹剣でもってダイを薙ぎ払い、

弟弟子の肩に浅くない斬撃を見舞いダイの剣の軌道をブレさせ、容易に回避した。

ヒュンケルが素早く起き上がり態勢を整えようとした瞬間、

「メラゾーマっ!!」

ようやく魔法を当てられるチャンスとふんだポップが得意の呪文を放つが、

「あ、あれ?」という素っ頓狂なポップの声が全てを物語る。

「バカめ……マヒヤドと氷の息の嵐がオレに効いていないのがわからないのか!」

オレの鎧には氷と炎……そして魔法も効かん!!」

炎の中、平然と立っている不死騎団長はそのままポップを無視し、

大きく後方へ跳躍し距離をとり仕切りなおす。

「なかなか見事な蹴りだったぞアバン……」

やはりアバン流刀殺法の創始者だけあって大地斬は見切っているな。

だが遊びもここまで……。



闇の闘法の元で磨いた我が剣技は既にアバン流を超えている。

それを今、証明してやろう………！」

かつての師、アバンを嘲笑うかのようにアバン流を使用する魔剣戦士。

アバンの頬を一筋の汗が伝う。

(危なかった……ヒュンケルが大地斬ではなく海波斬を使っていれば……)

残像ではなく、今頃本当の私が真つ二つになつていたのでしようね)

そう予感させる凄まじい殺気がアバンにも、そしてダイにも伝わってくる。

このような強敵を前にして、しかも冷気は確実にダメージを勇者達に蓄積しており、

こま目に回復をしているが追いついておらず、

段々と指先の感覚がなくなつてきており凍傷も目立つてきている。

それに、アバンは鋼の剣をへし折られてしまい、

すでに予備の剣を装備しなおしたものの

鋼の剣よりランクの落ちる鉄の剣では

1番弟子がネクロスと呼んだ業物と切り結ぶのは難しいだろう。

魔法は効かず、

常に(毎ターン)吹き荒れる氷雪呪文と凍りつく息の嵐。

「だが………ここで諦めるわけにもいきません。

非行に走った教え子を正しい道の戻すのも、教師の務めですからね。

ダイ君……氷炎魔団とフレイザードさんとやらは直接攻撃はしてこないようです。安心して……というのも変ですが、ポップの回復をお願いします。

魔法使いのHPでは、この吹雪に回復が追いつきませんからね」  
どこか余裕を感じさせながらアバンが言う。

危険な場面であろうと、それを和ませ皆から信頼を勝ち取り、そして導く。

それがアバンの真骨頂。

しかし、ダイは慌てて言う。

「でも先生！ おれも一緒に戦ったほうが！」

「……………ダイ君、ポップを見てごらんなさい」

「えっ」

師の指の先を見るとそこには、

「……………あつたけえな〜、あつ、あの子すっげ〜かわいい。

おっぱいでけーなー……………うひ……………むっちむちしてて好みだなあ」

などつぶつぶ言いつつウトウトしているポップの姿があり、

「わー！ またかよ、ポップう!!」

ダイは慌ててビンタの連撃を親友の頬へ浴びせると、

「んべべべべべつ!!」とポツプが痛みに苦しみながらも現実へ帰還した。  
「というわけです。君の体力ならこの猛吹雪でもなんとかなりますが、

ポツプは魔法使い体質……おねがいますね、ダイ君。

んなあゝに、パパつと行つてちよつとあの子にお置きしてきますから、  
まあ薬草でも2人で食べまくつて待つて下さい」

ナハハと笑いながら軽く手を振つていたアバンだが、  
ヒュンケルへ向き直つた時、その顔に一切笑顔はなかつた。

「フツ……も方がいいのか？」

今生の別れの割には随分あっさりしているな」

魔剣戦士が殺気を段々と強めて言うが、しかし、

「待つて頂いて感謝しますよヒュンケル。

そんな心配までもらつて恐縮ですが、私は……負ける気はありませんから」  
真顔でアバンが言い放つた。

その瞬間、

「ほぎいたなっ!!」

僅かに顎を引いたヒュンケルの動きに連動し、頭部の蛇腹剣が空気を斬つてしなり、  
生きた蛇のようにアバンへ一直線に襲いかかる。

それをアバンは閃熱呪文の爆発で逸らし回避する。

魔法が効かない金属で出来ているとはいえ、爆発の衝撃は普通に通るのだ。が、もはや蛇腹剣がともに通用しないことは双方承知。

爆発が起きたその一瞬で、

「ぬん！」

お互いが剣の射程距離に詰め寄っていて鏢迫り合いとなり、互いに力で押し合いながら魔剣戦士が驚愕する。

「なんだと……！ そんななまくらでオレのネクロスと!!？」

「まだ未熟ですねえヒュンケル！」

勿論、真正面から受けては鉄の剣はひとたまりもありませんが、

ちよーつと角度をつけてやるだけで結構大丈夫なんですよ」

その言葉を受けてヒュンケルの瞳に滲みでる憎悪がより強くなり、

「教師面をするなア——!!」

力に任せてそのままアバンを押し飛ばす。

が、少しも重心がぶれることなく隙を見せないままに、

「グランドクルス！」

柄に手を当てたアバンが中距離から闘気の閃光を放つと、

無言のままヒュンケルが迫る光に向かって魔剣を力いっぱい斬り上げ、先のダイのストラッシュのように霧散させた。

「小賢しい真似を……」と小さく呟いた魔剣戦士はアバンとの距離を再度詰めて、常人では捉えられぬ程の速度で2人が刃を合わし続けると、剣の摩擦が両者の間に美しい火花を生じさせるのであった。

20、30、40とその数は増え続け、50合ほど打ち合っついに、  
(強い……………ハドラーの言った通り、かなりのレベルだ！

オレに修行をつけていた時など比べ物にならない！

さつきは鋼の剣を軽くへし折ってやったというのに、

本気になったアバンは鉄の剣でオレと張り合えるというのか！)

剣の腕に絶対の自信を持っていたヒュンケルでさえアバンの強さを悟る。

しかしその程度で弱気になる程、ヒュンケルの師への憎悪は軽いものではない。

アバンを睨んだまま後ろに数歩分、跳躍し……

「さすがは世界を救った勇者……………」

さすがはかつての我が師……………！

口力と違い、毫碌しておらんようだな！ それでこそ殺しがいるというものだ

！」

アバンに揺さぶりを掛ける為にあの男の名を出す。

魔劍戦士の策の通りにアバンは、

「……………!! なつ、ま……まさか! ヒュンケル!

あなたは、まさか!!」

回転の早い頭でかつての愛弟子が何を言わんとするかを察せてしまう。

「クク……………ハハハハハハッ!! そのとおりだ!

ネイル村を襲い、ロカとレイラを殺したのはこのオレだ!!」

かつて卒業と同時に自分の命を狙い、

咄嗟の返り討ちで川底に殴り飛ばしてしまったヒュンケルとの再会。

そしてその一番弟子が魔王軍の将となっていた衝撃。

それらに勝るシヨックを伴う真実が、今アバンを襲う。

自分が育てた少年が、罪なき人々を殺し……親友達を殺してしまった。

それはつまり、巡り巡って勇者アバンその人がロカを殺したのと同義なのだ。

実際はそうでなくとも、アバンの強すぎる責任感はその理解してしまう。

アバンは己の手が震えてくるのを隠せていない。

「なんと……恐ろしいことをっ!!」

あなたは、ロカとレイラの子も……、

幼いマアムまで……自分の妹弟子まで殺したというのですか!!」

「マアム? 知らんな……だが、ネイル村にいたのなら死んでいるだろう。

オレが皆、斬り殺した……老人も赤子も、な!

だがロカの子だとわかっていれば、もつと鬨つて殺してやったのだがな。

事前知っていればと悔やまれるぞ! ハハハハハ!!」

大笑いをし、再び斬りかかってくる魔劍戦士。

精神的に大いに乱れたアバンは、

「ヒュンケル……く!?!」

何合目かのネクロスの一撃をとうとうまづい角度で受けてしまう。

鉄の剣が溶けたバターのようになクロスを迎え入れ、

ズルリ……と邪剣の黒い刃がアバンの左肩口に飲み込まれていくと……

ゴプリ、とアバンが血を吐いた。

その一瞬、

師と兄弟子の戦いを見守っていたダイとポップの時間が止まったようだった。

## ロモス決戦 その五

(殺<sup>と</sup>った……！)

ヒュンケルはそう確信した。

袈裟斬りの形で肩口から斬り進み

心の臓を通して越えてそのまま斜めに両断してくれる。

魔劍戦士はそう思ったがしかし、

「ぬう!!」

アバンが裂帛の気合とともに闘気を込めた両の手でネクロスをがっしり掴むと、ヒュンケルがいかに力を込めようともそれ以上斬り進むことができなくなった。ピクリとも動かない、というわけではないがかなりのパワーで固定されている。

その時、アバンがまばゆい光に包まれて、

斬り裂かれつつあつた肩口の傷が徐々に塞がり始める。

「ベホマの光……？ フツッ！」

小馬鹿にするように笑ったヒュンケルは、左手だけをネクロスの柄から離し

「闘魔傀儡掌!!」



魔劍戦士の左腕からどす黒い、

糸状になった暗黒闘気が瞬間的に伸びてアバンへと絡みついていき、

ヒュンケルが左手の指を一本折り曲げただけでアバンの舌の筋肉が硬直し、

ネクロスの刃を抑えていた手の指が無理矢理に開いていく。

「……っ！ あ……ぐ………っ!!」

回復呪文は、軽傷ならば瞬時の回復も可能だが

今しがたアバンが負ったような深い傷ならば例え最高位のベホマといえど、

長く唱えなければ全快はしない。

アバンが唱えたベホマは、闘魔傀儡掌によつて妨害されて徐々にその光を失つてい

き、

抵抗虚しく指も震えながら強制的に開かされて魔劍が解き放たれ

「終わりだ！ アバン!!」

ヒュンケルがそう叫んだ瞬間、

魔劍戦士の背後を一陣の風が横切つていき、

そこに僅かな違和感を感じた彼であつたが、それをすぐに塗り潰し、

すぐ目の前の死に掛けにとどめを刺さんとしたが突然両手から力が抜けていき…

それを自覚した途端ヒュンケルがごぼり、と大量の血を吐いて兜の隙間から溢れさせ

た。

「な、何が…起き、た…ツッ!」

気づけば闘魔傀儡の掌も消え去り、

ふらついた足取りで己が意図しないのに数歩ヨロヨロと後ずさる。

そのまま持ち主に引きずられ、ずる…とネクロスがアバンの体から抜けると、

解放されたアバンは傷口を押さえながらある一点へ視線を送っていた。

そこはヒュンケルではない。彼を通り過ぎたところ。

「ダイ君…!!」

(ダイだと? ああの青二才がオレに何かしたというのか)

そう思ったヒュンケルがダイを見ようと振り向く…寸前、

ヒュンケルの膝が折れて、

いつの間にか雪原に溜まっていた己から流れ流れた血だまりにそのまま突っ伏し、

ヒュンケルの意識はそのまま暗転した。

倒れ伏した彼の背には大きな斬撃の跡が一筋刻まれている。

それは深く、広く、皮一枚で胸と腹が繋がっているに過ぎない程の致命傷で、

おびただしい量の血を今もドクドクと吐き出し血の池を作っていた。

「ば…バカなツッ!! オレでも小僧の動きを捉えられなかったぞ!」

い、一瞬だ!! 一瞬で、あのヒュンケルの背を斬り裂いた!!  
そ、それに……あ、ああ……あ、あ、あれはア……あの紋章はツ、

ドラゴン!!! 竜の紋章!!!」

戦場に設置されていた

一段高い指揮用の移動台座から全てを覗いていた魔軍司令が恐れおののく。  
彼のような若い魔族ですら知っている天界の伝説。

今、軍団最強の魔界の英雄ボリクスが戦っているはずの竜の騎士。

その証を額に顕現させた少年が目の前にいたのだ。

一度に2人の竜の騎士が世に出現するなどありえないことで、

少なくともハドラーの知る伝承ではそうなっている。

「あ、あいつが竜の騎士だともいうのか?」

だが竜の騎士はカール戦線でボリクス達と戦っているはず……!!!

それにあの小僧の名は、たしか……そうだ、ダイだ!

バランとは違う個体の竜の騎士ともいうのか!!」

ハドラーは全身に脂汗をかき、動揺を隠せぬ様子で、

魔軍司令のその様と……そして少年の額に輝く紋章を見つめる八つの瞳が怪しく光る。

「間違いなくあの紋章は竜の騎士……!!!」

グブブブブブブブ………！ まさか生きていたとはな！

「どういうことだゴルゴナ！ おまえはダイを知っていたのか!?」

ゴルゴナの知識と経験は自分を上回っており、

だからこそ参謀として側に置いていたのだ。

知っていたのならばさっさと教えろ、という視線を背虫の冥王へ向けると

「……………魔軍司令殿……………フレイザードだけでは竜の子には勝てぬ。

我の出撃をお認め下さいますな？」

「な、なに!? 待て！ い、イカンツ!! どけえ!!」

ハドラーの言葉と視線を相手にせず、そのままゴルゴナの体がフワリと浮かぶと、

慌ててハドラーが周囲の親衛隊を殴り飛ばして指揮台座から飛び降りる。

「腐……病……葬……怨……魔……………腐……病……葬……怨……魔……………!!」

ヒュンケルが倒れた今、不死騎団の指揮権は我が元に還る。

妖魔士団……………不死騎団……………勇者どもに殺到し、圧殺せよ!!」

暗黒の瘴気を固めて黒雲とし、それに悠然と身を預けると、

黒雲が発する腐毒が直下の移動台座とその周囲のハドラー親衛隊に降り注ぎ、

「うっ、うがっ、うぎゃあああ!!」 「ひ、ひいい！ ぐ、ぐる…じい!!」

「ひいひいい！ か、体が溶けるううう！ ハドラー様あああ!!」

断末魔をあげてガーゴイルやアークデーモン達が腐り崩れていく。それらをハドラーはただ黙って見つめ、

(お、恐ろしいやつ……！ 逃げるのが遅れていたら……オレも……)

恐怖に引き攣った蒼白の顔となる。

もはや完全にハドラーを眼中から消したゴルゴナは瘴気の上から、

「ぐんぐんぐんぐんぐんぐん……大蠍の赤い心臓、アンタレスが燃えておる……。

天に燃ゆる金蠍宮スコレオンの火の心臓よ……。我が従属にかりそめの命を与えるべし……。

百獣魔団よ……冥府の底より来たれ」

世の摂理に逆らう悪魔の文言を呪詛のように唱えると、

やや離れた前線……勇者たちの周辺で、

「あ、ああ!! う、うわああ!!」

し、死んだモンスターがっ、い、生き返ったああ!!」

ポツが怯えながら叫んだ通りの事象が起きた。

「こ、これは……う、ぐ……」

なんという、お、恐ろしい……魔法、なのか!? 信じられん……!」

ヒュンケルに負わされた傷を再度ベホマで癒しているアバンだが、

血を多く流し過ぎたし、なにより単純に傷が深すぎる。

視界と足がふらついて定まらないが、すかさずポップが走り寄って来て「せ、せんせえええつ！ ほ、ほんとに良かった！」

で、でもあれ……一体どういうことっすかあ……!!」

恩師を案じ、支えながらも縋り頼る。

アバンと共に倒した1万體近くの百獣魔団の死体達が、

負った傷もそのままにズルリ、ズルリと立ち上がり、迫ってくる。

上空からはサタンパピー達が……、

地響きを立てながら不死騎団の骸骨達が……、

「クカカカカカツ!! 勇者どもオ！ てめえらはおしまいだぜ！

ゴルゴナの旦那が動き出しちまったからなあー!!

クククツクツクツ……ブリザード、氷河魔人！ もつとだ!!

全てを凍てつかせるのだア!!」

そして、嚴重に勇者たちを囲む氷炎魔団が更なる猛攻を加えてくる。

猛吹雪のダメージに回復を阻害され未だ傷と体力が癒えきらぬアバンは、

(い、いかん……これは……まずい。)

な、なんとかか……ポップとダイ君だけでも……逃さなくては!)

危機感を募らす。

その時、

「う、ううううう……!!!」

魔物たちを睨み続けていたダイの額が強く光輝き、

少年の小柄な肉体を誰の目でも分かるほどの強力な闘気が包み込む。

「うおおおおおっ!!!」

ケモノのように吠えたダイの内から更なる闘気が噴出し、

餌に群がるように寄ってきた魔王軍達を吹き飛ばす。

這いずり寄ってきていたアンデッド達がバラバラになって消し飛び、

膨大な闘気流が氷炎魔団の前衛を消滅させる。

そしてそれだけの闘気の余波は、とうぜんポップとアバンにも襲いかかり、

「まずい………！　ポップ、伏せなさい!!」

「うべえっ!」

闘気弾で地面を抉り小さめの穴をあけたアバンは、

反射的にポップの頭をそこに叩きつけて伏せさせる。

「な、なんだア!!　あのガキ………　まだこんなパワーを!!」

伊達にヒュンケルを瞬殺してねエってことか………!」

距離があつたため、闘気はフレイザードの体表を軽く炙っただけで

ダメージこそほぼ皆無だがダイの迫力に気圧される。

(クロコダイーンとヒュンケルを立て続けに破ったあのガキはヤバイ。

……………アバンの方が仕留めやすく手柄もデケエ……………、

それに、ゴルゴナは旦那はあのガキが光りだした途端に動いた。

旦那の狙いは十中八九ダイとかってガキ……………つまり！)

瞬時に判断したフレイザードは、

「氷炎魔団はアバンと魔法使いのガキを狙え!!」

そいつは妖魔士団に任す！ 氷炎魔団、突撃！ アバンを仕留めろ!!」

氷の瞳を見開いて号令を下す。

「ぐぐぐぐぐぐぐ……………そう、それでよい。」

貴様ではダイの相手は荷が勝ちすぎる。

幼き竜の騎士よ……………貴様の相手は我がしてやる……………」

黒衣から爪を鋭く突き出したゴルゴナは、

そのまま腕を天にかざすと

「腐……………病……………葬……………怨……………魔……………ぐぐぐぐぐぐ」

見る見るうちに爪の手のひらの先に純粋な破壊エネルギーの球体を生じさせ、

「ていやあああーっ!!!」



眼下のダイ目掛け撃ちだす。

「……………お前が…お前がモンスター達を苦しめているのか!!  
許すものか……、お前だけは!!」

ダイの鬨気に散らされたゾンビモンスター達は、  
消滅したものはまだ幸福であった。

多くのモンスターはただ体が千切れ、ひしゃげ、  
より悲惨な苦しみを伴ってダイに向かわされる。

モンスターは友達。そう育ってきたダイにとつて、

彼らの怨嗟の声とおぞましい姿を見るのは耐え難いことだ。

高速で迫るゴルゴナの光弾をにらみ。パプニカナイフを逆手に持つと、

「アバンストラッシュツツ!!」

ドラゴニックオーラ  
竜鬨 気が込められた奥義を叩きつけ、

冥王の光弾とストラッシュがぶつかった瞬間、大きな爆発が起き轟音が響く。

(大した威力だ……。父には劣るが、あの年であれば出来るといえよう。

……………確実に捕らえるためにもっと追い込みをかけるか……)

「ぐぐぐぐぐぐ……我を相手にしている余裕があるのか？」

百獣魔団の死体はまだまだある……………そして不死騎団も到着した。

グブブブブ！ かかれ、かかれ……安らかな死が欲しければ我が命に従え！」  
「き、貴様あゝ！！ うわっ?」

尚もダイはゴルゴナを射殺さんばかりに睨んでいたが、  
大量のアンデッドが波のように四方八方から襲いかかる。

「う……うう……痛い……殺して……殺してくれエ……」

「助けて……いやだあ……もうオレを起こさないで……グガガガ……」

「死なせてくれ……痛い……全身が焼けるうう……痛い、痛いイイ」

動く骸となったモンスター達から絶えず聞こえる恨みのコーラスが、  
ゴルゴナの耳にはとても心地よく聞こえ、

そしてダイにとっては心がバラバラになりそうな程に苦しく聞こえる。

「やめろ……やめろおお!! やめてくれ皆!! やめてくれよおお!!」

涙を流しながらダイは枯れ葉を薙ぎ払うかのように

ナイフで、素手で、呪文でモンスター達を殺す。

竜の騎士として覚醒しているダイに雑魚モンスター達が敵う道理はない。

だが、竜の騎士の力は確実に浪費されるのだ。

「グブブブブ……もつとだ。もつと激しく、執拗に……」

まだ死ぬことは許さぬ……甦れ、百獣魔団よ。ダイを攻撃せよ」

飛び散った肉片と滴る血から異形のアンデッドモンスターが生まれ、新たな脅威となってダイへ再三攻撃する。

アンデッドを破壊すればその残骸から

2体3体と異種再生をするよう改造されての強制蘇生。

ダイとモンスター達にとっての悪夢は終わりを見せない。

(ヴェルザーを破った竜魔人形態……、やはり変身は出来ぬようだな。

幼さ故か……混血故か……どちらにせよ、

ならばダイに打つ手はない……このまま削りきり生け捕りにしてくれよう)

もはやダイの周囲は異形の怪物で埋め尽くされて、

空からは数百体のサタンパピーが

アンデッドごとダイ目掛けてメラゾーマの集中砲火を浴びせている。

アバンとポップも同じように地上と空を氷炎魔団に囲まれて、

フレイザードは波状攻撃を繰り返し

獅子狩りの要領で勇者と弟子を追い詰めていた。

前方で繰り広げられる勇者達と魔王軍の戦いを見ていたハドラーは、朽ちた部下の死体を不機嫌そうに踏み潰し、

「チッ！ ゴルゴナめ……オレを軽んじおって！」

……だがまあいい、奴がアバンドもを追い詰めているのは確かだ。

それに、前線にはフレイザードもいる。ゴルゴナ一人の手柄にはさせんぞ。フ、フフフフ……あの小僧がドラゴンの紋章を発現させた時は驚いたが、お陰で気に食わんヒュンケルも戦死し、

そしてオレの指揮のもと勇者と竜の騎士の一匹を始末したことになる！

バーン様もお喜びになり、オレの地位も安泰というものだ！

もうポリクスにもゴルゴナにもでかい顔はさせん！」

魔軍司令の勝利を確信した高笑いが混沌の戦場の空に響き渡った。

「ありやあ、これは急いだほうがよきそうだね。」

あの馬鹿でかい、勝ち誇った感じの笑い声は聞き覚えがある。

あそこに敵の親玉がいるようだ……全速力で行くよ、マアム、ミーナ」  
はい！と元気よく返事をする道着姿の美少女を伴った老人が

更に走る速度を上げ、もうもうと煙立つ戦場へ向かっているのをまだ誰も知らない。

## ロモス決戦 終幕

圧倒的な物量がダイとアバン、ポップらに襲いかかっている。

大乱戦となってダイとアバンらは完全に分断されていて、

大地を埋め尽くすゾンビがダイに脇目もふらず突進し、

しかも1匹殺せば肉片が3匹4匹と新たなゾンビを生み出して終わりは見えない。

アバンとポップには炎と氷のエネルギー生命体や岩石体達が

我が身を顧みず突撃し続けており、

中でもフレイムと爆弾岩の抱き合わせ突撃はただただ脅威だ。

そこから中で大爆発が置きまくっていてポップをかばい続けているアバンは満身創痍。

現在までに魔王軍は3万以上の兵を失っていて、

その内訳は最も被害が多いのが断トツで不死騎団である。

4万のうち2万という被害を叩きだしており、

普通なら半分も討たれば壊滅扱いで撤退ものであるが、

何故か今現在、不死騎団の数は5万に増えている。

確実に2万はダイに倒されたというのに戦っているうちに増えたのである。

これこそがゴルゴナが不死騎団を率いた時の恐ろしさ——  
——『無限増殖の軍団』である。

味方が討たれれば討たれるほどゴルゴナの屍術はより輝き、そこに敵や巻き込まれた第三者の死体が加わってしまえば、不死騎団を止めるのは竜の騎士とて困難だろう。

ドルオーラで大陸ごと消し飛ばすしか無い。

破邪呪文の聖なる力で消滅させれば万々歳だが、

ゴルゴナには光葬魔雲という破聖の呪術があるのだ。

バーンがゴルゴナに術を行使し続けることを許可したのならば、  
比喩表現ではなく物理的に地上は死者で埋め尽くされるだろう。

アレフガルド時代のゴルゴナには出来なかつたであろうが、

この世界はルビスの世界と比べて少々こじんまりとしていて、

しかも今のゴルゴナは当時よりもレベルが上がっており、  
しかも今の作業だが不可能ではない。

だが、大魔王の地上侵略は天界攻略の前哨戦に過ぎず、

本番へ向けた新戦力の発掘と育成を兼ねている。

ミストバーン・キルバーン・ゴルゴナの三名は既に天界戦で通用する実力で、

地上戦で積極的に使う予定が大魔王に無いのは、人間にはある意味で幸福だった。しかし竜の騎士を目の前にすれば話は違う。

しかもそれが幼体であるなら尚更だ。

冥王の目の前の幼き竜の騎士は、今も大量のアンデッドを次々に屠っているが、ダイを覆うドラゴニックオーラの量は目に見えて減っている。

バランと違い力の使い方も荒々しく無駄が多く、その分消費も速い。

呻き、苦しんでいるモンスターが死を懇願しながら立ち向かっている様も見せつけられて、

精神的にもこの心優しき少年は消耗していたし、

ゴルゴナに力と怒りをぶつけないのに

涙を流すアンデッド達が立ち塞がり接近もままならない状況に、

ダイは感情的にも安定しておらず心身共にかなり弱っている、と言えた。

「そろそろか」と黒雲の上から地上を見下ろしつつ呟いた冥王が、

「ダイ……………未熟ながら貴様はよくやった。

褒美に面白いものを見せてやろうではないか」

と言うと漆黒のローブから6本の腕を左右に突き出して広げ、

「……………」



笑うと、3対の腕がそれぞれ炎のアーチを描きだして

「っ！ あの炎、まさか……ベギラゴンを……三発同時!!？」

さすがのダイの表情をも青ざめさせた。

「グブブブ………！ 極大閃熱呪文！」

炎を纏った閃光が3筋、眼下のダイ目掛けて殺到し、

ゴルゴナに合わせるようにしてサタンパピー達が続げざまにメラゾーマの追撃を放つ。

「うわあああああつ!!!」

アンデッド達を巻き込む大爆発が起こり、

巨大な火の柱と並程度のキノコ雲が沸き立ってダイを包んだ。

目に見えるほどの衝撃波が地平に向かって走り、周囲の氷炎魔団とアバンらに……

後方に控える百獣魔団とハドラーにも振動を与え数m吹き飛ばした。

ゴルゴナの6本腕と魔力が可能とする極大呪文の3発同時着弾は、

もはやそれだけで小さな村落を土地ごと消し飛ばす威力であった。

ゴルゴナの膨大な魔力とその容赦のなさを見て、

「ず、スゲエ………オレの手品（フィンガー・フレア・ボムズ）とは桁が違う！」

死者を呼び覚まし数で勇者どもを颯り、

肉の壁の向こうから使い捨ての死体ごと魔法で砲撃……クカカカカカッ！

オレ以上にツ、旦那は勝利のためなら過程を問わねエ！」

衝撃波に転がされながらも受け身を取り素早く立ち上がった氷炎將軍は、

どこか羨望を込めた眼差しで上空の魔人を見つめていた。

「ククククク……旦那が竜の騎士のガキを始末した。

オレもきちんとテメエらを片付けねえとな？」

絶え間ない氷炎魔団の攻撃で疲労の極致にいたアバンとポップは、

ゴルゴナの手品の余波でフレイザードと同じように吹き飛ばされていて、

消耗した身体ではうまく受け身も取れず

強かに地面に叩きつけられダメージを負っていた。

フレイザードが空から地に視線を移すと

勇者と弟子が乱れた呼吸で片膝を付いて氷炎のモンスターを睨んでいた。

ギリリ、とフレイザードが睨み返すと、

「う、うわわっ！」

とおっかなびっくりな様子で素早く師の影にポップが隠れた。

「ポップ……回復アイテムは残っていますか？」

「……もう、残ってません………ダ、ダイの野郎もやられちゃったみたいだし……、

もう……ダメつすよ、先生……お、おれたち、ここで死ぬのかな……せんせえ……」  
アバンの問いに涙声で答えるポップ。

ベギラゴンの煙塵が晴れると、視界を遮る不死者の群れも一時的に綺麗に消え去つていて、

その爆心地にはオーラを使いきったダイが傷だらけで倒れているのがアバンには見えた。

そして決意する。

(もはやこれまでか………)

何としてもポップとダイ君は助けなくては………!!

そして………なんとかして、あの悪魔を倒さねば!

今、倒すべきはハドラーではなくあの黒衣の魔族!!

奴だけは………絶対に生かしておいてはならない!

冷酷、冷酷、残酷、残酷………非道にして無慈悲。

武人の心意気や戦士の誇りといった心を欠片も持ちあわせておらず、

寧ろそのような存在を一笑に付す態度がありありと透けて見える。

神の慈愛を真つ向から否定する”命を弄ぶ呪術”を使いこなし、

しかも少しの躊躇いも無く、死者とはいえ味方ごと矚るように攻撃する。

悪魔という言葉すら生ぬるく思えるあの不気味な魔人を、

温厚なアバンでさえ「絶対に殺すべき存在」として彼を認識した。

ヒビだらけの鉄の剣を支えとして、

笑う膝を叱咤してアバンが立ち上がると、

「クカカカカカーッ!! 馬鹿かよテムエ!

サンドバッグだぜえ!!」

その瞬間にフレイザードが脱兎の如く駆け出して、

炎の左足による鋭い蹴りをアバンの腹にぶち込む――

――打ち込もうとして、

「武神流、土竜昇破拳ツ!!」

悪鬼渦巻く戦場に似つかわしくもない、鈴の音色のような美しい声が力強く聞こえた。

その声と同時に、

「うおおおおお!! な、なんだ、地面が!!」

フレイザードの足元の大地が急激に隆起し、

土中から激しい闘気を吹き上げて彼を遥か上空に打ち上げた。

「ミナー!」

「はい、おねえちゃん! じっくりよー!!」

先の声の主にミーナと呼ばれたダイよりも小柄で幼く見える少女は、桃色髪の姉弟子の肩に跳び乗ってそのまま足場として飛び上がる。

ミーナは腕をぶん回しながらグングンと空を昇りフレイザードに追いついてしまおうと、

「ゲエツ!!」

「窮鼠文文拳ツ!!」

弟弟子の大ネズミの技をフレイザードの顔面に叩きこみ、

「ウガアアア!!」と叫んだ氷炎將軍の顔半分が

バラバラに砕け散って地平の彼方へ殴り飛ばされるのだった。

「あ、あなた達は……………?」

突然現れた只者ではない少女二人を見てアバンが戸惑っていると、

「久し振りだねアバンの。元氣?」

「ろ、老師……………」

懐かしき頼れる仲間の顔に、何故ここにいるのか、

等の疑問は一端全て消し飛んでドツと疲れが出て膝から力が抜けた。

安心感によって張り詰め続けた緊張感が切れたらしい。

「……………遅れてすまなかった。アバンの一人に無理をさせてしまったね。」

マアム、アバンどのに回復呪文を。

ミーナはあの黒髪の少年を助けてあげなさい。

上の黒雲の瘴気には決して触れてはいけないよ。

わしは……………」

あの黒雲の魔族の相手をする、と言って地面をフワリと蹴って跳んだ。

アバンは慌てて、

「老師！ 一人では……………、わ、私も行きます！」

駆け出そうとしたが、

「先生っ！ ダメです……………今は休んで！」

「マアム……………！ あなたが無事で、再会出来て本当に良かった……………」

しかし今は再会を喜んでいる場合ではありません。

あの魔人は……………老師といえど一人では勝てない！

今の私でも、いないよりは……………！」

マアムの静止を振り切ろうとする。

だが、

「全力でベホイミをかけます！」

だから、少しだけ待って下さい先生！

その魔法使い君、あなたもこっちにきて！」

アバンの肩を掴み無理矢理座らせ、ポップも回復させるために呼び寄せる。

「……わかりました。」

老師が体を張ってくれている今、私の仕事は回復に専念すること。

頼みます、マアム」

マアムの技で広範囲の地面が吹き飛び、

しかも軍団長が一時戦線離脱してしまつて狼狽える氷炎魔団。

その間隙をついての綱渡りの回復である。

ゴルゴナはマアムらを捨ておいて

体中に火傷を負つて意識を失い倒れているダイを回収しようとし、

ダイを神仙術によつて宙に浮かし彼から流れでた血を

そのまま霧のように噴出させて己の黒いローブへと啜らせる。

肉体も丸々手に入れようと更に引き寄せると、

「だめ！ その子を返して!!」

ミーナが滑りこむようにして横からダイを抱きかかえてゴルゴナから奪い去らんとした。

しかし、少女を無視して強力なパワーでダイを持ち上げるゴルゴナに、

ミーナはダイの腕を掴んで持ちあげられまいとして精一杯踏ん張り、  
「……………離せ、小娘」

存外強い力の少女に対して軽く手を払いのけるような心積もりで、

左手の一本の腕に生じさせた破壊光弾をミーナへ投げつけた。

(あーやばっ!) 回避不能の速度と小さいながらも

かなりの威力を秘めていると容易に想像できるそれを見て少女は思わず目を瞑る。  
だが次の瞬間、

「ほいっ」

と気の抜けた声と共に一人の老人が割って入ったかと思うと光球を蹴り飛ばし、

光球は遙か彼方に弧を描いて飛んでいき迷いの森の一角を爆破するのみであった。  
闘気の込められた老人の枯れた足には傷一つ付いていない。

(こやつらは何なのだ! 肝心なところで邪魔を!!)

ゴルゴナが驚いたその一瞬の間に間髪入れずに老爺が跳び、

そのまま

「ぬう! 貴様……………!」

「閃華裂光拳!!」

対生物必殺の拳を黒衣から除く顔面に叩き込もうとしたが、



ゴルゴナが寸前で2本の右腕でガードし、そのインパクトの瞬間、  
「ぐわああああ！　こ、これは！　この光は回復呪文の！

私の腕が崩れる……………！　ぐ、ぶ……………」

堅牢な甲殻に包まれたゴルゴナの腕が溶けるようにボロボロと崩壊する。

（む…意外に速い。　魔道士に見えるが接近戦にも慣れているようだね。

だが、閃華裂光拳が通じるということは

この男も命ある生物ということ……倒すのは不可能ではない）

ブロキーナの判断は早く、迷いがなかった。

そのまま拳の衝撃をバネにして更に高く舞い上がり、

「アバンどのー！」

「いきますよ、老師！」

マアムの回復呪文で幾らか体力を戻したアバンが、

「アバンストラッシュュツ！！」

本家本元、渾身のストラッシュュをゴルゴナに浴びせる。

「ぬううう、小賢しい真似を……………」

ゴルゴナは神仙術の波動を巡らせて擬似的にバリアを形成、

ストラッシュュに耐え凌いでみせたが、しかし、

「…閃華裂光拳!!」

自由落下に身を任せたプロキーナが

冥王の頭上から二発目の必殺拳を見舞おうとした瞬間、

「小賢しいと言っている!」

無傷の左腕を一本、空のプロキーナにかぎすと空中でピタリと静止させた。

「う……………か、金縛り!?!」

有無を言わさぬ強制の完全停止にさすがに冷や汗を隠せぬ拳聖だが、

高速でこちらに迫る人物を視界に収めるとやや安堵する。

上方の老人の黒丸メガネに隠された視線の動きを素早く追ったゴルゴナは、

「!?!」

「はああああ!!」

強靱な脚力で飛び込んでくるマアムの姿を捉えた。

(三段構え…………… 拳に強力な魔力の収束…あの技をこやつも使えるのか……………だが!)

アバンのストラツシュのエネルギーを受け止め、

拳の達人を頭上で金縛りに遭わせて固定、そして…

クワツ、と甲殻に覆われた己の口を開け放つと、

口から圧縮された神仙術のエネルギーを光線として撃ち出した。

「!? きゃあああああ!!」

自分の速度も光線の破壊力に乗ってしまい、マームが受けた衝撃はかなり大きい。光線に超高速で押し戻され破壊エネルギーの奔流に晒され、数拍後にけたたましい音を響かせ空中で爆発した。

マームに口腔砲を浴びせると同時に、ゴルゴナは宙に固定していたプロキーナを受け止めていたストラツシユのエネルギーに投げつけて二度目の空中爆破を起こす。「…っ！ 老師とお姉ちゃんをよくも!!」

老師らが注意を惹きつけたお陰でゴルゴナの拘束力が低下したため、ダイをある程度引き離すことに成功したもう一人の格闘少女が舞い戻ってきていた。戻ってきた所で師と姉弟子が大ダメージを負わされる様を目撃し激昂したミーナは「ミーナさん、よしなさい!」

ストラツシユの構えを解き攻めあぐねていたアバンの静止よりも早く飛び出した。人類の中でも屈指の高レベルを誇るアバンだが、幼少からみつちりとプロキーナの薫陶を受けていたミーナの身体能力はかなり高く、素早さ特化の武闘家として鍛えられてきたこともありアバンから伸ばされた腕は追いつけない。

地上に墜落し、全身に中度の火傷を負ったプロキーナも

「ミ、ミィナー！」

突つ伏しながら叫んだが、その時には少女はバネのように足をしならせて冥王目掛け一直線に昇っていた。

「馬鹿め……腐り果てろ」

冷たい8つの瞳が絶対零度の視線を投げかけて、

ゴルゴナが片腕で漆黒のマントを払い振るうと

黒と見紛いそうな濃紫の瘴気が吹き出して少女へ殺到した。

（朽ち果てる邪悪の瘴気！ 全身に薄くホイミを張り巡らせることでしか切り抜けられない！）

ブロキーナとマアムにはそれが出来るが、

幼いミーナにはまだその高度な回復呪文の応用が出来ない。

老いた拳聖は一瞬、数年も寝食を共にした愛弟子の一人を失う未来を見たが、

「ピィィィィィィィィィ！！！」

黄金に輝く一筋の光条が

冥王目掛け引き絞られた矢のように黒い闇を引き裂いた。

黄金は、悲しげな……そして怒りに満ちた鳴き声をあげて腐ちる邪気を払い、

「な………！ ぐおおおおお！！！」

そのまま冥王の顔面に衝突する。

何処から何が来たのか。

自分の瘴気を物ともしないこの謎の物体は。

この冥王の頭に重い重い鈍器で殴りつけるような芯に響く衝撃を与える物とは。

蜘蛛の外骨格を焼け爛れさせる、いつか味わったこの身を焦がす痛みは。

様々な思考が巡らされつつ光の正体を掴もうと泣き喚く黄金を視界におさめるが、顔の左半分が焼け目も幾つか使い物にならず、また脳も衝撃で揺れている。

「せ、聖なる力……！ バカな……！……人間如きがこれほどの破邪の力を!?」

あり得ぬ……！ 天の精霊ですらこんなパワーは——っ!!」

その時、ゴルゴナの歪んだ視界に影が差し、

(い、いかん……防御を……！)

そう思った時には既に少女の可憐な……

しかし鍛えぬかれた拳が焼けた顔面に突き刺さり、

「猛虎破碎拳!!!」

武神流の最大物理奥義が外骨格を粉碎し肉を潰し頭蓋を粉碎する……

寸前にゴルゴナは自身を神仙術で後背へと吹き飛ばしミーナの拳から逃れて、

「ぐ、ぐ、ぐ……！ 痛感させられ、る……、……、

勇者と、その仲間、達……………“奇跡”、が……………天の加護が……………後一步の所で、起こる……………だが、まあいい……………我の目的は達した。

ここは、貴様らの勝ち、だ……………グブ、ブ……………ブ……………

敗れたことを認めつつも笑いながら、その姿がフツ、と掻き消える。

「リリルーラ、か……………」

アバンが詰まり続けた重い空気を肺から吐き出す。

ここまで勇者一行を消耗させれば後は

ハドラーでどうにでも出来る……………と踏んでのことだろう。

あの不気味極まる邪悪な魔道士を倒せないまでも追い払ったのは確かで、

だと言うのに勇者パーティの誰一人…勝利した、という余韻など味わえなかった。

嘲笑うかのような、呻く如くの醜悪な笑い声がアバンの…ブロキーナの…

皆の脳裏にこびり付いていた。

勇者達は疲労困憊で、新たに現れた勇者の仲間も軽くないダメージを負っている。  
だが、

獣王クロコダインは重傷を負い後退。

魔剣戦士ヒュンケルは戦死。

氷炎将軍フレイザードは一時戦線離脱。

冥王ゴルゴナは幻のように掻き消えてしまった。

勇者達を前にして取り残された氷炎魔団は、

「あわわわわわ！ フレイザード様が、ゴルゴナ様がいなくなつた！

退却……！ 氷炎魔団退却だ……！

ハドラー様の元まで逃げろ……！」

フレイムAが叫ぶと、氷炎魔団は雪崩を打って魔軍司令本軍へ逃走しだした。

信じられぬ逆転劇に魔軍司令は愕然となつて、

自然と体がガタガタと震えだすのを止められない。

「お、お……おのれえええ！ ゴルゴナの奴、口ほどにもない！！

勝手に逃げるとはなんたる奴だ！！

クロコダインも、ヒュンケルも、フレイザードもっ！！

ぬ、ぐ、ぐ……！ どいつもこいつもオレの足を引っ張りおる！」

わあわあど逃げ帰ってくる氷炎魔団が、ハドラーの視界にどんどんと大きくなると、

「……！！ 勝手に持ち場を離れるなアアッ！！

アバンドもの囲みを解くバカがどこにいる!!  
敵前逃亡の腰抜け共めツツ!! ……極大爆裂呪文!!!」

怒りに任せ氷炎魔団へ己の最強呪文を撃ちこむ非道に走る。

さすがに元魔王だけあり、怒りの感情も手伝いその一発で

氷炎魔団を200体程消滅させ、500体近くに重軽傷を負わずが、

「ハドラー殿?! 一体何を………! 乱心したか!!」

今のハドラーはとことん運に見放されているようだった。

折り悪くクロコダインの治療が完了し……

ハドラーの元にある報告を入れにわざわざ己の足で来ていた。

ハドラーはぎよつ、となつて

「ク、クロコダイン!? 貴様……目覚めていたのか!」

「……正確には、意識は大分前から戻っていた。

魔軍司令殿……もはやオレは、魔王軍を信じる事が出来ん。

オレの部下が、オレに知らせてくれたことがある。

魔の森近くのネイル村……それを襲つたのはヒュンケルである、とな。

そして妖魔師団長が百獣魔団の仲間の戦死者を利用し、

苦痛を与えアンデッドとして使い捨てにしたと直訴してきた奴もいる。



どこまでが真実かはオレにはわからん。

だが！……………今のハドラー殿の行為」

ハドラー殿だけは信じていたかったが、と伏し目がちに言った獣王は、

「お、落ちてくけクロコダイナー」というハドラーの言葉にも耳を貸さない。

「オレは魔王軍を抜ける！」

魔の森も百獣魔団も貴様らの好きにはさせん……………。

部下達は皆、オレについてきてくれるそうでな……………ハドラー殿、いやハドラー。

大人しく逃げ帰るがいい。軍団長が大幅に欠け兵も傷ついている今、

勇者と百獣魔団を相手にはできまい。よくて双方全滅だ」

攻撃はまだしないから帰れと勧告すること……………

それが上司であったハドラーへの最後の忠義だった。

妖魔士団、氷炎魔団、共に士気の低下は著しく、

また頼みの綱の不死騎団はゴルゴナが戦域にいなくとも

充分な脅威を發揮する筈だったが、何故か急激にパワーダウンを起こしている。

何体かがハドラーの魔法に巻き込まれ吹き飛んだが、

異種再生も始まらずあつさりと行動を停止し、二度と起き上がらなかつた。

ハドラーが知る由もないが、ゴルゴナはさつきと術を解除してしまっていて、

（もはやこんな戦場に用はない）と言わんばかりであった。

冥王は他に集中したいことでもあるのだろう。

今、アンデッド達は彼の呪力の残滓で動いているに過ぎない。

「う、ぬううう!! な、何故だ! ヒュンケルならまだしも、

なぜお前が魔王軍を裏切る!!」

ハドラーが額に幾つもの血管を浮き立たせるが、

「先に裏切ったのはそちらではないのかな？」

ハドラー……オレはあなたのことを武人として尊敬していた。

……今も、お前の中にその心を感じる。

……だからこそ!! お前の目を見て魔王軍の背信を確信したのだ!」

そう。魔王軍司令は厚顔無恥な男ではない。

残酷、冷酷な行いはするが、卑怯を嫌う。

内心では、己の部下達の行為に眉をひそめている部分があったが、

それを魔軍司令の座の保持と魔王軍全体の栄光の為と言いつくし

無理矢理に覆い隠していたに過ぎない。

そもそもネイル村と魔の森の一件は彼が目覚めた時には既に過去の事。

クロコダインに対する“負い目”がハドラーの瞳には確かに浮かんでいたのだ。

「だ、黙れ黙れエツ!!!」

貴様は偉大なるバーン様の軍団を預けられた身なのだぞ!!

そしてこのオレはその全権を与えられた魔軍司令だ!

オレが黒と言えば貴様もそれに倣って然るべきなのだ!

今からでも遅くはない……前言を撤回し、戦列に復帰せよ……!」

ハドラーとしては数少ない信頼できる部下を失いたくない一心で、

プライドと威厳を保ちつつの説得に必死であったが、

「断る……」

クロコダインとしても

軽い気持ちで魔王軍離反を高らかに宣言したわけではない。

もはや彼の中の武人としての矜持と折り合いを付けての裏切だ。

そしてクロコダインの正しさをどこかで悟っているからこそ、

「……………ッ! ……ならば、裏切り者として即刻処刑してくれる……!」

理性を怒りで塗り潰して残る軍団に攻撃を命じた。

それに答えたように獣王が堂々たる遠吠えをすれば、

瞬く間にそこら中が百獣魔団 対 残存軍団の混戦となってしまう、

結果は一言で言うならば『悲惨』に尽きる。

頼みにしていたクロコダインの裏切りに、

彼の人格に対してどこか“甘え”のようなものを抱いていたハドラーは逆上し短慮に走ってしまった。

この同士討ちの引き金をひいてしまったのはハドラーだが、寧ろ彼はヒュンケルやゴルゴナのツケを支払わされた被害者とも言える。

しかし……それでも彼は魔軍司令という地位にあるし、

彼には個性溢れる将達をまとめ使いこなす義務があつた。

部下の不始末は上司の責任……なのである。

ならば大魔王の任命責任は？という疑問もあるが、

当然のように魔界の神が責を問われることはない。

結局、ボロボロまで追い詰めていた勇者一行をこの同士討ちで取り逃がし……、

裏切り者の獣王クロコダインも始末できずに失踪。

フレイザードは生きて帰ったが治療の為動けず、

蘇生液につけられて見る間に蘇った魔剣戦士の独断専行と、

勝手に帰還をした妖魔士団長に関しては

ハドラーの権力は全て退けられて大魔王は不問に付した。

魔軍司令が失った兵力は9万を超えて、

ロモス占領軍すらも百獣魔団に差し向けてしまった為に、その間に人間達にロモスすらも奪還されてしまっており、これに関しては完全にハドラーの失態だ。

鬼岩城に意気消沈して帰還した彼が大魔王に呼び出された時、

ハドラーの脳裏には処刑や罷免などの物騒な文字が次々に浮かんで消えて、そして今、彼は玉座の間にて“バーンの顔”を前に青い顔で跪いていた。

「ハドラー……………何か申し開きはあるか」

室内に響く大魔王の声に、ただハドラーは震えて顔をあげられず、声もでない。

「……………余は寛大な男だ。失態も3つまでは許そう。」

勝敗は時の運とも言うが些か負け過ぎたな、ハドラーよ。

だが、此度の敗戦は全てがお前の責任ではないことは余も知っておる。

お前には10万の軍勢を失った罪だけを問うとしよう」

「バ、バーン様……………!」

ここにきてようやくハドラーには生きた心地がした。

「……………それに竜の騎士バランをポリクスらに抑えさせたは妙手。

パプニカ、オーザムの短期攻略も考慮すれば、

その敗北も……………手痛い教訓、といったところか。

……アバンの元に竜の騎士の子がいる以上……今のそなたでは荷が重かろう。  
心臓ハートの間にて、お前に新しき力を授ける。

お前の肉体はより強力なものとなり、極大閃熱呪文ベキラゴンをも使いこなせるようになるだろう」

「も、もつたいなきことでございます！」

かつての魔王は、地に額を擦り付けんばかりにして平伏する。

「うむ……その力で必ずやアバンを仕留めよ。」

お前には期待しているぞ、ハドラー」

必ずや、と力強く言い切ったハドラーがやがて退出するとエンプレムの眼光が消えて、

死の大地に埋まる大魔宮バーンパレスの玉座の間にて居残りの死神が仮初の主と対話を楽しむ。

「ちよつと甘いんじゃないですか……バーン様。」

叱責はちよこつとで、あれじゃあご褒美あげただけですよ」

凶に乗っちゃうんじゃないですか？と何も映らなくなった大水晶を見ながら

大鎌で肩をポンポンと叩いて溜息をつく。

お気に入りの酒を嗜みながら大魔王が、

「失ったのは地上のモンスターだけだ。」

あの程度、エリミネーターで補えばいくらでも釣りがる」

手軽に生産できる人造モンスター以下の力しかない地上の生物を嘲笑う。

「ま、そうですけどね」

「それにゴルゴナは無罪放免でハドラーだけ処罰……」

というのも気の毒だとは思わんか。 ん？」

「でもゴルゴナはダイ君の肉体ゲットには失敗しましたけど、血を手に入れたんでしよ  
う？」

親子竜の血が揃って研究に幅がでるって喜んでましたよ。

オマケに過剰回復呪文や神の涙らしき土産話まで持つてきましたし……。

ボコボコに殴られながらも只では起きませんよねエ、彼って」

「神の涙かどうかはまだ分からぬ。

だが、ゴルゴナの“瞳”から通して余が見たあの光……、

あの一瞬の黄金の残像にアレの影を見た気がするのだ……」

それは怖い、と肩を竦めた死神が何処からともなくグラスを取り出し、

キヤハキヤハ笑うひとつめピエロから酒を注いでもらうと、

「それではバーン様の不老不死化一歩前進と、

ハドラー君の健闘を願って乾杯といきましょう……」

死神が静かに笑う。

勇者達によつて、魔王軍はロモスの野で

一敗地に塗れてロモス王国を滅ぼすことは叶わなかった。

カールにおいても竜の騎士と魔王軍は痛み分けの形に終わり、

軍団長こそ無事だったが兵は半数が討たれた。

獣王クロコダインは魔王軍から抜け、

他の軍団長も傷つき軍団は大いに消耗していて、

徐々に人類は魔王軍への反撃を成功させているはずなのに……

だが確実に地上と天界を包む闇は濃くなつてきていた。



## 肥大する悪

永遠の曇天と雷雲、嵐が渦巻く乾いた大地：

もはや故郷とさえ思える程に居心地がいい魔界の第7宮に帰還したゴルゴナは、地上をほったらかしにして研究に没頭していた。

時間にして1ヶ月程度であったが、その間に地上は慌ただしかったらしい。

ハドラーの攻撃によってカールとベンガーナが完全に滅亡し、

両国の残党は辛うじて健在であるロモス王国へと亡命した。

魔王軍を裏切った百獣魔団（既にボロボロの残党だが）と

その団長もロモスにて人間の味方となるのを公言していて、

自然とロモスが反魔王軍の最後の砦となったのだった。

俗にロモス決戦と言われる先の戦で魔王軍の大軍を退けたことで

人類は希望を持ちさぞ結束している……と思いきや

ロモスに集った数はお世辞にも多いとは言えない。

その最大の理由は、ギルドメイン統一を成し遂げ

平和と繁栄を謳歌している親魔王軍国家リンガイアの存在である。

人間、誰しも安寧が欲しい。

絶大な強者が統治しそれを保証してくれる大国が目の前にあるというのに、わざわざ熾烈な闘いを繰り広げる国に住みたいとは思わない。

しかも先の敗戦が嘘のように魔王軍の大軍は未だ健在で、

口モスは大陸際で辛うじて侵攻を食い止めているに過ぎない。

10万の軍勢を失うことさえ魔王軍にとっては軽傷なのだ、と人類社会が思うのは当然であった。

飢えと襲撃による死の恐怖に怯えて日々を過ごすよりも、

衣食住と安全が与えられるのなら魔物の庇護の下に入りたい。

人間の意地と誇りだけで飯は食っていけない。

それを心の支えにして「飢えて死ぬ方がマシ」と言える人間は少なく、

大半の普通の人々はリングガイアという新天地に居場所を求め、

また魔王軍もそれを受け入れ、

衣食住の保証まで声高らかに謳っている為に口モスに集う人々は少数派だ。

脱落者も日に日に増えていて、人類は確実に追い詰められている。

そして人類側が知る由もないが、

最悪なのは魔王軍の重鎮・ゴルゴナの研究が新たな段階に移行したことだ。透明なカプセルを満足気に見る冥王が、

「キアラ、状態はどうだ」

古代ジパングの貴族ちつくな麻呂眉の少女に言う。

「全く問題ありませんね。安定していますよ。」

んふふ……いやあ、とうとうやりましたねゴルゴナ様！

珍しく体を張って色々材料とか情報集めた甲斐がありましたねえ」

豊かな胸を揺らしながら背を反らして自慢気に答える彼女だが、

「……実際に動き回っていたのはゴルゴナ様だけだと思うがのう」

とムー人最年長のオテイカワンは思わずツッコまずにはいられなかった。

「そんなことはどうでもいいのです。」

夫の手柄は妻の内助の功あればこそ。

つまり夫の手柄と稼ぎはあたしのものです！」

「いつ結婚したのよ………はあ、キアラ、あなたね……」

ゴルゴナ様が大魔王軍で大幹部だからってあからさますぎよ？」

それに蜘蛛よ?とフロレンシアが計器を読みながら言つてやると、

「あたし、爬虫類とか虫とか昔から飼つてましたから大丈夫です!」

フロレンシアこそ意識が低くて甘くて危機感足りてないです。

いいですか?

あたし達は今まで大蜘蛛のお腹の中で

あつたかーくしてグーグー寝てればゴルゴナ様が勝手に色々やつてくれましたよ。

でも、もう分離しちゃったんです!

別個体になった今いつ何が理由で切り捨てられるか分かったもんじゃありません!

だつて鬼畜外道のゴルゴナ様ですよ!?

フロレンシアこそゴルゴナ様に色目使つた方がいいんじゃないですか譲りませんけ

ど」

キアラは熱弁を振るつた。

「……同化してた時とて、私は切り離されて見捨てられましたか?」

遠い目で自虐的なトピアポ。

オテイカワン老が、

「無駄口を叩くでない。

必要とされれば我らは永遠に大魔王様とゴルゴナ様にお仕え出来よう。

だが、不必要となればすぐに永遠の命は取り上げられる。それだけじゃ賢人の中でも年長ということもあつて流石に的を得た発言をする。

グブブブ……と微かに冥王が笑いだし

「その通りだ。貴様らが我と主に存在の必要性を証明する限り、

貴様らは永遠に我等と共にある。

大魔王様は褒美も望むがままに下賜なさるだろう」

八つ目で部下達を見渡す。

そんなゴルゴナの横でキアーラは一人、

（え。じゃあゴルゴナ様と結婚したいって今度の褒美にねだればいいってことですね。

他の皆は今度のご褒美でそれを貰うんでしようけど……………

もうあたしは永遠の命と美貌は大魔王様から貰ったしなあ……

……やっぱゴルゴナ様貰うしかないじゃないですか）

ニマニマと笑っている。

ザボエラは丁度、ふとした拍子にその笑顔を見てしまい……

個人的な趣味をどうこう言うつもりはないが、

（キアーラ殿はちょっとおかしいわい……）

と鼻水を垂らして頬をヒクつかせていた。

透明な槽から溶液が排出されると

中の有機ゴーレムはズシヤリ、と2本の足でしっかりと立ち、

ガラス球のような無機質の瞳をギョロりとさせ目の前の主を見ているようだった。

「ぐんぐんぐんぐん……素晴らしい。

人間との混血である竜の騎士ダイ……

奴の不純物混じりの血こそが我らの道を切り開いた。

人間の不完全さが、完成されていた竜の騎士の性能の新たなる伸び代となったのだ！

そして混じりし人の血が、聖と魔の力の媒介となった。

竜の騎士と人の血……その配合率は正しく神の奇跡の産物……！！

それを今度は我が利用してやったのだ……グブブブブブブブブブ！

そう。この有機ゴーレムはどうとう神の兵器の領域へと手が届いた証明。

人造竜魔人とも言うべき存在を造り出すことに冥王が成功したのだ。

研究所の培養カプセルに浮かんでいた肉人形はエリミネーターの雛形……

つまりはかつてムー帝国で稼働していた有機ゴーレムと同じ見た目だが、

そのボディの性能は桁違いであった。

竜魔人の堅牢さに加えてマホイミ対策も施してある。

新たに、魔界に住む“魔力を喰らう異形生命体”の組織を組み込んだ。そのモンスターは大魔宮パインレスの心臓部・魔力炉に使われているのと同種で全ての魔力を吸収してしまう性質を持つ。

回復呪文も受け付けぬが、だからこそ過剰回復をせぬし、物理攻撃で負った傷はイメージン細胞が癒やす。

絶滅危惧種、というわけではないが数が多くないのが異形生命体を使うにあたっての問題だが、

人造竜魔人は簡単に量産は出来ないハイエンド機なので問題はない。

超魔細胞とイメージン細胞。

竜の騎士の聖の力と魔界樹の邪の力。

まさにこの肉人形は全てが調和していた。

「不老不死、超再生、吸魔能力………そして竜魔人に匹敵する強靱さ。

………ぐぶ、………グブブブブブブ!

見たか! 神どもめ!!

見るがいい! 太陽王!! 人の叡智を信じられなかった愚かなる兄よ!!

我は、我らは到達したぞ! 神の領域に! 科学は限界を超える! 超え続ける!」

冥王がタガが外れたように笑いだす。

これ程の大笑い、長年を共にしてきたムー人達とて見たことがない。

その笑い声は、冥王の名に相応しい暗黒の奈落の深淵から響いてくる怨嗟を思わせる。

楽しげな恨みこもりし呪いの声。

邪悪なる愉悦の嬌声。

盟主の笑いに釣られて、6人のムー人達もやがて笑い出す。

全てを投げ打って邁進してきた研究。

1万2千年の恨みが込められた笑い声。

1万2千年の狂気が実りを結んだ喜び。

1万2千年の渴望が満たされる充足感。

1万2千年越しの悲願成就への明確な道筋が見えた瞬間……

いや、まさに今、彼らは一つの到達点に辿り着いたと言える。

「キヒ、キイーヒツヒツヒツヒツヒツヒ……！」

ま、まつことにめでたいですなア……！ は、はは……！」

(ひ、ひいいい、なんじゃコイツラの笑い声……まるで死ザの言葉キじゃ！

き、聞いているだけで……わ、わしが……ち、ちびりそうじゃ……！)

小柄な魔族の老人は、ガタガタと震えながら愛想笑いを忘れない。



7人のマッドサイエンティスト達に囲まれて、今日も彼の研究は充実していた。

「……つまり、竜魔人級の強さを秘めた肉体の不老不死化に成功した。

……そういうことか」

「ハッ」

実験の成功を見たゴルゴナはすぐさま地上のバーンの元へと戻った。

そして今、大魔宮の玉座の間にて背虫を更に丸めて大魔王の前に付している。

大魔王の左右には白の影と黒い死神……いつも通りの彼らが控えていた。

しかし、両幹部の目は驚嘆に見開かれ、その視線は主と冥王を2度、3度行き来した。

「………人造竜魔人、か」

ポツリと大魔王が言った。

数拍の静寂が玉座の間を支配すると、やがて

「………フツ………フツフツフツ………ククッ、クハハハハ………」

はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

威厳と冷静さを決して失わぬ大魔王が歓喜に笑った。

その笑い声だけで大魔宮が揺れる、

と錯覚できるほどの威圧と魔力が込められた魂の底からの笑い。

——ズズズズズズ

いや、正しく揺れた。天地魔界が彼の笑いに怯えたように揺れたのだ。

ミストバーンですら

「バ、バーン様……!」

思わず声を出し、キルバーンの肩の上ではピロロが

「ひ、ひえええええ!」

頭を抱えて死神の影に隠れていた。

これ程の笑いはどれ程ぶりか……。

バーン本人として自分で少々驚いてしまう。

おつとイカンな……、そう言つて笑いと共に解放されていた魔力と闘気を抑える。

「ふふふふ……、昂ぶりすぎたな……。

お前は中々に余を楽しませるのがうまい……。

その人形……、すぐに使えるのか?」

大分落ち着いた様子のバーンが

微動だにせず己を見つめてくる大蜘蛛の魔人を見つめ返す。

「エリミネーターは命令に従うように

細胞にプログラム……呪印を組み込んでいましたが、

しかし、人造竜魔人は肉体と魔的防御が強すぎるのが逆に問題です。

強化しすぎたイマジン細胞が呪印を食い無効化してしまいます」

「……では制御が効かぬと言うつもりか？」

「簡単な命令ならばこなせましょう……」。

しかし、仰るとおり複雑な命令となると実行は不能でございます」

欠陥。

明らかにそれがあると思えるが、

淡々と説明する冥王の言葉に滲む自信は一切揺らいでいない。

それがわかる大魔王は寧ろ笑みを浮かべる。

「ほう………このような紛い物で余をぬか喜びさせたのか？」

「ほんとうにほんとうに……」。

有機ゴーレムは器………“空の器”にございます。

器にはそれに相応しきモノを入れてやれば良いだけの話」

ミストのことを言っているのか？

一瞬、大魔王は思ったが、ミストバーンの正体については秘中の秘。

キルバーンもゴルゴナも流石に知らぬ筈であった。

もつとも、知られた所でどうともなる……と彼は確信しているのだがそれはさておいて大魔王は愉快そうに尋ねる。

「相応しきモノ……………か。」

フツフツフツ……………さて何を注ぐが良いか」

「グブグブ……………恐れながら……………」

先の戦いで大魔王軍6軍団はその一角……………獣王クロコダインを失いました。

いまや彼は難敵となつて我らの前に立ち塞がっております」

ゆつくりと片手を薙いで言外に、続けよ、と示すバーン。

「再調整中のヒュンケルの穴は我が埋めることが出来ませんが、

我が強いケモノ共を率いるにはそれをねじ伏せる更に強い獣性と野生が必須。

裏切り者共を血祭り上げるに相応しきは新たなる百獣魔団。

それによつて魔王軍の健在ぶりを世に示す事にもなります」

「……………フツ、なるほど。」

確かに軍団がそっくり寝返つたまま放置しているのが現状。

あの程度の裏切り、蚊に刺された程ではあるが……面白く無いのは確かではある。  
人造竜魔人……それを新たな軍団長とし新生百獣魔団を創る……。

くつくつく……うむ、面白い遊戯だ」

片手の空のグラス。

ミストバーンが魔界でも屈指の美酒を主に注ぐ。

トクトクと音を立てる真紅の波を見つめながら、

「……………器に何を吹きこむつもりだ」

目だけで笑った大魔王が問うた。

ゴルゴナはたつぷりと間を置いて、かつて……と切り出す。

「我が故郷の世界。

アレフガルドにて、我とともに異魔神に仕えし四大魔王在り……。

その一人……

クロコダインと同じ武名を持つその男は武運つたなく勇者に敗れましたが、

その者の魂、未だ勝利と戦に飢えて冥界を彷徨っておりましょう。

かつて異魔神を呼び出した大召喚器を用いて、

その魂を呼び寄せゴーレムを使い受肉させまする」

「……………わざわざ異界から死者を呼び寄せる。

その価値があるのか？」

バーンの問いかけに深々と頷き肯定する。

「強き肉体には強き魂を。」

その者の名は獣王グノン……必ずやバーン様のお役に立つでしょう」

それを聞いて魔界の神は、よかろう、とあっさりと言可を出す。

話の途中で既に許可を出す気になっていたのだ。

失敗してもリスクは無く、成功した時のみリターンがあるあまりにも緩い賭け。

魂の呼び寄せや定着に失敗しても人形の使い道は腐るほどある。

いざとなればミストのスペアにしてもいい。

「思うようにするがいい。」

これが成功すれば余の軍勢は更なる飛躍を遂げる。

異界の戦士をも余の部下とし……天界を食らった後は……。

お前の故郷にでも行ってみるか。ん？」

ゴルゴナをからかうように笑う。

その瞬間、大魔王の脳裏に果てしなく広がる異世界のヴィジョン。

異界の神々、異界の魔王、異界の勇者。

果てしなく続く三千世界。

………太陽。

余はそれを手に入れた後何を成す？

魔界の恒久的な統治。それは当然だ。

地を滅し、天を滅ぼし魔の時代を手に入れた後………余は………。

大魔王が、静かに笑った。

## グノン

大召喚器。

精神を投影させる念象投影器を

大魔王陣営の技術力を使い可能な限り再現したものだ。

その性能はかつて彼が使用し、異魔神の精神を常に鎮座していた器とほぼ同じ。

宮殿の薄暗い一室。荘厳な装飾が施されたこの大部屋にそれは設置されていて、

巨大な受け皿にも見える召喚機の前には伏して祈る冥王の姿があった。

ゴルゴナはくぐもった不気味な声を部屋に反響させていたが、

その声にはほんの少しの郷愁が含まれていた。

「くぐぶぶぶぶぶぶ………久しいな、グノン」

「………何用だ。俺を笑うためにわざわざ死者を呼んだか、冥王」

冥王に答えた声には力強さと鋭さを感じるが

どこか覇気は感じられぬ気の抜けた感じで、何より不機嫌そうである。

「くぐぶぶぶぶぶぶ………不貞腐れているようだな。

勇者アルスに殺されたのが余程堪えたとみえる」



「……………貴様」

「慌てるな。お前を辱めるために呼び出したのではない。」

「このゴルゴナとて、勇者アルス共に殺されたのだ……………お前を笑うことは出来ぬ」  
「なに!？」

「投影器に浮かぶヴィジョンが揺らめいた。」

グノンは、目の前にいるこの大蜘蛛が嫌いだった。

というよりも、四大魔王は全員仲が良くない。

ヒュンケルとフレイザード程の“会えば一触即発”とまではいかなかったが、

魔人王ジャガンはその出自もあって他の魔王に噛みつく狂犬であった。

それはともかく、グノンはこの大蜘蛛が好きではない。

だがその力は誰よりも恐れ認めていた。

竜王のように甘さもなく、魔人王のように人間を捨てきれない半端者でもない。

故に驚いた。

そして疑問に思う。

「お前が殺された…………？」

ならば俺を呼び出したお前は何者だ。

「貴様は己が死すらも操れるのか、冥王」

「流石に我であつても己の死は覆せぬよ。

我は死の淵から掬い上げられたのだ………グブグブ」

「ほう。 異魔神様が我々を救つてくださるといふのか。

俄には信じられぬ。 あの方は我らなど歯牙にも掛けていないように見えたが」

グノンの脳裏には飽食の怪物・海王リヴァアサンの姿がよぎつた。

知恵無き単細胞生物となつたりヴァアサンは

敵味方の区別なく永遠に侵食と増殖を繰り返す破壊の権化だ。

勇者アルスが海王を討てなかつた時は、四大魔王総出で対することになつただろう。

その一瞬の思考を遮つたのは、聞き慣れた呻き笑い。

「ぐんぐんぐんぐん………異魔神が我らを蘇らすわけがあるまい」

ああやはり。

グノンは納得する。

だが、死者を蘇らすなど生半可な者では出来ない。

死者を操るゴルゴナ以外でそれが出来る者など異魔神以外には考えられないが、

ゴルゴナが異魔神に敬称をつけず呼び捨てにしている時点で、

もはや自分達と異魔神の縁は切れているのだと察した。

グノンは武人というよりは軍人然とした男でその思考はドライであつた。

忠義を軽んじるわけではないが、それよりも己を活かせる場を求め、彼もまた異魔神という存在を過去に押しつけた。

「貴様を蘇らせた何者かに、俺を推す……ということか」

「流石は獣王だ。話が早い……」。

我を蘇らせたるは大魔王バーン………！！

お前に、かつて異魔神に与えた肉体以上の器を用意した。

その器でもって蘇り、我と共に大魔王バーン様を支えようではないか」

グノンの揺蕩う魂を見上げながら冥王が言う。

「異世界で力を蓄え………」

いずれアレフガルドに戻りしその時こそ勇者アルスに雪辱戦を挑むのだ。

先手は貴様に譲ってやる………：我はアルスよりも導師タオに用がある。

………：貴様とて死に微睡むのを是としているわけではあるまい。

獣王グノンは死して尚、勝利を渴望する男。

お前は“退く”ことはあれど“諦め”などという負け犬の感情はあるまい。

それに………：この世界にも獣王を名乗る者がいる。

貴様以外にケモノの王を名乗らせておくのか？」

グノンは即答をしなかった。

静寂の部屋に召喚器の駆動音がブウウウウン——と響くのみだった。だが、1分ほどもしてから

「……………質問がある。 答えるゴルゴナ」

グノンが言うと、冥王は黙って頷いた。

「俺は貴様の屍術によつて縛られるのか」

「私の力が及ぶところではない。 受肉後には貴様はあくまで我と対等だ」

「大魔王バーンに俺を使いこなす器量は」

「ぐぶぶぶぶぶ……………貴様自身で確かめよ」

「そちらの世界からアレフガルドに帰還する目処はあるのか」

「この世界の天の神々が旅の扉を保有しているのを確認している」

我の念象投影器とバーン様の超魔力があれば可能である」

お前と会話出来ているのが良い証拠だ、と最後に言った。

「……………フンツ、いいだろう！

俺をそちらに呼べ。

紛い物の獣王の首……………俺がねじ切つてやろう」

グノンが言い終わるやいなや召喚器がより強く光と音を発して、

遙か彼方の異空へと繋がる魂の道を開きだす。

横向きに倒された浮遊するカプセル型のポッドが  
ゆつくりとムー人の手によって運び込まれて、音を立てて透明なシールドを開放し  
た。

冥王が磨きぬかれた床に邪悪の六芒星を灯火によって描けば、  
遙か宇宙のアンタレスが煌々と光る。

カプセルの中に横たわる肉人形の無機質な目が、ドクリ、と熱を持った。

「そちがグノンか。

ふむ……………ゴルゴナがお前を薦めた理由がわかる。

よき面構えよ」

「はっ………恐れいりまする」

片膝をついて深く頭を下げる豊かな毛皮を持つ獣人。

己の両膝をつくの許さぬ自尊心の高い男ではあるが、

目の前の老爺の威厳に

異魔神とはまた違う威圧を感じて彼は躊躇なく片膝を地につけていた。

「お前の肉体は我が軍でも最高のものだ。

そなたも気に入るだろう………」

しかし、と区切つて獣人を見る瞳を隣りに控える冥王へと向けた。

「随分と見た目が変わったな。

これはお前が手を加えた結果か？」

「ぐんぐんぐん………いえ、有機ゴーレムは空の器にございます。

かつて異魔神が宿つた折もその姿を大きく変容させました。

注がれた魂によつて姿形は自由自在。

異魔神は巨大な二足の化け物に………そしてグノンは生前の姿に」

「へえー、それはスゴイ。

じゃあ死者の魂を入れれば肉体を完全に失つていても

ぱつと見、完全に蘇つたように見えるんだね」

感心したキルバーンが声を弾ませて言う。

ミストバーンは変わらず黙りこくっているが、

珍しく何かを考えこむような気配がある。

(ならば私は……………生来の肉体無き私は、

アレに宿れば一体どういう姿になるのか)

彼はそう思わずにいられない。

器が魂によつて変化する現象にミストの興味は強く引かれていた。

「グノン……………」

魔界のモンスターを中心とした新たな百獣魔団をお前に任せよう。

余を裏切ったとはいえ、クロコダインは獣王の名に相応しき剛の者。

見事クロコダインを討ち果たした時……………余から獣王の名をお前に贈ろう」

「はっ……………おまかせ下さい。

獣王の名……………俺がこの手で勝ち取つてご覧に入れます」

ケモノの王。

それを自負している彼は、獣王を名乗れぬ現状に大いに不満があるが、

だが目の前の老王の溢れ出る威厳と魔力の波動。

(間違いないホンモノ……………なるほど、ゴルゴナを従えるだけはある)

グノンはそう確信している。

だからこそ、新参の将という今を受け入れる。

(出世競争も悪く無い……俺こそが魔王軍一と内外に名を轟かせてやる)

グノンの目が野心に溢れてギラリと光る。

そうそう、と大魔王が何気なく言う。

「余の元に馳せ参じたお前に、余からの贈り物がある。

受け取るがいい」

バーンが手のひらを開き、柔らかな所作でグノンへ振り下ろすと、

——ズ……ズ……ズ……

と暗黒の渦が宙に生じる。

徐々に渦が吐き出す物体……それは、

「……あ、ああ！ あ、あの輝きは……オリハルコン!?

オリハルコンの……ハーケン……!」

見慣れた己の得物の醸し出す得も言われぬ光沢に、思わずグノンの腰が浮くが、う、と気付いて即座に自制をきかし、腰を落とす。

それを見て大魔王は、

「くっくっくっ……よい、よい。



戦士であればオリハルコンでできた武器に心奪われるものだ。

それはお前の旧友、ゴルゴナに命じ造らせた物だ。

余は、既に神々の金属ですら自在に調達し鍛造できる……それだけの勢力を築いた。どうだグノン。

お前達の旧主、異魔神と余とでは……どちらが強い」

グノンの肩がぎくりとした。

何とも直球で、そして答えにくい質問であった。

バーンとしては、単純に異界の魔神と自分とでより強いのはどちらなのか……

単純に力を絶対の価値観とする魔族の戦士として気になるのは当然であったし、

最近臆気ながら考えるようになった

異界侵攻の目安にする冷徹な思考の故でもあった。

(まだ天界どころか、「蓋」すら破壊しておらぬというのにな……)

取らぬ狸のなんとやらで、我ながら少し呆れる大魔王だが

心はどうしても未だ見ぬ強者ひしめく異界に翼を付けて飛んでいきがちであった。

より強き者を求める。

——これも魔族の性さが、か。

グノンとゴルゴナ、2人の異界の魔族を眼下に静かに笑う。

言いづらそうにしていたグノンだが、やや間を置いて、  
「恐れながら……………」

大魔王様と異魔神では、魔力においては同等かと」

グノンが言う。

「では魔力以外の点では、余は異魔神に劣るか」

グノンの胃がやや悲鳴を上げる。

この身体……失敗作なのではないか!?

とゴルゴナに文句を言いたいような気分だが、

それ以前にとんだ対面式に文句を言いたい彼である。

だが、彼とて尊大の塊のような男。

動揺する姿を見せて大魔王軍の先達らに侮られたくはない。

物怖じせずにバーンと旧主の差を言ってやりたいが、

だが、グノンは異魔神が具体的に活動している姿を知らないのだ。

彼はせいぜい超魔力で海王から知恵を奪った成果しか知らない。

常に恐ろしい威圧感と魔力を漲らせていたが、

異魔神は一切の実体がない。

そして威厳や魔力は遥か高い次元で同等だとグノンには感じるのだ。

「い、いえ！　そうとも思いませぬ！

恥ずかしながら俺は異魔神の魔力しかその力の程を測る基準を知りませぬ。

異魔神は肉なき神。

魔力と知恵だけの存在でした故」

大魔王が感情無き視線でグノンを見ている。

「では余と異魔神とで、作り上げた勢力はどうだ。

余の軍と異魔神の軍ではどちらが優れている」

「……………それは比べるまでもありません」

「ほう」

「異魔神の魔王軍は、ハッキリ申しましてゴルゴナが作り上げたもの。

異魔神は……………組織力、部下の心を繋ぎとめようとする術……………そういったものは皆

無。

奴はまさに虚空より飛来した異形の破壊神。

力は圧倒的でしたが王を名乗る器ではありませんでした。

どちらが強いかは計りかねます。　されど！

優れているのは間違いなく大魔王バーン様でございましょう！」

グノンが大魔王を見上げながら言い切った。

新しい主に追従するわけではないが、主たるに相応しいと見込んだバーンへは多少はこういう機転も利かすのがグノンという男だ。

彼は武辺一辺倒ではない。機知にも富み策謀も嗜む。

大魔王は満足気に頷いた。

「よくわかった。

ハーケンをとれ、グノン。

お前には期待しているぞ……………ふふふ」

「ハッ！ おまかせ下さい！」

ガシツ、と怪しく銀に輝いたハーケンを掴みとる。

その重さに懐かしい心地よさを感じ勢い良く1度振ると、

(重さも掴み心地もかつての物と大差ない。ゴルゴナめ……………クソ)

この出来では流石に製造者たるゴルゴナに感謝せざるを得ない…

と思ひ、グノンは少し顔を顰めて、

「……………感謝する」

冥王をチラリと見て言った。

「ぐふふふふふ……………」

ゴルゴナはただ呻き笑うだけだった。

「いい鎌だなあ……………羨ましい。

僕もおニユーの鎌に変えようかな」

グノンとゴルゴナが退出した後、キルバーンがポツリと言う。  
(マキシマムくんに頼んでみるか)

死神は金属生命体から手足をもぐ方法に頭を巡らすのだった。

## ロモスの人々

世界の南西に位置するラインリバー大陸は、デルムリン島から最も近い位置にある大陸だ。

ロモス王国が大陸全土を支配し君臨する大地である。

次々に滅び去る大国達と同様、彼の国も先の大侵攻によって滅亡寸前であった。

しかし、勇者アバン率いるアバンの使徒達の決死の活躍と、

勇者達の優しさと決して諦めぬ勇氣に心打たれた獣王クロコダインの寝返りもあつて

ロモスは命脈を繋いだ。

現在、魔王軍の魔の手から逃れている唯一の人間国家である。

勇者アバンが1週間の時を費やして大陸に超巨大魔法陣をしき：

ラインリバー全土を破邪呪文マホカトルで覆うという超人的所業、

クロコダインと彼を慕う百獣魔団の残党1万の奮闘で

ロモスは魔王軍の散発的な攻撃を跳ね除けていた。

「ふう……………これで終いか」

返り血に染まった巨躯のリザードマンが足元で息絶えるバルログを見て溜息をつく。周りには数百、数千のモンスター死骸、残骸が転がっていて、そこから中から血の匂いが漂う。

獣王クロコダインは、魔王軍を裏切った1ヶ月前から激闘の日々に身を置いていた。アバンが張った結界内から人間の魔法使い達と共に

マッドオックスらのギラの一斉砲撃で大体の数を減らし、クロコダイン直属のモンスター隊（大魔王の邪気を跳ね除け自由意志で動ける精鋭）の直接攻撃で片を付けた。

「いやあ、老体にはこたえるわい。」

まったく魔王軍の奴らもしつこいのう。

毎日のようにやって来otte!」

人間の部隊を率いる副長のアキーム、の横にいた老兵が総隊長であるクロコダインに軽口を叩く。

「こんなものは序の口さ、じいさん。」

魔王軍は底が知れない………多分偵察の一環だよ、これは」  
クロコダインも老兵と同じように気さくに返す。

兜を脱いだ騎士がつるつばげの坊主頭を晒して、

「バダック殿、負傷者の回収をお願いします。」

自分は総隊長殿と一緒に百獣魔団の方を回収します」

老兵・バダックに言う、おう！と景気のいい返事をしながら走り去っていった。

その背を一瞥しすぐさま息のある部下を死体の山から探し始める。

「じいさんも大分無理をしているな」

「ええ……バダック殿はパプニカの御主君も未だに見つからず……。」

しかもロモスでは老体に鞭打って最前線……頭が下がる思いであります。

自分がバダック殿と同じ年齢になっても、

同じように立ち振る舞う自信はありません」

虫の息のリカントの傷口に薬草を擦りこみ、

木の実と一緒に潰した薬草の絞り汁を飲ませながらアキームが言った。

肩にライオンヘッドを担ぎ、脇にビッグホーンを抱えるクロコダインの顔は冴えない。  
い。

「……毎日5千以上の襲撃が1ヶ月、北から東から……。」

今や総隊長殿の百獣魔団も1万を切り……

我ら人間の兵も少年兵から老兵まで含めてようやく1万。

このままでは……」



大国ロモスの全てを絞り出した全兵力が、人間とモンスター合わせて2万に満たない。

しかもその内まともな戦力として数えられるのは、

半分を占める百獣魔団のモンスターで人間の戦士は3000程だ。

のこる7000は年少、老人、傷病者である。

一ヶ月絶え間なく夜討ち朝駆け奇襲強襲。援軍はなし。敵は減らない。

人の意地を！と集った彼らでさえ疲れていた。

兵たちが各々大量の聖水を持ってそれぞれ死体と土地に振り撒き浄化する。

ゴルゴナの屍術へのせめてもの対抗策として始めたこれも、

ロモスの国力を更に圧迫するのだ。

「だが、オレ達は一ヶ月ロモスを持たせた。

アバン殿とブロキーナ殿……」

そして合流してくれたマトリフ殿達の修行はもうじき完成するはず。

ダイが竜の騎士の力を使いこなし、アバンの使徒達が団結すれば勝機はある」

クロコダインはダイやポップの異常な上達ぶりを

この一ヶ月で嫌というほど見せつけられてきた。

時折実戦にも参加して戦の勘を磨くという荒修行もこなしていて、

特にポップを追い回すマッドオックスに跨るマトリフ老の姿は臉に焼き付いている。負傷者を人間・モンスター問わず

急造の砦に担ぎ込み終わった頃には辺りは暗くなってきた、クロコダイン、アキーム、バダックらはようやく人心地ついて少しの酒を酌み交わした。

が、とても戦勝などという雰囲気ではない。

今回もどうにか魔王軍の強行偵察を追い返した……その程度のレベルの勝利だ。

酒ももはや貴重品で、

大樽で飲める程のクロコダインが

人並みのカップでちびちびと酒を舐めるように飲んでいる。

アキームが、

「魔王軍は依然強大。

ギルドメインやホルキアで、

徹底的な残党狩りが行われていると斥候の報告にもあります。

それほどの余裕がありません。

なぜロモスに本腰を入れないのでしょうか」

クロコダインの正面に胡座をかいて尋ねる。

獸王は、

「オレは頭の出来が悪い……………大魔王の考えは分からん」

言いながら干し肉を千切って、窓の外のガルーダへと放る。

宙で華麗に啜えた側近の怪鳥を見つつ、

だが、と前置く。

「竜の騎士が現れ未だに魔王軍にとつての脅威として世界に潜んでいるのが一つ。

もう一つは、恐らく大魔王はオレ達で試しているんだ」

「……………なにをじゃ？」

バダツクの返しに、薄赤色のリザードマンはポリポリと頭を搔いて、

「うーむ、オレもいまいち要領を得ないんだ。スマン、じいさん。

やはりオレは頭が悪いな……………」

なんと言うべきかな……………」

……………つまり、大魔王の戦力がどこまで通用するのか。

それを敢えてオレ達のレベルを上げて試している気がするのだ。

魔王軍がその気になればオレ達を容易く殺せるはず。

なのにもう……………」

ダイに対しても……………紋章の力を引き出させようとしているような……………」

ダイやアバン殿達に戦力を小出しにして、

まるでわざと経験を与えているように見えないか？」

お陰でオレも少々レベルアップできた、と言つてガハハと笑う。

「まあ、奴らがオレ達を舐めている内に強くならねばならん、ということだ。

じいさんだつて大分強くなつたんじゃないか？」

「ぬっふっふ、よくぞ聞いてくれたクロコダイ。

わしのパプニカ一刀流もまるで若い頃のような冴えが戻ってきたわい！

大地斬ももうちよいで使えそうな気がするわい！ だははははは」

「自分も朝一のアバン殿の朝礼特訓には参加しておりますが……

未だに海波斬で躓いております。

いやはや、本当にダイ殿達は凄まじい才能をお持ちですな。

確かに彼らを守りできれば人類にも希望がある……………」

そう信じられます」

笑顔の下手なアキームが、やや微笑んだ。

「ホルキンス殿は既に海波斬をマスターしたらしいぞ。

いやあ流石は元カール騎士団団長。　すごい！」

もう一人の副長ホルキンスを真似てか、老兵が海波斬の型をとる。

元気で明るい老人であった。老いて尚盛んとは彼のことだろう。クロコダインは彼らを見て思う。

人類はかなり追い詰められている。

絶望的……と言っても過言ではない。

だと言うのにバダックとアキームを始め、

ロモスの戦士達は疲れていても諦めてはいない。

傷ついた百獣魔団にも分け隔てなく回復を施し、

そして今共に飲み食いしている人間と部下達。

これこそ自分が求めた光景だとクロコダインは確信している。

だからこそ苛烈に人類を攻める今の魔王軍が気に食わない。

(オレは……この光景を守るのだ)

バダックらを見て獣王が豪快に笑った。

美しい朝日が昇り、早朝独特の澄み切った空気が心地良い。

ガルルーダに両肩を掴まれながら砦を眼下に見下ろすクロコダインは、  
戦場特有の血と埃、鉄と火の臭いが混じる風を受けながら砦から戦場を空から巡っ  
て、

ラインリバー大陸の沿岸を遠くに見る。 敵影は無い。

「……………朝駆けは無し、か」

だが、

「むっ？」

ルーラの光を彼方に見てやや警戒する。

しかし、

（南側……………あちらはロモス城だな）

と思い少し気を緩めた。

ぐんぐんと大きくなるその光は案の定、

「ポップ！」

「おっさん！ 今日もお互い無事で何よりだぜ、へへへっ」

鼻先を擦るバンダナの少年、アバンの使徒のポップであった。

ルーラもトベルーラもほぼ完璧に習得したようで、空を飛ぶのも様になっている。

少年の急激な成長を見て頬を緩めるクロコダインだが  
ポップの鼻を擦る腕を見て、

「ほう………またえらく派手な魔法を覚えたようだな」

その威力を容易に想像できてクロコダインは思わず目を見開く。

「へへっ、まあな。　　ったくあのジジイときたら、

ルーラの時といい今回といい無茶な修行ばつかなんだからさあー！

アバン先生もストップ掛けてくれないしやんなつちやうぜ」

ポップは衣服の表面だけが焦げた腕をぶんぶん振って

先生と師匠の愚痴を言うがその顔には師達への尊敬が溢れていた。

「ダイはどうだ」

「マアムに、ようやく素手で勝てるようになってきたぜ。

ただし紋章込みでだけどな……。

紋章のパワー使って、やつと3本中1本つてとこかな。

ミーナには同じ条件で勝ち越した。

覇者の剣使えば、さすがにダイが安定して強いんだけどな……。

ホントとんでもねえゴリラ女……」

ポップの仲間達を茶化す発言を、クロコダインは優しい眼差しで受け止める。

彼の言葉には仲間を貶めるような気配が欠片もなく、だからこの程度の悪口もかなり心地よく獣王の耳に届く。

余談だが、ミーナがダイに素手で負けた時、

「あたしより強い同い年くらいの子はじめてみた！」

とつぶらな瞳をキラキラさせて、それ以来ダイにベツタリになった。

ダイ、ミーナ、ゴメちゃんで

城下町に遊びに行くこと（ミーナ曰く“でーと”）も最近は多いようだ。

「そうか。とうとうマアムと並んだか。」

あの紋章の力も使いこなせるようになってきたのだな……それならば希望はある」

クロコダインのその言葉に、ポツプの剽軽な表情が少し陰った。

それを見て、どうした、と獣王が声をかけてやる。

「……………なあ、おっさん。」

やっぱダイは竜の騎士ってやつなのかな」

「……………そうだろうな。マトリフ殿もそう言っていたし、

何よりダイのパワーに覇者の剣以外耐えられないのが証拠と言えるだろうな」

そう。成長したダイのパワーは常識を遙かに超えていて、

並の武器では全力についてこれずにボロボロになって崩れる。



ロモスに伝わる伝説の武器・覇者の剣だけが彼のフルパワーに耐えうるのだ。  
「でも、竜の騎士は伝承では一つの時代にただ一人。

カールで魔王軍相手に暴れた竜の騎士が出たっていう……、

フローラ様もホルキンスさんも見たって話、さ」

うむ、とクロコダインが相槌を打つ。

「魔王軍でも話題だったよ。

確かバランとかいう名だったかな」

「……………ダイはデルムリン島に流れ着いた孤児……ってのはおっさんも知ってるよな。

……………やっぱそのバランって奴がオヤジなのかな」

「かもしれない……………可能性は充分ある。

というよりもそう考えるほうが自然だろうな……………。

魔影軍団と、魔王軍最強の超竜軍団相手に引き分けたと聞くが、

恐らく無傷ではあるまい。魔界最強格のドラゴン、ボリクスが相手だったのだ。

フローラ女王から聞いた話からしても想像を絶する。

一国を覆い尽くす雷の嵐の中で繰り広げられる戦い……………お伽話だな。

……………無事だといいのだが」

ダイの父親かもしれないもう一人の竜の騎士は、

超竜軍団との激闘以後ようとして行方が知れない。

アバンとダイを中心としたロモスが人類の最後の砦に変わりはないが、正当なる竜の騎士は紛れも無く天界公認の最後の砦だ。

もしアバンと合力できればこれ以上なく心強い。

僅かな間、目を閉じてダイの身の上やアバンの安否を思うも、

「それで、ポップ。何か用があつて来たんじゃないのか？」

すぐに常通りになったクロコダインが友の少年に言った。

あんな急いで覚えたてのルーラで飛ばしてきたのだ。

ぶらりと雑談をしに来たとは思いいにくい。

ポップは、ああつ、と思ひ出したようだ。

「重要な会議があるからロモス城まで戻ってくれつてさ」

「そうか、わかった。アキームとじいさんは？」

「その2人もだつてよ」

「指揮官不在になつてしまふが、構わんのか？」

「あんまよくねえけど、どうも大事な話し合いみたいだぜ、今回ののは」

ふうむ、と下顎をさすつたクロコダインは、少し考えこみ、

「まあ、お前もルーラを覚えてくれたし、いざとなればすぐ戻れるか。」

少しならオレがいなくても百獣魔団ならば持ちこたえられるだろう」  
すぐには動けぬ怪我人達と砦を守るようガルーダ達に言い聞かせ、

ポップのルーラで一同は直ぐ様ロモス城へと戻る。

城の大会議室へ行くと、既に主要な面々が席につきクロコダインを待つていた。

「待たせてしまい申し訳ない」

のっしのっしと歩きながら開口一番、皆に謝る獣王に、

「私達こそすみません、クロコダインさん。」

北の守りを任せつきりで、しかも戦明けですぐにお呼び立てして……」

円卓から立ち上がったアバンが頭を下げるが、

いいさ、と獣王は微笑んで軽く流すだけだった。

アキムとバダックはホルキンスと不規則ながら交代制をとっていて、

ずっと砦に詰めっぱなしだったクロコダインと比べれば負担は軽かった。

円卓にはアバン、フローラ女王、シナナ王、クルテマツカ7世、ホルキンス、アキム、

クロコダイン、バダック、マトリフ、ブロキーナ、ミーナ、アバンの使徒達……

が腰掛けて話し合いが自然と始まる。

その内容は、簡単に言えば

「アバンの使徒達の修行が完了したのでこちらから攻め込もう」というもの。

もはや勢力差は明白で、まともに戦っているのは人間の敗北は避けられない。

多くの人間達が戦うことを放棄してリンガイアにいる今、

ロモスと勇者達が敗れば人類は永遠に自由を失い、

やがては全ての尊厳を奪われて真の家畜と成り下がる。

それがロモスで抵抗を続ける最後の戦士である彼らの共通認識であった。

「何とかして魔王軍の本拠地を攻略したいところですが……」

軍団は勿論のことアルキードを消し去った大爆発は余りに脅威だ。

あれが竜の騎士の裁きなのか、あるいは魔王軍の仕業か……

どちらにせよ我々に謎の超破壊力が向けられれば私達は為す術なく全滅です」

「今それを言っても始まらねえ。

魔王軍がその気なら今頃俺達は大陸ごと消えてるぜ。

奴らが余裕ぶっこいてるってんならそれに乗じさせて貰うだけだ。

リンガイアが占拠した都市ベンガーナは、

魔影軍団の攻撃やらその爆発の衝撃やらから立ち直っていない。

魔王軍が城壁諸々を修復しちまう前にこっちから攻撃する」

マトリフがクルテマツカ7世へ視線を投げると、目だけで何かを伺っているようで、

クルテマツカも何やら察して、目だけで「好きにするといい」と返し頷いた。

彼らの陣営で最も知恵に優れたアバンとマトリフが中心となって話し合いは進むが、もはや何をしようかと破れかぶれの感が拭えない。

全ての作戦が最上とは程遠く、

作戦とも言えぬ薄氷を踏む思いのものばかり。

「全力で……がむしやらにベンガーナを攻撃する。

魔王軍とリンガイアに危機感を抱かせる程にな。

で、その間に勇者達の少数精鋭で鬼岩城を攻撃、撃破……。

現状、俺達が見出だせる勝ち筋はコレしかねえ」

マトリフの表情はいつものスケベじいひのそれではなく、

まさに大魔道士の名に相応しい冷徹なものであった。

「………ようは囷だ。

敵の本拠地に近いベンガーナを攻撃するんだ。

どんなに魔王軍が油断していようと反撃の速度と量は半端じゃねえだろう。

ま、それだけに意識を逸らすことが出来るってなもんだが。

………良くて、ベンガーナを落として全滅。

悪けりゃベンガーナに取り付くことも出来ず全滅」

どれだけ粘れるかね、と目を細めて考えるマトリフの思考は一切の情を切り離している。

マトリフの発言に、弟子のポップを筆頭としたアバンの使徒達は一瞬ギョツ、となったが、

「決死隊を募るほうがいいのでは？」

士気は伝搬しますから、覚悟のない者は隊にに入れるべきではないと思います」

「今更決死も何もないぜ、アバンよ。 ロモスにいるのは酔狂な物好きだけだよ」

彼らの心優しき先生が大魔道士に同意したようだった。

ダイとポップは思わず、「反対だー」と言いたくなつたが堪えた。

兵士の一人一人が、

どういふ思いでロモスに残留してるかを日々の触れ合いから知っているからだ。

死にたくない。 大魔王に全ての尊厳を奪われてもいいから安穩と暮らしたい、とい

う者は、

とつくにロモスを捨てている。

ロモスに今もいる人間達は、言ってみればプライドが高いのだ。

人として当たり前の日々を生き、死ぬ。

人としての最後の誇りを捨てるくらいなら死を選ぶ………そういう者だと知ってい

るからこそ、

ダイとポップは情に流されずに口を噤んだ。

皆が冷徹な作戦を無闇矢鱈に批難しなかったのは、

それを提案した先生と師が相応の覚悟を持っていると理解できたから、というのもある。

アバンは特に、囀の軍を自分が率いると言つて聞かなかつた。

「巨悪に太刀打ち出来るのは勇者の一太刀。

そして、新たなる勇者はダイ君……君です。

教えられることは全て教えた。もう君の力は私を超えているでしょう……。

ダイ君、ポップ、マアム……そしてミーナさん。

君達はマトリフ達と一緒に鬼岩城に乗り込むのです」

そう言つて突入隊に指名した人員の中にはクロコダイン達もいたが、

しかし獣王は、

「オレは鬼岩城の場所を知っているが、ルーラを使えるわけでもない。

おおまかな場所を地図に記せば、

あの異様な大城はすぐに目につくだろうからオレがいなくてもわかるさ。

アバン殿はダイ達に欠かせぬ主柱。

それに、囿の要である百獣魔団はオレ以外の手には余るだろう。

オレにやらせてくれ」

やんわりとアバンの指示を断った。

アバンがマトリフと共にこの非情の作戦を練り更に皆に実行させようとしたのは、偏に自分が死という責任を負うからこそだった。

再度、己が……と言い出しそうなアバンを制したのはマトリフの一言。

「…………正直、お前さんがそう言い出してくれるのを待ってたぜ。

ありがとよ、クロコダイン」

アバンは眉根を寄せていて、その顔はやや険しい。不満であろうことは目に見えた。

だから彼が口を開く前に、

「まあ聞け、アバン」

ピシヤリ、と先回りした大魔道士は反論を遮り、

大会議室の一同をゆっくり見回してから口を開く。

「噂に聞くあのゴルゴナの肥やしにしかならねえガキとジジイを除いて、

百獣魔団を合わせれば1万と少し。

それでも数の上では話しにならない……………。



だが、今のロモスの軍は半端な強さじゃねえ。

全員、降伏するのは死ぬより辛いつて言い張る死兵共だからな。

しかし、ほぼ万全の魔王軍相手じゃまだ困すら務まらん。まだ重要なピースが欠けている。

群れが強くなるか弱くなるかは頭次第……だよな、クロコダイン」

「ああ」

獣王に確認するように問うたマトリフに、リザードマンが短く答えると、

大魔道士は先を続ける。

「困には、最初の予定通りアバンも参加してもらおう。

ベンガーナをアバン、クロコダイン、ホルキンス、アキーム、バダック率いる死兵1万で攻撃。

これは敵さんからしたら、かなり本気に見えるだろう。

なにせ大勇者と百獣魔団長、カールとベンガーナの元騎士団長までいるんだ。

アバンの使徒の不在は1万の兵で覆い隠す。悟らせちゃいけねえ。

……………バダックの爺さんはおまけだけだな」

「マトリフのお！ はるか年上に爺さん呼ばわりされたくないわ！ しかもおまけつてなんじゃない！」

「だはは！ 冗談、冗談！」

鼻水を垂らして急に冗談めかす。

張り詰めてばかりでは糸も切れやすい。

これもロモスで意地を見せようとする老人同士の友情がなせる、場の“和ませ”と言えるし、

何よりマトリフが次に発言する己の畜生ぶりへのワンクッションを置きたかったのかも知れない。

「えー、で、だ。大暴れしていい感じに魔王軍を惹きつけられたら、

アバン………お前はリリルーラでダイ達に合流するんだ。

これで鬼岩城攻略はグツと楽になる」

マトリフはその表情を揺らがせることなく、旧知の友を見る。

各亡国の代表達もマトリフの言葉を脳に浸透させ咀嚼し理解すると、

沈痛な面持ちになり奇妙な沈黙が場を包む。

ようはアバンに、クロコダイインら一万の兵と共に戦い、

全滅寸前まで粘ってすぐさま鬼岩城での戦いに参加しろ、ということだ。

心身ともにかなりキツイ。アバン以外にはリリルーラが使えないというのも最大

の理由だが、

彼ほどの精神でなければ味方を目の前で見捨てる自責の念には耐えられないだろう。(何とも酷いことを私にやらせる……ですが……さすがです、マトリフ)

大魔道士の冷徹さに度々救われてきたし、彼の性根は知っている旧知のアバンは、「わかりました。クロコダインさん達もそれでよろしいですか？」

4人の戦士を見ると、彼ら団専念組はさも当然という顔で頷いたが、とうとうポップが椅子を蹴って立ち上がった。

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！」

本当にこんな作戦でいくのかよ！　こんな……！！

おっさんたちを捨て駒にするみたいな作戦！」

とうとう堪えきれなくなった様子のポップが怒りを露わにする。

師としては弟子の情に流される“熱く”なりやすい彼の性分はいただけないが、

一人の人間として見ればどこまでも好ましい。

マトリフは(俺みたいな冷血漢は天国にやいけねえ……行っちゃいけねえ) そう思っていた。

だが、内面はそれでも外面は違う。

「みたいな、じゃない。完全に捨て駒だ」

「なっ……！」

「ポップ……いいか。もう俺達人間には後がない。

俺達が負けければ人類は終わりだ。

人間は家畜になるぜ？ 三流魔王が昔、そう言ってたからな。

人間の存在を家畜としてだけ認める……ってな。

『それでもいい。生きていければいい。』

そう言うならさっさとリンガイアにケツまくって逃げる。

どうせ何もしなくても負ける。

だったら最後に足掻いてみる……今、ロモスにはそういう奴らが集まってんだ。

お前のやることはそういう奴らに同情し、命を大事にして声かけることか？」

マトリフの発する視線と声はゾツとするほどで、まるで氷であった。

師の言葉と眼光は、ポップの怒り一色だった感情に水を差す。

「で、でもよ師匠！

勝つために何でもやっついていいってわけじゃないだろ！

それだったら俺達も魔王軍と変わらないじゃないか！」

ポップは声を荒げ食いつく。

「ポップ……」

アバンの使徒の紅一点……マアムが弟弟子を慮るように呟いた。

そんな彼女の一言を自分への同調の証と思った弟弟子は、  
「マアム！ お前も何とか言つてやれよ！」

こんな大勢の人を見捨てるやり方で勝つたとしても、  
そんなの魔王軍と変わりないじゃねえか！」

姉弟子へと発言を求めた。

優しいこの少女ならば自分にきつと同意してくれる。

そうポップは思っていたが、しかし

「……………全員で鬼岩城を目指せば必ず魔王軍は全軍で迎え撃つてくるわ。

あなたも魔王軍の強さはロモス決戦で嫌というほど味わつたでしょう、ポップ。

……………特に冥王ゴルゴナは、

私とミーナ、老師とアバン先生の四人がかりでようやく追い払えたのよ。

そこに超竜軍団と魔影軍団が加われば……………勝てない。

無駄死にするだけよ」

思いも寄らず否定された。

「な、なんでそんなこと言うんだよ！」

今度は俺達だつて師匠もいるし、おっさんも…ホルキンスさんもアキームさんもいる

！

「1万人も味方は増えてるし、レベルだってあがってる！ 皆で行きや勝てる！  
なんでみんなそんな冷えてえんだよっ!!」

魔法使いの少年は思わず目を強く瞑り叫んでいた。

アバンを始め、皆が口惜しいような：

悲しげな顔つきとなって静寂がロモス城の会議室を包み込む。

たつぷりと十数拍ほど間が空いただろうか。

やがてマトリフが、

「いい加減にしろバカ弟子……………」。

いつまでガキみてえな我俥言つてやがる。

魔法使いつてのはパーティ内で誰よりもクールじゃなきゃいけないえ……………教えたはず  
だぜ。

アバンが……………マアムが本気で冷たい奴かどうか、分からないお前じゃねえだろ?」

冷ややかな眼光を弟子に注ぐが、

その声にはほんの僅か、温かみがあつたように思える。

ポツプは、ハツとなり、気付いた。

よく見れば誰も彼も、強く拳を握りしめている。

アバンもマアムも唇を噛み切りそうなほど噛み締めている。

撃発しそんな感情を押し込めて、身体を震わせている者もいた。

そんな中、ポップに続いてダイが席を蹴って立ち上がり、

「クロコダイーン！ バダックさんにホルキンスさん、アキームさんも。

おれ達……すぐに鬼岩城を落とす！

だから、ちよつと待っててくれ！

すぐに……みんなで駆けつけるから……！」

元気を振り絞った笑顔で年長の友人達に言った。

「フツ、ありがとう、ダイ。

だが、案ずるな。オレ達も結構強いつもりさ。

もしかしたら魔王軍を蹴散らして、

お前達より早くベンガーナを落とすかもしれないぞ？ ワツハツハツハツ！」

「はははは、まさしくその通り。

ダイ君におんぶにだっこでは

元カール騎士団長としてロカ先輩にも申し訳ないからな」

「そうなればわしらが鬼岩城に応援に行つてやるからな！

まっつておれよダイ君！

なあにわしは姫さまと再会するまでは死ぬ気はないわい！」

クロコダイン、ホルキンス、バダツクの言葉に、

アキームはむっとり顔で力強く頷く。

ポップの身体はワナワナと震えて、

「……………そうだな……………そうだよな、ダイ。

みんな……………冷たいとか、勝手なこと言つて、ごめん。

パパツとハドラー達ぶつ倒してさっさとおっさん達助けよう。

ダイ、俺達なら出来るよな……………！」

グスツ、と鼻をすすり涙目でダイに抱きつく。

弟弟子の心の強さを見て、自分の不甲斐なさを自覚し、

そして年下の親友ダイの頼もしさが余りにも誇らしくて自然と涙が滲んでいた。

感情豊かに己の心を吐露するポップの存在は、皆の心を暖かくする。

(ありがとう、ポップ、ダイ)

獣王は勇者のために、自分のために涙を流してくれる友人達のため。

人間と魔物の真の共存のために命を捨てる決意を改にし、

元騎士団長、元戦車隊隊長、元姫の側近の3人もまた、

勇者の勝利のために命を捨てるのに躊躇いはなかった。



## 獣王と獣王

1万のロモス軍は、家族と涙の別れを済まし、全員が大型船に別れて乗船。

100隻近い大船団は海路を往き、一路ギルドメイン目指し突き進んでいった。

当然、アバンやクロコダイン達は

(洋上で水棲モンスター達に襲われない道理はない)

と警戒を強めていたが、

ロモス自慢の聖水を船首から垂れ流す軍船団にモンスター達は近寄れない。

マーマンやしびれくらげ、だいおうイカの群れは無理矢理攻撃を仕掛け、

その全ての水棲モンスター達が皮膚を焼かれて自滅していく。

だが、それでも彼らは攻撃を止めようとしな

身を焼かれる苦しみに悶えながらも、狂ったように軍船目掛け殺到してくるのだ。

「よせ〜〜！ 貴様らもわかってるだろう！ 無駄死には止めんか!!」

地上のモンスター達に顔の効くクロコダインが大音声で呼びかけるも効果はない。

アバン達もこの異様に息を呑み、異常性に気づく。

「……これは……モンスター達は、何かを恐れているように見えますね。」

聖水の中に突撃し、その身を焼かれる方が退くよりもマシ…。

そういうことでしょうか」

アバンがクロコダインを見る。

「そう見えるな。 マーマンのあの血走った眼……とても普通じゃない」

「一体何が彼らを駆り立てるのか…！」

だが、あの勢いは危ない。 クロコダインさん、皆に号令をお願いしますか。

近寄るモンスターから弓と大砲で迎撃。 MPはなるべく温存するように」

「心得た！」

巨体のクロコダインの声はドデカク、そして声は低音で渋いながらも良く通る。

命令の伝達や士気の鼓舞に大変役立ち、これも立派な将として才能だ。

クロコダインが叫ぶと大船団に限無くアバンの意志は伝わり、

勢い盛んな個体から狙撃され海の藻屑となるモンスター達。

淡々とした作業じみた狙撃が1時間程も続いたが、

今度は空から怪鳥の雄叫びが洋上の空に響き渡る。

何らかの合図と思えた。

「今のは……オレが聞いたこともないモンスターの声だ。

オレが知らぬ地上のモンスターがまだいたのか…？」

獸王の名が泣くな、と薄く笑うクロコダイイン。

そんな頼れる彼の言葉にアバンが一抹の不安を抱き、そしてある可能性を示唆する。

「…ならば、地上のモンスターでないとすれば？」

「なに…？」

アバンとクロコダイインが互いに不安げな視線を交差させた、その時である。

ドオン、

という爆発が船団の右翼から幾つも起こり、

大型軍船が満載した兵士ごと四散し海上に散らばった。

「な、なんだ！」

「わかりません！ 突然船が爆発し——」

ドオン、ドオン、ドオンと今度は立て続けだ。

「——うわあ!？」

火薬庫に引火した船が大爆発を起こし火炎を周囲に撒き散らす。

燃えた兵士が何かを叫びながら海へと転落していくのが遠目にも分かる。

「空だ！ 空から火炎がふつてくるぞ!!」

誰かが叫んだ。

「バカな！ 空には雲ひとつない晴天だつての！」

モンスターなんて……あつ！ い、いた!!」

「さつきまでいなかったのに、きゅ、急に！」

ア、アバン様！ クロコダイン様！ 空に、空にモンスターの群れです！」

「あ、ああ！ なんて数だ！」

「今まで誰も気づかなかったのか！ 見張り台は何をやっている！」

兵士達が蜂の巣をつついたように慌てふためく。

無理もない。

空を埋め尽くす飛行型モンスターが突如現れたのだ。

突撃を繰り返す水棲モンスターに気を取られていたとはいえ、

この数を全員が見落とし船団の上空をすっかり覆われてしまうなんて有り得ないことだった。

「レムオルか消え去り草でしょうね。 やられました。

しかも、あのモンスターは初めて見る……！」

クロコダイン、皆にあの燃える鳥めがけて氷系呪文で攻撃するように指示を！」

アバンが指差す空。

そこには燃え盛る炎をまとう鳥が無数にひしめき合い、今も船へ火炎を吐きかけていた。

クロコダインは勇ましく大きな声で皆を落ち着かせ、そして空の燃える鳥への攻撃を命じた。

だがそれと同時に、

「ひくいどり共よ！ 中央右よりの大型船を狙えいっ!!」

空からクロコダインにも劣らぬ大音声が聞こえ空気を震わせた。

そしてその声に合わせて大量の燃える鳥：

ひくいどりが一斉に炎のプレスを吐きながらアバンとクロコダインが乗る軍船に殺到した。

「くっ!? 防御光幕呪文!!」

アバンが咄嗟に展開した氷炎を弾く結界呪文によつて炎は大分軽減されるが、降り注ぐ火炎の全てはとて防ぎきれない。

船に引火し、それを消すために甲板を兵士達がバタバタと走り回る。

「リントブルム隊!! 周囲の船を攻撃！ 船首の聖水壺を破壊せよ!!」

それ以外には目もくれるなッ！」

再度、空から響く声の的確な指示が飛ぶ。

燃える鳥達の後ろに控えていた、

ひよろ長いトカゲのような血色の悪い紫の翼竜が猛然と降下を始める。

アバンが顔を青ざめるが、フバーハを解くわけにもいかない。

「バルーン隊、ケンタラウスを投下！」

人間どもを八つ裂きにせよ!!」

矢継ぎ早に空から下される命令。

青の皮膚に翡翠色の翼膜、その翼膜には目のような紋様があるモンスターが滑空し、その背に乗る二足立ちする馬のモンスターが軍艦の甲板目掛けて飛び降りる。

どの船も甲板上で激しい戦闘が開始され、そして燃え盛り、爆発し、沈没していく。

「デルパ!!」

乗り込んできた馬のモンスターを全滅させ、クロコダインが動いた。

腰袋から取り出した自分専用の魔法の筒から召喚したのは、彼の忠臣ガルーダ。

「アバン殿！ 皆を頼む！」

「クロコダイン！ お気をつけて！ 敵は戦巧者だ！」

ガルーダは跳躍し、大きな足爪で主の肩をシツカリ掴むと大翼を広げ大空目掛け飛び立つ。

「海のモンスター共よ！ 何を二の足を踏んでいるツツ!!」

聖水は薄まった！ 突撃せよ!! それとも我がハーケンに素っ首刎ねられたいかつ

!!!」

「グオオオオオオオ!!!」

「キシヤアアアアア!!!」

またも空から四方の海に吸い込まれる大音声。

尻にムチを入れられたかのように、だいおうイカ達が猛り狂って再突撃を開始する。薄まったとはいえ、その身を焼く聖水に耐えての強行軍。

そして、

「う、うわあああ！ 船尾にとりつかれたぞー！」

「ぎゃああ!!!」

血走った目のマーマンが次々に側舷を這い上がり、甲板に乗り込んでくるのだ。

爪を兵士の背に突き立て、鋼鉄のヘルムごと頭に齧りつく。

「ゴオオオオオオ!!!」

空から降り注ぐ友軍の火炎に全身を焼け爛れさせただいおうイカが、

太い触手をマストに絡めさせて船ごと海中に沈めんとする。

「くっ！ おのれ…… 貴重な戦士達を!!!」

沈む船の海流に巻き込まれ、

何十何百という戦士が水底に引きずられていく様を見て獣王が歯軋りするが、

今は救助よりも敵の指揮官と思しき声の主を倒すのが先決だ。

ロモス軍の魔法使い達の一部がトベルラで必死に救助を試みているが、魔法使いはそもそも絶対数が少ない精鋭だ。

皆もそれを理解している。

殆どの魔法使いはアバンと同じようにフバーハで船の守備を優先していて、そして燃えたり、或いは海に没する兵士達の誰一人として「助けて」とは叫ばないのだ。

全員が歯を食いしばって戦っていた。

ガルーダと共にクロコダインはひくいどりの群れに切り込んでいき、

「クワアアアッ!!!」

「唸れ! 真空の斧よ!!!」

ガルーダはベギラマを口から連射し、

クロコダインは真空の刃でひくいどり達の翼を一時鈍らせ動きを封じる。

そして大型戦士の速度とは思えぬスピードで斧を斬っては返し斬っては返し…

次々に見慣れぬ炎の鳥を両断していく。

「我が名は獣王クロコダイン!! オレの首が欲しい奴はおらんのか!!!」

(あの声の主を、何とかして探し出さねば!)

(このままでは船団はギルドメインに辿り着く前に全滅だ!)



敢えて目立つ立ち振舞で敵の指揮官を誘い出そうとする。

「ぬううんっつ!!」

一際強力なクロコダインの斧の一撃。

闘気をまとった衝撃波で頑丈の炎の鳥を一層する。

獣王の視界を塞ぐ一群が消え去り晴れ渡る。雲一つない青空。

そして、遠くにポツンと見える異形のモンスターと目が合う。

それは巨大な斧を両手で握りしめる逞しい人型の上半身と、

ドラゴンのような四肢と尻尾を持つ下半身。

全身はダークグリーン色の鱗に覆われ錆色の髭と長い髪が風にたなびく。

(あ、あのモンスターといい……一体コイツらは…何なのだ!)

だが、その異形のモンスターすらかすれてしまう威圧感を持った者が、その背にはいた。

クロコダインが真っ先に目を奪われたのはそいつだ。

大斧を携えたモンスターの背にまたがる、輝く鎌を右手に持つ男。

「貴様が獣王クロコダイン、か!」

ハーケンを担ぎ直し、男が凶暴に笑った。

「セルゲイナス!」

男がハーケンの石突でダークグリーンのもんスタアの脇腹を打つ。

セルゲイナスと呼ばれたそのもんスタアが手の大斧を振り回すと、

汗ばむほどの陽気と海上の燃える船の熱気に挟まれた暑い空が一変し、

ゴウゴウと音を立てる猛吹雪が突如吹き荒れ氷点下に変わり果てる。

「くっ、マヒヤドだど!? あのもんスタアはかなり強いぞ！」

「ガルーダ!!!」

「クワアアアアッ!!!」

ガルーダが口からベギラマを放ち、斧をぶん回すセルゲイナスへと攻撃。

だがセルゲイナスは上で振り回していた斧をそのまま前面に展開。閃熱を散らし

てしまう。

「なに!?!」

「フハハハハハハ！ セルゲイナスは魔界でも指折りの強豪！」

オレが身を預けるに相応しきもんスタア故に我が騎乗もんスタアに選ばれたのだ!

地上のガルーダ如き、敵ではないわ!!

そして、クロコダイン！ 貴様もな!!」

獯猛に笑う男が、背の大きな翼を広げセルゲイナスから飛び立つ。

「我が名はグノン！ 新生百獣魔団の将なり!!」

聖水如きで無防備な洋上を切り抜けられると思つたか！

貴様らの上陸を座して待つほどオレは気が長くないのでな……仕掛けさせてもらったぞ！

獣王クロコダイン！ 貴様の首を獲つて我が手柄とせん！

威風堂々と名乗りを上げ、

太陽光を受け白銀に輝くハーケンをかざしクロコダイン目指し一直線に向かつてきた。

「むう!? あ、あの輝きはヒュンケルのネクロスと同じもの！

ま、まさか……オリハルコン!」

「ハツハツハツハツ! 死ねい!」

真一文字に振り回されるハーケンを斧の横腹で受ける獣王。

だが、ピシリ、とたった一撃で真空の斧にヒビが入る。

「ぐ!? や、やはり……オリハルコンか！

ぬううん!!」

「っ!」

オリハルコン製武具とあまり斬り結びたくない獣王は、

斧持たぬ左の豪腕で眼前の男を殴りつけ、割りと整った彼の顔面に直撃させた。し

かし、

「…ふっ！ 非力！」

男は不敵に笑ってクロコダインを睨みつけた。

「なんだと!？」

「オレの肉体は竜の騎士に匹敵するのだ！」

本当の拳というものを教えてやろう!! そらあーーーッ!!!」

「がふっ!!!」

グノンの拳がクロコダインの顎に突き刺さる。

「もう一発!!」

「ウオオオオオッ?!」

敢えてハーケンではなく拳でクロコダインを滅多打ちにするのだ。

「そらそらそらあーー!!」

「ぐわあああああッ!!!」

ガルーダも必死で羽ばたき主人を眼前の敵から遠ざけようと飛ぶが、

グノンは巧みに翼を操作してピッタリとガルーダに追いつきクロコダインを逃が

さない。

「貴様が獣王だと!? 笑わせる！」

獣王の名はオレにこそ相応しい!

貴様の首ごと獣王の名、このグノンが頂こう!!」

グノンが右手に携えたハーケンを振りかざす。

首元をとんでもない握力で掴まれているクロコダインは、

それに加え頭を何発も強力なパンチを受けてしまつて視界が揺れている。

とても避けられない。

「クワアアツ!!!」

その時、ガルーダがセルゲイナスとのマヒヤド・ベギラマ合戦を取りやめ、

グノン目掛けて閃熱呪文を仕掛けた。

それによつてガルーダはその身にマヒヤドをまともに受けてしまふが気にも留めな

い。

「っ?! 貴様! このグノンに対して!!」

ベギラマの直撃を肩に受けたグノンがハーケンの矛先をガルーダへと切り替え、

オリハルコンの刃がガルーダの身を裂いた。

左翼の根本から切断され、ガルーダが苦悶の表情と呻きをあげる。

バランスを崩しもはや墜落する……寸前にグノンがガルーダの顔面を掴んだ。

「クワアアツ!!!」

その時、ガルーダは己の命運を悟る。

そして咄嗟に足に掴む主人を蹴るようにして放り出し、少しでも遠ざけようと足掻いた。

「下等モンスター風情がこのグノンの毛皮に傷をつけるなど！ 許さんツ!!」

左手に掴んだガルーダを、まるで枯れ葉のように軽々と振り回すグノン。

「ぬ、ぐ……あ、あれは!? ガルーダああ!!」

脳震盪が治まったクロコダインの視界に飛び込んできた光景。

それは、左翼切断面からおびただしい血が吹き出しながら振り回されるガルーダの姿。

自由落下に身を任せるしか無いクロコダインには、その光景を見ることしか出来ないのだ。

「や、やめろ!! ガルーダ！ ガルーダああああ!!」

「死ねいッ!!」

グシヤリ、

何かが潰れ弾ける音がして、大量の血が雨のようにクロコダインを追いかけていく。

「ガルーダあああッ!!」

獣王の雄叫びが海面に吸い込まれていき、

直後に破裂するかのような水音を轟かせて水柱があがる。  
グノンの凶悪な笑いが空に響いた。

## グノンの猛攻

「ハツハツハツハツ！ 口ほどにもない！」

猛々しく笑うグノンが勝ち誇ったままに空を飛ぶ。

このまま海中に沈んだクロコダインに追撃したいところだが、  
(奴はワニ型の獣人……名からしても恐らく水中は奴の領分だろう)

そう判断すると、次の目標を先程部下に狙うよう指示した大型の軍船に決める。  
まずは徹底的に指示系統を破壊するつもりのグノンであった。

「セルゲイナス！」

左手に握り締める巨鳥の残骸を、べったりとねとつく血と共に拭い捨て去る。

呼びつけた魔界のモンスターの背に再び跨ると、

「まずは人間どもを叩き、その後貴様を追い込み殺してやるぞ。 クロコダイン」  
踵を返し人間達への攻撃を再開しようとした。

だがその時。

「むっ？」

グノンの目が海面に釘付けとなった。



今も海上では男と魔物達が雄叫びを上げて剣と爪を振るい合っており、呪文や大砲の爆発で海面は荒れに荒れる。

だがグノンがジツと見るそこは、

(…海面が、渦を巻いて…)

周囲の波の揺れとは明らかに異なつた。

しかもグノンの本能が妙な警鐘を慣らすのだ。

ドオン、と海面が破裂した。

「なに!？」

大海に巨大な水柱が立ち、沈む船、兵士、モンスターを巻き込む大渦が生じる。

「な、なんだあれは！ まるでバルジの大渦だ!!」

誰かがそう叫んだ。

大渦の中央から天に向かって逆巻く鬨気の竜巻。

それが容赦なくグノンとセルゲイナスを飲み込んだ。

「う、うおおお!! こ、これは……!!」

あ、あの小娘の技に似ている…! と、鬨気! 鬨気の竜巻!!」

グノンの脳裏に浮かぶは精霊ルビスの世界、

アリアハンにて激闘を交わした勇者アルスと3人のケンオウ。

その一人、拳王ヤオの技である。

(似ているが……！ 闘気量が桁違いだ!!!)

「うおおお!! ひ、引つ張られる!!!」

周囲の残骸、死骸を派手に巻き込みながら大渦はより激しく回転を増し、ついには海底で踏ん張るクロコダインその人が渦の中央に露出する。

天に突き出されたクロコダインの膨れ上がった右腕からは、

まさに乱気流としか形容できぬ暴力の闘気流が尚も発生し続けグノンを掴んで離さない。

「グノン！ 我が友ガルルーダの仇……、討たせて貰うぞ!!」

クロコダインが叫び、右腕をグツと引くと、

闘気流が乱雑に歪み、空のグノンとセルゲイナスの体勢を完全に乱した。

「くっ！ 水底でオレと戦おうというのか！ いいだろう！」

ならば……こちらから出向いてやるまでよ!!」

引き寄せる闘気の暴風に逆らうように翼をはためかせていたグノンとセルゲイナスが、

グノンの声を合図として一気にクロコダイン目掛けて急降下しだす。

引つ張る闘気の流に乗り、重力までも味方につけての突進である。

この加速が乗ったグノンの一撃を貰えば、

いかにクロコダインが鉄壁の皮膚を誇ろうとただでは済まない。

「やはりそうきたな!!」

だがクロコダインは、待ってましたとばかりに不敵に笑う。

突き出す右腕と逆の腕……引き絞った左腕が手甲を弾き飛ばし、膨張。

「っ!? ま、まさか……い、いかん! セルゲイナス!!」

「遅いわああ!!!」

巨大な鬨気の竜巻の中に囚われるグノンに、

逆回転のオーラのハリケーンが矢のように突き刺さる。

「ううっ!? ぎゃ、逆回転の……もう一つの鬨気、だとおおお!!」

「ぬうううん!!! 獣王激烈掌!!!」

獣の口の様に両手を合わせて、捻る。

鬨気の乱気流内に更なる逆回転の渦が加わり、

回転が更に振れ、くねり、曲がり、中にいる全ての物を切り裂く。

「ぐおおおおおおお!!!」

全身を襲う大ダメージにグノンも遠吠えのような叫びをあげる。

しかし彼の目はより一層鋭くクロコダインを睨んでいた。

獣王激烈掌の渦中でセルゲイナスの巨体に我が身を埋もれさせ、ダメージを最小限に抑える。

肩代わりしたセルゲイナスは当然のように死んだが、グノンが気に留めるわけもない。

マヒヤドを開幕に撃たせた時点で、MP不足によりベホマズンも使えないし、それにどの道必要ないだろう。なにせグノンの体は再生能力を有している。

闘気流にズタズタのポロ雑巾のようにされたセルゲイナスを投げ捨て、

グノンはハーケンを大上段に構えた。

「はああああああああつ!!!」

「来い！ グノン!!!」

獣王の闘気流が消え失せ、海が徐々に戻りつつある。

グノンはハーケンを高々と掲げ、

クロコダインはヒビ入る真空の斧を構え…、投げ捨てた。

「つ?! なに?! 獲物を捨てるとは! 勝負を捨てたか獣王!!」

クロコダインは頭上に豪腕をクロスさせる。

完全防御の体勢だ。

(オリハルコンの武器には真空の斧では抗えん!)

ならば!!

全霊で防御し、奴の攻撃を凌ぐ!」

そうすればグノンと自分は自然と戻りゆく海に飲まれることになるのだ。その意図をグノンも察した。

「舐めるなよ……! 我がハーケンの切れ味! その身で知れいっ!!!」

ビュウツと風を裂き白銀の鎌が獣王を両断せんと迫り、ドカツ、と鈍い音。

グノンのハーケンがクロコダインの両腕を引き裂き、切断……出来ぬのであった。  
「バ……バカナツ?!」

「ぐふふふふ! 力任せに振るうだけでは、オレの鋼鉄よりも硬い皮膚は貫けん!」  
ハーケンがクロコダインの薄紅色の皮膚で止められる。

いくらグノンが力を込めようが、そこから進みもせぬし引きもせぬのだ。  
「貴様は確かに強い! だが、ただ力任せに剛力を振るうのみよ!

オレが闘気を込めて完全な防御をとれば……こうなる!」

クロコダインが両腕をクロスさせたまま、一気に巨体でグノンを押すと、海底の泥濘に足を取られそのまま押し倒されてしまう。

あまつさえハーケンの柄が首に押し付けられ、彼の首を締め付ける。

「ぐ、お……が、ああ……き、貴様……!!!」

オリハルコンの棒が、クロコダインの重量とパワーを加えてグノンの首を圧迫し、そうこうしている内に海が完全に彼らを覆い尽くし自然の姿に戻っていく。

クロコダインとグノンは完全に海中に没したのだ。

「がぼ……ぐ……が……がぼ！」

いかにグノンの体が

『全モンスターの優れた点を取り入れて作られた竜魔人に匹敵する性能』だとしても、

今はグノンの魂に合わせて形状を変えている。

即座に肉体を作り変えてエラ呼吸を……などは到底出来ない芸当である。

学者肌で肉体の性能を隅々まで知るザムザやザボエラ、

ムーの七賢人だったのなら可能かもしれないが、少なくともグノンには無理だ。

しかも彼は、クロコダインの指摘通り闘気の使い手ではない。

肉体の強さのみで戦う荒々しき戦士であり、己のそういう闘法に誇りと自信を持って

いた。

ビーストの王である自分に小手先の技は必要ない。

そういう自負が彼にはあった。

そして、それによってクロコダインに圧倒されるのを許してしまっていた。

なにせ闘気を全開にして防御に徹したクロコダインには、

正当の竜の騎士の必殺技とて防がれてしまうのだ。

先程、グノンが見舞った拳撃も、完全防御のクロコダインにはもはや通用しないだろう。

(貰ったぞグノン！ 海での勝負ならば貴様に勝てる！)

そしてクロコダインの得意とする海。

勝機が見えた。

(舐めるなッ!! クロコダイン!!!)

かのように見えた。

しかし、グノンの目がギョロリと見開かれ、同時に彼の胸部が膨張する。

体内の酸素を掻き集め肺にチャージ。

互いの鼻先が付きそうなのこの距離で、

「ハッツツツ!!!」

圧縮した空気弾をクロコダインの顔面に叩き込んでやる。

「むぐ…!?!」

いかにクロコダインが巨体とパワーで押し掛かろうと、

海中では巨体の重量は半減する。

グノンの空気弾の力に圧され浮いてしまったところでグノンは素早く脱出。失われた酸素を求め一目散に洋上へ泳ぎ登る。

(逃がさん!)

当然、クロコダインも尻尾を左右に波打たせ加速。猛追する。

(掴んだ…!)

グノンの片足をクロコダインの大きな手がハツシと掴んだが、グノンはそれを血走った目で睨みつけると右手のハーケンを一閃。

(な、なにい!?)

己の片足を切断し、切り落とした。

蛇口をひねった水道水のように垂れ流れる血が広がり、クロコダインの視界を赤く遮る。

驚愕と血によって一瞬もたついたその隙に、

「がはぁー……っ!!」

グノンは海面に浮上。

そのまま翼をはためかせ空へと逃げた。

「お、おのれ…許さんぞ…クロコダイン!!!」

彼が睨む先には、海面から頭を覗かせるワニの獣人。



いつの間に回収したのか、右手には真空の斧を。そして左手にはグノンの足を握っていた。

滞空するグノンの足からしとどに溢れる鮮血。

だが、

ボコリ、ボコリ、と切断面を泡が覆い尽くしていくと徐々にグノンの足が生えてくる。

「あ、あれは……！　再生、しているのか!!」

クロコダインの目が驚愕に見開かれた。

獣王激烈掌によって全身に負った筈の傷も、いつの間にかグノンから消えていた。

どうやらクロコダインの予想は正しい。

「くくく……そうだ。我が肉体はあらゆる傷を再生する。

だが……さすがは獣王と名乗るだけはある……。安心したぞ!

雑魚から獣王の名を取り戻してもつまらんかなあ……!　かああああ!!」

怒りをありありと顔面に浮かべるグノンが口から獄炎を撒き散らす。

海面が瞬間的に沸騰し、クロコダインを焼く。

すぐさまクロコダインは潜水。炎から逃れるが、

(何と凄まじきブレスだ!　オレのヒートブレスとは比べ物にならない!)

あの一瞬でクロコダインの皮膚は所々が焦げていた。

(もはや同じ手は通じまい……どうするー！)

友・ガルードダを失ったのは個人的な感情以上に戦力として痛撃だ。

まるで自分の手足のようにガルードダは意思を汲み取って空を飛んでくれた。

あれ以上の相棒は、もはや得られないだろう。

ガルードダを失ったクロコダインは海中からの攻撃しか手はない。

(だがやはり……獣王会心撃しか——んん?)

海中を華麗に泳ぎながら思案していた、その時。

大爆発が突如海中で発生した。

「……っつ!!!」

凄まじい衝撃波が水を伝わり海洋を駆け巡る。

クロコダインですらキリモミ状になって吹き飛ばされ、

魔王軍の水棲モンスター達も吹っ飛び海中の岩肌に激突し、

或いは打ち上げられ海面に叩きつけられ、死んだ。

海の中がそんなであるから海上も惨憺たる有様だ。

「う、うわああああ!!」

「グオオオオオオ!!」

轟音に掻き消されつつも人と魔物の叫びが等しく木霊する。

アバンの指揮のもと、旧百獣魔団と人との混合であるロモス軍は、新生百獣魔団と圧されながらも対抗し激しい戦いを繰り広げていたが、水中大爆発にもろに巻き込まれたアバン搭乗の軍船も木っ端微塵。敵も味方も半数が吹き飛び激闘の意義は消えた。

巻き上がった大水柱が軍船団に降り注ぎ海中に沈め、

衝撃に大船が宙を舞い、津波が魔物も人も飲み込んだ。

アバンも乱戦の中で突如起こった爆発と波に飲みまれかけ、

「くっー」

瞬時にトブルーラで船を脱出し事なきを得たが、同乗していた者達は全滅だろう。

ホルキンスやアキーム、バダックらの安否も気になるが、

今は、災害の大元であろう敵の軍団長をどうにかせねばならない。

(クロコダイインさん一人に押し付けていいレベルの敵ではなかった！)

しかし…今の爆発は一体何だ!?

空が突然、暗雲を立ち込めたのと何か関連があるはず…。

闘気でも魔法でもない、恐ろしい威力の広域破壊…!)

未だクロコダイインが生きていることを願って荒れ狂う海上をアバンは飛んだ。

その時であった。

美しいとさえ思える白刃の煌めきがアバンの視界をよぎる。

「っ!？」

咄嗟に身を引くアバン。

だが、彼の胸元の皮膚と肉は斬れなかなかの量の血が溢れた。

その傷は浅くはない。

「その顔……アバンだな？」

素早く傷口にベホマの光を当てながら声の方を見ればそこには毛皮豊かな羽の生えた男。

「くくくくく、ゴルゴナの情報通りではないか。

貴様もまた手柄首……!! このグノンが頂こうツツ!!!」

ブーメランのように彼の手元に戻ったハーケンを再度振りかぶりながら、

グノンはアバンに向けて大口を開いた。

(再びハーケンの投擲！)

グランドクルスで軌道を逸らし、アバンストラッシュUBタイプで……!!)

どうしても注意は羽の生えた獣人の持つ鎌へと注がれてしまうのだ。

アバンの墮ちし一番弟子が振り回していた魔剣と同じ輝きを持つ、その鎌に。

アバンが瞬時に戦法を構築し身構えた瞬間、

「かはああああああ!!!」

超圧縮の空気の塊がグノンの口腔から撃ち出されたのだった。

「!?!」

(闘気でもなく、魔法でもない……さ、さっきの攻撃はこれか?!)

強化された肉体が可能にする純然たる空気の凝縮弾が超高速でアバンへと迫り、

「うわああああああああつ!!!」

爆発と破裂が混じった轟音が天地に響く。

アバンは百戦錬磨である。

ハドラー大戦に終止符を打った勇者であり、リンガイア戦争でも活躍した大英雄だ。

人、魔物、魔族、あらゆる者達と戦ってきた経験が、戦闘の先読みを可能にする。

だがそれ故にグノンの仕掛けたフェイク（ハーケンを投擲する素振り）

によって誤った先読みに誘導され、そこに初見の未知の攻撃だ。

直撃を許してしまった。

<sup>グノン</sup>敵もまた百戦錬磨。

一瞬の駆け引きにアバンは敗れたのだ。

音速を超える速度で吹き飛ばされ、海面に鈍角で突っ込むと数回海面でバウンド。

スピードに乗った身には海とて硬い大地と変わらない。

そのまま激しく海面上で乱回転し滑り飛んで、やがて勢いを無くし海中に沈む。

「ほう……たかが人間の分際で、原型を留めたまま吹き飛んだか。

さすがは大勇者アバンだ」

グノンは笑う。

彼の言うとおり、並の者では木っ端微塵になり死体も残らない。

そういう攻撃であった。

そもそもグノンの放ったこの空気弾は、

かつては変身をし『ビーストの王』としての真の姿にならなければ使えないブレスだ。

それを今のグノンは通常形態で使用できる……ということとは、

現在の彼が、通常の姿のままアレフガルド時代の第2形態に迫る力を持っている、

という事の証左であろう。

(体がどんどんと馴染んでくるのを感じるぞ……！)

この調子ならば……変身が出来る日も近い！)

「海のモンスターよ!! アバンの死体を探せ!

息があるのならば止めを刺し、我に大勇者の首を献上せよ!」

グノンの号令一下、マーマンやだいおうイカ達は即座に行動を起こす。

先の彼の空気爆発や上空のひくいどり達の攻撃……、

友軍からの攻撃に巻き込まれ、

かなりボロボロな海のモンスター達だが不思議と士気は落ちていない。

グノンの勇ましき狂気にあてられ、

「弱者死すべし」という力への信奉が彼らの心の奥底に芽吹き出していたのだった。

獣の摂理は弱肉強食。

故に、生き残っている自分達は強い。

故に、弱者を蹂躪する権利がある。

（虐げろ！ 殺せ！ 我らは強い！

最強のビースト、グノン様に率いられし無敵の獣の群れ！

我らは死を恐れぬ！ 背後から仲間を撃たれようともし、尚恐れぬ！

我ら新生百獣魔団は、無敵なのだ！）

モンスター達の目は危険なまでに血走っていた。

麾下のモンスター達に、そう盲信させ熱狂させるグノンの手腕。

アレフガルド時代、ビースト兵団を率いた四大魔王は伊達ではない。

「そうだ…それでいい。

貴様らはビースト……… 喰らう者”よ！

敵を喰らえ！ 人間を喰らえ！ ゆけ、百獣魔団よ!!」

獣達が熱狂の雄叫びをあげ、更に苛烈に船団を攻撃する。

「オレは……クロコダインの首を貫うとしよう……！」

不敵に口角を釣り上げるグノンの瞳が、海面に映る影を捉えていた。



## ベンガーナ前哨戦、終結

ゆらりと空から見える海面の影が揺らめいた。

グノンが口を開け放ち、空を吸い込むがごとく大気を口腔へと導く。

ゴオオオン、ゴオオオオン、と天が唸って分厚い雨雲に太陽が完全に隠された。

「かはあはああ!!」

低気圧を呼び寄せる程の、

だが3割程でしかないパワーで放たれたグノンのブレスが揺らめく影を海ごと叩き割る。

大海が無数の水飛沫となつて吹き飛び、

影の主……クロコダインの姿が露わになつて天高く舞い上がった。

「ぐわああああー……ッ?!?!」

海中で意識を失っていたクロコダインは体中を襲う激烈な痛みによつて覚醒を果たしたが、

既に彼のダメージは甚大で、しかも空では何も出来ない。

クロコダインの脳裏に、頼もしくも今は亡き巨鳥の友の姿が浮かぶ。

「ははははは！ 無様な姿だな、クロコダイン!!」

今の貴様は陸の上の魚も同じッ!! その首……貫ったア……ッ!!!  
黒い雲の隙間からどろどろと轟く雷光をハーケンが反射し煌めく。

力のままにぶん投げられ超高速で回転する両刃の鎌が、  
クロコダインの首目掛けて正確に迫るのだった。

もはや獣王に為す術はない。

この斬撃を凌ぐだけの闘気も体力も、もう尽きた。

(ガルダ……アバン殿、ポップ、ダイ……)

すまん……オレは……自分の仕事もろくに全うできんようだ)

軍団1万をベンガーナに導くことも出来ずに死ぬ己を不甲斐なく思い、

死んでいった兵士、そして生死不明の戦友達……

鬼岩城へ決死の特攻を仕掛けるダイとポップ達……皆の顔が浮かんで消えた。

銀と白の光が眩い刃が迫る。

獣王の首に迫る。

死の間際に世界の全てがスローになり、

クロコダインの目には首を跳ね飛ばそうとするハーケンがはつきりと見えた。

あと数センチ、といったところであった。

眼前のハーケンが、甲高い金属音をたてながら明後日の方向へと軌道を変えた。

「っ!?!」

「なに!?!」

クロコダインは己の死を確信していた。

グノンは己の勝利を確信していた。

それが思わぬ第三者によって覆されることになる。

グノンのハーケンを、海中からロケットの様に飛び出てきた鋼鉄の錨が弾いたのだ。

錨に繋がる鎖は海中へと伸びている。

「何奴だ! このオレの邪魔をするとは!?!」

逸れたハーケンが主の手元に帰り、苛立ちも隠さず乱暴に掴み取ったグノンは吼える。

自由落下するクロコダインが大きな水柱を立てながら海中に消え、

彼と交代するように飛び出してきたのは、上顎から生える太い2本の牙を持つ巨大なトドマン。

「グフフフツ……余りに派手な爆発が近くで起きたものでな。

昼寝もできず叩き起こされた恨みよ!」

「戯言を! 名乗れい!」

王冠のように豪華な額当て、重厚な鎧、マント、

そして何より特徴的なのが鎧の左胸にあしらわれているドラゴンの頭の飾り。

「我が名は海戦騎ボラホーン!! 竜の騎士に仕えし忠実なる三騎士が一人!!」

平和を乱す魔王軍め!! この天下無双のボラホーン様が粉微塵にしてくれるわ!」

ボラホーンが声高に名乗ると、グノンの表情が僅かに歪み、

「竜の騎士…… 貴様が噂の竜騎衆か!」

だが一人でこのグノンに勝てると思うか! バカめ!!」

空で翼を威圧的に広げながら怒声を張る。

水没しかけたクロコダインは、海中で大きな甲羅を背負うドラゴン…、

ガメゴンロードに受け止められてそのまま海竜に連れられて海面へと再浮上。

「ボラホーンとやら……感謝するぞ!」

だが、奴の言うとおりで……! 空を飛ぶグノン相手では勝ち目は——」

悲壮な顔でトドマンを押しとどめようとする。

グノンと戦い、殺されるのは自分一人で充分だ、というクロコダイン流の配慮である。

だが、

「安心しな、リザードマン! 一人なわけがねえし、きちんと空の対策もあるんだよ!

竜騎衆が一人、空戦騎ガルダンデー見参!!」

グノンとは異なる者の声が荒れる大空に響いたのだ。  
ハッ、とグノンが後方を振り返る。

そこには曇天の空を悠々と飛ぶスカイドラゴンとそれに跨る鳥の獣人。

「空戦騎……！ うっ!? あ、あれは…アバン!?」

スカイドラゴンの背、ガルダンデリーの足元にもう一人……。

力無く項垂れてスカイドラゴンに身を預けるボロボロの人間はアバンその人だ。

「クワツクワツクワツ！ こいつか？ えらい勢いで海をすつ飛んでつてからよお。

群がるマーマン共をぶった斬って優しい俺様が助けてやったのよ！」

ペロリ、と自分の武器…鋭いレイピアの刀身を舐めるガルダンデリーは、

とても善人には見えないが一応は人間を守る気があるらしい。

グノンの表情が更に歪む。

「チィ……！ 使えん部下共だ。」

それにしても……貴様らも獣人モンスターのくせに人間どもの味方をするとはな。

クロコダインといい貴様らといい……魔王軍を敵に回すとは愚かな奴らよ」

海と空に油断なく目を配り、睨みつけるグノン。

とそこに、更に違う声が突然に乱入し、ボラホーンとガルダンデリーの代わりに答え

た。

「我ら竜騎衆は竜の騎士にのみ仕える竜使い！」  
ドラゴンライダー

竜の騎士の望みを実現するための駒。

人々を守り、魔王軍を倒せと言われればそれに命を賭ける…。

陸戦騎ラーハルト、推参!!」

青い肌、とんがった耳、切れ長の目から涙のように下へ伸びる鋭い紋様。

明らかに魔族と思しき青年が、

海面に浮かぶ不安定極まりない船の残骸の上に微動だにせず立っていた。

彼こそがグノンに答えた声の主。

「……三人……いや、四人か……」

前後に展開する竜騎衆の動きを空気を感じ取ろうと気を張るグノン。

だが、彼の視線は前方100m程の空に立つようにして浮かぶ人物へ注がれていた。

黒雲からポツポツと雨が落ち、

それはすぐにザアザアとした大雨となって海に無数の波紋を画く。

グノンが言った四人目。

その影が一瞬轟いた雷光によって映し出される。

一見すると整った鬚を蓄えた人間のようにしか見えぬ男。

左目に神具・竜ドラゴンファングの牙、黒いマントで体をすっぽり覆い、

背に帯刀するは真なるオリハルコンの神剣・真魔剛竜剣。

「竜の騎士、バラン……！」

雨は豪雨となつて、雷がけたたましく鳴り響いた。

もはやグノンの顔からは不敵な笑みは消えている。

グノンは脳から一時的にクロコダインもアバンも消し、ただ目の前の強敵だけを見た。

グノンの鋭い目とは対象的な静かな瞳でバランは佇み、

そして、

「ラーハルト、ガルダンディー、雑魚を任せろ。

ボラホーンは海に落ちた人間達を可能な限り助けよ。

お前の相手は私がしてやろう……グノン」

背の豪剣を抜き放つ。

ゴロゴロと唸る黒い空から大きな稲妻が海に落ち、

二振りのオリハルコンの武器が白銀に輝く。

二人が空を蹴つて同時に飛び出す。

鋭い金属音が天に響き渡ること数度、剣と鎌が正面から喰い合い、

竜の騎士と、その存在を超えるべく生み出された人造の魔人が臂力で押し合う。

「ほう…大した腕と力だ。 私ところも斬り合えるとは」

バランスと一見して対等に渡り合うグノンだが内心はそうではなかった。

(つ、強い…！ 隙がない！ どう攻めても、勝ち筋が見えん!!)

勝ち筋どころか、退くことすら困難な程のプレッシャーがグノンを襲っていた。

グノンの肉体は竜の騎士の真の姿、竜魔人を参考に造られた筈。

理屈で言えば、グノンがバランスに劣るわけがない。

しかし、目の前の竜の騎士はその理屈から大きく逸脱した強さを持っている。

その理由は簡単だ。

バランス自身が常に激しい特訓と戦いを繰り返しレベルアップしているからだ。

未だ肉体に慣れきっていないグノンでは、レベルアップを繰り返したバランスには敵わない。

そして武器のレベルもまた違うのだ。

如何にハーケンがゴルゴナ謹製のオリハルコン武装だとはいえ、

相手は、オリハルコンの真の持ち主である神々が竜の騎士の為に鍛え上げた真魔剛竜剣。

魔界一の名工、ロン・ベルクならば真魔剛竜剣にも競り合えるだろうが、

鍛冶師が本職ではないゴルゴナでは分が悪い。



肉体の強さは同等。 武具の材質も同等。

だが、バランと真魔剛竜剣は、圧倒的に格上なのであった。  
海面からその戦いを見守るクロコダインも、

「す、すごい……！ 両者とも、凄まじい腕前だ……！」

素晴らしい程の両者の武力に賞賛の声をあげるのだった。

グノンとバラン……更に打ち合うこと二十数合。

「ぬうううん!!！」

グノンが一際大きな力を込めて押し込み薙ぎ払うと、

バランの体が数mほど圧されるが、それでも竜の騎士は涼しげだ。

バランの目が鋭くなり、構えを大きく上段にとると、

「どこで冥王の奴が見ているか分からん。 このまま仕留めさせて貰おう」

なるべく力量を隠したままの決着を試みる。

甲高い、キイイーン……という音がバランの額から響き、ドラゴンの紋章が光り輝いた。

「む?！」

獣の本能がグノンに危険を報せ、ハーケンで防御の構えをとったその時……

バランの竜の紋章の輝きが集束し光線となる。

極限まで圧縮された竜ドラゴニックオーラ闘気が突き出されたハーケンの刃に竜の紋章を刻みながら

貫き、

「うぐおおおっ?!」

そのままグノンの心臓目掛けて胸部プロテクターをも貫き、

その下の毛皮へも竜の紋章を焼き付けた。

身を焼く鋭い痛みがグノンを襲うが、

「ぐ……、はああああああっ!!!」

痛みに悶ながらもカウンターで獄炎の吐息を balan へ吹き付ける。

竜魔人ベースの肉体に超魔生物の理論を組み込んだグノンのボディに眠っていた闘気と、大猿系モンスターとの柔軟な皮膚組織が紋章閃を無効化……とまではいれないが捌いていた。

「ぬうー!」

竜闘気に覆われる balan には致命傷たり得ない炎のブレスだが、

それでも balan に熱いと感じさせる程度にはとんでもない威力だ。

(なんと……、心臓を貫けると思ったが……反撃する余力すらあるか)

眼前を埋め尽くす炎を、手にした豪剣で切り裂き霧散させたが、

「なに……? 逃げただと?」

既にグノンはルーラの光に包まれて遙か空の彼方へと飛び去りつつあり、

その後姿だけがバランには見えた。

全力のトベルーラならば追うのは不可能ではないと思えたが、

(苛烈な猛将型に見えたが、機を見るに敏！ 敵ながら見事な引き際だ)

視線だけはグノンから外さずに真魔剛竜剣を背に収める。

グノンの背を見送るバランの耳に、獣の雄叫びが聞こえてきて、

その瞬間、ラーハルトやガルダンディー、

そして息も絶え絶えなロモス船団と戦っていた百獣魔団が徐々に後退を始めたのだった。

どうも今の遠吠えはグノンの撤退の合図だったらしい。

「へっ、逃がすかよ!!」

スカイドラゴンのルードの手綱を鳴らし、逃げる百獣魔団を追撃しようと勇む空戦騎。

だが、

「よすのだ、ガルダンディー。百獣魔団は余力を持って退却している。

つまらぬ反撃を受けるかもしれない。今は力を温存しておけ」

竜騎衆の絶対の主、バランにそう言われては暴れん坊のガルダンディーも否は言えない。

齒切れの良い返事をし、サツと踵を返す。

「ラーハルト、ガルダンディー、ボラホーンと共に救助にあたれ。

メルルの占い通りならば、この者たちの中にディーノに繋がる手がかりがある」

「ははっ」

「おまかせあれ！」

暗雲晴れつつある空。

雲の隙間からは徐々に太陽光が降り注ぎ、傷つくロモス軍を優しく照らす。

バランと竜騎衆がこの場に颯爽と現れたのは、

彼らの家族たる占い師メルルの助言による。

最近、めきめきと的中率を上げ、

また占いの内容もあやふやのものから明確なものへと変化しているメルル。

彼女が、古代占布術こだいせんふじゆつという、探し物の場所を具体的なキーワードで現す占い方によつ

て、

「ベンガーナ……南……海……」

今はまだ……この程度しか読めません。ごめんなさい、お義父様、お義兄様」

そう言ったものだから、バラン達は矢も盾もたまらず隠れ家の神殿を飛び出した。

今までのメルルでは『南』とか『島』とかが精一杯であったのだ。

充分すぎる手がかりが掴めたことになる。

そしてメルルの指し示した場に来てみれば、魔王軍とロモス軍が海戦の真つ只中。 balan 達はメルルの占いが的中したことを悟った。

問題は、一子ディーノの手がかりを魔王軍とロモス軍……どちらが握っているか…、であるが、ラーハルトとメルルが人間に紛れての情報収集をしていた折、

大勇者アバンの使徒に歳が12程の少年がいると聞いていたのが幸いだった。アバンに目をかけられ魔王軍と正面から戦える少年。

少年の歳はディーノと重なる。

そしてメルルの占い通り来てみれば、注目していたアバンがいたのだ。

balan とラーハルト達は躊躇うこと無くロモス軍に肩入れした……、

というのが今回の顛末であった。

「おらあ！ 人間ども！ グズグズしてんじやねえぞお！」

魔王軍がいつ来るか分かんねえんだ！ さっさと船を進めて上陸しろ！」

船団上空を飛び回り、恫喝じみた叱咤激励をルードの上から飛ばすガルダンディー。

魔王軍として誤認されても文句は言えない雰囲気である。

「ガルダンディー！ もう少し丁寧に言えんのか！」

「この者達はディーノ様の仲間かもしれんのだぞ！」

当然、ボラホーンの叱りが海から飛んできた。

航行可能な軍船に、助けることができた者達を分けて乗せ、

怪我人満載の彼らはそのまま海を北上しベンガーナの南岸につける予定だ。

当初こそ乱入してきた獣人と魔族混成の超戦力を警戒していたロモス軍だったが、

「救援感謝する。お陰でアバン殿やじいさん……多くの仲間が助かった」

気を失っているアバンに代わりクロコダイスが代表で礼を述べ、彼らを受け入れた。

クロコダイスと旧百獣魔団のお陰で、

モンスターを受け入れる土壌がロモス軍にはあったのだ。

が、より正確に言えば例え疑って拒否したくとも、もうロモス軍には戦う力は無かつ

た。

大乱戦、大波、嵐、爆発、降り注ぐ炎、這い登る水棲モンスター。

あの大混乱の中で、軍の准エースであったホルキンスとアキームは行方不明。

死体が海に消えたのか、あるいはグノンの空気弾に巻き込まれ消滅したのか。

それは分からないが、死体が見つからないだけで戦死の可能性は濃厚だ。

それほどの乱戦だった。

獣王の目に浮かぶ涙。

（兵たちよ……ホルキンス……アキーム……無念であつたらうな。

ベンガーナに辿り着くことも出来ず、真価も発揮できぬ海でやられる…。  
すまん…すまん…！ オレが不甲斐ないばかりに！

二人以外にも、多くの兵達…クロコダインについてきたモンスター達。  
戦友達の無念の死を、

生き残った者達は思い思いに悼むが歩みを止めるわけにはいかない。

自分達は、最初からどれ程被害を出そうとも全員が捨て石となつて、  
ベンガーナに魔王軍の注意を向けなければならぬ。

その働き次第でダイ達の鬼岩城攻略も難易度がグツと変わってくる。

そんな、内心で慟哭するクロコダインを慮りながらも、

「……お前は魔王軍の百獣魔団の軍団長、クロコダイン。

なぜ人間達に与し、魔王軍と戦っていたのだ」

balan はそう切り出した。

「オレは……ダイとポップという少年に戦場で出会った。

奴らは素晴らしい人間だった。どんなに傷ついても諦めず、

そして怯えながらもポップ…非力な魔法使いの少年は友のために体を張り続けた。

オレは震えたよ。

こんなにも、弱い人間が誰かのために強くなれる…。

丁度、タイミングも悪かったというか言うべきか、良かったと言うべきか。

魔王軍の裏切り行為を知ってしまったオレは、ダイの為に戦う道を選んだのだ。

……まあ、簡単に言えば人間に惚れたんだよ。 はははは

笑うリザードマンの瞳は優しい。

それを見るバルンの目からも、自然と険しさが消えていく。

「人間に惚れた……か」

クロコダインのその言葉を受けて、自然と思い返されるのはソアラのこと。

バルンにとって彼女は、人間の素晴らしさの全てを詰め込んだ人であった。

一人の女性としては勿論、人間としても純粹に惚れ抜いた。

「クロコダイン、一つ聞きたい。

そのダイという少年……どこか普通と違う少年なのではないか？」

「普通と違う？ ……まあ、違うな。 かなり強い。

アバン殿の薫陶を受けている正当な弟子だからな」

「いや、それもあるが……そう、例えば……」

額に不思議な紋章が浮かび上がったりはしないか？」

「っ！ そうか、バルン殿がそう言うことは……やはりダイは竜の騎士か！」

クロコダインが驚くが、



彼の発言にバランは獣王以上に驚く。

「やはりっ！　ダイという少年は竜の騎士なのだな？」

「ああ、オレ達はそう見ている。

ダイは、感情が昂ると額にドラゴンのように見える紋章が光り輝くのだ。

今ではアバン殿との修行で紋章の力を自在に使えるが、どうしてどうして！

紋章が出た時のダイの強さはまさに天下に敵なしだ」

バランが瞠目し、天を仰ぎ見る。

「おお…、マザーよ！　デイーノをよくぞ守ってくださいっ…！」

「バ、バラン様……お、おめでとうございます……！」

バランの背後に無言で立ち続けたいた魔族風の青年が、

鋭い目をうるませながら跪き、肩を震わせていた。

そんな彼らを見て、何やらクロコダインも察したらしい。

「……やはり、バラン殿はダイの父親か？」

以前、ポップと話していた予想は正しいようだ。

「うむ。私と一年前に生き別れた息子、デイーノに違いない。

年齢と、お前から聞かされたその話……二つも合致すれば充分だ。

竜の騎士は本来、世に一人。

マザードラゴン

聖母竜は一人目が死ぬまでは決して新たな騎士を生み出さん。

二人目がいるとすればそれは……我が子以外には有り得ない」

おおつ、とクロコダインも表情を破顔させる。

大損害を受け、戦友を失ったばかり……

暗い雰囲気に包まれるクロコダインの心を晴れやかにする暖かな朗報だ。

「デイーノの師、アバン殿にも礼を言いたい。

彼が目覚めるまで、デイーノについて知っていることを教えてくれぬか、クロコダイ

ン」

「いや、オレよりも本人に聞くのが良からう。

ダイは……デイーノ殿は仲間と共に魔王軍の本拠地、鬼岩城に向かっている。

竜の騎士であり、父である貴方なら正に千人力だ」

言われて balan は言葉に詰まる。

クロコダインの言うとおおり、いや、言われずとも息子のもとに向かいたい。

息子が魔王軍と戦っているというのは、何よりの朗報。

妻を殺され、妻の故国を滅ぼされ、息子と引き裂かれた balan にとつても魔王軍は憎

き敵。

一目散に援軍に駆けつけてやりたいが……、

「……クロコダイン、お前達はどうするつもりだ」

息子の恩人と友がまとう空気に剣呑なものを感じ取り、それを躊躇わせる。

バランの問いにクロコダインはしばし沈黙し、

竜の騎士と獣王は少々の時間、見つめ合っていた。

が、やがてクロコダインは観念したように溜息を一つつくと素直にバランへと告げる。

「オレ達はこれからベンガーナを攻撃する」

「ベンガーナを……？ ……この戦力でいくつもりか？」

「ああ」

「……………無謀を通り越して、ただの自殺行為といわざるを得んな。

グノンはベンガーナ方面に撤退した。アンデッドが大量にいたという情報もある。

つまり、少なくとも百獣魔団と不死騎団……ゴルゴナがいる可能性もあるのだぞ。

お前の後釜のグノン……あれが全ての力ではあるまいよ。

ゴルゴナも同じだ。

奴はまだ何かを隠している……。

底知れぬ不気味な男……元百獣魔団長たるお前が知らぬはずはあるまい」

船が波間に揺れ、潮風に乗ってカモメの鳴き声が聞こえてくる。陸は近い。

バランに、クロコダインは笑って答えた。

「百獣魔団がいるのはオレ達も把握していたが……、

アンデッドとなるとヒュンケルかゴルゴナか……だが寧ろ好都合。

ベンガーナにいる戦力が多ければ多いほど、ダイが楽になる」

「この程度では時間稼ぎすら怪しい。悪いことは言わん……やめておくことだ」

ポロポロの船が三十数隻。

乗っている者達で無傷な者はいない。

「無謀は百も承知。

だが……どれ程絶望的であろうと、やらねばならぬ時が男にはある。

オレ達が一人でも多く、一秒でも長くベンガーナで暴れれば……ダイの為になるのだ」

クロコダインの目は、捨て鉢な者の目ではない。

見渡すと、他の兵たちも皆がそういう目をしている。

捨て石という己の自分を理解しつつも捨て鉢にならぬ心。

強い意志の籠った、燃えるものを秘めた瞳。

バランスが、ラーハルトの顔をチラリと見、互いに頷く。

「ダイの為………ディーノの為と言われては、このバランス…捨て置けん。」

私と竜騎衆も助勢しよう」

「なに？ それは心強いが………だが、それはいかん。」

オレ達は捨て石だ。本命のダイ達を助けてやってくれい」

「お前達に出会っておきながら何もせずに素通りしディーノと出会えば、

あの子に何を言われるか分からん。」

お前がそこまでしてやろうと思える子だ………さぞ、真っ直ぐに育っているのだろうか

…。

私を卑劣漢にしてくれるなクロコダイン。

胸を張ってあの子に会いたいのだ」

バランスとクロコダイン。

二人の視線が再び真っ直ぐに交差し、そしてどちらともなく二人はゆつくりと頷くと、

自然と手が差し出されてガツシリと握手を交わしていたのだった。

「わかった…頼むぞ、バランス殿。」

お主がいれば、ベンガーナ攻略も夢物語ではなくなったわ！ わはははははは！

皆で生きて、ダイに再会しよう！」

ロモス軍残存兵力……アバン、クロコダイ、バダック、兵3000。

そして竜の騎士バランと竜騎衆三名。

ベンガーナで彼らを待ち受けるのは、グノンと…

果たしてヒュンケルか、ゴルゴナか。

だが、誰が待ち受けていようと、それが救いようのない程の凄惨な戦いとなることは、誰もが容易に想像できることだった。

## ハドラーの憂鬱

魔軍司令ハドラーは現代より21年前に地上侵攻を開始し、

15年前にアバンに討たれるまでに世界中で大乱を巻き起こした強力な魔族である。当時において、自他共に認める『魔王』でありその実力とカリスマは本物であった。彼の目的は地上支配で、人間を滅ぼすことではない。

人間も、家畜としてだが支配の対象に入っており、

愚劣な存在であるからこそ管理・保護の必要があるカースト最下位の虫ケラ、との認識を持っていた。

もつとも、捕らえた人間を地底魔城の闘技場で殺し合わせたり等で余暇を潰したりはしていたが、

それも自分の所有物として当然の権利だと彼は思っていたからだ。

そんな栄光を持つ元魔王のハドラーは、

ロモスでの戦い以来、少々戦歴がパツとしないと思いき詰め気味である。

カールとベンガーナを滅ぼしたものの、

その手柄の大部分は超竜軍団と魔影軍団に帰するものと魔軍司令は理解している。

ハドラーは消耗しきった両国を、

軍団長不在で一時指揮権を預かった妖魔士団、不死騎団、氷炎魔団、の3軍でダメ押しをしたに過ぎない。

さりとて勇者達が籠るロモス王国に攻め入るには、

前回以上の軍備を整える必要があると彼は思案している。

しかも竜の騎士とその部下達は未だ健在で、

魔王軍の一部将兵はその存在に怯え神経の消耗を強いられているし、

リンガイアが新たに獲得した南方領土の統治は

始まったばかりであり未だ不安定である。

流民・難民の居住区の振り分けすら完了していないのだ。

「くそつ、人間どもめ！無駄に数だけが多い！」

だが下等な虫けらとはいえバーン様の領民となったからには杜撰な対応も出来ぬ…。

放っておくわけにもいかぬが…魔王軍には文官が少なすぎる！」

ゴルゴナと妖魔士団がその手の仕事は大量に引き受けてくれてはいるが、

統括する立場上、書類の山は魔軍司令に降り積もってくる。

雑務に埋もれながら諸々を考慮したハドラーは、

全世界の支配を望んでいる主君の為に



まずは地上の支配を安定させるべきと動き出していた。

まず手の空いた軍団を旧カール、旧ベンガーナ、旧パプニカに派遣し

竜の騎士探索ついでに人間狩りを再度徹底させる。

抵抗すれば即殺し、降伏するならそのまま家畜として受け入れた。

降伏した人間達の様子をしばし観察すると、

人魔共存のリングイア王国の空気に馴染ませれば

人間の軍団を勇者に差し向けて戦わせることも可能に思える。

なにせリングイアの一部では既に、

「勇者達が抵抗をし続けると人間全体の印象が悪くなり、今の好待遇も脅かされるので  
は」

という意見が市民の間でチラホラとあがり、広がりつつある。

それは魔王軍の水面下での情報操作の成果で、

主に薄気味悪い冥王の助言を取り入れた結果であった。

人間達の間に着実に勇者への反感が植え付けられつつある。

歯向かうものには徹底的な苦痛と死。

従うものには一切の犯罪もない、空腹もない、寒さもない住処。

分かりやす過ぎる程の飴と鞭は人間達に浸透していく。

人々は魔王ハドラーの乱の時より絶えず続く世界中での戦争に疲れていたし、真つ先に人間の国・リンガイア王国が丸ごと魔王軍についたのも効いた。

人間は集団性の強い生き物である。

「彼らがそうしているから、自分もそれを享受する。 しても許される」

多くの人々が魔族による支配を受け入れつつあり、

そしてロモスと勇者達を煙たがるようになっていた。

ハドラーの統治と戦略は確実に実を結びつつあったのだが…。



鬼岩城——玉座の間。

そこに腰掛けるのは筋骨たくましく、見るからに勇壮な魔族・魔軍司令ハドラー。

重厚な肩鎧からマントを流し、ドッシリと玉座に腰掛けている姿は威厳がある。

彼の両脇を固めるアークデーモンやガーゴイル達も緊張を緩めず直立していた。

しかし彼の心はその威厳とは真逆で、

そこには保身と虚栄心、嫉妬や劣等感が渦巻いている。

激務の合間、彼はこの玉座でクタクタの心身を休め物思いに耽ることが多くなっていた。

(……………最近は……………大魔王様のお言葉が無い。

“バーンの印”が光らなくなつて早1ヶ月、か。

ヒュンケルだけでなく、他の6大軍団長共も…

そしてバーン様もオレを軽視している節が多々ある…。

だが、それにしてもだ！特にあのグノンとかいう獣人の態度はなんだ！無礼な新参者め！)

ハドラーは、数日前のある出来事のことを思い出していた。

着任の挨拶もそこそこに切り上げて、

魔界のモンスターを率い出撃していったグノンのことだ。

防衛に専念し、万全の体勢で勇者達を迎え撃つつもりであったハドラーの命令を一蹴し、

「奴らは今、行軍の半ば……………しかも海上。人間は翼もエラも持たぬ！

今こそが攻め時！魔軍司令殿の作戦は承服しかねるな！」

いきなり真つ向から齒向かってきた男の傲慢さに、

(ま、またこの類の奴かつ!!問題児が増えおった!)

魔軍司令の胃がキリキリと痛みだした。

ハドラーの静止も振り切つて麾下軍団と共に出撃していった百獣魔団長は、

自身と麾下軍団は軽微な被害に抑え口モス連合には大打撃を与えた。

オマケに竜の騎士バランの所在と戦力までも掴んできて、初陣としては及第点だろうが、

グノン本人としては完勝で飾りたかつた初陣を汚された怒りは大きいし、

バロンもまた新生百獣魔団の戦果を聞いて

「ふむ…悪くはないが、少々物足りんな。ベンガーナ戦に期待しておくでしょう」

グノンの肉体の馴染み具合を鑑みても、

今はまだこの程度か…と笑みを消して納得するのみだった。

しかし、長年の懸念だったバランの動向も掴むことはできたし、

ベンガーナ防衛はずつと気楽になったと言える。

「グノンめ!大魔王様のお声掛りだと思って調子に乗りおつて!

舐め腐つた獣ビーストマン人風情が!

威勢のいいことを言つたわりに竜の騎士に追い払われ、

結局はアバンもクロコダインも討ち損じたではないか！」

グノンの報を耳にしたハドラーは一人、鬼岩城で憤慨したという。

戦果報告も悪魔の目玉で軽く知らせただけで、グノンは鬼岩城へは帰還せずそのままベンガーナへ後退。

彼の地にて、自分が名乗るべき獣王の異名を未だ名乗るクロコダインと、

そして乱入者・竜の騎士バランの両名を思い返しては、

「おのれ……肉体が完全に馴染めば必ずや我がハーケンの鎧にしてくれる！」

と怒気をばら撒きながら寝る間も惜しみ鍛錬に励むグノンの姿が目撃されている。

態勢を立て直して引き続き大勇者と獣王を攻撃する腹積もりらしかった。

ハドラーの防衛構想的にはそれで良いのだが、

自分への報告が明らかに雑なのが彼は気に食わなかった。

(オレを侮る青二才共め……)

……バーン様は明らかにオレよりもミストバーンとゴルゴナを重く見ている。

悔しいが、それはまだ……オレ自身理解出来る……。

しかし！グノンやヒュンケル如きがバーン様の寵愛を得ることは我慢ならん！

奴らだけは気に食わぬ！

だが、1ヶ月ものバーン様の沈黙は……ひよつとすると……！

ま、まさか……バーン様は、オ、オレのことをもはや見限っているのでは……。いい、いや……バーン様は3度までは許すと仰ったではないか！

まだたった一回の敗北だ。ま、まだオレは見捨てられてなどいない。

見捨てられるわけがない！

だがロモスのあの時から明らかに風向きがおかしいのは確かだ……！

あの一回が響いている…………！

クロコダインだ………あ奴のせいだ！

オレが見出した2人の将の片割れが裏切るなど………く、ぐ、ぬうう……

オレの面目は丸潰れだ!!!)

怒りと焦燥に身を焦がし、疲労した精神を更にすり減らす。

玉座の肘置きを握る手にも思わず力が入り、ミシリ、と悲鳴を上げた。

バーン本人は別段、ハドラーを見放したつもりもない。

が、いかせん大魔王の興味はゴルゴナの研究結果や提案などに注がれていて、

ロモス決戦以来特に見るべきところもないハドラーの平々凡々たる成果に、

過剰に賞賛する気もないし叱責する気もない。

わざわざ時間を割いてハドラーと話す必要がない、と思っただけだ。

寧ろ、曲者揃いの魔界の英雄らを率いて、

大魔王の予定と予想通りに頑張つてはいると一定の評価はしていた。

だが、当然ハドラー本人はそんな主の心は知らぬし、

放置しているという意味では大魔王はハドラーをおぎなりに扱っている所が無いではない。

ハドラーという男は本質的には生真面目で、そして常識的なのかもしれない。

本来、総司令官である彼が最前線で手柄首など求めずとも良いのだが、

生来の真面目さ、魔族特有の弱肉強食の思想、胡乱な部下達…。

元魔王としての誇りと、そしていかに魔界の神が相手とはいえ

今では魔王の座から転落し、指揮官でしかないという微かな屈辱。

それらの要素のお陰でハドラーの生来の大器は矮小化してしまっていた。

だが、魔軍司令の心の焦りが表面化し始めた大きな切っ掛けは、別にもう一つある。

それは、先般ふらりと鬼岩城にやって来た死神・キルバンの存在だ。

|

|

|

いつものように鬼岩城の玉座にどっしりと座り、壁面上部に映る世界地図を見ながら、

その日もハドラーは頭を悩ませていた。

日に数百件は報告に上がってくる「竜の騎士を見た」という民草の証言の裏付け調査、同じく、日に数十件寄せられる行方不明の PAP ニカ王女の情報の真贋見極め、滅びたカール王国跡地を漁っているこそ泥 4 人組への対処を求む配下からの声…。人間達からの、不足する生活用品の嘆願。

それらに対処せねばならないし、

ロモスの動向にも毎日目を光らせるのも怠れない。

(「こそ泥 4 人組など、オレの命令を待たんで見つけ次第殺せば良いではないか…)

そう思わないでもないが、

竜の騎士や勇者に繋がるかも知れぬ怪しい者は報告せよ、との命を下したのはハドラーだ。

部下は、勇者と縁深いカールでコソコソしているその 4 人を (怪しい…) とふんだのである。

そんなこんなでハドラーは今日も今日とて激務の嵐に晒されていた。そんな時…。ゆったりとしつつも不気味な音色を吹き鳴らしながら死神が現れたのだ。

「このメロディーは…」 死神の笛の音…!?

お、おまえがキルバーン…!



魔王軍の死神と恐れられ、

大魔王バーン様直属の殺し屋としてその意にそぐわぬ者を闇に葬るといふ…

あの噂に高い男が…こいつか…!!?

し、しかし…なぜこの男が鬼岩城に…!!」

情報としてだけ知っていた秘された同僚を目の当たりにし、

ハドラーは魔族の青い顔をさらに青くして総身に汗をかき、

手にしていた報告書もハラハラと数枚、床に落ちていった。

同時に髪の毛も数本、パラパラと床に落ちていった。

そんなハドラーを見ながら死神は、ウクク…、と笑って

「グッドイブニ〜〜〜ング、ハドラー君。

こうしてキミと顔を合わせるのは初めてかな？

いやあ…でもこうして現場に来てみると…：…なかなか大変そうだねえキミは」

ニタニタ顔の仮面の向こうからため息混じりの同情の声が聞こえる。

「…：…い、いったい何の用だ」

ハドラーのやや震えた声に返事をしたのは、

キルバーンではなく彼の肩にしがみついていたひとつめピエロ。

「キャハハッ！ キャハッキャハッ！

死神キルバーンが来たんだから、きつと誰かさんが不始末でもしてかしたのさあ！」  
ギクリツ、とハドラーの肩が揺れた。

「アツハツハツハ…、いやいやそんな。

ボクってそこまで大層なもんじやないヨ。 今日ここに来たのも気紛れさあ。

総司令官たるハドラー君と一面識も無いってのは、

同じ釜の飯を食う仲間としてどうかと思つてねエ」

内心、不安で一杯のハドラーを知つてか知らずか、キルバーンは仮面から覗く瞳を歪めて笑う。

死神は床に散らばつた数枚の紙を拾い上げ、

「ふくくくん、ハドラー君はすごいなあ。

ボクってこういう事務作業は苦手だからさ…尊敬しちゃうな」

チラリとそれらに目を通してながらハドラーに手渡す。

「む…そ、そうか。

オレも好き好んでやらんが、魔軍司令としては当然のことだからな」

社交辞令だろうが何だろうが、大魔王直属の殺し屋に褒められるのは悪い気がしない。  
い。

自分を咎めに来たのかと疑っていたハドラーの心持ちも少し軽くなりつつあった。

しかしそんな気分は直ぐに霧散することになる。

「だけど…、気をつけた方がいい、ハドラー君。」

誰も彼もがキミの頑張りを正しく理解しているわけじゃあない。

大魔王バーン様は寛大な御方だ……それにキミの才能を買ってもいる。

この前の敗北なんて気にも留めないサ。

「だけどねえ」

死神はコツコツとブーツの音を室内に反響させ、

ゆつくりとハドラーの周囲を歩む。

「…もうすぐ復帰するって噂のヒュンケルやポリクスあたりは何と言うだろうねえ。

特にあの場になかった雷竜殿は『自分と超竜軍団がいなければ何も出来ない』

なあって思ってるんじゃないかな？

ウツフフフ…：ただのボクの想像だけどね？」

冗談めかして発せられるキルバーンの言葉に、

ハドラーは脂汗を滲ませながらやや俯き、マントの下で拳を強く握り締める。

ハドラー自身、軍団長を統制しきれていないことを自覚しているし恥じている。

判断ミスもしているというの、自他共に認めるところだ。

いつ取り返しつかない大失態を演じるか己で不安がっている。

(な、なんだ……何が言いたいのだ、こ、こやつは！)

ま、まさか……本当に、オ、オレの……処罰を……!?

様子を見に来たとは……オレの不手際の調査か……!?)

「おっと。忙しい魔軍司令殿のお邪魔をしちゃったかな？」

頑張ってくれたまえよ、ハドラー君。ボクはキミを応援しているよ…。

困ったことがあつたら何時でも連絡してくれたまえ。

それでは鬼岩城の皆さん……シーユーアゲイン……ウフフフ」

ゆらゆらと手を降ったキルバーンが

死神の笛を再び吹き鳴らし影に溶け込むようにして消えていく。

その様を、ハドラーも彼の周囲の親衛隊達も、ゴクリツ……と息を呑みながら見守るのみ。

一体キルバーンは何を言いたかったのか。

本当に気紛れだったのか。

ハドラーの心に、その日から抜き差しならない焦燥の楔が打ち込まれたのだ。

ハドラーの脳裏に、過日のキルバーン来訪の一件がフツとよぎる。

あの日以来、恐ろしい己の未来を夜な夜な夢に見てしまうのだ。

ヒュンケルが、グノンが、地べたに這いずるハドラーを冷たく見下し罵り笑う。

力なく伸ばしたハドラーの手を見ながら、

ミストバーン、ゴルゴナ、ボリクスはただ冷たく背を向けて立ち去り、

そして振り返ればアバンとバランが剣を片手に迫ってくる…そんな光景だ。

それはまさに悪夢。

決して現実にさせてはならない悪夢だ。

「親衛隊！」

「は、ははっ！」

ハドラーが控えるガーゴイルへ向け声を荒げる。

「フレイザードを呼べ！ 奴の傷も完治している頃だ！」

すぐさま左<sup>レフトシヨルダー</sup> 肩の間の円卓に奴を招集せよ！」

波風立たせぬ統治。

そんな堅実で地味な成果だけではもはや諸将の尊敬は集められない。

ハドラーは思い、焦る。

魔軍司令の座を揺るぎなきものにする為には、

己と己に忠実な手駒だけで大金星を上げる必要がある、と。

(死神も言っていた……ヒュンケルの復帰が近い。)

それにクロコダインの穴を埋める人員は、氏素性も定かでないあの生意気な獣人！

バーン様が手ずから選出した新百獣魔団長は、ボリクス達同様オレを侮りきっている

！

今しかない！

指揮権を預かる妖魔士団と不死騎団：そして我が子、フレイザードの氷炎魔団！

この3軍でもって勇者どもの首をぶんどり、ロモスも滅ぼしてくる！

そうすれば魔軍司令の座は盤石……！

青二才共にもでかい顔をさせないで済むわ……！グフフフ……！)

現在は陰りを見せているが、ハドラーは元々優れた男だ。

武勇に偏っているが、知勇兼備でパワー・魔力・スピードが高レベルでまとまった万能型である。

能型である。

しかし突出した要素を持っていない。

大魔王6大軍団長の選出理由に、そもそも「一芸においては魔軍司令を凌ぐ猛者」と

いう条件があるので攻・魔・知などで軍団長に遅れを取るの仕方がないのだが、

曲者ぞろいの現在の6軍団では、年齢、実績においてもハドラーを上回る魔族が何名

かいる。

それ故に、下等種の人間で、しかも宿敵アバンの弟子であり、人生の半分も生きていない若造・ヒュンケルに遅れをとるのだけは我慢ならないのだ。

今の彼の自信と誇りの源は、大魔王から与えられた『魔軍司令』という地位のみ。

だが最近、ひよつとしてその魔軍司令という地位ですら

(ただの肩書で、自分の実態は軍団長不在の団を率いるだけの補欠なのでは)

という自嘲の思いが一瞬去来するが、すぐに頭を振ってそれを霧散させる。

「お呼びですか、ハドラー様」

様々に思いを馳せるハドラーの耳に聞き慣れた男の声飛び込む。

円卓の間にて一足先に待っていたハドラーに声をかけつつ、

彼の子供同然の水炎將軍は親の許しを得るでもなくどつかと己の席に腰を掛けた。

フレイザードの、完全に粉と化していた頭部は綺麗に復元されているし、

噴き上がる魔炎と魔氷の気は猛々しい。すっかり完調であるように見える。

「ふむ……岩石生命体のお前が、

頭部を破壊されたぐらいで随分と修復に時間がかかったな」

「ハンツ、もうザボエラあたりから話は聞いたでしょう。」

あの武闘家の小娘からオレに送り込まれたエネルギーは生命エネルギー！

あのガキの拳を伝ってオレの体中に光の闘気が送り込まれたんだ！

見かけによらず恐ろしい闘気量………コアまで消滅しかけたぜ」

故に研究に没頭していたゴルゴナに代わり、

ザボエラ、ザムザ親子によつて彼は長期にわたつて治療を受けることになったのだつた。

なにせ禁呪生命体に生命エネルギーは天敵である。

「ザボエラからは治療の状況は聞いていたがな………」。

自分の耳で聞くまでは信じ難かつたのだ。

禁呪から作り出した岩石生命体は実質不死に近い。

それがあんな小娘に頭を殴りつけられたくらいで、と思つてな」

「ケッ・ハドラー様もあの武闘家共と闘つてみりゃ分かるさ。

あいつら相当にレベルが高エ。

ゴルゴナの旦那だつて手を噛まれたんだらう？

アバン一人に手こずつてたアンタじゃ、大分荷が重いぜ」

口角を釣り上げて笑うフレイザードの裂けた笑み。

思わずハドラーも、



「ぬぐツ！ き、貴様！ 生みの親を侮るのか！」

我が子まで己を軽んじるのかと、瞬間、頭に血が上った。

「クカカカカッ！ そうじゃねえさ、ハドラー様よオ……」

オレは親のアンタに似てるだけだ。

アンタがなんでオレだけを呼んだのか……大体は分かる。

デケエ金星が欲しいんだろ？

ククククククク……やっぱオレとアンタは親子だよなあ……

アンタもだが、オレもいい加減大金星が欲しくてね……

オレ達には手柄が必要だ！

ヒュンケルにデケエ面をさせねえ為にもな！」

フレイザードの炎の目が血走る。

生まれて1年足らずの彼は、生まれた瞬間から知性と人格を獲得していたが、

当然、彼の人格には歴史がない。

あらゆる行動の指針、柱となるべき経験と記憶が彼には存在しない。

彼に存在するのは、他人のそれらに相当する……

それらと比べても遜色ないモノを手に入れたという強烈な飢餓感であった。

（他の奴らに、オレという存在を証明する手柄が欲しい!!）

彼の行動理念の全てはそこ承認欲求に行き着く。

「幸い、前回のロモスでの戦ではヒュンケルの野郎もしくじったから良いようなもの  
…、

奴だけが無事だったらと思うとゾツとするぜ！

今のうちに俺達だけで勝ち星を挙げて、とつとあの人間にデカイ差をつけねえとな  
…。

そうすりや魔界の英雄ボリクスも新参者の獣ビーストマン人も…デカイ顔はさせねえ！

あのゴルゴナの旦那だつて俺達に一目も二目も置くぜ」

そうだろハドラー様、

とニタリと笑う我が子の瞳の奥に潜む狂乱の炎が、ハドラーには一瞬垣間見えた。

「…うむ」

少々気圧されながらも、ややぎこちない顔で同意をする。

「お前の言う通りだ。

4軍団を投入したロモス会戦を凌いでみせた、

大勇者アバンと、その使徒共の勇名は更に高まった」

「だが、そのアバン共をどうやって倒すつもりですか、ハドラー様。

盤石で挑んだ前回だつて負けちまったんだぜ。

しかも攻め上ってくる勇者共に竜の騎士まで合流しちまった。

雑魚共は百獣魔団が片付けたらしいが、状況は好転してないんじゃないですか？

それだけに勝てばまさに大金星だがよお……」

ちよつとやそつとでは勇者を討つどころではなく、ベンガーナ失陥まで有り得る。

むしろ、前回以上の戦力が欲しいくらいなのだが、手柄の独り占めのこれ以上の戦

力動員は難しい。

大局的な情勢は圧倒的有利の大魔王軍だが、彼らには彼らなりに苦しい事情があるものなのだ。

「ベンガーナ防衛戦の初戦は、先の海戦からベンガーナに撤退している百獣魔団にやらせる。

アバンとクロコダインを討ち漏らし、竜の騎士にむぎむぎ背を見せたとしても言つてやれば、

あの血気盛んな獣ヒーストマン人は勇んで打って出たがるだろう。

忌々しいが、グノンと新生百獣魔団の強さだけは認めねばならぬ…。

奴らを利用せぬ手は無い…せいぜいアバン共を疲れさせてもらおうではないか」

そうすればお前のアレが完成するだけの時間が稼げるといふものだ。

ハドラーはそう言つていかにも残酷そうに笑った。

「あれの出番か……なるほどな……ちと時間的に厳しいかと思つたが……」

ククク、それなら確かにイケますぜ」

彼の子もまた残虐さを隠しもせず裂けた口を尚釣り上げて微笑む。

「疲れ切り、5分の1にまで力を封じられれば竜の騎士でさえ敵ではないわ！」

お前の結界が完成したと同時に氷炎魔団が突撃を仕掛けるのだ。

妖魔士団と不死騎団には『塔』を守らせる」

強く握つた拳を振り上げ力説するハドラーを見つめる、氷と炎の瞳。

瞳同様、相反する属性の腕を組みながら、

情熱的かつ獐猛な感情と冷静冷徹な思考を巡らせる。

「しかし、ハドラー様。俺の呪法の中じゃ妖魔士団なんざ頭でつかちの役立たずに成り

下がるぜ？」

オレ以外は力も魔法もからつきしになるんだからな。

………まあ妖魔士団は結界外に配置すりゃいいか」

「クツクツクツ……もうすぐだ。アバンとの因縁もようやく終わる……」

ベンガーナが奴の墓場になる……！フハハハハ！」

ハドラーの顔は自信に溢れているように見えたが、

同時に酷く危ういものを孕んでいると思えた。

(…自信…というよりは、テメエ自身に言い聞かせてるだけじゃねえのか？

こいつは考えておいたほうがいいかもな…)

フレイザードの氷の瞳は、そんな生みの親をただ冷たく見つめている。

## 鬼岩城 大地に立つ

それは幸運に幸運が重なった結果だった。

最後まで決して諦めない人々の決死の抵抗が引き寄せた奇跡一步手前の幸運だった。何度でも奇跡は起こる。起こす。それが人間の、勇者の恐ろしさでもある。

グノン率いる百獣魔団はベンガーナに撤退し大勇者一行を今か今かと待ち受けていた。

ハドラーは増援を率いてフレイザードと共に鬼岩城を出立。

ヒュンケルはもうじき戦列復帰の筈だが、今現在は鬼岩城にはいない。

ミストバーンとボリクスは魔軍司令の個人的な思惑から

旧カール領で人間狩りという名の厄介払いをされている。

魔王の属国・リングアイアも領土拡大に伴う戦後処理に忙しいし、

ハドラーからの動員命令に応えベンガーナへの派兵で精一杯。とても多方面で戦は出来ない。

色々と目端が利く冥王ゴルゴナは、北の死の大地と魔界を往復し今も何やらに没頭している。

アバンらの狙い通り過ぎる理想的展開となったのだ。

今、魔王軍の本拠地（とアバンらが思っている）鬼岩城はガラ空きであった。

ダイ達は主力不在の敵本拠地へ高速で迫りつつあった。

そしてその目的地……ギルドメイン山脈にそびえ立つ鬼岩城では……

「あっ!？」

た、たいへんだ！艦長代理！19時の方向からレーダー反応です！

しかも……結構近くまで来ちゃってます！」

鬼岩城の顔内部……コントロールルームで端末をボーツ眺めていたあやしいかげAが、玉座の間中央に座るシャドーへ慌てて報告した。

何故かシャドーの頭にはちよこんと船長帽子がのっかっているのはご愛嬌。

というか艦長代理という呼称といい、

彼らは鬼岩城の操作をムー人から習うついでに変な知識まで与えられたようだ。

「な、なんだと！」

気を抜きすぎだぞ！

いや……落ち着け。友軍かもしれない……友軍反応はあるか！」

「パターンレッド！人間です！魔王軍ではありません！」

「なんとということだ！軍団長も魔軍司令も不在のこのタイミングで来たのか！」

城内に緊急放送！総員戦闘配置につけ！」

「艦長代理！パターン赤の飛行物体が更に速度を上げました！距離3分！す、すごい速さでギルドメイン山脈を越えてくる！」

玉座の間は急速にわらわらと忙しく動き出し、今ではてんてこ舞いだ。数分前までののんびりっぷりが嘘のようである。

「そ、そんな！速すぎる！ひ、ひい！勇者だ！勇者が来たんだ！」

こんな速さでルーラが出来るなんて勇者以外にいない！」

あやしいかげDが、モンスターにとつて最悪の来訪者の予感に慄いた。

「あわわわ！ミストバーン様もゴルゴナ様もハドラー様もいないぞ！大変だ！」

と、更にあやしいかげB。幹部不在の現状に悲鳴を上げた。

「お、落ち着くんだ！全兵器、準備はいいな！戦闘配置についたな！」

あつ、そ、そうだ！緊急回線開け！ゴルゴナ様への報告を忘れていたぞ！」

シャドー艦長代理もいまいち落ち着けていなかった。

微妙にメダパニ気味だが、当然といえは当然である。

雑魚モンスターだけで勇者に立ち向かうのは自殺行為以外の何者でもないし、

大魔王お気に入りの鬼岩城を幹部の立ち会い無しで戦闘行為に巻き込むのは、かなり気が引ける。



独断での鬼岩城起動などもつてのほかだ。

だが、

「ぐぶぶぶぶぶぶ…シャドーよ。バーン様のお言葉を伝えよう。

『勇者と思しき者共を、余の鬼岩城を存分に使い撃退せよ。

鬼岩城の恐ろしさを人間共に披露してやるのだ。』

…以上である。グブブブ。バーン様は此度の余興に大層心惹かれておる。

精々励むことだ…」

普段、お目通り叶わぬ殿上人…魔界の神の直近に侍る魔神は愉快そうに言った。

バーンにとって見ればお気に入り玩具の、いよいよ本格お披露目の機会というわけ

だ。

以前の公試運転とは違う初めての实战投入となる。

ミストバーンやゴルゴナに陣頭指揮を任せるのが妥当だろうか、

(一般モンスターだけで鬼岩城を運用した場合、どれだけの戦力となるか)

を知りたいバーンの思惑によって両幹部の派遣は見送られた。

それに、いざとなれば合流呪文リリッラでミストかゴルゴナを瞬時に転送できる。

そんな大魔王の考えを知る由もないお留守番組の一般モンスター達の胸中は察して

余りある。

「わ、我々だけで勇者を相手せよと仰せに……!？」

シャドー艦長代理が船長帽を握りしめながら絶望的な嘆息をあげた。

彼の周囲から「もうおしまいだあ!」とか「そんなあ!」とかの声が巻き起こっていたが、

「ぐぶぶぶ、シャドーよ。バーン様の鬼岩城はそう簡単にやられるような代物ではない。

何者も寄せ付けぬ鉄壁の装甲、国家すら蹂躪する大量の武器と無限の兵士。

大陸をも消滅させる究極の魔砲……

真の姿を顕にした時、何者にも負けぬ超兵器となる。

お前はミストバーンより直接生み出された謂わば分身であり、

ポポルヴー達から直接、鬼岩城の操艦と指揮を教導されている。

鬼岩城の留守を預けられるほどの貴様は、バーン様に期待されているということだ。

その貴様ならば、無双の大要塞の真価を發揮できるであろう」

弁の立つ魔神はそう言い切って、自分たち幹部無しの戦闘開始を宣言した。

「バ、バーン様が……我々に期待なさっている……!」

これは……負けられん!負けられんぞ!

わかりましたゴルゴナ様!私を生み出したミストバーン様の御名を辱めない為にも

!

我らはやってやります！

魔界の興廃この一戦にあり！魔影軍団鬼岩城組各員一層奮励努力せよ！

やるぞー！」

「「おーやるぞー！」」

シャドーとあやしいかけ達は薄っぺらな腕を振り上げて気合充填。

蜘蛛の冥王の言葉は、見事に彼らを落ち着かせ士気を高めたのだ。

シャドー艦長代理は直ぐ様預かっていた“バーンの鍵”を“バーンの顔”の口へと差し込むと、

ゴゴゴ、という地響きと共に

山岳と一体化していた城塞であつた鬼岩城が急速に立ち上がろうとする。

「鬼岩城…トランスフォーメーション！キガンゴーツー！」

ノリノリでヤル気に満ちたシャドーがムー人伝来の怪しげなロボット発進掛け声をあげる。

一人だけ片腕を突き上げていて、“あやしいかけ”タイプの顔のくせに満面の笑みなのが解る。

カモフラージュとして覆われていた岩石が砕け、落下して鬼岩城の膝が頭になる。

山肌を突き破り巨大な腕がゆっくりと持ち上がる。

グラグラと地すべりが起き、軽い山体崩壊の後には巨人の大腿が剥き出しになる。

一分と掛からず巨大要塞は超巨大人型ゴーレムの模様を呈していた。

各部から排気し、白煙をまとひ吹き上げる。その全貌は白い靄の向こうに霞む。

「イマジン細胞安定しています。肺の間：<sup>ラッパ</sup>大暗黒水晶球、稼働良好！」

「ボリクス細胞、活動活発化確認。

心臓の間、<sup>ハート</sup>稼働効率80%まで順調に上昇しています」

「各部オールグリーン。」

口部大魔砲「いかずち」充填完了！」

「よし、一発先制攻撃をお見舞いしてやるか」

「射角調整。角度よし。方位、19時」

「撃てえー！」

玉座の間直下の砲撃スペースが唸りを上げて、

口から吐き出された閃光が遙か空へ吸い込まれていった。

雷光と振動が「いかずち」の状態が万全であることを物語る。

シャドーとあやしいかげ達によるスムーズなやり取りはなかなか見事で、

大魔王の威光によって落ち着きを取り戻した彼らが日頃の練習の成果を發揮しだ

た証拠だ。

「続けて電磁投射砲、全砲門開け！」

眼部・腕部・指部・掌部・脚部スネ・脚部フクラハギ、全光線砲も用意！  
シャドーの指令に合わせカモフラージュ岩石が次々に剥離する。

鬼岩城の、太陽光を受けてキラキラと輝く白金の装甲が剥き出しになると、全身の毛を逆立たせる猛獣の如く装甲から砲身と攻撃魔法球が姿を現した。

「了解…各砲座、準備よし」

「勇者達をギリギリまで引きつけてから一斉発射だ！」

それまでは口部「いかずち」で攻撃するぞ！当たれば儲けものだ」

ライトシヨルダー レフトシヨルダー  
「右 肩、 左 肩のカタパルト展開完了！」

「よし！準備のできた奴から飛行モンスター出撃だ！」

ラング  
「肺の間、更にゴースト、エビルスピリッツ、さまようよろい各30体生産完了！」

ライトシヨルダー レフトシヨルダー  
「右 肩、 左 肩にじゃんじゃん回せ！」

よろい系の生産はしないでいい！今は飛行系を優先しろ！

勇者達のルーラの妨害と撃墜が狙いだ！」

「いかずち再充填完了！」

「第2射…撃てっ！」

再度の閃光と轟音がギルドメイン山脈の空に響いた。

視線を鬼岩城の上方に移せば、その空域には飛行系モンスターがうじゃうじゃと集いだしている。

まるで黒い雲が鬼岩城の頭上を覆うかのようだ。その雲は今も膨れ上がっている。

肺の間ラシクのゴルゴナ謹製の常設魔法陣から生成されるアンデッドモンスターは

異形形成により無理やり翼を生やし飛行能力を得ていて、

暗黒闘気が満ちる水晶球からは

絶えずガストやギズモが生み出され鬼岩城の両肩から飛び立つのだった。

そして…、

「艦長代理！勇者達を有視界距離に補足！

メインモニターに回します！」

とうとう来るべき時が来た。

勇者が来た。

彼らの姿がシャドー達の目にはつきりと映った。

鬼岩城を中心に空を黒く染めていたモンスター達がワツと勇者らに飛びかかる。

が、魔法使いの師弟コンビ…

マトリフとポップの放つ呪文によって溶けるようにその数を減らしていく。

このペースなら一分と経たずに全滅だろう。

しかしそんなことはシャドー達とて予想済みだ。

飛行部隊第一陣は次に繰り出す飛行隊を隠すカーテンにすぎない。

「空中戦で恐ろしいのは魔法使いだ……ガスト隊、出撃！」

カタパルトを完全に展開し終えた鬼岩城。

その異様と威容はより増して、まるで邪悪な羽を広げた墮天の悪鬼が如く。

そしてその悪魔の城の羽から、

シャドーの命令と同時に数百体の暗黒生命体・ガストが巨大な黒い霧かと思紛う群れとなつて

ブロキーナをおんぶするマトリフ、マームを抱えるポップ……

そしてミーナの手を引くダイとその傍らのゴールデンメタルスライムに殺到した。

「ピピピイっ!?!ピピピイ……」

「いけねえ!ガストだ……あいつらの得意呪文は……!!」

「呪文封じ!!」  
マホトーン

「くそ!何なんだよこのデカブツ!

城が動くだけでも反則だつつのによ!なんて数のガストだ!」

慌てて勇者パーティーはマホトーンの嵐から逃げ惑う。

空中で呪文封じを食らってしまえば、トベルラの効果も消え失せて地面へ真つ逆さ

まだ。

自力で飛べないブロキーナ、マアム、ミーナの三人を巻き込んでしまう。

それだけは避けたいマトリフは年齢を感じさせない急旋回や宙返りやら錐揉み回転やら、

とんでもないアクロバット飛行を次々に披露し、そしてポップとダイもそれに倣う。

「いいぞおー！よしーよし、よしー！ガスト隊い…頼むぞ〜！」

勇者共を所定の位置にまで追い込んでくれえー！」

飛行部隊第二陣のガスト達もまた、次なる手の布石。

鬼岩城の全砲門が火力を集中できるクロスファイアポイントへの誘導こそ真意だ。

大画面を凝視しながらシャドーが（魔界の）神に祈るように呟く。

そして祈りは届いた。

「艦長代理！勇者共をXポイントに誘導完了ー！」

「つー撃てー！撃てえー！撃って撃って撃ちまくれっ！砲身が焼け付くまで全砲門発射あああ!!!」

玉座の肘掛けをダンツと叩きながらシャドーが叫び号令一下。

胸部電磁投射砲がググツと砲身を持ち上げ火を噴く。

一門、また一門、更に一門。



留まることなく怒涛の如く拭き上げていく砲火。

鬼岩城は雷光迸るハリネズミとなって、その光は全て勇者達に降り注ぎ轟音が大地を震わす。

炸裂し続けた雷力砲弾が空中を粉塵の濃霧で包み隠した。

「艦長代理！いかずち再充填完了！」

「第3射ああつてええええつつ！」

ダメ押しとばかりに鬼岩城の口が極大の破壊エネルギーを吐き出し、

空中に描かれつつあった爆煙の濃霧を一気に引き裂いていく。

勇者らを包んだ光の柱は背後の山脈頂きを薙ぎ払い、

尚威力は減退することなく地平線へと吸い込まれ、

そして遠来からドロドロと響く重低音が、微弱な地震と共に数拍後に響いた。

鬼岩城のモニターからは遙か遠方の地にキノコ雲が立ち昇るのさえ見て取ることができた。

「やったか!?!」

やや喜色の浮かんだシャドーの大声が艦橋に響く。

国家消滅砲に数歩劣るとはいえ、大魔砲いかずちは弩級の戦術兵器だ。

無論、勇者達はガスト諸共、為す術もなく、いかずちの雷光に焼き尽くされていく

のみ…、

と思われた次の瞬間。

「あっ!?!」

シャドーが叫んだ。

“いかずち”の激烈な光と魔力流によつて

視界とレーダー双方が塞がれていたことで反応が遅れた。

雷光をくり抜きながら突き進んでくる巨大な魔法の矢が、鬼岩城の顔面に迫っていたのだ。

轟音。

爆音。

揺れる艦橋。

メインモニターが激しく乱れた。

強い振動に玉座にしがみついたシャドーに冷や汗と共に疑問が湧いてくる。

（“いかずち”をくり抜く程の攻撃魔法を人間達は持っているのか!?!

竜の騎士のドルオーラなら話は別だが……しかし今のは違う!

今の魔法弾は一体何なんだ! データにないぞ!）

その疑問は非常に重要なことではあるが、その前に…。

「被害状況は!？」

「大魔砲いかずち、被害甚大! 使用不可!」

「大魔砲へのダメージが眼部光線砲にまで伝搬しています!」

「頭部センサー類、7割使用できません!」

司令塔である艦橋に損傷度合いを確認し、あやしいかげ達の報告にシャドーの顔が歪む。

「くっそう! いかずち」の攻撃を跳ね除けて砲台を攻撃してくるなんて予想外だ!

鬼岩城の鉄壁の装甲も砲台までは覆いきれていない…!

技術班を損傷部に向かわせろ! センサー類だけでも使えるようにするんだ!

あやしいかげB! 敵、攻撃魔法解析!

「は、ははっ! お待ちを! 『マキシマム』に分析させます!」

あやしいかげBがボタンをポチッと押す。すると…。

『キィ〜〜〜ングスキャ〜〜〜ン!』

鬼岩城のスーパーAI『マキシマム』が解析開始の電子音声を艦橋内に木霊させ、

『<sup>アクセス</sup>検索!』

解析中の音声が響き、

『シヨアツ!!!』

そして解析完了の合図。

何ともやかましいAIである。

「できました!あれは……爆裂系でも閃熱系でもありません!

メラやヒヤドと同系統の魔法です!」

「バカな!あれがメラやヒヤドの威力なものか!それに全然火炎でも氷でもなかったぞ!

コンピュータの故障じゃないのか!」

スーパーAIマキシマムの核ユニットとなったモンスターは

天界地上魔界含めても屈指の大馬鹿者である。

彼の記憶力と計算速度、スキャン能力だけを活かせるように七賢人から改造を施されている。

マシーンと化した彼は以前よりも余程有能なのだからまず間違いはない。

シャドーがムー人印の生体コンピュータにイチヤモンをつけ始めた、その時だ。

血相を変えたあやしいかげFが、

「艦長代理!前方に急速に高まる闘気反応っ!」

「っ!!」

勇者達からの再攻撃の予感を告げた。

完全に晴れつつある戦塵の中から

強烈な鬨気の剣撃が鬼岩城の損傷部位：口部 “いかずち” に突き刺さった。

再び爆発。

鬼岩城が、読んで字の如く口から火を吹いて眼部光線砲も内側から炎を垂れ流す。

勇者達はあの嵐のような弾幕と極大の雷撃の中で生きていて、

しかも反撃の余力まであるらしい。

“いかずち” は使えなくされたとはいえ、

今も電磁投射砲や暗黒鬨気圧式機銃は勇者達目掛けて撃ち出され続けているというのに、だ。

しかもカウンターパンチは鬼岩城の顔面にぶち当たり

大魔王自慢の白亜の移動要塞は傷物にされてしまった。

2度目のシェイクを味わった艦橋内でシャドーは事の重大さに表情を大きく歪めている。

「ゆ、勇者め……化物か！ 鬼岩城の超火力の中で無事だなんて……！」

勇者への怒りと恐怖と、爆発による振動のダメージ。

それらがシャドー達艦橋員の手を僅かに止めさせ、鬼岩城の指揮をほんの少し鈍らせ

た。

メインAI『マキシマム』による自動迎撃は健在だが、

勇者達は暗黒闘気圧式機銃185門の弾幕を捌き防ぎ潜って城に取り付かんとする。

そして…、

ドゴンツ

という轟音と共にととう城壁に突っ込んできてしまった。

「わ、わ、わっ！取り付かれたぞお！」

あやしいかげAが悲痛な叫びをあげ、あやしいかげCも

「く、くそお！国家消滅砲ならきつと奴らもひとたまりもない筈なのに！」

叫んで嘆いた。

鬼岩城最大最強の必殺兵器を放つには充填時間が足りなかったし、

勇者達の速度が予想以上であつと言う間に有効射程距離圏の内側に入られてしまった。

ある程度の遠距離でなければ鬼岩城自身が余波によってダメージを受けてしまう。

あれを撃つと他の防備が疎かになる点も使用を躊躇させた要因だ。

しかし、確かにドルオーラ級の国家消滅砲ならば今のダイ達を倒すことができたかもしれない。

今更言つても全ては愚痴でしかないのだが。

それを知るシャドーは、戦闘が次の局面に移行したことを即座に理解した。

「落ち着くんだ！バーン様達の期待を裏切りたいのか！

艦内に緊急放送！勇者が城内に侵入してくるぞ！

プランB発動！

全戦闘員配置につき時間を稼ぐんだ！」

「りよ、了解！プランB開始します！」



鬼岩城の内部は、いかにもバーンに好まれそうな悪魔的でありつつも

高貴であり正統派な意匠が施された部分と、

無機質で近未来的な：或いは異世界の超古代的な機械部分が混ざり合っていて

魔導機械文明といった様相を呈していた。

そんな鬼岩城内では今、赤色灯が各ブロックを照らし、緊急ブザーがやかましく鳴つ

ている。

それだけでなく、ブザー、サイレン、足音、そして破裂音や爆発音。喧騒の中、“さまようよろい”や“くさったしたい”、マミー達……

ムー人印の機械人形らが通路を忙しくバタバタと走り回る。

彼らが急ぎ向かう区画では、

重々しい防壁扉を蹴破って来た桃色の髪を靡かせる武闘家の美少女が

ボロ雑巾のようにモンスター達を引きちぎっていった。

それに負けじと覇者の剣を携えた勇者の少年も続き、彼の背を守るようにミーナが、そして前線で肉壁役を務める3人の若者を老練のプロキーナがまとめ上げる。

更に後方を大魔道士マトリフと賢者の片鱗を見せ始めたポップがサポートするのだった。

アバン、マトリフ、プロキーナの薫陶を受け、

そしてその師の二人までがパーティーに同行しているダイ一行。

鬼岩城内部の防衛力は当初の建造計画時よりも大分強化されていた筈だが、どうやら勇者パーティーも予想以上の速さでレベルアップをしていたようだ。生半可なモンスターでは相手にすらならず、一方的な蹂躪が始まっていた。

城内で繰り広げられる虐殺劇を尻目に、



今、艦長代理たるシャドーは肺ラシクの間に全力で飛んでいた。

鬼岩城の防衛指揮をA1マキシマムとあやしいかけ達に任せてでも

自分自身でやらなければならないことが彼にはあった。

「マキシマム！勇者達の現在位置は！」

廊下を高速で滑り飛ぶシャドーががり立てるように『城』に聞く。すると、

『勇者達は中央の間でオリハルコン扉のトラップに引ツカカツティマス。』

閉鎖された中央の間で、デッド・アーマー10体、さまようよろい120体、あやしいかけ60体、

ギズモ70体、ガスト100体、くさつたしたい100体、がいこつ100体と交戦中デス。

味方戦力が全滅するまでの予想時間、10分。

オリハルコン扉が破壊されるまでの予想時間、1分デス』

かつてのド無能リビング・ヒースでは考えられないぐらい正確で気の利いた返答を返してきた。

先程の解析時のハイテンションぷりが嘘のように冷静だ。

「よし……いいぞお！間に合う！充分間に合うぞつ！」

そのまま足止めをしていてくれ……同志達よ！」

ギリギリと眼を光らせたシャドーは飛び続け、

すぐに彼の眼前に肺<sup>ラング</sup>の間の重々しい扉が目に入ってくる。

開かずの間と言われた部屋の扉は大きく開かれ、

シャドーは次から次に走り出てくる魔影軍団と不死騎団のモンスター達とすれ違うと

そのまま肺<sup>ラング</sup>の間へと飛び込んでいった。

肺<sup>ラング</sup>の間では現在進行系で天井中央の巨大な暗黒の水晶球が唸りを上げて、

空っぽの鎧兵士に暗黒鬨気を吹き込んでいる。

一方、磨き抜かれた床を見れば、

ゴルゴナが敷設した大きな魔法陣からは

滾々と湧き出る水のように「がいこつ」や「くさつたしたい」達が這いずり出てきていた。

「はあはあ………よし。肺<sup>ラング</sup>の間に異常はない……あれも無事のようにだ」

暗黒生命体であるシャドーは肉体的に疲労することなど無いが、

精神的な疲れがそうさせるのかシャドーは肩を上下させるほどに息が荒い。

そんな彼の目線にある物。

それが彼の息を荒くさせているのかもしれない。

疲労ではなく、ある種の興奮と緊張が彼の暗黒の魂を駆け巡っていた。シャドーが見つめる物。

それは鋼鉄の腕と、四本の足を持つ巨大な鎧。

全体的に丸みを帯びた鋼鉄の巨人のようにも見え、小柄な人間一人ぐらい軽々と握れそうだ。

右手には湾曲した大剣。

左手には大型弩弓バリスタが取り付けられていて、

更にバリスタの機構に覆い被さるようにして銀色の人用サイズの盾が括り付けられている。

それは鎧ではなかった。

かつて魔王ハドラーが地上侵略の為に創り出した最強の機械兵士。

ハドラーの天啓ともいえる瞬間的な閃きと勇者抹殺の執念が結実した奇跡のマシーン。

ゴルゴナでさえ感心し、そしていの一番に回収を命じた珠玉の逸品。

そのオリジナルがそこに鎮座していた。

それをゴルゴナとミストバーンが中心となり技術者達が改良していった結果…、起動と操作に多大な暗黒闘気が必要となってしまう

それを動かすことが出来るのはミストバーンか、

或いは彼に直接生み出されたシャドーぐらいになってしまった。

しかし、デッド・アーマーを圧倒的に凌ぐ魔影軍団最強の鎧として生まれ変わったのだった。

「今こそ貴様の出番だ……目覚めろキラーマシーン!!」

シャドーがずるりと青い巨兵に入り込む。

暗黒闘気がキラーマシーンの隅々まで浸透し、満ちていく。

——ブウウン。

キラーマシーンの紅い瞳が静かに怪しく光り輝いた。

## 逆襲のキラーマシーン

シャドーは知る由もない。

いや、シャドーだけでなく……彼の生みの親のミストバーンも、その主である全知全能に最も近い大魔王バーンも知らぬこと。

この世界の運命には変革が巻き起こっている。

本来辿るべき運命はある出来事を境に大いに狂い、

そしてこの世界は全く別の道を進むことになった。

元々あるべき運命の姿。

その運命においては、大勇者アバンは早々に戦線離脱し、

知力やカリスマはともかくとして肉体や魔力面では大きく弟子たちに劣る。

マームは、師アバンから授かった魔弾銃に頼り

僧侶戦士という中途半端な存在として長年を無為に過ごすことになり、

武闘家としての素質を伸ばす時期が遅れる。

ポップは、しばしの期間、肝心なところで踏ん張りがきかず逃げグセに悩まされるし、

また自分が普通の一般家庭出身であることに強い劣等感を抱く。

ダイはアバンの特訓を完了することが出来ず、紋章の力を制御することにも苦勞し、またオリハルコン製の武器と出会うまでは全力で戦うことも出来なかった。

マトリフとブロキーナは、年齢的な理由もあって

勇者達に教えを授けることはあっても直接に力を貸すことはギリギリまでしなかった。

ネイル村は滅びないし、

そのことでミーナが幼少よりブロキーナに英才教育を受けることもない。

普通の少女として生きていく筈だった。

魔劍戦士ヒュンケルは、

この時期にはアバンへの誤解を解いて、マアムに説得されて正義の使徒に目覚めていく。

そして、鬼岩城はロン・ベルク作の『ダイの剣』を携えたダイによって一刀両断。

脆くも崩れ去る。

それが鬼岩城の末路であった。

だが、その運命はもはや破却された。

今、鬼岩城は白く輝く鉄板に覆われた白亜の大魔神となっていて、

大魔導士マトリフとポップ：そして勇者ダイの一撃を受けても依然健在だった。

ダイの剣による大地斬で真つ二つとなるはずの鬼岩城は、

覇者の剣によるアバンストラッシュを受けても頭部の破損で済ましてしまった。  
B タイプでなら話は違うだろうが、

先程鬼岩城に放たれたのはAタイプのストラッシュだ。

射程と速射性に優れるが威力に劣る。

鬼岩城は、元々の運命のそれと比して

比べ物にならない程、頑丈に、高密度に、強力に、多機能に、巨大になった。

今のダイ達では外部からの完全破壊はかなり難易度が高いといえる。

一方で勇者一行は、鬼岩城からの一斉砲撃と

大魔砲「いかずち」によって大ダメージを負っていた。

ダイの竜闘気全開防御、マトリフらの連続ベホマのお陰で

なんとか生き長らえて、ようやく彼らは鬼岩城に突入出来ていたのだ。

「内部から破壊するしか、このデカブツは倒せねえ」

とはマトリフの言。

シャドーが思っているよりも、勇者達には余裕はない。

中央の間のトラップが発動し、

モンスターハウスと化した大広間での怒涛の連戦も辛い。

デッド・アーマーには魔法が効かぬし、

ガストはマホトーンを連発してくるのでマトリフ、ポップは苦戦を強いられている。通気口を通れるガストやあやしいかけ達は次々に増援として参上し、戦局は膠着状態だ。

ジリジリと勇者達が押ししているが、消耗は避けられない。

「ふうー、魔王軍の本拠地つてのは…伊達じゃないわね」

桃色の髪を後ろで結わえた美少女・マームが呼吸を整えつつ片眉をしかめる。

「へんてこな罫で閉じ込められるし…モンスターは変なところから飛び出してくるし…。色んなところから攻撃は飛んでくるし…歩くし！へーんなお城！」

姉弟子と並ぶ小柄な、これまた美少女のミーナは怪物城に文句たらたらのご様子。

「どわ~~~~!!マームう!!早くこいつ何とかしてくれよぉ〜！」

人垣（モンスター垣）の向こう側で

ポップがガスト数匹とデッド・アーマーに追い回されているのが見えるが、いくら一撃で倒せる雑魚相手とはいえ

無限増殖する魔影軍団系、不死騎団系のモンスターが相手だ。

まとめで一掃する手段に乏しい武神流奥義ではどうしても多少時間がかかる。

「ポップ！今行くぞー！」



なので、対集団戦を得意とすると魔法使いか勇者の出番が求められるのだ。

「ダイ！テメエは温存してろつつつたる！下がれ！俺が——ぐっ!」

「マトリフさん!?!あなたこそ休んでてください!」

勇者の温存を考えたマトリフが極大閃熱呪文の構えをとるも、

胸を押さえ僅かに喀血したのを見てダイは自分が飛び出していった。

パーティー全員を飛翔呪文で長時間飛行させ、

あまつさえ鬼岩城との前哨戦での大火力を掻い潜るのにマトリフはかなりの労力を割いていた。

100歳近い彼には堪える作業といえるだろう。

「アバンストララーッッシュユ!!」

「いかずち」の防御で消耗した竜闘気もそのままに、ダイはアバンストラッッシュユAアローを放つと、

眼の前に立ち塞がっていたさまようよろい達が木つ端微塵に弾け飛び、

「バギ…:クロスッ!!」

続け様、ポップを負っていたガスト達を引っ掻くように腕をクロスに振り下ろす。

かつて紋章の力を発現していた時しか使えなかつた

最高位の真空呪文を使いこなせるようになっていた。

ポップが慌てて伏せると、ガストの群れが引き裂かれ四散。

デッド・アーマーそのものには魔法は効果がないが、最高位真空呪文の暴風は足止めには充分だ。

「たああつ!!」

気合一閃の通常攻撃でデッド・アーマーは脳天から股下まで両断され、どう、と地に突っ伏した。

「大丈夫か、ポップ!」

ダイが親友へと駆け寄ると、

「バカかおめえー!あとちよつとでおれにもバギクロスあたるところだったぞ!」

ガバツと起き上がったコミカル顔のポップに肩を掴まれシエイクされる勇者なのであった。

「へへ:技から魔法、そして間髪入れずの通常攻撃。流れるような三段攻撃だ。

アバンの野郎にしごかれた成果が実ってやがるな」

ダイの仕上がりっぷりにほくそ笑むマトリフだが、今も胸のあたりを抑えて苦しそうにしている。

それに勇者の力を温存しておくつもりが、

ダイが息切れる程に疲れさせてしまっている状況は全く宜しくない。

今も、ダイは竜鬪気の残量を懸念して

B タイプではなく低燃費のAタイプアローを無意識に放つたのだろう。

今は元気に敵を殴り砕き蹴り潰している武闘家三人組も

このペースで暴れていれば早晚スタミナ切れを起こすだろう。

(…魔王軍どもの…まるで時間を稼ぐみてえな戦いつぶりも気に食わねえ。

さつさと決めてトンズラこきてえところだが……)

パーティーの誰もがカッカしてる中でも魔法使いはクールに。

マトリフはその信条通りに戦場を見通していた。

「おい馬鹿弟子。いつまでも遊んでんじゃねえ。……気付いてるな?」

ダイとほつぺを抓合ってじゃれるポップに、その師は鋭い眼光で問う。

「ああ師匠…魔王軍の奴ら、増援待ちでもしてんのかな?」

動きがどうも消極的な気がするぜ」

不肖の愛弟子が、ちゃんと自分の教えを忘れていなかったのに老魔道士はニヤリと

笑った。

「ブロキーナの大將。オメーどう見る?」

今度の言葉は、木の葉のようにゆらゆらと舞い跳び敵の攻撃を流し、

撫でるような気安さで蹴撃を叩き込む老翁へと向けられていた。

彼もまた自分と同程度の百戦錬磨。その意見は必聴に値する。

「そうだね。何だか不自然さを感じる。

だけど、ここでわしらが退いたらこの巨人がどれだけの惨劇を生むか……。退却はできん。

不退転の決意で進む：ワシってかっこいい？」

モンスターの中から頭へ飛び移りながら、

きちんと頭部を踏み潰しアンデッドの息の根を止めつつピシッと決めてみる。

「かぁーうぜえジジイだ！」

まだまだ余裕ありそうで結構なこった。まだまだ死なねーなこりや」

「ひゃー、ジジイにジジイって言われちゃ敵わんなあ」

老人二人の軽口の応酬。

さすが、気心の知れた古くからの仲間だ。

軽口の裏には互いへの深い信頼と理解がある。

「つまり、奴らが時間稼ぎをしたってことは、

なるだけ早くここを突破しなきゃならん：ってこったな」

骨が折れるぜ、とマトリフが自分で自分の肩を揉みほぐす。

息をゆっくり吐き出しながら奮闘している若人達を見ると、

「おじいちゃん達とダイくんは休んでね！」

「こんなザコ達、わたしとお姉ちゃんが倒しちゃうから！」

「ポップ！今のうちに皆の回復してて！」

特に元気な少女二人がモンスターの群れに猛然と突撃。

タツクルで数体を吹き飛ばしそのまま「どりやあああああ」とか叫んで

武神流の美人義姉妹はモンスターに会心の一撃の嵐を見舞うのだった。

「うへえ…可愛い顔してゴリラみてえ…」

ポップがあんぐりと恐ろしい膂力を誇る可憐な二輪の花を眺めていた。

「プロキーナでさえ、「…鍛えすぎたかな？」と若干不安気になる程に凄まじい。

元々迎えるべき運命では、マームは僧侶戦士から転職し僅か2ヶ月弱で武神流を修めた

麒麟児だ。

そのマームが5年もの間みっちり修行すれば…、

「ちまちまやってもキリがないわね…」

ちよつと疲れちゃうけど…猛虎破碎拳、連打でいくわよ!!」

一発で体に負担が来る猛虎破碎拳を完全に使いこなしている。

それどころか、マシンガンのように連打するという無茶も叶ったりする。

16歳という油の乗り始めた肉体と天賦を持つ彼女だからこそできることだ。

若過ぎて体が完成していないミーナや、

老境に入り肉体が衰えているブロキーナでは完璧な猛虎破砕拳は放てない。

極めれば一発でオリハルコンさえ砕くと云われている拳聖ブロキーナの秘奥義を

マアムは神速の拳でもって前方全ての敵へぶち当てる。

威力と速度が相まってマアムの前方にはちよつとした鬨気の暴風地帯と化する。

「アギヤギヤギャツ!?!」

哀れなあやしいかけ達が叫んで消失。

半身がひしゃげてろくに動けなくなつたデッド・アーマーが2体。

同じように痛々しい姿のさまようよろいは数十体。

無残な姿になりつつもギシギシ動いて殺意を失っていないのはさすが魔影軍団だ。

拳の嵐から溢れた生き残りモンスターにも、もれなく妹弟子ミーナが仕留めにかかっ

た。

見る見るうちに大部屋内のモンスターは減つていき、程なくして…。

「ふう…ざつとこんなものね」

「あくん、もうアンデッドとか暗黒鬨気体とかやだー! 気持ち悪いし殴り辛いし疲れ

ちやうよ!」

パンパンつ、と両手で誇りをはたく少女2人に男どもはただただゾーツとするのみ

だった。

しかも直後にツカツカと白に輝く大扉に向かうと、

「ふんっ!!」

掛け声と共にオリハルコン鋼板のその扉をゴンガンゴンガンしこたま叩き蹴り出す。薄く伸ばされて鋼鉄表面に貼り付けられているとはいえオリハルコンである。

それがどんどん凹んでいく。

形を変えていく。

メキメキつべこべこつと凹んでいく。

その光景に男どもの肝は先程以上に冷えていくのだ。

(あの太もに見惚れるのはやめよう……!あれは凶器だ!)

ポップはそう心に誓った。

「うくん、だめね……。やっぱりこれもオリハルコンだわ。このままじゃ時間がかかり過ぎる」

最近いい感じに仲が深まってきている魔法使いの少年の内心は露知らずマアムは溜息を一つ。

大分歪んできているが、まだまだ勇者一行を閉じ込める防壁としては機能していた。

隙間から精々ゴメちゃんぐらいしか抜け出せないだろう。

「…ねえポップ。魔王軍は時間稼ぎを狙ってるのよね？」

「え？お、おう。」

そんな不自然な消極さがあるなって師匠と話してただけで、狙いは分かってねえよ？  
今もあやしいかげの増援が止んだのがやっぱり不自然だしな」

急に話を振られたポップはややキョトンとした顔でそう答え、

それを受けてマームは何やら意を決したようだ。

「それだけ分かってれば充分よ。」

何より鬼岩城がこんな歩く巨人だつて分かった今、放っておけばロモスが危ない。

老師も言っていたとおり、

こんなのにラインリバー大陸に上陸されちゃ大惨事が待っているわ！」

マームはぐつ、と腰を落として利き腕を引き、右拳に闘気を収束。

またもや猛虎破碎拳の構え。今度は腰も腕も深い。

連発式ではなく、弩級の一撃を放とうしているのだ。

こちらの構えと用途こそが本来の正しい奥義の型といえる。

「ええ！マーム、また猛虎破碎拳を使うつもり？無茶だよ！…ここはおれが…！」

「おれのメドロローアでもいけるぜマーム。お前こそちよつと休んだほうがいいんじゃないか？」



マアムへの負担の大きさを憂慮してダイが慌てて剣を構え、ポップも鼻っ柱を擦りながら申し出る。

「ダイ、マトリフさんもいつも言っているでしょ？」

巨悪に対抗できるのは、最後には勇者の一太刀だけなの。

鬼岩城の中枢にはもつと恐ろしいモノが待っているかもしれない。

あなたはそれまで力をとっておいで。露払いこそ私達の役目。

それにポップもマトリフさんも回復用にMPをとっておいたほうが良いでしょ？」

ダイとポップを制止し、

「武神流……猛虎破砕拳っ!!」

マアムは渾身の拳打を歪む白亜の大扉へと叩き込む。

と、扉が見る見るうちに、まるで虎の顔のようにひび割れていき、

そのまま大扉にぼっかりと大穴が穿たれたのだった。

「だ、だははは！ たいしたもんだぜ。俺のメドローアもまつつあおだなコリヤ」

旧友の弟子の素晴らしい成長っぷりにマトリフが「たはは」と笑う。

少し鼻水を垂らしながらちよつと引きつった笑みを浮かべているのは、

(レイラの若い頃そっくりで……)

むちむちつとしてイイ感じだと思つとったけど……ありやアカンわ。やめとこ

セクハラは決してすまいと心に誓ったからだとかなんとか。

ポップとマトリフ：こんな所までこの師弟はそっくりだった。

マアムとミーナが奮闘している間に、

ポップが皆をすつかり回復させ、マトリフも呼吸を整え終わる。

しかし、やはり思っていたよりも損耗スピードが早い。

アバンより送られたシルバーエザーも既に使い切っており

MPも今の分を使い切れれば補給はできない。

鬼岩城突入時に

「いかずち」と一斉砲撃を凌ぐのにベホマを乱発せざるを得なかったのが痛かった。

だが取り敢えずはモンスターの波も一先ず絶えて、

皆ようやく落ち着きいざ出立しようとした、その時。

ガシンッ

鋼鉄の重々しき音が僅かに大部屋を揺らした。

「何の音だ!?!」

ポップが、(また何かの罠が作動したのか!)と頻りに辺りを見渡すも特に何も無さそ

うだ。

しかし、

ガシンツ、ガシヤンツ、ガシンツ

鋼鉄の音はどんどん大きくなり、音と音の幅は短くなり、

「これは…何かが近づいてくるね。廊下の向こうからだ…デッド・アーマーの足音ではない」

ブロキーナが眼光鋭く廊下の暗闇の向こうを睨みつけた。

マアムが打ち破った大扉のあちら側。

照明も灯っていない、暗く…恐らく長い大きな廊下のずっと向こう。

大きな質量を持つ鋼鉄同士が衝突する音が反響する暗闇の中。

怪しく光る紅い光がぼうつと浮かんでいた。

ガシヤン、

ガシヤン、ガシン、ガシンツ、

ガシヤンツ、ガシヤンツ、ガシヤンツ、

どんどんと大きくなる鋼鉄の音。

「先手…必勝だつ!!」

明らかに新たな敵。

そう見て取ったポップは右手にメラ系、左手にヒヤド系を生成。

初手に最大の必殺技で戦いを決めようとする。

最初の一撃に最強の攻撃を放つのは悪手ではない。

両手の魔法力を擦り合わせ弓を引き絞るように構え、いざ放とう…とした時に、  
「よせ、ポップ。初手で最強の攻撃を放つのは悪くはねえが、メドロアでやつちやいけねえ。」

「教えたはずだぜ…：呪文返しマホカクタを使うモンスターがいなくても限らん。」

それにこのデカブツの中にや、デッド・アーマーとかもうろついでんだ。  
他にも魔法が効かねえ奴や、

「マホカクタみてえな特性があるモンスターがいる可能性は充分ある」

師に腕をがっしと掴まれたポップは、ハツとした顔になって慌てて魔力を霧散させた。

「そ、そうだった…：危ねえ危ねえ…：！ありがとう師匠」

「ケツ、バカ弟子が。まだまだ俺がついててやんなきやいけねえみたいだな。ダハハハ！

「アバンの印ならぬマトリフの印でも近々くれてやろうかと思つたが、こりや延期だな」

「げええ、なんだそりや。」

「マトリフの印って…」

この前貰っただっつきいこのベルトについてる師匠の顔みてえなこーゆーの？

あつ！そういうや師匠！これ全然はずれねえんだよ！呪われてんじやねえのかこれ！」「あん！？ヒヨッコ風情が、俺様自ら手がけたオリジナルデザインのバックルをだせえだど！？」

こーんなかつちよいいベルト見たことねえだろうが！

見ろ！この大魔道士マトリフ様の顔を模してるんだぜ！？」

ありがてえデザインだなあ…、と最後に言い足したマトリフは満足気にうんうんと頷いている。

「外れないのはオメエあれだよ。そんだけしっかりお前を守ってくれてるってことだぞ。

呪いだなんてとんでもねえ。むしろ祝福だ。感謝しなヒヨッコ」

ポップが何とも言えぬ表情で師匠を眺めている。

そのやり取りを見守る周りの仲間達も、概ねポップと似たり寄つたりの表情。横暴が服を着て歩いている、とはポップの言だが、まさに今その真価が発揮されていた。

弟子と師匠の微笑ましい？やり取り。団欒の一時。だが次の瞬間、

ズズンッ！

それを強制的に終わらせる金属の重量音。

薄暗い廊下を抜けて大部屋へと足を踏み入れた巨大な人影が、その全容を見せた。

「ああ!? あ、あれは……!」

ダイが両目を驚愕に見開く。

ダイにとって忘れようはずがない。

無骨な2本の腕。4本の脚。

右腕の湾曲大剣。左腕の大型ボウガン。

他に幾らか見覚えのない武器が追加され、

色も当時と違って鮮やかなブルーに変わっているもの……それは間違いなく、

「キラーマシーンっ!!」

そう。見間違えることなど有り得ないその特徴的なロボット兵はキラーマシーンだ。

「キラーマシーン……! こいつが……!」

アバン先生を倒すために作られた対勇者殺人機械兵士!」

ポップもまた驚きの声を上げて巨漢の機械兵を見上げていた。

キラーマシンの紅い単眼<sup>モアイ</sup>が、

スムーズな駆動音を微かに漏らしながら滑り動きダイとポップを見つめ、

『そう……その通りだ!!』

エコーする機械音声が勇者らに向かって投げかけられた。

『キラーマシーンはかつて人間になされた改造とはレベルの違う改造を受け、生まれ変わった……！』

そして……今では竜の騎士という勇者を殺すためのキリングマシンなのだ!!』

言うと同時に機械兵士が跳ぶ。

「は、速い!!」

鈍重そうな見た目と、先程まで響かせていた足音からの推測を裏切る速度。

予測を遥かに上回る俊敏性と加速性が、幼い竜の騎士の対応を遅らせた。

「っー!!」

『死ねええ、ダイ!!』

巨大な曲刀が重量と速度を味方にし唐竹割りに襲いかかる。

ダイは受け止めるべく振り上げた覇者の剣で、

(このままキラーマシーンの剣を斬り折る……！)

つもりで竜闘ドラゴニックオーラ 気を込めた。

しかし、

ガキイイインツ

けたたましい金属音を響かせてガツシリとキラーマシーンの刀剣と鏢競ってしま

のだった。

『ハハハハハッ！モンスターハウスで相当消耗したようだな！』

貴様の竜ドラゴニックオーラ鬨の量は明らかに減少している！

このキラーマシンの目は誤魔化せんっ!!」

中身に人間が乗ることを考慮しなくなったことで、

キラーマシンの内部には機械構造が詰まっている。

頭部にも古代ムー帝国の技術が導入されたコンピューターが搭載されており、

融合状態にあるシャドーはその恩恵を遺憾なく受け取っていた。

「くう…そ、それにしたって…コイツ、どんな改造を受けたんだ！

竜の騎士のオリハルコン製の剣の一撃を受けて無事だなんて…!」

『フッフッフ…キラーマシンの湾曲大剣はプラズマコーティングソード！

なに？何を言っているかわからんだと!』

私だってよく分かっているかわからないが、とにかく凄そうだろうっ!!

とにかく!!

神々の金属であるオリハルコンとて金属には違いない…!

故に湾曲大剣が纏う磁場フィールドが貴様の剣の衝撃を吸収する!

ゴルゴナ様がそう仰っていたのだからそういう事なんだ!』



ロボット兵のモーター駆動音が唸りを上げる。

更に出力を上げてぐぐぐつとダイを押し込みだした。

「こいつ…凄いいパワーだぞ！こつちが疲れていることは関係なしに、強いっ!!」

「ダイ！くそ…！近すぎて呪文じゃダイまで巻き込んでしまう！」

ポップが舌を打つ。

冷や汗を一筋垂らすダイの助勢に、

「ダイっ！」

「ダイくん!!」

すぐさま2人の武闘家が舞うように参じようとするも、

— p i p i p i p i ! !

恐ろしいほど速く正確な動きでロボット兵のバリスタ砲が放たれる。

しかもこの弩弓、やはりというか何というか、ムー人の手が入っていて連発式炸裂榴矢弾なのだ。

ボンツボンツボンツと立て続けに爆発が起き、

可燃性の粘液がばら撒かれて中央の間の大部屋は一瞬にして紅蓮の地獄と化す。

「広範囲を一瞬にしてっ!!」

「わー!?燃えうつつた！」

マアムとミーナは持ち前の素早さで直撃こそ回避したが、

武闘着の裾に僅かにその可燃粘液が付着。

ムー人の悪辣な可燃液は燃焼部位を切り離すよりも速く火炎を燃え広がらせる。

「マアム！ミーナ！」

「ちっ……ポップ、ヒヤダルコだ！」

魔法使いの師弟コンビが燃える仲間に氷結呪文を放ち鎮火に努め、

その間に火炎地獄を引き裂くようにしてブロキーナが疾風の如く前面に躍り出た。

あつという間にダイと競るキラーマシーンの懐に潜り込むと、

「はぁー!!」

枯れ葉のような老人が繰り出しているとは思えない連打がメタルボディに打ち込まれる。

一撃一撃が、並のモンスターならば死に至る威力。

だが、

『馬鹿め！』

キラーマシーンの装甲はミスリル・オリハルコン合金ブルーメタルめつき鋼板！

ゴルゴナ様が開発した新型装甲なのだあ!!

1万2000枚の新型極薄装甲を丹念に施されたキラーマシーンの防御に隙は

なあああい!!!」

僅かに仰け反ったものの、

踏ん張るキラーマシンの四つ足の一つが猛烈な脚撃をブロキーナへと見舞う。

だがブロキーナは、まさに枯れ葉となつて強力なキラーマシンの蹴りをふわりと舞つて避ける。

『ぬ!?!』

そして僅かとはいえ仰け反り、

踏ん張る脚の一本を持ち上げたキラーマシンが見せた隙をダイが見逃す筈もない。

一気に押し返しキラーマシンを持ち上げて、

『うおおお!?この力……これが竜の騎士!!』

「でええいつ!」

曲刀を弾き上げるとがら空きとなつた胴体、胸部のガラス装甲目掛けてパンチを繰り出した。

が、しかし。

ぐわあああん、とダイの拳の方が痺れてしまう。

「い、いちちち!なんて硬いんだ!くっそ……前はあそこが壊れやすかつただけだなあ」

拳にフーフー息を吹きかける様は少し面白可笑しい。

『ハッハッハッ！』

生まれ変わったキラーマシーンに弱点はないと言っているだろう！

計算しつくされた曲線フォルム！

職人技光る重ね貼りの装甲！

新型装甲の柔軟性と硬性！

それらが抜群の衝撃分散性を発揮し、攻撃を散らす！

そしてええ、当然防御だけではないのだああああ!!!』

シャドーのテンションがMAXとなり多少言動が怪しい。

だが、彼の言う通り間違いなく今のキラーマシーンはムー人の超ロボット兵と言うに相応しい。

ジジジジ——

キラーマシーンのモノアイが不穏に発光しだす。

「ふーようやく全部消え…なんだありや!?

目がすんごーく光ってるんですけど? な、なんだか嫌な予感が——」

丁度、鎮火作業を終えたポップが振り向きざまに懸念を表明。

案の定…、

「みんな伏せろおー！」

「ピピイ!? ピーピピピイーっ!!」

鬼岩城の大魔砲には及ばないが、

それでも凄まじい光線がキラーマシンの目が発射され勇者パーティー全員を薙ぎ払う。

光線が通り過ぎた軌道に沿って次々に火柱が立ち、

「きゃあああっ!!」

そしてキラーマシンの左腕のバリスタ砲をも乱射し榴弾を更にばら撒くと、

「うわああああっ!!」

そこら中で爆発が発生し、勇者達が吹っ飛ぶ。

折角鎮火した大部屋内がまたもや阿鼻叫喚の火炎地獄になってしまった。

「ち、ちくしょー……あの機械野郎好き勝手しやがって! あちこち火傷だらけだぜ!」

ポップがゲホツゲホツとむせながら感情豊かに悪態をつく。

だが、部屋中に広がる炎の壁。

それらを見てポップはニヤツと笑った。

「だがこの炎は良いかもしれねえ……」

キラーマシンの野郎の目くらましにや丁度いいや」

頬の擦り傷からの血と煙塵を拭いながら立ち上がったポップが、

その両手に炎・氷両系統の魔力を漲らせる。

揺らめく炎の壁の向こう側では、切り結び、

或いは拳打の応酬に興じる機械兵と仲間たちの影がゆらりと見える。

ドンツ、ドンツ、という音も2度3度聞こえてきて、

(今のは爆裂系の音…師匠か。どうやら魔法反射とかは大丈夫そうだな…ならっ！)

マトリフが魔法戦を展開しだしたのを察して、

そして現状、安全にメドロアを作り出せるのは自分だけとポップは判断。

残り少ない魔法力を収束させた両拳を擦り合わせ、弓を引き絞るようにして開き構

え、

「みんなー！今からあれいくぜー！避けてくれ!!」

大声で仲間呼び掛けると炎の向こうの、

一際大きな影から小さい影達がパツと飛び退いたのを、ポップは見た。

そして、

「いくぜえ！極大消滅呪文っ!!」

絶対消滅の光の矢が勢いよく放たれた。

ごうごうと音を立てて飛ぶ魔法の矢は、道中の炎や煙の全てを消し去って突き進む。

(ようし！直撃ルート！)

キラーマシーンがどんな装甲を持ってようが関係ない。

例えオリハルコンだろうが、

先に奴が言っていた通り計算しつくされた弾くフォルムだろうがメドローアならば一撃必殺。

タイミングも完璧だ。

ポップは勝利を確信した。だが…。

『それが、いかずち』をくり貫いたあの魔法の矢か！しかああしっ!!』

シャドーが睨りキラーマシーンが左腕をズイツと迫り出す。

それとほぼ同時である。

バアアアアアツツ

という薄く伸ばした金属を叩いたような甲高い音が大部屋中に木霊した。

そしてその瞬間、

「ポップ!!呪文返した!!!」

(っ!!?やべっ!)

師の、心底焦った大音声が聞こえた。

反射的にポップはもう一発のメドローアを急速展開。

己へ迫る大光弾に向かって両腕を突き出す。

激しいスパークが起きて、消滅のパワーが相殺されていく。

「ぐう、ぐぐ……く、そっ!!」

メドローアは霧散した。

しかし、これで…。

「に、二発分の魔法力を使っちゃった……もうメドローアは撃てねえ…」

メドローアどころか、もはやポップにはメラゾーマ一発すら撃てない。

へたへたと座り込んで、その顔にどつと脂汗を滲ませる。疲労の大きさを物語っていた。

マトリフが弟子の無事を見てホツとしたのもつかの間。

呪文を跳ね返したロボット兵の腕を見てその顔を再び驚愕に染める。

「ま、まさか……あの銀の小盾は……『シャハルの鏡』!!」

「シャハルの鏡だつて……!?!」

聞き返すブロキーナはその名に聞き覚えがあるようだ。

ひよつとしたら昔、マトリフから聞いたことがあるのかもしれない。

「覇者の剣や覇者の冠と同じく、神々が遺したともいわれている伝説の武具の一つ……!」

あらゆる魔法を反射すると何かの文献で読んだが……どうも本当らしいな。



チツ……なんてこった。まさか魔王軍の手に渡っていたなんてな」  
キラーマシンの左腕：

バリスト砲の機構を隠すように括り付けられた

銀色に輝く小盾を、2人の老人は忌々しそうに見つめていた。

「ブロキーナ……シャハルの鏡、砕けそうか？」

「いんや無理だね……。何度かわしのパンチをあれで防がれているけど、とんでもなく硬い。」

オリハルコン級だよあれは。神々の遺産つてのも領ける」

「オリハルコン級か……ならマアムはどうだ？」

おめえの猛虎破碎拳ならいけるんじゃないかねえか？

さつき大扉べこべこにしてたろ」

チラリとマアムを見るが、

「いえ、ダメね。さつきの大扉はオリハルコンの薄い鉄板が貼られていただけ。

あの盾と比べたら強度の厚みが桁違いよ。

本来の溜め重視の猛虎破碎拳ならば砕けるかもしれないけど……。

キラーマシンの素早さに追いつこうとしたらどうしても軽い破碎拳になってしま  
うわ」

不可能と断じた。

「くそっ……せめて俺に魔法力が残ってりゃあヤツの防御の裏をかけたんだが…、

しかもポップの奴、メドローア二発分撃っちゃまったんだ…恐らくMP切れだろうな」  
魔力が空っぽのフェザーを指でいじりながら悔しそうに老魔道士が呟く。

弟子は確かにやらかしてしまったが、彼の責任を追求するのは酷というものだ。

炎の壁がポップを隠してくれていたあの状況。

キラーマシーンと仲間たちの一進一退の攻防。

例え自分でもあの状況ならメドローアを撃つという選択肢を選んだらと思う。

このロボット兵がシャハルの鏡なんぞという

伝説の防具を装備していたことの方が想定外過ぎるのだ。

勇者らに取り囲まれているキラーマシーンは、

無機質な電子音を響かせながら機械の単眼で彼らを見つめる。

キング・マキシマムの得意技、解析アナライズの機能を付与されたキラーマシーンの電子頭脳は、

勇者達が今現在、決して楽な状況にはいないことを見抜いていた。

『ククク…鬼岩城の猛攻を凌がれた時は勝ち目なぞ全く見えなかったが…！』

このキラーマシーンならば…いける！』

キラーマシーンが四脚の足で地を蹴る。

凄まじい馬力と巨体でダイへと突っ込んでくる鋼鉄の塊が、

その勢いのままに右手の大剣をブン回す。

バリスタとレーザーで武闘家勢への牽制もしっかり忘れていない。

「うあつー！」

「ぎゃあつー！」

光線と爆発の連発に流石の拳聖陣営も被弾が重なりつつあった。

機械の頭脳による的確かつ多面的な判断力と、高性能なボディ故の純粋な高スピードは、

まるで人間が一動く間に二を動くかのように素早いのだ。

「くっー！」

ダイは一撃を捌き、二撃目をいなし、三撃目を躲す。

と、思いきや。

「ぐっ!?!うわあああ!!！」

熱く鋭い斬撃がダイの土手つ腹に決まり、小さな竜の騎士を後方へと吹っ飛ばした。

「どういうことだ!?!今、ダイは間違ひなくかわしたじゃねえか!！」

心身疲れ果て、片膝をついて親友を見守るしかないポップが声を荒げた。

『フツハツハツハツ!!さつきも言っただろう!キラーマシンの剣はプラズマをまとつ

ている！

磁場を一瞬解除し、

まとったプラズマを暗黒闘気と共に解放してやれば…斬撃を飛ばすことができる！』  
キラーマシーンが遮二無二、届かぬはずの距離で勇者達全てを目掛けて剣を振るいだし、

そしてその動きは次第に速くなる。

びゅうびゅうと風を切る音すらやがて一つの甲高い高周波のようにしか聞こえなくなり、

剣を振るうキラーマシンの腕は、既に常人では目視で捉えられない程だ。

そして、

『ククククク！オティカワン様命名、*ブレード光波*の嵐をくらえいっ!!』

プラズマと暗黒闘気の斬撃がキラーマシンの周囲全てを襲う。

「アバンストラッシュのお手軽版ってどこか…！」

あれなら剣の達人じゃなくても闘気剣を簡単に扱える…！」

胸をおさえ息荒いマトリフの眉が歪んだ。

超高速回転する腕の隙間を縫ってモノアイからレーザー、左腕からは焼夷榴弾を放つ。

周囲全てを襲うキラーマシンの全体攻撃が怒涛の連続で繰り出されていた。

戦場である大部屋がオリハルコン鉄板で覆われていなければとつくに部屋は崩壊していただろう。

ポップとマトリフ、ゴメちゃんを庇うように竜ドラゴニックオーラ闘気を展開し守りに入っているダイだが、

(ダメだ……鬼岩城を壊すために力を温存しておきたかったけど、

こいつはそんなことを言っていて勝てるやつじゃない！)

「マトリフさん……ごめんなさい！計画通りじゃないけど……おれは全力でアイツを倒します!!」

ドンツ、と熱風が渦巻き溢れ出るドラゴニックオーラが

光波、レーザー、榴弾を押しつけ掻き消す。

一瞬で完全なる攻撃態勢に入った。

竜の騎士がその闘志を剥き出しにした時、圧倒的な破壊と暴威が地上に吹き荒れる。

『う、うう、あああ!?!』

あ、あれが……竜の騎士の真の力なのか!?

す、凄い数値だ……今までののは弱っていたのではなく、温存していたというのか……!だが……いいぞ!もっと力を出せ!全力で来い!』

闘志漲る竜の騎士相手に物怖じせずに、

寧ろダイに比例するかのようにやる気に満ちるシャドー。

キラーマシーンの足のモーターをフル回転。

全速力で後退させ疾風のように迫るダイと等距離を保ち、

そしてやはりレーザーとバリスタ砲、ブレード光波の嵐をダイへと見舞うのだが。

「こんなものっ!!」

左手でレーザーを弾き、

覇者の剣でブレード光波を切り裂き、

榴弾矢はもはや避けよともせず余裕で耐えきる。

「すごい……あれがダイの本気なのね!」

「いいぞいいぞ、ダイ兄ちゃん! かあっ、いい!」

マアムが感嘆しミーナは見惚れる竜の騎士の威风。

もはやキラーマシーンの攻撃では速度を緩めさせることさえ出来ない。

『竜ドラゴン 闘バトル 気の防御力はデータを上回っている……!』

ダイめ……成長しているぞ! この短期間でこんなにも予測を超えるなんて!』

以前にゴルゴナが計測した数値を尽く超えていくダイが機械戦士の目前へと迫る。

キラーマシーンのモノアイが驚愕に見開かれ、そして次の瞬間。

「大地斬ッ!!!」

『ああっ?!』

振り下ろされたダイの斬撃にキラーマシンの左腕が宙を舞った。

「うまいぞー!うまくシャハルの鏡を避けて関節をやった!」

ポップが歓声を上げる。

だがまだキラーマシンの1つ目は強く暗い輝きを失ってはいない。

未だシャドーの闘志も闘気も尽きていないのだ。

『なんとということだ……鉄壁のキラーマシンの腕を切り落とすなんて!』

恐るべき攻撃力……恐るべき防御力……もはやレーザーや爆弾では……、

……こうなったら……!我が暗黒闘気の全てを込めたこの技を使うしかない!』

(バーン様……ミストバーン様……私に力を!)

ふわりと湧き上がった暗黒の闘気が機械兵の装甲を伝い右腕の大剣へと収束していく。

プラズマの出力も限界まで引き上げられ目で見てわかる程にスパークする。

『これで闘魔最終剣……!』

さすがミストバーンから生み出された分身であった。

その執念と忠義心は見上げたものがある。

シャドーは己を構成するほぼ全ての暗黒闘気をキラーマシンの剣へと込める。

その技名の通り、ミストバーンの奥義・闘魔最終掌の剣版…

先のブレード光波をアバンストラッシュAタイプ of 紛い物とするなら、

こちらは暗黒闘気版アバンストラッシュBタイプともノーザンブレードとも言える。

キラーマシンの巨剣が激しいプラズマと漆黒の闘気をなみなみと湛え、

暗黒の炎がゆらゆら立ち昇るようにも見え禍々しい。

「……」

それを見たダイも構えを深くとる。

腰を落とし、足に力を込め闘気と膂力を溜め込む。

アバンストラッシュBタイプの構えだ。

『キラーマシンのパワーと…我が渾身の暗黒闘気を……』

喰らえー！ーっ!!!』

キラーマシーンが四品の脚を跳ね上げてダイへ猛獣の如く飛びかかった。

「アバンストラッシュ!!!」

『闘魔最終剣!!!』

覇者の剣と大剣がぶつかり合う。



ドラゴニックオーラ

竜闘気と暗黒闘気が絡み合い、そして反発。

爆発し衝撃波が周囲へと広がっていった。

「どわあああー！」

「ピーーっ!!」

「ゴメちゃんこっちー！」

「ポップ！私の陰に隠れて！」

衝撃が大部屋を満たしていく。

転がるポップとゴメちゃんをその身を盾に必死に庇う美少女ら。

「ちえっ！なあんで俺はジジイに守られんだ？」

ムッチムチのマアムちゃんが馬鹿弟子だなんてズリいぞ」

「あのねえ…若いもんは若いもん同士が常識だつて…。」

「まだまだお盛んだねえー、いやはやなんとも」

「色気と食い気失くしたらいいよそりゃ、オメエ、俺の死ぬ時だぜ」

「違くないね」

爺さんと爺さんは互いに頑張つて衝撃波を凌いでいたのだった。

「ダ、ダイ……！どうなった！」

マアムに庇われながら肩口からヒョコツと頭を出したポップが親友の様子を固唾を呑んで見守る。

そこら中が煙で包まれ、ポップには何も見えなかったが、

「……………ダイの勝ちよ」

気配を感じ取ったマアムがそう宣告した。

煙が晴れていく。

そしてそこには……。

「ダ、ダイ……！やった！やったぜ！」

肩で息をするダイが、ちらりとポップを見て微笑む姿があった。

怪我也疲労も忘れてポップが一目散に友へと向かって駆け寄るが、

やはりポップの足取りは重々しくふらつく。

「はは……！足、フラフラじゃないかポップ」

軽口を叩く小さな竜の騎士の黒いボサボサ頭を乱暴に撫でながら

ポップは吹き飛ばされ壁にめり込むキラーマシーンへ視線をやった。

「……死んだ、のか？」

キラーマシンの巨大な湾曲刀が真ん中から折れていた。

右腕はあらぬ方向へ曲がっていて、頭のミラーカバーは割れ光は灯っていない。

脇腹あたりの装甲は切り裂かれて……というよりも

巨大な大砲で抉られたとでも言う方が正しい。

四脚のうち二本の足も腕同様にひん曲がっていた。

所々裂傷した装甲からは内部の機械が火花を散らしている、

黒煙と一緒に微弱な暗黒闘気が漏れ出たキラーマシンは力なく項垂れている。

肩を貸しあつた老人二人が、やはり足取り重そうにダイラへと寄り、

「完全にぶっ壊れてるな……。あれじゃ直すのも一苦労だろうぜ。」

まっ、今すぐ動き出すこたああんめえ」

「暗黒闘気も感じない。」

心配はなさそうだ……。おめでとうダイ君。見事だったよ。

伝説の竜の騎士の力……。完全に使いこなせるようになったようだね」

「はい……これもアバン先生にマトリフさんやブロキーナさん……」

ポツプにマアムにミーナ……クロコダインも……

みんなが修行を手伝ってくれたからです！」

「ピィ〜〜！ピィピィ!?ピィーっ!」

「あははは、そうそう!当然ゴメちゃんもだよ!いつもありがとう!」

マトリフとブロキーナも成長したダイへと賛辞を惜しまない。

マアムとミーナも笑顔でダイに駆け寄り、

ゴメちゃん是最愛の旧友の頭上を愉快そうに飛び回っていた。

だが、

「っ!?みんな、気をつけて!」

ダイが皆を庇うようにして一歩迫り出し、倒れるキラーマシーンへ向き直る。

ピクリ、とキラーマシーンの鋼鉄の指が動いた。

「げえっ!?まさかアノ野郎…まだ生きてんのか〜!?」

大仰に驚いたポップがまたまたマアムの陰へと隠れ、

すぐさま全員が再度戦闘態勢へと意識を切り替えた。

ギシ…ギシ…

鋼鉄が軋み摩擦の悲鳴を上げながら、

キラーマシーンはゆっくりと捻れた右腕を持ち上げてダイ達を指さした。

『さ、さすがは…竜ドラゴンの騎士…日々…恐るべき早さで…

レベルアップしている…私の、負けだ…だ、だが…それでも…

お前達は……我ら魔王軍には……か、勝てない、ぞ……絶対に……！」  
「う、うるせー！負け惜しみ言ってるじゃねーぞ！」

このポンコツブリキ野郎！」

ポツプが指を指し返して威勢よく切り返す。

だが、キラーマシンの右肩から火と暗黒鬨気を漏らしつつも、

それでもシャドーは「負け惜しみ」をやめはしない。

『フ、フフフ……いや、これは確信だ……！』

今、私は安心しているのだ……！！

我が生みの親、ミストバーン様も……

このキラーマシンを改造した……ゴルゴナ様も……

そして……当然、魔界の神……全知全能の大魔王、バーン様も……

お前達よりも……強い……！！

あの御方らが……お前達で遊んでいるから、こそ……お前達は生きていられるのだ……

！』

不気味に赤く光る機械兵のモノアイが、鈍く明滅する。

その眼光は段々と力を失っていつているのに得体の知れない力強さに満ちていた。

ごくり……と勇者パーティーの誰かが息を呑んだ。

それ程の自信に満ちたシャドーの負け惜しみ。

『そして何より……お前達の冒険は、ここで……終わる！』

あの御方達の手を煩わせるまでもなく……!!

勇者ダイ……お前達の負けだ!』

「ば、バカも休み休み言いやがれ! 誰がどう見たってダイの勝ちだろうが!

俺達のダイが完全しょ——」

そこまで言い返してポツプは思わず両膝をついた。

頭がクラリリとして視界がぼやけてくる。

「——はれ? 力が……入ら……ねえ……! な、なんで……」

見ればポツプだけではない。

魔力切れを別にしてもマトリフが青ざめた顔で突っ伏し、

マアムもミーナも……ブロキーナでさえ立っているのが辛そうだ。

そしてダイも。

「な、なんなんだ……これ……!」

「頭が……ふらつくわ……! 力が抜ける……! これは……!」

「毒っ! し、しまった……! お、俺としたことが……!」

マトリフが気付く。

「マ、マアム……ミーナ……ホイミを……全身に、まと……い、いかん……意識が……」  
「う、うう……!」

ブロキーナ達、武神流の拳士が得意とするホイミをまとう呼吸法も既に手遅れ。

キラーマシーンとの戦いで消耗し過ぎたダイもまた、

大部屋内をいつの間にか満たしていた毒ガスに意識を重たくされてしまっていた。

『フ……フハハハ……や、やったぞ!』

バカめ……お前達のような侵入者が現れた場合……

この鬼岩城の防衛策が守備兵や防護壁だけだと思つたか……!

魔界でも妖魔司教殿しか調合できぬ秘伝の毒!

無味無臭の魔香気……疲弊した貴様らならばひとたまりもない!』

キラーマシーンが勝利に笑う。

シャドーの揺るがぬ自信の理由。

それは「プランB」が発動した瞬間から城内にばら撒かれる『魔香気』の存在だった。生きとし生けるものを様々な状態異常に誘う恐るべき完全無刺激の毒ガス。

ザボエラが干からびて死にかける程に搾り取られ、

そしてゴルゴナによって改良・生産されたものだ。

「そ、そうか……このデカブツを……」

てめえら無生物モンスターだけで……う、動かして、いた……のは……毒の影響を避ける、た  
め……

今までの……攻撃は、全部……毒が回るまでの……時間、稼ぎ……か」  
　　臉が異様に重い。

疲労とMP切れ……特別強力な毒ガス……

マトリフでさえもはや呪文を唱えるコンセントレーションを發揮できない。

(ち、ちく……しよう……勝負に勝って、し、試合に……負けたあ……、

俺も、焼きが回った……な……すまねえ……アバン……)

薄れゆく勇者達の意識。

とうとう覇者の剣を支えに最後まで立っていたダイも、

「こんなところで……寝る、わけ、には……」

力なく眩き、倒れる。



『……………か……………勝った……！』

破壊の嵐が過ぎ去った静かな大部屋。

そこで静かに、だが確かに……シャドーの勝利宣言がなされた。

## 戦士に絡みつ়く邪糸、そしてベンガーナの戦いへ

暗い暗い部屋。

どこが出口で、どこまでが壁か。

そんなことすら分らない程にそこは暗い。

常人であれば吸い込むだけで発狂か、或いは全身から血を吹き出して死に至る瘴気に満ちたそこで二人の剣士が激しい火花と血花を咲き乱れさせていた。

闇夜に白刃が煌めく。

ひゅんひゅんと風を切り、そして金属と金属が激しく摩擦する。

散る火花が一瞬、剣士の顔を照らした。

照らされた顔は鉄兜に覆われていたが、覗き穴から伺える瞳はただギラギラと憎悪の炎で燃え滾っている。

その剣士が、無言の内にも必殺の気合と…命ある全ての者への憎しみと共に右手の白銀の刃を振るう。

ひゅうつ、と白刃の閃光が戦士の首元を駆け抜けた。

一瞬の静寂。

相手の剣士の動きが止まり、ぐらりと揺れ、血飛沫を噴き上げながらぼとりと首が落ちた。

「ぐふふふふ……見事」

眼を見開いたままに転がる首を冷たく見下ろす魔装の剣士が、突然聞こえてきた不気味な声に振り向く。

「…ゴルゴナ殿か。こいつは中々手強かった。

練習相手にはちようどいい…もつと用意してもらいたい所だ」

8つの目を光らせる背虫の魔神・ゴルゴナがそこにはいた。

この暗黒の部屋を用意したのは彼だ。

そして、今しがたこの魔剣戦士…不死騎団長ヒュンケルの練習相手を務めていた戦士を用意したのも勿論彼である。

「案ずるな…この生ける軀は何度でも蘇る」

八つ目が、ヒュンケルに勝るとも劣らぬ冷徹さで戦士の首を見、虫の腕で首を持ち上げて胴体へと放り投げる。

首が胴の間近まで転がり近づくお互いの切断からじゆるじゆると触手が伸び、水焦がれる砂漠の放浪者の如く無数の触手を絡ませあつた。

「う…あ…あ…痛…痛…殺して…くれ…」

兜に包まれた首がガラガラ声で呟いた。

蜘蛛の魔人は笑う。

「ぐぶぶぶぶ…死にたいか」

「死に、たい…死なせて…くれ…」

「ならぬ」

苦悶を浮かべる首に蜘蛛は無情に宣告する。

「貴様は己だけ死を望むのか。」

貴様と、生ある時に愛し合った女も同じ刻苦の獄に繋がれて現世を彷徨っているというに、何故に貴様は死を望む。

お前はそれ程に軟弱な男であつたのか…？」

「……き、さ、ま……レイ、ラに…まで…ツ、殺、して……やる！こ、ろ…して…や、る、ぞオオ、オオ……！あ、悪魔、め……っ!!」

窪んだ眼で魔人と魔剣士を睨みつける首が、濁った血を瞳と口から溢れさせて腐った唇から呪詛を紡ぐ。

それをゴルゴナは実に心地良さそうに眺めていた。

「ぐぶぶぶぶぶぶー」

さすがは大勇者アバンの“仲間”だ。

首だけになろうとも：我が術で縛られようとも我に吠えるその精神力：素晴らしい。  
戦士ロカ……貴様が己に課せられた使命を果たした時……その時は……お前の妻共々永遠の安らぎを与えてやろう」

笑いながら「まずはヒュンケルの相手が貴様の仕事」と宣ったゴルゴナが、腐敗の暗黒戦士へと活力を与えて無理矢理に立たせる。

大勇者のかつての親友は抗う術なく、不可視の蜘蛛の糸のように絡みつく呪力に操られるしかない。

「ぐ、ぐぐ……ううううッ!! 殺、すッ! 殺す……! 殺す! 殺す!」

ゴルゴナの呪力がロカの肉体のみならず、その高潔な魂までを穢していく。

暗黒戦士ロカは瞳から理性を失せさせ、大蜘蛛の魔神に向けるべき憎悪の矛先さえ変えられて、殺意漲らせた黒い眼球から血の涙を滴らすと、血塗られた剣を振り上げてヒュンケルへと一目散に駆け出すのだった。

ヒュンケルは目を細め笑う。

「ふっ……さすがはゴルゴナ殿。

いいぞ、向かってくるのだ……! 戦士ロカ! アバンの仲間め!!

貴様を何度でも細切れにできるとは嬉しいぞ!!」

ロカの憎悪に応えるは、もう一塊の憎悪の化身だ。

不死と憎しみに囚われた二人の天才剣士は、瘴気に満ち満ちる暗き部屋で、何時までも何時までも、踊るように互いを殺し合った。



その夜、次の戦いまでの間の僅かな憩いを過ごす人間達が、思い思いに過ごしていた。ある者は故郷に残した愛しい人を思い、ある者は親しいものを殺された無念を胸に魔王軍への復讐心を滾らせる。

この中に明日の戦いに怯える者は一人もいなかったが、軍船を多く沈められた事もあって、即席のキャンプ地はみすぼらしく、殆どの者はテントも張らずに雑魚寝で夜を過ごし、寝ずの番の兵らがとる食事も栄養満点とはいかず、兵達の疲労は積み重なっていく。

アバンやクロコダイも、 balan 達のお陰で一命を取り留め、回復呪文で傷が癒えた

とはいえ、やはりコンディションは万全ではない。

あまりに重傷だとホイミ系でも癒やしきれず、後遺症が残る場合もある。

「…すでに傷はすつかり癒えたな。腕もそこまで上がるなら、もう大丈夫だろう」

バランスが、アバンの腕を持ち上げ、ゆっくりと回して可動を確かめて診察する。

専門家でないから保証はできんが…と、そう締めくくったバランスに、

「いいえ、幾つもの戦を潜り抜けて来たあなたの診断は、そこらのお医者様の言葉より信頼できますよ」

アバンはニコリと笑って応えた。

短い言葉の中にも、その声色、抑揚などで、アバンという人の為ひととなり人が滲み、バランスに伝わる。

なんとも穏やかで、人を安心させる。

深い知性すらも、声に溶け込んでいるかのようで、たとえ初対面であろうとも人の心を絡め取ってしまう…そんな人だと、アバンを見たバランスは感じた。

(不器用な私とは対極的な人だ)

そう思った。

衣服を着直して、包帯の巻かれた体を隠したアバンは、メガネも掛け直してクイツと持ち上げ、そして乱れてストレートになってしまった髪も丹念にカールさせ、いつ

ものアバンを整えていく。

そして、優しげでいながら、凜とした佇まいを取り戻したアバンは、あらためてアバンへと向き直り、頭を下げた。

「あらためまして……ありがとうございます、アバンさん」

「なんの。それはこちらのセリフだ……アバン殿」

威厳に満ちるアバンの声も、その時はまるでソアラと相対した時のように優しさが含まれているのは、それは目の前の賢き勇者がデイーノの師であるからか、それともアバンの持つ人柄がそうさせたか。

ひよつとしたらその両方かもしれない。

「あなたには……かつて私が、地上で暴れるハドラーに対処出来なかった時に、その相手を押し付けてしまった事がある」

「ハハハッ！ 何をおっしゃいますか！ ラーハルトさんから聞きましたよ。あの時、あなたもつともつと恐ろしい敵と魔界で戦っていた。私など、大した事は……うん、まあちよつとはしましたけど——」

おちやらけて笑うアバン。

つられてアバンの顔も、また一段緩くなる。

「——それでも、あの冥竜王ヴェルザーに比べれば……地上の災厄は微々たるもの。私も、



多くの神話伝承に通じていると自負していますが、冥竜王の恐ろしい逸話は枚挙に暇がない。真竜の闘いの伝説などは、地上でも多くの戦士が好む伝説ですしね」

「……そう言ってもらえると、私の心も楽になる。だが、何を言おうと……あの時、苦しむ地上を見捨てたのには違うい」

「それこそまさに不可抗力という奴ですよ、バランさん。それに、私だつてあなたに謝らねばならぬ事があります」

「あなたが私に？」

バランの目がキョトンとする。

アバンは、またその柔和な顔を破顔させて悪戯小僧のように微笑んだ。

「勇者として讃えられるのはあなたである筈だつたのに、御存知の通り、今は私等が勇者とチャホヤされ……中には大勇者などと、過大に褒めてくださる人もいます。なんだか……あなたの功績を盗み取つたようで……たはは、お恥ずかしいやら申し訳ないやら」

微笑みながらも冷や汗をかいてみせて、そして頬をポリポリと搔くアバンの姿に、バランは今度こそ笑つた。

「はははは……謙遜なさるなアバン殿。あなたは間違いなく勇者だ。大勇者だ。この地上を守り、導いてきたのはあなただ。何も恥じる事などない。さつきも言つた通り……私にはあなたに感謝しているのだ。そして、今こうして相対し、言葉を交わすうちに、感謝

は尊敬に変わってきている。……私は……聖母竜によって、そうなるべく力を授けられ生まれた……竜の騎士だ。だが、あなたは違う。あなたは真正正銘、人の身でありながら、弛まぬ練磨によって知勇を鍛え、身につけ、そして……魔王ハドラーすら倒してみせた。勇者とは、まさにあなたが名乗り、讃えられるべき尊称。私には荷が勝ちすぎる。重き名だ……」

バランは心底そう思ったが、アバンは「褒めすぎですよ」と照れて笑う。

だが、アバンほど、勇者という肩書が似合う人はいないとバランは思うのだ。

無論、自分も凄まじい鍛錬と闘いの果てに、竜の騎士の力を磨いてきたのだが、そもそもアバンと自分では下地が違うというのも事実。

強者は強者を知る、とも言う。バランは、アバンと接してその力を感じ取り、そして、ただの人であるアバンの力は、たとえ今のバランでも油断出来ぬと思わせられる実力者だと思えた。

命を懸けて戦うことがあれば……きつとアバンは思いも寄らぬ戦いぶり、こちらを翻弄し、そしてバランは大苦戦するだろうと簡単に予想できる。

下手をすればこちらが負ける。

この手の引き出し多き賢き戦巧者が相手の場合、武辺者を自認するバランが取るべき最良の戦術は、最初から全力で相手を叩き潰す事。

つまり、バランの見立てでは、「アバンとの勝負は竜魔人化しなくては心許ない…」と、そう思わせる程であった。

バランが、アバンの眼鏡の奥の理知的な瞳をジッと見つめる。

「それに何より…あなたは我が子ディーノの心を導いてきた師父だ。私にとっては、アバン殿は大恩人だ」

「ダイくん…ディーノさんに関しては、私よりもっとベリーベリーナイスな関わりをしたのは、ブラス老です。礼なら、彼に。ディーノさんの人柄のまっすぐさは、私と出会った時には既に健在でした。デルムリン島とブラス老…心優しいモンスター達。ゴメさん。あの島が、ディーノさんの持つて生まれた素晴らしい心をまっすぐに伸ばしたのですから」

ダイの育ての親と、育った環境。そして、ダイを生んだ両親の血の事もきちんと尊重するアバンの気の使い方は、さすがは学者賢者の家系だった。生みの親の前では、ダイを本来の名で呼ぶのも忘れない。

そういう気遣いが、バランには嬉しかった。

「そうだな。そのブラス殿という御老人にも、一度きちんと挨拶にいかねば。……だが、アバン殿が大恩人であるのは、やはり変わらん」

見た目で判断してはいけないと、かつて弟子にも教えたものの、見た目通りの頑固さ

を見せたバランに、アバンは内心で苦笑する。

「……ならばここは、おあいこですね。バランさん。お互いの恩の貸し借りは同等という事にしませんか？両者共に恩人……ですから、これからは是非、対等のお友達ということだ」

ウインク一つ、茶目つ気たつぷりにしてみせたアバンは、手を差し出す。

その差し出された手を、バランはしっかりと握り返してみせた。

「友か……ああ、喜んで、そうさせて貰おう」

「ありがとうございます。……いやあくいくつになつても新しい友達が出来るのは嬉しいことですね。あつ、そうだ。ならまずは、お近付きの第一歩に交換日記といきましょう」

ロカ以来ですよく、等とアバンは喜び、いそいそと準備を始める。

「こ、交換日記？」

「ええ。ジニユアール家に代々伝わる、伝統の交換日記方があるのです。まずは書き方ですが……友達という事でフランクさをより強く意識し、あえて砕けた文体で書くのがマナーです。『おはようございます』なら『グツモーニンっ♪』などと書くよりも早く親しくなれるのですよ！」

本気かウソか、冗談か。アバンは懐から（どこにしまっていたのか）一冊の乙女チツ

クな表装の本を取り出して、フザけた笑いを浮かべつつ、しかも力の入った講義をバランに始める。

これにはバランも少々タジタジ。

「う、うむ……だが、今は事が事ゆえ……世が平穩になつたらという事で……」

「むむ？ そうですか……」

大げさに残念がつてみせるアバンの姿は、どこまでもコミカルだ。

たとえ現状が切羽詰まっていようとも、こうした本気の冗談はアバン流の話術詐術の一つでもあるのだろう。

彼がこうして余裕ぶつてみせる事で、この光景を遠巻きに見ていた者達も……竜騎衆

でさえも朗らかな顔となっているのだから、皆の心の緊張を解す良い役割でもあった。

(…フツ。本当に大した御仁だ。道化を演じ、人々の心を癒やす……これも狙いのうちか。

……ディーノ……良き師に恵まれたな)

微笑んだ二人の勇者は、お互いの杯を、どちらともなく自然と近づけて鳴らし乾杯をし、貴重な酒で唇を潤す。

「美味しい酒だ」

戦場の安物酒にすぎない。

しかし、この僅かな安酒は、バランにとっては極上の美酒に等しい。

息子も見つけることができ、そして、友と呼べる男とも出会えた。

(思えば……私には友はいなかった。良き部下はいても、竜騎衆は友たり得ない。そもそも、竜の騎士とは孤独な存在だ。本来ならば、愛する伴侶すら持つ事なく、故に、当然子を成す事も有り得ない。……私は、歴代の竜の騎士の中でも、飛び抜けて恵まれているのかもしれない)

竜騎衆とは固い絆で結ばれ、特にラーハルトはディーノの義兄と呼んでもおかしくな  
いぐらいにバランとの絆は強固だ。

愛する女・ソアラとも結ばれ、愛の結晶たるディーノにも恵まれて、フォルケンやナ  
バラ：メルルとも良き関係を築けて、そして今度は友だ。

聖母竜から生まれず、生来、竜の紋章を持つという、規格外の竜の騎士はダイである  
が、ある意味で真の規格外はバランなのだろう。

バランは一人で、神の時代から続く竜の騎士の歴史を、どんどんと塗り替えていく。  
気付けば、アバンは僅かな酒に身を手伝わせてわざとらしくテンションを上げて、兵  
達と、そしてバランの為に、まるで講談でも聴かせるように朗々と語っているのがまた  
可笑しく、そしていかにもアバンらしい。

「——ということがありまして私は対リングガイア戦線で大忙しだったので。  
いやいや、それはもう大変な戦いでした。」

北の厳しい寒さ……乏しくなる食料……抜け駆けしたがるオーザム王国。私のメガネも寒さのあまり曇る有様で……おっと、私の武勇伝はこれくらいにして

…

そんな時にあの子のことをパプニカ王国のレオナ姫から聞いたのですよ。ものすごい才能ある未来の勇者がデルムリン島にいとね。

リングア包囲の指揮の途中だったのですが、居ても立ってもいられなくなりまして、

フローラ女王の許しを得て私とポップはダイ君のもとに旅立ったのです！

私はそれはもう驚きました！

こんな子が、こゝんな南の島に隠れ住んでいたなんて！

ダイ君はスペシャルハードコースをクリアし1週間で勇者になれる逸材だったのです！」

語りに語るアバンの背後にぎっばーんと波打つ大波が見える……気がする。

兵達はヤンヤヤンヤと喝采を送り、 balan もまた時折頷いて相槌を打ち、アバンの面白可笑しい講談に聞き入っていた。

「なるほど……アバン殿とブラス老は勿論、ポップ君にも感謝してもしきれぬな。そうか……デイーノめ、友にも恵まれたか」

短い間であつたが、 balan はアバンの知的で重厚な完成度を誇る人間性に、あらためて感服していた。

かつて balan が見た人間達の中でも、ソアラに次ぐ素晴らしい人間だと思える。

“人の暖かさ”ではソアラが上だと balan は個人的な理由（弱み）で確信しているが、その balan から見てもアバン・デー・ジュニオール3世という男の完成度は、接すれば接するほど完璧に思えた。

理性的で知的的。

人間は賞賛されるだけの素晴らしい生き物ではないと断じるだけの冷静さと公平性。

そして、それを理解しつつも人間という種への信頼と愛情を失わず、可能性を信じ、その上で魔物や魔族に対しても偏見を持たない。

一個一個の人格、精神を見抜き、評価する。

力なき正義を無力と言い、正義なき力もまた無力だというアバンの価値観。

戦士としての技量、体力：魔法使いであり僧侶としての魔力、見識。

破邪の呪法すら修め、進む勇氣も退く勇氣も持つ、まさに人類史不世出の大英雄。

彼の全てが賞賛に値する。

彼の素晴らしさに比べれば、竜の騎士とて霞む。

そういう評価でアバンをまとめたところに、



「あつ。バランさん」

アバンが何かを思い出したかのように言った。

「なにかな？」

また一杯、酒杯を空け、空になる度に群がる兵士にまたまた注がれてしまいがらバランは返答する。

と…。

「交換日記の件…よろしくおねがいしますね？」

「……………う、うむ」

あの話は本当に生きていたのか。

このタイミングで蒸し返すのか。

バランでさえ、アバンのペースに巻き込まれ、そして流されてしまう。

(な、なるほど…本当に恐るべき人だ…)

計り知れない…まさにその言葉がピッタリ似合う男、それがアバンだった。

ベンガーナの戦いが始まったのは朝焼けの頃合いだったろうか。

払暁の陽光が、雲間から薄く差し、その光と共に最後の人類軍は進撃を開始した。

先陣を受け持つて駆け抜けるのは、竜の騎士バランとその従者達。

「魔王軍ども！ 貴様らが追い求める竜の騎士の首はここにあるぞ!!」

死を惜しまぬならばかかってくるがいい!!

寄る者から、我が真魔剛竜剣のサビにしてくれる!!」

威風堂々と、剛剣を八相に構えて、名乗りあげるバランの姿は、まさに神話かおとぎ話に出てくる勇者そのもの。

アバンとはまたベクトルの違うその勇姿に、敵味方を問わず、惚れ惚れと目を奪われる。

以前、偵察した情報では、ベンガーナの城壁は度重なる戦でボロボロのままという事だったが、いざ来てみれば魔王軍によって急ピッチで修復と増改築を繰り返されていたようだ。

ベンガーナは街もすっぽり覆い守る大城壁によって囲まれていて、ベンガーナの街中

へ進む為には、まずはその城壁の突破が必須。

堅牢な城壁には、威容な黒鉄の大門が備わり、ベンガーナ唯一の出入り口となっていた。

大門は、暗黒闘気が練り込まれたオリハルコンメッキによって、太陽の光さえ反射せぬ異質な黒に輝くという、不気味かつ無比の門で、短期間での急拵えとは思えぬ防衛力を持ち、まず人間には砕けない代物。

だが、竜の騎士ならば話は別だ。

接近を許せば、バランならばこの大門を突破出来るに違いない。

そうはさせじと、バランの名乗りを受けて、城壁の上に蠢く影達が一斉に空へと飛び立った。

街中からも、城からも、その影共は次々に空へ飛び、夜明けの光を一瞬で黒く塗りつぶす。

「っ！凄まじい数ですなあ、バラン様!!驚いたぜ……ありや全部アンデッドだ!くせえくせえ!ここまで腐った臭いが漂ってきて、鼻が曲がっちゃうよなあ!クワックワックワックワック!」

空の騎士・ガルダンデーが口笛などを吹きつつ軽口を叩いてみせたが、頬には薄っすらと冷や汗が伝う。

魔王軍の凄まじさは、軽薄な彼にも危機感を募らせるに充分だったが、相変わらざるの軽口っぷりに、同僚であるラーハルトもボラホーンも、思わず笑みが溢れる。

「皆、油断をするな！ゴルゴナのアンデッド達は、滅びて尚、瘴気を撒き散らす！」

ロモス軍の戦士達よ、僧侶魔法の心得のある者はキアリーとトラマナを常に唱えろ！  
ガルダンディー！私と共に空中で奴らを迎撃する！

ラーハルト、ボラホーン！おまえたちは、このままロモス軍と共に突撃!!」

「はっ！」

「ははっ！おまかせを!!」

飛翔するアンデッドの群れに対抗するかのように、ガルダンディーとルードが天高く飛ぶ。

「空は俺らのもんだぜ!!死人は土の中にも潜つてな!!」

スカイドラゴンのルードが炎を吐き出し、ガルダンディーが瞬速の剣技で、アンデッド共に生やさされている歪な翼を切り落としていく。

頼もしい程の手際の良さだが、本来、ガルダンディーという男は獲物をいたぶる性質がある男だ。

その男が、バランと同じ戦場であるとはいえ、こうも一撃必殺を旨として戦っているのは、それだけこの戦場が危険だからだろう。

「ガルダンディー、上だ！」

バランがギガデインで死者の群れを引き裂きながら、部下に注意を促せば、即座に鳥人の青年は上空へと翼のはためかせて、羽根の矢を射出。敵を打ち落とす。

「さすがはバラン様だ……まるで後ろにも目がついているかのようではないか！我らも負けてられぬ！ラーハルト、俺は右をやる！」

「ならば俺は左だ。ぬかるなよ、ボラホーン！」

飛べぬ者は地を駆けて、空から落ちる者にとどめを刺し、そして地面から湧き出てくるアンデッドの群れの頭を砕いていった。

ボラホーンの凍てつくブレスが死者を氷漬けにし、そして凍ったところを、巨漢のトドマンが振り回す重々しい錨が、まるで鎖分銅のような速さで粉微塵にし、ラーハルトの閃光としか思えぬ槍捌きは、瞬き一つの間数十の敵を両断していく。

彼らの後ろから突撃する人間軍は、ダイやアバンらの無双っぷりをも凌駕しそうな程の彼らの活躍に、ただただ感嘆の声を上げた。

「す、すごい！」

「これなら……本当にベンガーナ攻略ができてしまうかもしれないぞ！」

「あれが、伝説の竜の騎士の力なんだ!!」

「アバン殿の弟子の、勇者ダイ殿のお父上だということからな！」

「ああ！やはり血は争えないな!!素晴らしい勇者じゃないか!」

「アバン様にダイくん、それに…：バラン殿がいれば…：打倒魔王軍、見果てぬ夢ではない!」

命を捨てる覚悟などとうに出来ている者達であるが、グノンとの一戦では一方的に叩きのめされ、大いに士気を下げていたロモス軍。しかし、目の前で起きている英雄譚に勇気付けられ士気も鰻登りである。

バランを中心に、兵達は凄まじい活躍をみせ、数万はいようかという死者の群れを散々に打ち破る勢いだった。

魔王軍先鋒の不死騎団を蹂躪され、慌てたのは百獣魔団の戦目付役だ。

「グ、グノン様…た、大変です!」

慌てて踵を返し、ベンガーナ城の大広間で出撃に備えている獣王へと報告する。

かつてロトの子孫達と戦う前もそうであったように、女の獣人に身の世話をさせてふんぞり返っていたグノンが、ギロリと戦目付のエビルホークを睨んだ。

「何用だ!戦の寸前…：我が闘志を高めようという、この時に!!」

「も、申し訳ございません…：し、しかし…：その、先鋒を担っていた不死騎団が、ま、まさかの、壊滅でございます!人間どもは破竹の勢いでベンガーナの大門まで迫っており

…このままでは——」

「このままでは何だ？まさか、俺の百獣魔団が敗れるとでも言うのか!？」

グノンの目が釣り上がり、エビルホークから「ひっ」と小さな悲鳴があがった。慌てて弁解する。

「そ、そのような事は!」

「だまれ!!先鋒の不死騎団は、所詮はゴルゴナの小手先の技によって乱造された、雑魚の群れだ!……不死騎団本隊は未だ動いておらぬ。それは貴様も知っているはず!」

「それは存じておりますが、し、しかし、それにしても人間どもの勢いは油断ならぬものがあり、ここはベンガーナを退いて人間の勢いが弱まるのを——」

その瞬間、グノンのハーケンが飛んだ。

エビルホークは、言葉の続きを紡ぐことなく、胴と首が断たれて、そのまま鮮血を拭き上げてドサリと倒れる。

「腰抜けが!!退くだと!?!たかが目付役風情が、俺に戦を指図するか!!」

百獣魔団の長、獣王グノンが吠えた。

その遠吠えはベンガーナの隅々にまで響き、国中に控えていた獣共が一斉に腰を上げ、獐猛に唸りだす。

「出撃ダ……!」

「出撃!百獣魔団、出撃……!グルルルル!」

「ガオオオオオツ!!主ガ、戦場デ死ネト、命ジテオラレル……」

グノンの咆哮はただの合図ではない。

獣兵達を闘争の狂気に追いやる、雄々しき獣王の狂咆だった。

「ゴルゴナがこしらえた捨て駒の死人共は、ロモス甲奴らに再び殺される事で任務を全うした……！ バランならば、ゴルゴナの手管は知っておろうが、毒に対処すれば魔法力を……数に物を言わせたゾンビ共の肉壁は体力の消耗を強いる……！ ゴルゴナらしい、二段構えの悪辣な策よ……ククククククツッ！ 竜の騎士よ、クロコダイソよ！ ベンガーナが貴様らの死に場所だ！」

グノンは堂々とした将でありながら、こうした非道作戦をも躊躇なく取り入れる。

将の本分は勝つ事にこそあると確信し、そしてその為に尽くす知略と工夫は、どんな鬼畜の所業であろうと正道であると考えるのがグノンだ。

武人としてのプライドも高い獣王でありながら、その在り方はクロコダイソとは異なり、ゴルゴナやフレイザードに近い。

獣人の魔族らしく、縄張り意識も強いが、初戦で百獣魔団だけでの単独勝利にケチがついた以上、ここは連携を重視し、勝利という結果に重きを置く事だけの冷静さが彼にはある。

ゆえに、他の軍団との連携にも抵抗はない。



己の戦場への誇りと拘りはあるが、勝利を目指した上での援軍や協力態勢などは、寧ろ、勝つ為の布石として望むところだった。

アンデッドの群れを突破し、ベンガーナの大門に取り付いたロモス軍だったが、やはり魔法力と体力の消耗は激しい。

「……ゴルゴナめ。相変わらず卑劣な作戦だ。死者を冒瀆するだけに留まらず、二度目の死までも細工し利用する……反吐が出る！」

因縁深いからこそ、バランは宿敵とも言える蜘蛛の魔人を嫌悪する。

バランと竜騎衆ならば、その小細工の突破は容易い。

だが、彼らほどの戦士であろうと、多少なりとも心身は疲れてしまって、その時点でゴルゴナとグノンの目論見は成功しているのが解るだけに、バランには一層癪であった。

「しかし……その邪悪な策……全て斬り伏せてくれる!!」

掲げた真魔剛竜剣に雷光を招来し、たかだかと構えて balan は跳んだ。

「ギガブレイクッ!!!」

ベンガーナの大門は、並の人間の魔法も闘気も全て弾くほどに堅牢だった。

だが、竜の騎士の必殺の一撃を受けては、オリハルコンといえども所詮はただのメツキ。

読んで字の如く、メツキは剥がれて、轟音と共に大門は粉々に砕け散る。

この超破壊力は、同じ勇者であってもアバンには出来ぬ芸当だ。

竜の騎士だからこそ出来る、最強の大技だった。

「おおっ、ベンガーナの門が……砕けた!!」

「俺達でベンガーナを落とせるかもしれない!」

「よ、よし! やってやろうぜ!」

「ダイくん達を援護するつもりなだけじゃなく、勝つつもりで戦おう!!」

おお! という声援が巻き起こる。

だが、そんな淡い希望を飲み込むかのような濁流がロモス軍に押し寄せる。

「つ!!? な、なんだ!!」

「あれは……獣の群れだ!!!」

「なんだあの数は……あれじゃ、津波じゃないか!!」

「だ、だめだ!左右に散る暇なんてないぞ!!」

理性の一切をかなぐり捨てた獣ビーストの群れ。

それが突如、打ち破った大門から怒涛のように溢れてくる。

地上で起こるビーストの大波。

それこそが、百獣魔団の単純明快にして最強の戦術であり真骨頂だ。

「つー皆、固まれ!こちらも矢のようになって、モンスターの群れを突っ切るのだ!」

バランスが真っ先に飛び出し、そしてラーハルトもそれに続いて、暴走群集へと突撃する。

バランスとラーハルトが刃の切っ先となり、その両翼をガルドンディーとボラホーンが固め、ロモス軍は強力な盾となり剣となってくれている彼らを全力で支え、そして追走する。

避けられぬのなら、敵の群れを引き裂くしかない。

「所詮は考えなしの獣の暴走……!どちらが狩られる立場か、この陸戦騎が教えてやる!ラーケンディストール!!」

ラーハルトの、神速の槍が獣を瞬時に十数両断し、それでも止まらずに陸戦騎の天下無双の槍捌きは、次々にビーストの頭を貫く。

ガルダンディーとボラホーンも、堅実に敵の勢いを逸し、徐々に獣の群れの暴走は、その流れを左右に分かたれつつあった。

バランを先頭に、人間達は集い固まり、その周りを激走するアニマルモンスター達の濁流が流れていく。

「このまま突撃をいなせそうすな、バラン様！」

錨をブン回しつつ、ボラホーンがバランにそう言った瞬間、そいつは疾風のように現れた。

「っ!!いかん! 竜闘ドラゴニックオーラ気、全開っ!!!」

バランは己の体に凄まじい量の竜闘気を纏いつつ、一点を見つめた。

「な…!? あれは、グノン!!まさか…!!」

ラーハルトも気づいた。

だが、超絶技巧の槍術と速度を武器とするラーハルトは、回避は出来ても防御技能には欠け、ましてや仲間を身代わりに守るスキルも無い。

ここは主・バランに任せるしかないのが、忠臣ラーハルトには口惜しい。

グノンは、先の戦いで見せた時のように、胸部の筋肉までも膨張させてみせた。

猛烈に息を吸い込む。と、一気に空が振動し、雲が乱れて渦巻く。

ゴオオオン、ゴオオオオン、と天が唸って、瞬く間に分厚い雨雲に成長した雲が太陽

を飲み込む。

「かああああああっつっ!!!」

低気圧を呼び寄せる程の、グノンのプレス。

超圧縮された真空の大炸裂弾が、ロモス軍の真上から音速で降り注ぐ。

しかし、迫る真空プレスに向けて、 balan は自分の両手を、まるで竜の顎のように構え、両掌に膨大な竜闘気を漲らせる。

（竜魔人化しなくては、全開のパワーは放てん……だが、あれならばこれでー）

「ヌウウウ……竜闘<sup>ドル</sup>気砲<sup>オーラ</sup>呪文!!!」

極大の光線が balan の両掌から放たれる。

本来のドルオーラの半分ほどの威力でしかないが、だが、それでも収束した竜闘気の砲撃はとてつもなく威力を誇る。

竜の騎士としてレベルアップを重ね、より強靱な肉体となった今の balan だからこうして撃つ事ができたが、従来、ドルオーラの使用には竜魔人化が必須条件となり、ある種のリミッターとなっていた。

歴代最強の竜の騎士である balan でさえも、人間の姿のまま全力のドルオーラを撃てば、両腕は砕け散り、下手をしたのなら命も失うであろうし、そもそもドルオーラの威力を調節して撃ち出すという事すら、豊富な戦闘経験値を持つ balan にしか出来ない技

術だった。

鮮烈な光の渦が、グノンのブレスを貫き霧散させ、そのまま光線は天へと吸い込まれて、雲をも裂いた。

「す、すごい…!!ダイ君にも負けていない…いや、それ以上だ!!」

「あ…う、あああ…!?こ、これが…伝説の、竜の騎士の…神々の力!」

「まるで、神話だ!!」

たとえ味方であると解つていても、人間には畏怖の対象であった。

そして、敵であるグノンにとっては、バランが示した力は喜びでもある。

「はははははは!!今のはほんの挨拶代わりだ…待ちかねたぞ!!バラン!!!」

新たなセルゲイナスに仁王立つグノンが、大音声で叫ぶように言いながら、まっすぐにバランを睨み、対してバランは無言のまま、真魔剛竜剣を構え直しグノンを睨み返す。

ラーハルト、ガルダンデー、ボラホーンの竜騎衆らも、一点の油断無く、己の得物を構えた。

「…アバンとクロコダインの姿が見えぬな。…フンツ!大方、別働隊でこそそこそと動いているのだろうか…。まあいい。オレは、バランの首を獲つて手柄とせん!!」

グノンのハーケンが陽光に光る。

「ゆくぞ、竜騎衆よ。油断するな…奴は、強い!」

「ふふふ…四人がかりか…：…よかろう！かかってこい！！」

この異世界の地でも、勇者と、その仲間達は四人。

そういう不思議な法則と奇縁に、グノンは心底で思わず笑った。

アルス、キラ、ヤオ、ポロン。

勇ましき少年・少女らの幻影が、似ても似つかぬ厳しい男らの後ろに視えた気がした。

## 暗躍する者達

バラン率いる戦士団が、グノンの百獣魔団と激戦を展開していた一方で——  
ロモス軍の本隊の中にアバンとクロコダインの姿はない。

という事は、彼らは別に動いているという事で、グノンの指摘通りである。

だが、それを見抜いたからといって別段、グノンは特に慌てる様子もなく、巧妙に駆られた風でもなく冷静に、眼前の獲物に狙いを定めた。

これが意味するのは、もともとアバンの動きを看破していたか、或いは、こそこそ動き回られても問題無いぐらいに、魔王軍の守りが固いかだ。

「クククク……ハドラー様！ どうやらネズミが釣れたようだぜ！」

ベンガーナの大広間から大階段を昇り、更に奥へ上へ行くと城主の間となるが、そこにはグノンと百獣魔団の戦闘を見守るハドラーがいる。

そして、その傍らには氷炎将軍が鋭い目をギョロギョロと忙しく動かして、幾つもの悪魔の目玉の映像を検分していたのだが、そのフレイザードからの報告が、今上がった。  
「ほお？ どんなネズミが釣れた？」

「クカカカカツ！ 前に取り逃がした大物さ！ ハドラー様にとつちや、いい加減見飽きた



面かもなア」

主従であり親子でもある二人の魔将は、口の端を釣り上げてニタリと笑う。

「ふん！アバンか」

「……アバンの野郎、手勢が少ねえどころか……一人ですぜ。今なら大勇者を殺る好機と見たが……どうします？」

「アバンが一人……？フレイザード……貴様は、奴が何を企んでいると見る？」

問われて、フレイザードは、先程の笑みとは打って変わって氷のように冷静な瞳でジツと悪魔の目玉の映像を見て、そしてほくそ笑んだ。

「フツフツフツ……こいつあ、驚いた。」

アバンは凄まじい速さで、ベンガーナの都の周りを走ってやがる……。

地面に魔法円を描きながらなア。

ベンガーナの都をまるまる包む結界でもこさえるつもりなんじゃないですかねえ？」

オレ達と随分気が合うよなア、などと言ってさらに口角を釣り上げる。

氷炎將軍の氷のように冷静沈着な分析力は、生みの親のハドラーとて重々承知していた。

恐らくフレイザードの言は正しいだろう。

「……アバンの結界呪法という……マホカトル破邪呪文か。」

デルムリン島では、あれの突破は骨が折れた…少々厄介だな。

あの魔法陣の中では、微々たるものとはいえ、魔に属する者は力を封じられてしまう…さすがに旧知の仲で、ハドラーはアバンの呪文や技を良く知っている。

「…封魔と破邪、か。オレの氷炎結界呪法の効果がどうなるかが問題ですな」

フレイザードの指摘に、ハドラーも神妙な面持ちで頷く。

「うむ。映像を見るに、アバンの奴が仕掛けようとしている結界の範囲は、マズイことに我らが張ろうとしている結界呪法をもちり込んでいる。

マホカトールの内側で氷炎結界呪法を発動させた場合…どうなるかは予想できん」

「なら…やはり今が仕掛け時って事でしようなア」

確かに、とハドラーも考える。やはり似た事を考えるらしい。

(…今は、あの生意気なピーストマンも、バランを相手に釘付けた。ヒュンケルの復帰は、どうやら今回の戦いには間に合わなかったようだしな…そして、目の上のたんこぶであるゴルゴナもミストバーンもない。不死騎団も、妖魔士団も…！軍は俺の思うがままに動かせる…！くく、くくくくく!!そして今！アバン共は、確実に消耗している！俺と子飼いのフレイザードだけでアバンを倒し、そして返す刃でバランをも始末する…！できる！俺にはできる!!!この状況ならばできる!!!あのピーストマンは強いが、それでもバランとの決着は中々つくまい!!全ての手柄を俺のものとするれば、もはや誰も俺の魔

軍司令の座は脅かせぬ!!!)

「——くっ……く、くくく、ぐわははははっ!!好機は巡ってきたようだな!

フレイザード!すぐに出陣の用意だ!!」

「ハッ!そうこなくつちやな!」

またも笑いあつた両者は、表現としては良く笑い合う親子と言えたが、その笑顔は邪悪で、そしてお互いの考えは敵の死で埋め尽くされ、そして感情は「味方をも出し抜き手柄を独り占めしたい……」とか、そういった負の方面だけに染まりきっている。

「不死騎団、妖魔士団、氷炎魔団……出撃!!!」

ハドラーは、いかにも勇ましく笑いながら出撃の下知を飛ばす。

だが、その笑顔とは裏腹に、彼の心には常にあの死神キルバインの言葉が張り付いて離れない。ハドラーの心には一切の笑み等存在していなかった。

日々、ただただ募る焦燥感。

常に頭の中に浮かぶは、鎌を携えた不気味な男の、仮面の微笑み。

『だけど……、気をつけた方がいい、ハドラー君。』

誰も彼もがキミの頑張りを正しく理解しているわけじゃあない!』

『……もうすぐ復帰するって噂のヒュンケルやポリクスあたりは何と言うだろうねえ。』

特にあの場にいなかった雷竜殿は、自分と超竜軍団がいなければ何も出来ない!』

「なあんて思ってるんじゃないかな？」

大魔王直属にして、不要となった者、厄介な敵対者を抹殺する者。処刑人。肅清人。そう恐れられる男、キルバーンが発した発言は、裏を考えれば考える程、ハドラーはドツボにはまってしまふのだ。

死神が巻いた種は、ハドラーの心に着実に根を張り、芽吹こうとしている。



描く。  
子供が木の棒で地面に絵を描くようにして、鞆を地面に当てがって大の男が地に絵を描く。

だが、その規模は都市を一個飲み込むほどに壮大で、そして図面に引かれた円のよう  
に綺麗な円が描かれようとしている。

「ほくくくっ！」とか「ちよえええええく!!!」とか「うひよおおくく！」などという、奇つ

怪でコミカルな掛け声をあげつつ、その大魔法円を描くのは勿論アバンだ。

途中で遭<sup>エンカウト</sup>遇するモンスターを、まるでボーリングのピンのように弾きつつ、アバンは一切止まることなく、スピードを緩めることすらなく、激走する。

だが、

「ちよええええ〜！……む?！」

アバンが何かを見つけ、急ブレーキをかけて止まった。

直後、そのまま走っていれば通過したであろう場所に、大爆発が起こる。

さらに今アバンが立っている場にも、立て続けに巨大な火炎弾が次々に降り注いだ。

「ふっ！はっ！ほっ！」

それを華麗なステップで避けていくアバン。

最後のワンステップで大きく後退し、剣を鞘から逆手で抜き放ち、そのまま腰を落として構えると、刃に闘気が急速に漲った。

「アバンストラッシュ!!」

己を狙って迫る大業火を、オーラの刃が切り裂いた。

大爆発がまた起きて、塵芥と煙が辺り一帯を覆い尽くす。

しかしアバンの眼鏡の奥の理知的な瞳は、一点を見つめて逸らされる事はない。

「あなたなのでしよう!?!出てきなさい、ハドラー!!」

達人であれば、太刀筋の個性から使い手を特定できるように、呪文であつても魔力から使い手を特定できる事がある。

大勇者と讃えられる程の超達人であり、そして何度も同じ人物から同じ呪文の応酬を経験した事のあるアバンなら、襲撃者の正体を見抜くなど容易だった。

「ぐふふふふ……!!」

案の定、アバンが良く聞き知る声が煙の向こうから聞こえてくる。

「ハドラー……まさか、軍の司令たるあなたがここに出てくるとは……驚きましたよ。鬼岩城でふんぞり返っているかと思つていましたが……まだ魔王時代の誇りは持つていたようですね」

「ぐははははははははっ！

間抜けにも一人のこのこと、我らが魔王軍の拠点となつたベンガーナの周りを彷徨きおつて！

飛んで火に入るなんとやらだな！

古い付き合いだ……特別にこの魔軍司令様が、わざわざ自ら出向いてやつたぞ……!

感謝の涙を流しながら……今日こそ死ぬがいい、アバンよ……!

大量のモンスターを付き従え、重厚なマントを翻し煙を払いながら、ハドラーが宿敵へ向けて一步また一步と堂々と迫る様は、さすがはかつての魔王だった。

日々の気苦勞で器を矮小化されたとはいえ、アバンというライバルと相對する時、ハドラーの心はかつての力強さを取り戻すかのように血が沸く。

ハドラーとアバンは視線をぶつけ合い、アバンは劍を、そしてハドラーは拳から名劍にも劣らぬ自慢の爪を生やし、構え合う。

「好都合は、こちらも同じ……！」

それに私こそ、今日こそおまえとの因縁にケリをつけさせて貰うぞ、ハドラー！」  
両者同時に駆け出す。

劍と拳を振り上げながら、しかもほぼ同時に二人は呪文を唱えていた。

「ベ・ギ・ラ・マ……！」

「メラゾーマ!!」

まるでデルムリン島の対決の再演だ。炎と閃熱がぶつかり、混じり合い爆ぜる。

だが爆発も何のその、二人は爆発へ自ら飛び込むようにして拳と劍を交わす。

ギインという音が何度も何度も響き、爪と劍が火花を散らした。

「海波斬！」

「ぐぬ!!」

最速の劍がハドラーの足元を砕き、よろけた所に、

「そこだ！大地斬っ!!」

「うお!!?」

アバンの力技がハドラーの拳にクリティカルヒットし、ヘルズクロウが根本の肉ごと切断されて魔族の青い血が吹き出る。

「さ、さすがは俺のライバルだ……!」

ハドラーが称賛混じりながら頬を引きつらせた。

やはりアバンは強かった。

かつての戦いよりも、また一段、強くなっているのは、やはり相次ぐ戦乱の中で、皮肉にもアバンのレベルアップが順当になされているからだ。

ハドラー一人では、もはや仕留めきれない程の強さを確信し、魔軍司令は最後のプライドを捨てる決意を固める。

「……く、くくくく……アバンよ……貴様がどれほど強かろうと、所詮は人間だ。

竜の騎士バランならば蹴散らせても、貴様では我が軍団の総攻撃は撃退できまい!」  
「フツ、ハドラー……やせつぼちのプライドを捨てたようだな。

一対一では敵わぬと知って、部下に泣きつくとは」

そして、長年の宿敵はズバリそれを指摘するのだから、ハドラーの心までも引きつった。

「な、泣きつくだとお!!お、俺は魔軍司令だ!!」



部下を使うのは当然の戦術だ!!」

「おっと、そうだったな。今のおまえは魔王ハドラーではない。」

大魔王の小間使いに成り下がった今のおまえでは、それも当然……と言ったところかな」

「ぬ、ぐうう!!だ、黙れ黙れ! 貴様程度に! 人間風情が知ったような口をきくな!

者ども、かかれえええくくく!!!」

口先一つでハドラーの冷静さを削いでいく。

これは立派にアバンの戦術の一つだった。

誇り高いハドラーにとって、アバンの舌先三寸は相性が悪く、特に今の状況のハドラーにとつて、アバンの凶星を突いてくる悪口雑言は常以上の効果があった。

「何を言おうと所詮は一人! このまま、妖魔士団と不死騎団で罫り殺しにしてくれるわ!!!」

ハドラーの宣言に、しかしアバンは不敵に微笑む。

「私が一人だと思っただら大間違いだ、ハドラー!」

アバンが懐から出したアイテムを見て、ハドラーの目も大きくなる。

「む?! まさか……そ、それは!」

アバンの手には幾つもの小さな筒が握られている。

指の間にも器用に筒を挟み、両の手合わせて十本以上の白亜の筒。

「ふふ……そう、魔法の筒です！デルパ!!!」

通常、一本の魔法の筒には一体のモンスターが封印されるが、これはアバンが改良したもので特別製だ。

かつて魔王時代のハドラーが、カール襲撃に用いた魔法の筒もハドラー特製であり、一本に複数のモンスターを保存できたが、アバン印のこいつはそれ以上の性能であった。

デルパのキーワードに反応し、魔法石が輝いて幾筋もの光が筒から飛び出し、アバンの周囲に降り注ぐ。

「お、おおおお!!き、貴様は!!クロコダインと、旧百獣魔団!!!?」

驚愕するハドラーの言葉通り、突如彼の目の前に現れたのは巨漢のリザードマン。

そして百以上もの旧百獣魔団の最後の精鋭モンスター達。

「ふふふ！ハドラー!!我らの要たるアバン殿を、むぎむぎ一人で行かせると思っか!」

このクロコダインと百獣魔団が、常にアバン殿をお守りしていたのだ!!」

真空の斧からバギの魔力が放たれて軍団の動きを阻害し、獣王が迫る敵軍に腕をかぎす。

筋肉が膨れ、鬨気が豪腕へと収束していく。

「いきなりいかせてもらおうぞ！ぬううん!!—— 獣王会心撃!!」

そして、奇襲まがいの、いきなりの獣王の最強技が炸裂した。

「うおおお!!? 獣王会心撃…と、闘気の渦かつ!!! 何をしている!! さっさと魔法で迎撃を

——」

誇り高い獣王が、まさか初手で最強技を放つとは思わず、しかも軍団を前進させて、己のすぐ背後と左右にまでズラリとモンスターを並べ、その威容を見せつけていたハドラーは、味方が邪魔でろくな回避ができないし、妖魔士団を前進させたが為に、軍団お得意の一斉魔法攻撃は味方前衛がいかに邪魔だった。

なにより、既に放たれている“高速で迫る強烈な闘気流”を見てから、魔法なり闘気技なりで相殺を狙えるのは、それこそ神々の領域にまで辿り着いた極々一部の猛者だけだ。

ハドラーの命令は無体なものと言えて、ハドラー本人でさえ逃げを選択したのはその証拠だろう。

そしてその肝心の“逃げ”だが、武道的な資質を持つハドラーは身のこなしには定評があるし、咄嗟に踏んだステップの身躲しは、成功していれば獣王会心撃を紙一重で躲せたはずだった。

しかし、その自慢の回避も、敢え無く味方の肉壁に塞がれるという始末で、二重三重

の小さなミスが積み重なって彼を妨害していた。

ハドラーは激昂しながら部下達を薙ぎ倒し、そして青ざめる。

「——あああ!?!ま、間に合わん!!邪魔をするな無能共め!!っ!!あ、あああああああ!!?!?!?!」

そして、直後に多量の味方ごと、ハドラーは闘気流に包まれる。

もともと軍団長は、得意分野においてはハドラーを上回るという触れ込みだが、なんとハドラーは真正面からそれを受け止め、踏ん張った。

ハドラーは魔法を得意とするが、闘気の使い手でもあるのは流石元魔王といったところで、世に闘気と魔法を十全に使いこなせるのは、やはり特別な才能が必要なのだ。

拳に闘気を漲らせ、受け止めて、そして必死に踏ん張るが、怪力の戦士として…そして闘気の使い手として、やはりクロコダインはハドラーを凌駕する。

ハドラーが徐々に押され始めた。

「クロコダインさん!もう一発お願いします!」

「おう!!」

そこにアバンの入れ知恵。

最高のタイミングで、もう一発の闘気流が炸裂した。

「し、しまったあ!?!こ、これは…グノンさえも怯ませた、あ、あの…——!!」

「もう一つの渦をくれてやる!」

逆回転のもう一つの闘気流が、正回転の闘気流と摩擦を起こし、交わる。

まるで、闘気のハリケーンが目の前で起きたようなものだ。

極大の闘気の暴風が、全てを引き裂いていく。

「…獣王——激烈掌っ!!!」

クロコダインも闘気の出し惜しみは無しだ。

極大呪文にも負けぬ恐ろしい全体攻撃。

妖魔士団と不死騎団の先鋒を、切り裂きながら遙か上空へと打ち上げて吹き飛ばしていく。

「あ、あああああああ~~~~っ!!!?」

ハドラーもまた押し負けて、とうとう木の葉のように宙を舞い、それを待っていたとばかりにアバンが腰を深く落とし、剣を大きく引いた。

吹き飛びながらもそれを見たハドラーの顔が、鼻水さえ垂らして情けなく歪む。

「げえ!!?その構えは!!!」

「これで…終わりにしたいものだな、ハドラー!!!」

「ああああ!や、やめろおおーーーーー!!!」

「アバンストラーーーーーッシュ!!!」

「う、うおおおおおおおお!!!」

渦巻く二つの闘気流に、闘気技の最高峰とも言える奥義が加わって、破滅的なエネルギーがハドラーを襲う。

本能的に、何とか両腕をクロスさせてなけなしの防御を試みたが、哀れにもハドラーは両腕を切断されて、胸板さえも深々と切り裂かれて更に遠くへ吹っ飛ばされたのだ。た。

そして、指揮官が空を舞って尚、極大の闘気の嵐は続く。

「まだ、まだまだまだっ！ぬおおおおお!!!」

後先考えぬ闘気の放出。

クロコダインの激烈掌は、まるで軍団全てを飲み込む勢いだ。

叫び声をあげながら、モンスター達が次々にボロ雑巾のようになって空へ打ち上げられ、そして叩きつけられ絶命する。

妖魔士団と不死騎団の本来の団長が不在の今、その指揮権はハドラーが持つが、その司令官が真っ先にやられてしまえば、妖魔士団も混乱するし、不死騎団などは確な知性を持たぬためにまさに烏合の衆と化す。

「今です！百獣魔団の皆さん、私に続いてください!!」

クロコダインが体力の限界となって激烈掌もそよ風に等しくなったその瞬間、混乱の極地となった魔王軍に、アバン率いる元百獣魔団が突っ込んだ。

もはや呼吸をするのも苦しい程に疲労したクロコダインへ、アバンは視線だけで労いの思いを伝えれば、クロコダインは静かに親指を立てて微笑む。

「あ、あとは…頼む、アバン殿…」

「おまかせを！」

陣形も乱れ、頭を失った魔王軍は、面白いように蹴散らされていく。

少数のアバン隊が、敵の大軍を蹂躪するという光景が展開されていた。

モンスターの断末魔があちこちで響く。

このまま押し勝てるかもしれない。

戦況がそういう状況にまで傾いたその時、ベンガーナを地震が襲った。

「むっ…この揺れは…！」

アバンが敵を斬り伏せながら、目ざとく震源を探る。

「……地面が、盛り上がる！」

ベンガーナの外周…そう遠くない大地が盛り上がり、そして、鋭い爪のような燃え盛る塔がせり上がってくる。

「燃える塔…!？」

「アバン殿…あ、あちらを!!」

よろよろと起き上がったクロコダインが、ベンガーナの都の向こう側…ちようど炎の

塔の反対側にあたるであろう地を指差した。

「あつちには氷の塔……?」

アバンとクロコダインが戸惑っていると、

「っ!こ、これは……腕が重くなった……いや、違う……剣が重く感じる!」

クロコダインさん、お体の調子はどうです!？」

「ぐ……、ただでさえ、立ち上がるのも辛かったが……、ダ、ダメだ。

た、体力が……落ちてしまったかのように……自分の体が重い!」

アバンの叡明な頭脳が答えを導き出しつつある。

「まさか——っ」

その時、混乱から徐々に立ち直りつつある不死騎団のアンデッドが剣を振り上げ襲い来て、

「イオラ!!」

咄嗟にアバンは爆熱呪文を唱えたが、魔法力不足でもない筈が、なぜか呪文は発動しなかったのだ。

「っ!」と、声なく驚きながらも即座に剣技に切り替え、最速の剣・海波斬で骸を切り裂く。

しかし、やはり剣の太刀筋さえも、いつもの自分の切れ味ではないのがアバンには良



く解る。

「ま、まさか…先程、一瞬あの2つの塔の頂を、光が結んだように視えましたが…」

「な、なんなのです、アバン殿！」

様々な秘呪法に通じ、凍れる時の秘法すら知りうるアバンには、全く同じとはいかないが似た禁呪法にすぐに思い至った。

「あれは……おそらく禁呪法の一つです！」

ルカニやボミオスなどと同じ系統の……敵対者のステータスを下げてしまう、弱体化呪文の極大結界でしょう！」

しかも、この結界は呪文さえも封じてしまう。

忌々しげにアバンは、そう付け足した。

「お、恐るべき結界呪法……！」

これも…あのゴルゴナという不気味な妖術師の仕業なのか……！」

息荒くなるアバンと、元百獣魔団のモンスター達。

そんな彼らをジッと見つめる、ギョロリとした目玉がベンガーナの城壁には無数にいる。

そのうちの一体…アバンの戦いを見守っていた悪魔の目玉が、そんなアバンの眩きを耳ざとく聞き届けたか、ひどく不愉快な大笑いを披露した。

「ギャーハハハハハハツ!!チゲえよお!!」

この境界は旦那のもんじゃねえ…このオレのもんだ!!」

人の神経を逆なでするこの馬鹿笑いを、クロコダインはよく覚えていた。

城壁を這う悪魔の目玉を、ギロリと睨む。

「その声は…フレイザード!!」

「くくく…よおクロコダイン。変わりねえみたいで安心したぜ。

…。 凶体だけのワニ野郎が、まさかアバンの魔法の筒の中にこそそそ隠れていたとはな

だが、裏切り者のテメエにはお似合いの隠れ場所だったなア…クカカカカ!

「……戦場に姿を見せず、主であるハドラーを矢面に立たせるとは…相変わらず、貴様も卑怯な奴だ」

「卑怯だあ? 違えな…これはハドラー様も折込済みの作戦だ。

しかしハドラー様も情けねえよなア! あれだけ大見得切って2つの軍団まで動員しておきながら…アバン一人討ち果たせず返り討ちとはよ。

…まあオレが生きてるから、ハドラー様もまだ生きてるんだろうが…。

ハドラー様の時代も終わりかねえ…?

クククク…新しい時代に適応できねえバカは消えるのが運命ってこったな。

古くせえ武人のテメエにも教えておいてやるぜ、クロコダイン……………。

戦場に卑怯もクソもあるかよオ!! 戦術も解らねえバカは黙って消えろ! クカカカー!!」

「戦場に立つてこそその武人であり将だ!

城に籠もってばかりでは部下の信用は得られんぞ、フレイザード!!」

「……………やっぱわかってねえなア、クロコダイン。

オレあここにるのが仕事なんだよ。

オレの氷炎結界呪法は、氷魔塔と炎魔塔が、オレの核コアと作用して起動する結界!

一度発動しちまったら、もはや塔を破壊しても結界を消す事は出来ねえ!

オレはここにふんぞり返ってるだけで一線級の働きをしているって事なんだぜ?」

「…口を滑らせたな!

ならば、この厄介な結界は…おまえを倒せば消えるということだ」

「……………ククククク…まあ、そういう事だが…。

出来るものならやってみやがれ…ってとこだな。

オレ様は、ここでゆるーっくり待ってやるが、グノンと新生百獣魔団は…てめえの

部下共みてえに甘くはねえ!

精々、百獣魔団を突破して、このベンガーナの城主の間まで、がんばって来てみな!

楽しみにしてるぜ……あばよ！ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！！」

情報を引き出し終えたと見たアバンが、海波斬の衝撃波で、耳障りな声を奏でる悪魔の目玉を両断し、そしてクロコダインを見、互いに頷き合った。

「この結界呪法は極めて強力だ。

恐らく、私のマホカトルでは、外から覆っても意味をなさないでしょう。

それが禁呪法というものですからね……」

「呪文が発動出来ぬとくれば……バラン殿のギガデインすらも封じられたという事。

急ぎ、フレイザードを仕留めねば」

「フレイザードは……炎のような獰猛さと、氷のような冷徹さを持つ禁呪法の怪物……という事でしたね？」

「ああ。卑怯で冷酷な男だが、切れ者でもある。

あの口振り……恐らく、いや、間違いなく城へ続く路も罠があるだろう」

「……クロコダインさん、立てますか？」

「ああ、何とかな。アバン殿に貰ったフェザーは使えなくなってしまったが、まだまだ薬草はある」

薬草を、もっしやもっしやと口に詰め込みながらクロコダインは微笑む。

闘気技と怪力が武器のクロコダインは、氷炎結界呪法の中で、最も力を発揮できる戦

士。

今は彼が無理をする必要があるという判断は、アバンとクロコダイン双方が同じだった。



「——っという顛末だ」

ベンガーナの玉座に、足を組んで腰掛ける炎と氷の怪物が、悪魔の目玉の通信能力を介して、一人の魔人と言葉をかわしていた。

「それでいい。」

その口上ならば、アバンは塔の破壊よりも、貴様のコアを打ち砕かんと動くに違いない」

塔を破壊しても氷炎結界呪法を消すことは不可能……先程フレイザードが言った事

は、無論ウソだった。

結界を止めるには、フレイザードを倒すしか無いと勘違いさせた。ルーラ系も封じられ、ガルルーダも失ったアバンとクロコダインは、ショートカットも出来ずに城を攻める事になるだろう。

自分も頭が回る方だとフレイザードは自負していたが、旦那と呼んで慕う魔人の悪辣な知略には心で口笛を吹いて敬服する。

「それで？オレと氷炎魔団はどう動けばいいんだ、旦那。」

バーン様は、我が軍団に何を期待していらつしやるんだ」  
悪魔の目玉の映像の向こうで、黒衣の魔人が肩を揺らす。

「ぐんぐんぐんぐんぐん……今回のお前の役目は時間稼ぎである。」

氷炎結界呪法で敵の力が鈍った今……人間どもは泥沼の戦いに引きずり込まれたのと同義。

今、魔王軍が欲するは時間。

時を稼ぎさえすれば……もうじき、こちらは片がつくからな……。

グブブブブブ……。竜の騎士と大勇者の苦しむ顔が目に見えかぶ」

フレイザードが言葉をかわす者……それは彼が、大魔王以外で唯一尊敬する魔なる者・ゴルゴナだ。

ハドラーの動向に不安と不満を感じつつあったフレイザードは、既にゴルゴナとの連絡を密にするようになっていて、保険をかけていたという事だった。

「鬼岩城の方は順調なんですかい？」

「ああ……すこぶる、な。」

我やミストバーンが手を出さずとも、もはや魔影軍団と鬼岩城だけで、勇者ダイを追い詰めつつある」

「そいつアすげえや。……でも、それは鬼岩城あつての手柄だろう？」

まさか、全部ミストバーンと魔影軍団の手柄にや、なりはしないでしょうな」

「ならぬ。安心するが良い」

「……ハドラー様はどうします？」

「貴様が無事という事は生きているのだろう。親衛隊に回収させるがよい。」

……ハドラーは先走ったとはいえ、バランスをベンガーナに釘付けにした功績の一端は奴にもあると……バーン様は知っておられる。

よもや三本目の指を折られる事はあるまい。

ぐぶぶぶぶ……お叱りぐらいはあるかもしれぬがな」

大魔王の懐刀の一人のその言葉に、フレイザードは人心地つく。

これで一応はハドラーの命は保証されたも同然だ。

ハドラーが、最近相次ぐ失態から処刑でもされては、禁呪生命体のフレイザードも無事では済まない。

フレイザードとしては、暫くの間はハドラーには生きていてもらつて、そのうちに手柄を認めてもらい、大魔王バーンの絶大な超魔力で、独立した一個の生命を与えてもらう：そういうつもりでいた。

それに、半ば見捨てているとはいえ、仮にも産みの親であるから、最低限の忠節と恩は感じている。

(…まあ、ここでオレが失敗しなけりや、ハドラー様の計画は成功する。そうすりゃ一応の格好はつくだろう？ハドラー様よオ。…へッ！これが最後の恩返しつてヤツだぜ：孝行息子で良かったなあ。クカカカカッ！)

「そいつを聞いて安心しましたよ。」

なら…オレはせいぜいここでノンビリと勇者共を待つとしますかね」

「…方が一、アバンやバランが貴様のもとまで辿り着いたら——」

「解つてますよ。」

このスイッチを押せば、この城主の間をオリハルコン製の檻が覆うつてんでしょ？

氷炎結界呪法の影響下で、オリハルコンの檻に閉じ込められたら打つ手はねえからな。



…たとえ竜の騎士でも、な。クククツクツク…！」  
「ぐぐぶぶぶぶ、その通り。解っているならば良い。」

…ではな。健闘を祈っているぞ、氷炎將軍よ…グブブブブ」  
啜う二匹の怪物。

もはや、ゴルゴナが張り巡らせた蜘蛛の糸は、そこかしこに存在する。

多くの戦争を経験した地上魔王軍のレベル上げに満足した大魔王は、ここらで別の催し物を所望している…そういう事らしい。

ドラゴンの息子を捕え…大勇者の親友と一番弟子を暗黒に染め上げ…。  
もうじき、見世物が始まるのだ。

魔王軍にとって、堪らなく面白い、最高のショーとなるだろう。

天と人の世の終わりは近づき、魔の時代の足音が着実に迫ってきていた。



着地に失敗し、その衝撃はもろに両足にきていた。

膝から下の骨と肉は圧潰し、太ももからは大腿骨が押し出され、腰骨までが肉から露出し、内臓を一部引きずって這う有様。

死神は「うくくく」と笑いながら彼へ応えた。

「そんなの、とおくくくせんさくくく…」

死神の笛をヒュンヒュンと振り回し、そして最も美しく輝く角度で、振りかざし、まるでハドラーに見せつけるようにしてゆつくりと首筋へと近づける。

「っ」

もはや死に体のハドラーの、瀕死の顔から更に血の気が引く。

「キヤツハハハハ！今の顔、面白くない！」

「こちらこちらピロロ。あんまりハドラー君をイジメちゃダメだよ」

血を口から溢れさせ、ハドラーは血の涙を流す勢いで、絞り出すように言葉を漏らす。

「お、俺を…始末しにきた、というわけか…」

それももはや仕方のない事。

ハドラーはそう思い、死神の処刑を受け入れるつもりであった。

だが、

「違う違う。うくくく…ちよつとからかい過ぎちゃったかな？」

ボクは君を助けに来たのさ。ハドラー君」

思いがけぬ言葉が死神から返ってきて、ハドラーは俯いていた首を持ち上げた。

「た、助け…!?!」

「そうさ…前にも言ったろう? ボクは君の頑張りを認めてるってサ」

ほら、ピロロ…ハドラー君に回復呪文を——って、そうか。今は結界があつて無理だった」

「もく、キルバーンのうっかりさん。どうすんだよおく?」

クスクス笑い合う死神と使い魔を、ハドラーは深い諦観のもとに眺めているだけだ。

そんなハドラーの反応が、どうやらピロロはお気に召さないらしい。

頬を膨らませて、「もつと笑いなよ」等と小さな魔法ステッキでツンツンとダルマ状のハドラーを突っついて弄ぶ。

「おやめよ、ピロロ。これ以上、敗者に鞭打つのは気の毒だよ」

「はあくい」

テヘツと舌をだし、キルバーンの隅に隠れるひとつめピエロは、どこまでも他者を小馬鹿にした態度だった。

だが、それでもハドラーは俯くのみ。

「…ハドラー君。相当応えたようだね。」

一つ、君に聞きたい事があるんだけど……答えてくれるかな？」  
「……なんだ」

どうせ残り少ない命だ。

そう思えば、ハドラーの肝は座つて、おどおどした魔軍司令の顔は鳴りを潜め始める。  
まるで、かつての魔王のような堂々っぷりだ。

「おやあ？まさに死のうとする今……随分良い顔になったものだ」

「く、くくく……もはや、この傷では……俺の命は……あと、数分というところ……」

魔軍司令の座も、もちろん……命さえ……命さえ、今……終わるのが……解れば……もはや恐怖はない、からな……」

血を吐きながら、ハドラーは自嘲気味に言う。

「君に……チャンスをあげようか？」

「チャン、ス……だと？」

「そう。チャンスだよ。君が言った通り……このままでは君は死ぬ。

助けだつて来ない所を見ると……どうも見捨てられたんだらうね」

そう死神が言うと、微笑みながらピロロがちらりと地平を見た。

そこには、ハドラー親衛隊であるガーゴイルやアークデーモン達の死体が転がる。

まるで大鎌にでも両断されたような、モンスター達の死骸が。

「……フフフフ。かつて魔王と畏れられ、今では魔軍司令という重責までこなしていた君も……最期は戦場の片隅で、誰にも看取られる事なく、手足をもがれて芋虫みたいのたうち回って死んでいく。

世間は冷たいよね。フッフッフッフッフ」

「……」

諦めに染まっていたハドラーの瞳に、火種が燦る。

このまま、敗北を続けて、長年のライバルに片手間で始末されて、その死も見届けて貰えぬでは、魔王ハドラーとして世界を恐怖に陥れた沽券に関わった。

魔軍司令となつて、長く埋もれていた武人としての魂が、そのような最期を否定する。

「ハ、ハの……ままでは——」

歯が軋む程に、ハドラーの表情に力が戻る。

死神は、ハドラーが選択する路が見えているかのように、ただ愉快そうに彼を眺めた。  
「——このままでは、死んでも死にきれん!!」

お、俺に……チャンスがまだあるというならっ……俺に、チャンスを与えてくれる者が、神でも悪魔でもいい!! そう! たとえ、死神でもな!!

……ぐっ、ぐっ……ふっ! はあ——っ! はあ——っ! ……!

アバンも……その使徒共も……奴らの成長速度は速い! 速すぎる!

もはや…バーン様からいただいたこの体でも、追いつけぬ！

もっと強い力が必要なのだ!! そう…あの、グノンのような…竜魔人バランのような

……!

誰にも負けぬ…地上最強の力が…!!!

それをくれるというなら…俺は、死神にでも…、この魂、くれてやる!!!」

ハドラーの魂からの言葉は、死神をいたく満足させるものであった。

キルバーンは、仮面の上からでも解る程に目を弧にして微笑んでいた。

## 真・冥王ゴルゴナ

白刃のハーケンが煌めく。

真魔剛竜剣が唸る。

鎧の魔槍が、スパイラル・ソードが、鋼鉄の錨が風を切り裂いた。

熾烈な戦いが、かれこれもう一刻程も続いていた。

戦いは膠着状態……と言えば聞こえは良いが、圧倒的にバランと竜騎衆の不利に傾いている。

「ふううう……ハッ!!!」

グノンの空圧弾が音速で迫ると、

「つーぶはああああ!!!」

ボラホーンのコールドブレスが吹きかけられ、その威力を急激に弱める。

グノンの得意とするブレスは、炎系と、そして超肺活量が可能とする真空の空圧弾。

灼熱の炎は、そのままボラホーンの氷によって相殺され、空圧弾にしても超低温の氷のブレスを撒き散らされると、急激な温度差が空気圧を変えてしまつて威力が減退する。



「チッ！よくも俺のプレスに反応するものだ！——む！？小賢しい！」

もう何度目かのプレスの応酬に辟易していたところに、宙を飛ぶグノンの背後から気配。

即座にグノンの裏拳が背後をカバーし、「ぐぎやつ!？」という鳥人の鳴き声が聞こえる。

脳天揺れて、宙から墜ちるガルダンデイーを、巧みに利用する者が一人。

「ガルダンデイー、右に墜落しろ！」

「ぐ、ううう！む、無茶言うなよ!!こなくそ!!」

墜ちるガルダンデイーが、羽で無理やり軌道を変えれば、それをラーハルトが踏み台にして、陸戦騎が空を跳ぶ。

「ぐぎやつ！」という、先程グノンに殴られた時のような鳥人の声を残して、ラーハルトはグノンの頭上から槍の一撃を馳走せんと迫った。

「上をとったぞ！グノン！ハーケンデイスツール!!」

「小賢しいと言った!!ぬうううあああ!!」

剛力のままに振り回したハーケンで、ラーハルト必殺の一撃を真正面から弾き返す。

「ぐっ！力は、やはりヤツが上か……！しかし……！」

翼で宙を飛び、大地を睥睨し続けていたグノンの体勢が、ハーケンデイスツールに対

応する為に宙を向く。

その瞬間に、ボラホーンのアンカーブローが、引き絞られた弓を放つように全力で投擲される。

雄叫びと共に唸って迫る鋼鉄の塊が、グノンの背をしとどに打つ。

「つづく、ううう!!」

それはグノンにとって大きな一撃ではない。

込められた闘気量も然程ではないし、ただ単に鉄塊が剛速球でぶち当たった…ただそれだけでは、グノンの今の肉体には蚊が射した程度でしかない。

しかし、くだらぬ一撃だからこそ、くだらぬ攻撃を貰ってしまったグノンのプライドを甚く傷つける。

歯を軋ませ、首をひねってトドマンを横目に睨みつければ、ボラホーンは「ぐふふ」と不敵に笑っているではないか。

「つ…この俺の毛皮に…三下風情が!!」

グノンが怒りの形相で超高速で下降する。

大上段の構えをとり、超高速でボラホーンに迫るグノン。

それはもはやボラホーンの反応速度限界を超えている。

「うおおおおお!!」

だが、そのハーケンをボラホーンは最初から避けようともせず受け止めた。投げつけた錨を捨て去って、両手を交差させ、未だに不得意ながら闘気を操り、全力でのガード。

ボラホーンの両腕から血が吹き上がり、片方などは骨まで切断されて薄皮一枚で繋がる有様だが、しかしボラホーンは確かにグノンのハーケンを防御してみせた。

「……その防御は……!!」

「み、見覚えがあろう！ そうだ！

これはクロコダイインから教えてもらった『だいぼうぎよ』よ！

俺ではまだクロコダイイン殿のようにはいかんが、こうすれば……!」

未だ使える片腕で、ハーケンの柄をしっかりと握る。

「動けまい!」

「片腕を捨てて、俺の動きを……!」

(っ！ バラン……奴はどこだ!!?)

今まで、竜騎衆がどれ程動き回って攻撃を仕掛けてこようとも、決してバランから意識を逸らす事はなかったグノン。

氷炎結界呪法が発動し、魔法を封じられたバランの脅威度は下がったが、それでも絶対フリーにしてよい相手ではない。

「よくやった、ボラホーン!!」

「おまえの片腕、無駄にはせんぞ!!」

左右から迫る、バランとラーハルト。

「っ! 挟撃!!」

(疾い…だが!)

「下郎!! いつまで俺のハーケンに触れている!!」

力任せのグノンの前蹴りがボラホーンの肉厚の土手つ腹を陥没させれば、「っ!?! うぐ  
おおおおお!!」と血反吐を溢してボラホーンが吹き飛んだ。

(本命はバランなのだろう!?)

「しゅっ!!」

鋭く息を吐きながら、体全部でラーハルトへと突進。

「っ! く…!」

ラーハルトは体勢を捻って跳躍し、背面跳びの要領でグノンの突進を避けつつも、彼の肩へと一閃をくれてやる。

グノンの突進を避けたのもさすがだが、それに加えてカウンターも食らわせるラーハルトの疾さは、まさに天下随一。彼のスピードは、魔界全土を見渡しても並び立つ者はそうはいない。だが浅い。

それはラーハルト自身も手応えで確信し、そしてグノンの目論見通りの事だった。そして、その突進をグノンは急激な制動で無理やりに止めて、踏ん張る。

「はああああ…!!」

呼吸を深く、腰も深くし、両足に力を込め、真魔剛竜剣を振りかぶるバランを迎え撃ち、バランも当初の予定から一切ブレること無く、グノンへと斬り掛かった。

ドラゴニックオーラ  
竜闘気が満ちる、渾身の一撃。

たとえ氷炎結界呪法で力が5分の1にまで落とされようと、それはグノンも同じだ。

「喰らうがいい、グノン!!」

バランの気炎が迸り、斜め上から振り下ろされる剛剣。

技の型としてはギガブレイクそのものだが、魔法力が皆無のそれを、バランはギガブレイクとは呼ばない。

威力ももちろん本来のギガブレイクとは比べるべくもない。

——ガキイイイン!

という甲高く空を裂くような、金属が激しく打ち合う音が響く。

「ハハハハハハ！たとえ竜闘ドラゴニックオーラ気が込められていようと…ギガデイン無しのギガブレイクなど、笑止っ!!」

「くっ…!!」

同じオリハルコン製とはいえ、武器の格として下回るハーケンが真魔剛竜剣を受け止めていた。

グノンが口の端を持ち上げた。

「ギガブレイク、敗れたり!!」

自慢の技を受け止められ、さぞ balan は口惜しい…と思いきや、balan の表情は冷静そのもので、むしろ逆に笑みを返していた。

グノンの片眉が歪んだ。

「…っ！まさか、貴様も——」

「クワックワックワックワツ!! そうだぜ!! まさかのこの俺様が本命よお!!」

ラーハルトと balan の挟撃すら囷。

ラーハルトに足蹴にされた直後から、ガルダンディーは即座にその翼で再度空を舞っていた。

真上から首筋を狙う一撃は、重力さえ味方につけての高速のものだったが…。

「かああああああああつ!!」

グノンもまた地上で翼をはためかせて、その反動を利用して高速で身を捻り、そして頭上へと炎のブレスを肺活量一杯に吹きかければ、

「う、うう!?! ぐあああああ!!」

ガルダンデューは丸焼きになって墜落した。

ごろごろと転がって消火作業に忙しいが、やはりグノンの炎は雑魚とは一味違う。

なかなか消えず、（やべえ!!このままじゃ焼き鳥になっちゃううう!!）とガルダンデューが死を覚悟し始めた時…、氷のブレスがガルダンデューを覆い尽くして炎は消えた。

「あが——が——が……」

今度はカチンコチンとなっていた鳥人の青年。

バキバキと身に纏わりつく氷を割りながら叫んだ。

「バカヤロー!!加減しろ!!」

「ぐ……、こっちは、片腕をやられて、は、腹にまで穴が空いておるのだぞ……焼き鳥になる前に助けてやったのだ……感謝せんか」

血だらけのボラホーンが、よろよろと何とか歩いていた。

グノンを囲むように、よろけるボラホーン、少々焦げているガルダンデュー、そしてラーハルト、バランが各々の武器を構え直す。

「……クツクツクツ……楽しませてくれる……」

バランとラーハルトこそ殆ど無傷だが、ガルダンデューとボラホーンは負ったダメージもいよいよ危険な領域になりつつある。

だがそれでも目に宿る力は少しも損なわれてはいないのは、さすが勇名轟かす竜騎衆だった。

そんな猛き者達を見て、グノンが薄く嗤う。

「あちらで我が軍団の総攻撃をくらっている人間達共々……まったく楽しいオモチャだもだ。

勇者と……その名を慕う者共……くくくく……いつの時代も、どの世界も、貴様らは我ら魔族の最高の遊び相手となる」

己を囲む四方の戦士達を鋭く見回してから、ずっと後方でピーストの群れと激しい乱戦の真っ只中にあるロモス軍を視てまた嗤った。

「あそこにいる人間共は、皆が相応の戦士なのだろう。

だが見ろ！回復呪文もアイテムを制限され、その猛者共も、一人また一人と獣の牙に斃れる……！

呪文を封じられれば、物を言うのは純粹な己の肉体の力っ!!!

それこそまさに弱肉強食の摂理の世……我らピーストの世界!!

この結果呪法の中では、たとえ竜の騎士のパワーでもこのグノンの肉体を傷つけることは出来ぬ!!!

竜の騎士バラン……貴様は俺には勝てん!!!」



猛々しく雄叫ぶようにして言い放ち、ハーケンを軽い棒きれのように振り回す。グノンに一切疲れは見えない。

傷も無い。

眼前の魔族は、魔王とさえ恐れられたハドラーすら凌ぐ脅威的な肉体を持っているのだと、バランの、竜の騎士の本能が教えてくれる。

(斬り結ぶ中で、かすり傷程度ではあるが幾つかの斬撃をいれた筈…)

しかしその浅傷すらもはや皆無。

しかも、全力でこれ程の時間を戦っても、奴は息一つ乱れない……つまりは、奴の肉体は傷も体力も自然に治癒してしまうという事！実質的な不死身の肉体！)

その本能こそが、大魔王バーンさえも警戒する「闘いの遺伝子」だ。

神代の時代から連綿と続く竜の騎士の、闘争の歴史。

その中には、竜魔人にも匹敵し得る強大な敵の出現はままあったし、厄介な特性の肉体を持つ大敵もいた。

当代の竜の騎士バランが葬った強敵、冥竜王ヴェルザーもその一人だろう。

もつとも、彼の場合は魂が不滅であり、肉体は滅びる度に強力になって蘇るという特性であったが、そういった「不死身」「不老不死」「不滅」を謳う怪物の対処については『封印』という手段が最も効果的だ。

（だが……私に力を貸してくれた、あの時の仲間達精霊は既に皆死んでしまった。精霊の助力無しに封印は不可能……！残る手段は——）

封印という手段をとることが出来ず、ならばもう一つの奥の手……つまり竜魔人化はどうかと言えば、バランにはその選択肢はとれなかった。

マックスバトルフォーム  
最強戦闘形態へと化身すれば、グノンは倒せるという確信がバランにはある。

あるのだが、竜魔人は攻撃的な欲求があまりにも大きくなり過ぎて、敵味方の判断がかなり極端、且つ苛烈となる。

攻撃の流れ弾的なものがかすったりする等の些細な事で相手を「敵」と判断してしまうような事すらあるのは、かつてヴェルザーとの戦いで学んでいた。

仲間が複数いる場での竜魔人化はリスクだ。

バランは、ロモス軍の人間達を守るために助勢したが、命まで賭けるつもりは無いし、あくまでダイの為であるのと魔王軍への敵意から協力している。

だから人間の戦士達がここで戦死しても（それは已む無し……）と思っているが、それでも竜魔人として敵味方の区別無く殺戮してしまうのは気が引けた。

「——っ、来る！」

睨み合う事、数秒。

グノンが跳ねて翔び、一直線にバランへと斬り掛かる。

受ける balan。

誰もが予想した通り、その一撃は balan の真魔剛竜剣によって完全に受け止められたが、

「……、これは?!!」

斬り掛かった方のグノンが驚きに顔を歪めていた。

先程の斬り合いよりも、balan の力が増していると、そう感じられた。

勢いを乗せたはずのグノンの初撃が、むしろ balan に押し返されている。

(違う……これは……俺の力が落ちていなのだ!!)

「ば、バカな……結界の力は均等にフレイザード以外の力を封じる!そこに差異は生まれぬはず!!」

「……フツ」

黙したままに、今度は balan がニヤリと笑ったのを見て、グノンは「己が何かをされた」のだと察する。

グノンの目が、耳が、嗅覚が、触覚が、自分の状態を素早く診てとる。

鋭い歯を食いしばった隙間から空気さえも急速に取り込んで、味覚をも使って空気中の毒物をも精査する。毒か。はたまた呪術の類か。

何らかの方法で、balan 達が自分の体だけに弱体化を仕込んだのは明らかだ。

(結界によって魔法は全て、道具に至るまで使えぬ！ならば……！)

「つ！ぬうう……！こ、こいつか!!」

そして見つけたのは、自分の体に突き刺さる小さな羽根。

赤い羽根が、グノンの二の腕にひっそりと刺さり、血飛沫にも似る赤いモノを垂れ流していた。

今すぐに引っこ抜いてやりたいが、鏝迫り合いの真つ最中ではそうもいかず、しかも、翼をどれだけはためかせてもこびりついていた赤い羽根は、やすやすとは取れそうもない。

忌々しそうに眉を歪めたグノンを見て、五体満足とは言い難いガルダンディーが嫌味に笑う。

「クハハハハッ!!オレの羽根は特別製だ！魔法が使えなくなる結界だろうが関係ねえ！

白い羽根は魔法力を……そして、その赤い羽根はテメーの体力を奪うのさ!!

簡単にはとれやしねえ……!

さつき、オレ様がくれてやった本命の一撃は……そいつなんだよオ!!」

お世辞にも善人面とは言えぬ凶相で煽るガルダンディー。

「うぬ……雑魚の分際で……!」

視線だけで射殺さんばかりにグノンが睨むが、直後に「おおお!!」という気声と共に全身から鬨気を拭き上げて猛烈に押しまってくるバランスが目の前にいたのではガルドンデーナぞに構ってはいられなかった。

「ぐう!?ぬ、うううううう!!」

一気に数十mは押し返されてグノンの全身の筋肉が軋む。

まるでジェット噴射のようにオーラを噴き出したバランスの勢いは留まらず、尚もグノンを押し込んでいく。

大型ネコ科を思わせるグノンの足先から鉤爪を引き出し、力を込めて踏ん張るグノンだが、それでも地を削って後ずってしまい、そしてそんな隙を逃す程、竜騎衆はヤワではない。

ラーハルトが閃光のように走った。

「……ここだ!ハーケンデイスツールっ!!」

「ぐおおおおおお!!」

魔槍の一閃が完璧なタイミングでグノンを袈裟斬りに裂く。

当然、グノンはよろけ、踏ん張っていた力は緩み、そこに罅迫り合いを押し切ったバランスの剛剣が襲い来る。

「はああああ!!」

「っ!!」

身震いするようなバランスの殺気が真魔剛竜剣にのってグノンの胸を深く切り裂いた。通常ならば、この連撃で大ダメージは確定だ。或いは、これで勝負が決してもおかしくない。

しかしグノンは一瞬ぐらりと仰け反ってから、吹き出る血を筋肉の収縮で抑え込むと、そのまま傷口は見る間に癒えて痕も残さず、そして何事もなかったかのように勇ましく構えた。

「気の毒だったな……良い攻撃だったが……俺には通用せん!!」

「く……や、やはり……不死身!」

決定打に欠いていた。

このまま戦い続けるのでは、恐らく何時まで経ってもグノンは倒せない。

「クッククック……この羽根も、引き抜けぬのならば……こうするまで!!」

——ブチイ!

肉が食いちぎられる嫌な音がして、ガルダンデリーの赤い羽根はグノンの肉片ごと大地に転がった。

ガルダンデリーの頬が引きつり、ボラホーンの目が見開かれる。

「な、なんて奴だ……!」

「ガルダンディーの羽根を…自分の腕ごと食いちぎるとは！」

戦慄する同僚二人とは対照的に、ラーハルトはあくまで冷静にグノンの凶行を見る。

「…なるほど。再生するというならば…あの方法は効率がいい。」

理になつてゐる」

「言つてる場合かよ、ラーハルト！」

チツ：俺の羽根をいくらぶつ刺してやつても意味がねえつてことか。

食いちぎられりや、すぐに怪我も体力も回復しちまう」

「…どう致しましょう、バランス様」

打つ手なし、という感情をありありと顔に浮かべてボラホーンが主を仰ぎ見れば、や

はりバランスも難しい顔だ。

「厄介だな」

溜息と一緒に吐き出したようなその言葉に、全てが集約されているようだった。

せめて氷炎結界呪法の影響が無ければ、バランスにもやりようはあつたようだが、もは

やこの姿では打つ手は無い。

しかしバランスは、ここで何時までも足止めされているわけにもいかないのだ。

彼はさつさとここを片付けて、そして鬼岩城に向かったという息子の元へ馳せ参じた

いのが本音。

この戦場にいる者らを皆殺しにする覚悟を決めるか、ここでダラダラと戦い続けるか。

（たとえ、敵の結界の中であろうと…恐らくは竜魔人に変身はできる！私の中に流れる血が、そう教えてくれている。レベルアップを重ねた今の私ならば…或いは竜魔人となっても闘争本能を制御しきれるかもしれないが…ヴェルザーとの戦い以降、竜魔人となつた事はない…！万が一…理性を失い、ディーノの仲間達を殺してしまつたら——）  
そう思うと、やはり迷いが生じてしまつていた。

ソアラとの結婚の際の一悶着はあつたとはいえ、バランにとって人類はやはり守るべき弱い種族であり続けた。

アルキード王との確執も、アルキード滅亡後の指名手配の件も、裏で魔王軍ゴルゴナが糸を引いていたという、半ば確信の予想があるからなのか、バランは人間に受けた仕打ちも大魔王とゴルゴナの策略だと転嫁出来ていたのが今回の戦いでは逆に災いとなつていた。人間への愛着を持つているから、人間達を犠牲にして勝つという選択肢がとれない。その人間達が、息子ディーノの恩師や仲間とくれば尚更だつた。

戦いはまたも振り出し…膠着状態へと戻つてしまつた。

そこに、

「バランさん！竜騎衆の皆さん！ご無事でしたか！」



そこに、正門前の戦域へと戻ってきたアバン達が合流するも、残念ながら事を大きく動かすには、やはり決定打に欠けている。

それも当然の話で、アバンは元々、爆発力よりも搦手を得意とし、また賢者としての資質が大きく様々な秘呪法に長けているから、氷炎結界呪法の中では単純なステータスダウン以上に戦力を封じられてしまっている。

しかしそれはそれとして、仲間の合流というのは味方の心を鼓舞してくれるものだった。

「おお、アバン殿！クロコダインも無事のようななー！」

重傷を負っているながらも元気に動き回るボラホーンが真っ先に笑顔を返せば、アバンもクロコダインも頷いて応え、アバンは友たる balan と状況の摺合せをする。

「balanさん。私達の方は予定通りに別働隊を叩くことができました。」

これで魔王軍の戦力を少しは削れたでしょう。

ハドラーまで倒せたのは予想以上の戦果でしたが……しかし、こちらは一筋縄じゃないきそうもありませんね」

「さすがはアバン殿だ。」

しかし……恥ずかしながらその通りだ。こちらは手こずっている。

助勢、感謝するぞ。

「……………これで5対1…卑怯とは言うまいな、グノン」

グノンを囲む陣形に、颯爽とアバンとクロコダインが加わって得物を構えた。

バランの言葉に、グノンはただ不敵に笑ってハーケンを振り回して衰えぬ戦意を示し、

「ハドラーめ…あれだけの大言を吐いておきながら情けない奴!!」

しかし……クツクツクツクツ…手柄首が揃ったではないか。

寧ろ好都合よ……!クロコダインをも始末し、獣王の称号を我が物とし…貴様ら全員を大魔王様への供物としよう…!!」

獯猛に吠え、吐いた台詞の通りに尚闘志を燃え上がらせる。

グノンとの戦いは、アバン、クロコダイン兩名を加えて第二幕へ…。

そう思われた、その時だった。

耳にした者を不快にさせる、ピュウピュウという不愉快な風音が戦場に静かに響いた。

それは静かだが、確かな不穏の予兆を孕んだ闇の風だった。

緊迫した空気が極限まで引き締まって、弾け、両陣営が動き出す、その寸前。

暗雲迫り、黒々とし始めていた空に、どこから湧き出たのか、カラスの大群が現れたのだった。

「なんだ!？」

「カラスだ！な、なんだあの数!!鳥人のオレ様のファンか何かかア!？」

鳥界限でも、随分と有名になったみてえだな…このオレも！クワツクワツ!」

「冗談を言っている場合かガルダンディー!」

戦の爪痕に死肉狙いのカラスは湧いても不思議ではないが…今この時に来るだと…  
?

お、おかしいぞ!」

竜騎衆がいの一番に、その異様さに気付く。

そして次に異変を察したのはグノンだ。

「カラス…? チツ…なるほど。」

時間切れのようだな……。勇者共……貴様らとの遊戯もこれまでだ」

「なんだと……？」

怪訝な顔のバランに言うと、漲らせていた全身の力を抜いてしまい、身に纏っていた凄まじい獣性までも霧散させる。

そして、既に終わった戦には興味がないとでも言いたげな、つまらなさや勝利の確信を同居させた、傲慢なまでの勝者の顔でバラン達を見た。

「おい……あれをしろ……カラスが……群れ集まって、形を……なんなんだありや！」

ガルダンディーが指差す先には、まさにその言葉通りにカラス達が天に絵を描いているのだ。

数え切れぬ大群の黒鳥が、死臭を纏って空に描いたのは「顔」だ。

「あれは……!!」

ひと目見れば二度と忘れぬ異形の魔人の顔を、アバンは戦場の空に見た。

黒きローブで全身を隠き無く覆った背虫の呪術師が、八つ目を瞬かせて地上を睥睨する。

「ゴ、ゴルゴナ!!あれも奴の呪文なのか……?」

呪文とは全く異なるゴルゴナの怪しき術が、カラスを操って天空に蜘蛛の魔人を投影する。

そのカラスとて、果たして本物か幻かはアバンにすら解らない。

今まで彼らが勝手知ったる呪文では作り出せぬ不気味な空に、戦場にある者達は敵味方問わずゴクリと唾を飲んで畏れを抑えこんでいた。

味方であるフレイザードなども、

「へッ…旦那のゴ登場か！」

…全くよオ…魔法の発動そのものを封じちまうオレの結界の中で、あんな投影呪文を使うとはな。

いや…呪文じゃねえ。旦那の術は…オレ達を知る呪文とは全く異質！だからこそ結界の中でも使う事ができるのだ…！

確かに考えてみりや、旦那の死者を使役する力…あれが呪文とは別物だ。

死者を蘇らせず魔法には蘇生ゾオラル呪文系があるが…齋す効果も、規模もまるで違う。

つまりはオレの氷炎結界呪法の中では、敵は呪文を封じられつつも、旦那は自分の術がしたい放題…相性は抜群ってわけだ。ククク…こりや面白エな」

氷炎將軍の異名に恥じぬ分析を行いつつも、城主の間の大窓から黒い空へと尊敬と畏怖の眼差しを向け、眺める。

不気味で、そして静かなながらも頭に直接語りかけてくるような、呻き声にも似た邪悪な声が戦場に木霊した。

「勇者達よ」

死者の苦悶と怨嗟が染み付き、纏わりついたその声は、もはや声ではなく呪詛そのものだった。

「偉大なる魔界の神、大魔王バーン様より、お前達へお褒めの言葉を預かっている。

「勇ましき戦いぶり：見事。そなたらが苦しみ、藻掻き、足掻く様は余を充分に楽しませ、満足させる演物（だじもの）であった。ついでには褒美をとらす：受け取るがよい」

……ぐぶぶぶぶぶ、確かに伝えたぞ、地上の戦士達よ」

ゴルゴナが言い終わるや否や、ゴルゴナを構成していたカラス達がぶわりと飛散し、蜘蛛の魔人の像を崩して一斉に人間達目掛けて飛んでくるのがバランには見えた。

「……ちんちんに來る！皆、注意しろ！」

バランが叫ぶと同時に、カラス達の速度があがる。

異常であった。

ただの鳥がだせるわけのない速度で、黒い矢となつて漆黒の大群が押し寄せる。

黒い霧……と言うにもとても足りない：黒く塗りつぶした空間そのものが、地と空を這うようにして急速に勇者達を覆っていった。

呪文やマジックアイテムで払おうとしても、それはフレイザードの呪法によつて封じられているのは既知の通りで、皆は必死に剣と槍、斧を振り回して闇を追い散らす、気

付けば、彼ら皆は暗黒の空間に飲み込まれたかのような異常空間へと誘い込まれていたのだった。

「(、(、(、)は…!!?」

古今東西、あらゆる知識を修めるアバンですら見当がつかず、暗黒空間を必死に観察しているが、回答など出てこず、出るのは冷や汗のみだ。

「地平の彼方まで続く漆黒の世界…太陽もなく、月もなく……魔界ですらない…!」  
竜の騎士の先達の知識を受け継ぐバランもまた同様。

大勇者二人がそうであるから、他の者らも答えなど出るわけがなかった。

「バラン様！あ、あれを!!」

ラーハルトが悲痛を滲ませた声で叫ぶ。

内に熱意を秘めていようと、常に冷静である竜騎衆最強の男が、このような声を出すなど、バランでさえも聞いたことがない。

それだけの重大なナニカを、ラーハルトは見つけたらしい。

「……っ！ま、まさか…あれは——…テイ、ディーノ!!!」

暗黒の世界に、ポツンと浮かぶ人影が6つ。

不可視の礫台に縛られているかのように、その6人は宙に固定されている。

その中の一人…少年の姿をした幼い戦士は、アバンやクロコダイに聞いた一人息子

の容姿そのもの。

バランもラーハルトも、そしてガルダンディーもボラホーンも、ひと目でその少年がディーノなのだ と確信できた。

そしてその驚愕はバラン達だけでなく、アバンもクロコダインも同じだ。

見えない碟に括り付けられている6人全員が、彼らの大切な仲間だった。

「ダイ君！ポップっ！！マアム、ミーナさん！！…あ、ああ…マトリフと老師まで！！」

「なんたる事だ…いや、敗れたというのか…ダイ達が！！」

愕然となる大勇者一行を、くぐもった唸り嗤いが包む。

「グブブブブ…そうだ…その通りだ。」

お前達人間共の狙いなど、我ら魔王軍はどうに見抜いておったわ。

大魔王バーン様の御力と叡智の前には、貴様らの乾坤一擲の大博打はまさに愚行ではない。

貴様らの全ての希望は、所詮は泡沫の夢…盲人の迷妄…。

ぐぶぶぶ…現実を見るがいい…大勇者よ。竜の騎士よ。

貴様らの、希望と言う名の無知蒙昧な暴挙が…未来ある若人と、老い先短い老いぼれ共を死に追いやる…それとも、子供と老人共を玉砕覚悟の捨て石にでもしたのか？

だとすればなかなか愉快な知恵と言える。



アバン：貴様辺りの入れ知恵か？さすがは切れ者よ……グブグブグブ！  
実際の戦力は、勿論、既にダイやポップ達が上。

そんな事は、発案者のアバンも、そして嘲ってみせたゴルゴナも知つてのことだが、それでもゴルゴナのこの侮蔑はアバンの良心の呵責にズキリと食い込むものがあつた。

アバンは顔を歪め、一瞬、言葉に詰まつたが、それを庇うようにしてバランが無明の闇を睨んだ。

「相変わらず口の減らぬ奴……いい加減に姿を見せたらどうだ……ゴルゴナ!!」

闇の世界に響く力強い声に應えるように、だんだんと目の前の暗闇からボウつと浮かび上がる八つの眼光。

その眼光は、まるで黒い空に浮かび上がる八つの凶星だ。

天高く、そして大きく輝く八つ光が、バラン達を見下ろしている。

やがて闇から這い出るようにして、ゴルゴナが全貌を人間達に披露すれば、それはひたすらに巨大。

ドラゴンよりも巨大な蜘蛛の怪物が、呻いて嗤いながら闇に鎮座していた。

「そ、それが貴様の本性か……!!」

「ぐんぐんぐんぐんぐん……よういこそ、我が地へ。」

「……は我が真の力発揮せし場所……冥界なり」

冥竜王ヴェルザーや雷竜ボリクスをも上回る巨体を、のっそりと這いずらせる大蜘蛛がバラン達を鋭く睨む。

もはや暗黒のボールも脱ぎ去ったその姿は、まさにモンスターであり、冥府の王の威容を姿で語る。

「デイーノを任せ、ゴルゴナ！ 貴様が欲しいのは私の首一つのはず！」

かつての因縁を知るからこそ、バランは大蜘蛛の八つ目を睨み返して言い放った。

だが、ゴルゴナは牙を剥き出して嗤う。

「確かに貴様は欲しい。」

ぐぶぶぶぶ…神々が創り給うた最強の戦士…。

貴様を思うがままに切り刻めば、神の奇跡の全てを我が術として修める事も叶うであろうからな。

どうだ、勇者達よ。いい加減、観念し…大魔王様に頭を垂れよ。

魔界の神にその身を預け、恩寵に預かるのだ。

バーン様は強き者全てを愛し敬う。

出自も種族も関係など無い…魔王軍では全ての強者が永遠の安寧と栄光に浸れるのだ。

強者を妬み、引きずり下ろし、弱者同士がいつまでも嗟いがみ合い、憎悪を押し付け合う

…そういう人の世など何の価値がある？

神々の創り給うた理不尽の世を碎き、大魔王様の元…真の平等の世を共に生きようではないか」

「…！」

バランは忌々しそうに、言葉もなくただ恐ろしげな眼光を大蜘蛛へと注ぐ。

「貴様達、魔族の言う平等の世…それは強き者が全てを得、弱き者は永遠に虐げられる世の事だろう！」

「ぐんぐんぐんぐん…是也<sup>なり</sup>」

それがどうしたと言わんばかりにゴルゴナは静かに笑い、バランは眼尻を釣り上げ、

「愚か者め…人はそれを…地獄と呼ぶのだ!!」

そして手にする真魔剛竜剣の超速の抜刀術で大蜘蛛へと斬りかかる。

「っ!!」

瞬時に間合いを詰め、大蜘蛛の腹を深く切り裂いた。

冥界においては無限の力を発揮し、空間さえ支配する冥王ゴルゴナ。

圧倒的優位に立つゴルゴナだが、グノンとの戦いで消耗した筈のバランの闘志溢れる姿に、表情の読めぬ蜘蛛の八つ目はやや驚愕に見開かれたように見えた。

「ぐんぐんぐんぐん…やはり素晴らしい。

真なる竜の騎士……見事」

しかし腹を割いてやったはずの大蜘蛛の姿はスルリと煙のように立ち消えて、蜃気楼のように揺らめいて五体満足なゴルゴナが奥から再度姿を表す。

「幻術……!?この私が発動さえ見抜けぬとは……!」

斬りかかったバランこそが驚愕する。

バランの目を持ってしても術の発動が全く見えなかったのだ。

ゴルゴナの技の速度、精度、規模……そのどれもがかって戦った時よりも強大だった。

「ぐぶぶぶぶ……だが、愚かなのは貴様の方だ、バランよ。

今の一撃で解ったであろう……我が力を……そして!

貴様達の仲間、弟子、子……それらが我が掌中にある今、我に逆らうという事はどうい  
う事か!」

この世ならざる声でゴルゴナが叫んだ。

それは命が軋む音だった。あらゆる命の終わりを詰め込んだ、断末魔のような気声  
だった。

思わず耳を塞ぎたくなるようなその声に、

「ぐう……!」

「う、ううう!!」

「何という声……！これほど悍ましい声がこの世に存在するとは！」

「クワアアア……!?あ、頭がいかれそうだけ!!」

勇者達も苦しみ悶える程だった。

(音波攻撃の一種か……!?)

すぐさまアバンが、

「く……皆さん、しつかり！今すぐ回復を——」

アバンは懐中のマジックアイテムを取り出し仲間の回復を試みようとして、未だ戦意に満ちていた強い表情が一瞬にして転じた。

「ぐぐぐぐぐ……金縛りの術……」

ゴルゴナの勝利宣言にも似た呟き。

アバンの腕がピクリとも動かない。

指先一つさえも動かすことが出来ない。

何とか動くのは口と目のみで、視線だけをやると動かし、パーティーを見渡せば全員が必死の形相で動こうと試み、そして失敗に終わっていた。

「大勇者アバン。貴様の顔にも、ようやく絶望の色が滲んできおったな。

良い顔をしているぞ……金縛りグブブブブブ!

かつて地上で見せたそれとはわけが違うぞ。

冥界においては我が力は無限に高まる……！我こそは冥王！冥府魔道の王也！<sup>なり</sup>  
全ては我が意の儘……見よ……！」

大蜘蛛が腕を振るう。

十字に貼り付けられたブロキーナとマトリフが、瞬き一つする間に balan 達の前へと滑るように迫る。

「マトリフ！老師!!」

アバンは動かぬ手を伸ばし、動かぬ足で跳ぼうとした。

だが、身体は無理に動かそうとしても僅かに震えるばかりでとても動かないのだ。

アバンの知性さえも今は無意味。

「ア、アバン……」

その時、磔にされているマトリフが苦しそうに口を開いた。

「マトリフ！すみませんでした……私の策の為に……」

「あ、謝らなきやならねえのは、こ、こっちの方だ……すまねえ……」

俺とブロキーナがついてながらこのザマだ……」

「アバン……次世代の希望の星を……守れなかった。」

老いた身を盾にしてさえも……ダイ君達を逃がすことさえ……すまない」

ブロキーナも、トレードマークだったサンングラス状の丸メガネが割れ、全身に痛々し

い傷を負って、息も絶え絶えといったふうに謝罪を繰り返す。

「つ……ふ、二人とも……」

互いに死を覚悟の、決死の反撃作戦だった。

とはいえ、こうして目の前で、十年以上の付き合いのある命を預けあった仲間が、半死半生の姿で虜囚となるを見るのは魂を裂かれんが如きの光景だった。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」

ゴルゴナの目が光った。

「あ、ぐ、ぐああああつー！」

「う、ぐううううつー！」

すると balan やアバン達の眼前で、二人の老練な戦士は抵抗もままならず、苦悶の表情のまま石像と化し…、

「マトリフっ！老師!!」

そして、アバンが叫んだ次の瞬間、石化した老人二人は地面へと落下し、砕けた。瞬間、アバンの顔から全ての色が失せる。

敵地にありながら、完全なる茫然自失。

極限の虚脱。

今が金縛り状態でなければ、膝は崩れて突っ伏してしまっていただろう。

破片に駆け寄って掻き集めてやる事も出来ない。

苦しみの表情を浮かべたままのマトリフ達の碎けた顔面が、今もアバンの瞳と目線が絡むような錯覚に陥る。

「な、なんとということをおのれいゴルゴナ！ぐ、うううううう！！」

クロコダインも怒りに身を任せ一矢報いんとしたが、それもまた徒労でしかなかった。

「ぐぐぐぐぐ、無駄、無駄、無駄……貴様ら程度では指一本動かす事は出来ぬ」

嗤うゴルゴナに対し、あまりに非力な勇者達。

それでも、アバンは完全に停止しそうになる思考を微かにでも回転させて、必死に考える。

これはゴルゴナお得意の幻惑かもしれない。

アバンの優れた知恵は、その可能性も大いにあると常に思考している。

しかし、無力を痛感し、そしてあまりにも生々しく碎けた仲間の石化した死体は、アバンからさえも冷静沈着な思考能力を曇らせ、叡智を鈍化させた。

（考える、考えるんだ、アバン。マトリフだって常に冷静でいろと常々言っていた！どんな苦境でも、諦めてはいけない！し、しかし……）

魔王ハドラーとの苦しい決戦の中でも、人間同士の大戦争の中でも、アバンはいつも



こうやって己を叱咤して苦難に立ち向かい続けた。

しかし、頼れる仲間であると同時に尊敬する人生の先達二人の無残な亡骸は、アバンの心がかつてない程に追いつめ、その心は折られつつある。

だが、竜の騎士は未だ諦めていない。

諦めるわけにはいかなかった。

それが天の騎士の運命であるがゆえに。

「ゴルゴナ……この外道め……許せぬ!!」

バランスが吠えた。

だが、巨大な蜘蛛は竜の騎士の威圧もそよ風が如く受け止め、嘲笑う。

「ぐぐぐぐぐぐ……許せぬならどうする？ バランスよ……」

いつかのように、精霊や、真魔剛竜剣の聖なる力に頼ってこの事態を打開してみるか

？」

「ゴルゴナが言いつつ巨腕を振るえば、次に前へとせり出した礫台は――」

「っ!! デイ、ディーノ!!」

それはバランとよく似た黒髪を持つ少年勇者……ダイその人であった。

バランが愛息の真の名を叫び、続けてクロコダイも野太い声でその名を叫べど、ダイは意識朦朧として返事をしない。

「デイーノ……起きろ、デイーノ!!!……いや、勇者ダイ……目を開けるのだ！お前は強き竜の子のはず！しっかりしろ、ダイ!!!」

デイーノという名を知らぬ息子へ、もう一つの名で必死に呼びかけ続けるバランへ、ゴルゴナは嘲るように言った。

「ぐぶー・ぐぶぶぶぶー辛うじて生きているが……子竜はもはや虫の息だ。

我が操りし怨霊に、その身と魂を徐々に蝕まれ喰われる……それがデイーノの……勇者ダイの末路よ……！」

鬼のような形相で冥王を睨みつけるバラン。

そしてバランの忠臣である竜騎衆達も、主と同じように憎悪すら込めてゴルゴナを睨む。

「デイーノ様！ぬ、ううう!!う、動け……動かぬか！俺の体よ!!!」

「お、おのれえ……ゴルゴナめ！次はデイーノ様をあのような目にあわす気か……！」

「くそ……あん畜生は、きつとマジでやるぜ……！ど、どうすりゃいいんだ！」

主と同様に蛇蝎の如くゴルゴナを憎み、恨み、並々ならぬ殺気をぶつけてやるが、そ

れで事態が好転するわけもない。

磔台で力なく俯くダイには、今も怨念めいた呻き声を漏らす靈魂が取り付き、ダイの生命力を徐々に奪っていく。

「さあどうした、バランス…貴様が心底より追い求めた息子はここにある。

グブブブブ…、貴様の力で取り戻せるといふならば、見事ディーノを救い出しその腕に抱くがいい…。

だが、それにしくじった時…我に歯向かった報いを、貴様は受ける事になるのだぞ」  
「ぬ、ぐ…ぬうー！」

今だ。今、まさにディーノを、息子を助けねばならない。

ドラゴンファングを振り上げることも出来ず、雷を招来する事も出来ず、竜魔人と化身する事は出来ないが、まるでバランスの形相は竜魔人が如くだった。

歯が砕けん程に食いしぼり、渾身の力を込めて、全身の鬨気を結集して、そしてとうとう…

「ぬうああああああああつ!!!」

バランスを縛っていた謎の呪力を打ち破って、バランスは真魔剛竜剣を高々と掲げてみせた。

「ほお…我が術を破るか……さすがは神の祝福を受けし竜の騎士よ…！」

驚いたようにみえるゴルゴナだが、その姿にはどこか余裕を感じさせるのは、やはり何もかもがこの魔人の術中であるからに違いない。

だが、それが予感できても、今の balan は勇者パーティーにとっては間違いなく最期の希望。

一縷の望み。

クロコダイオンも、竜騎衆も、そしてアバンも、balan に全ての希望を託すしかなかった。

「す、すごい……balan 様のあの気迫……い、いけるぞ！」

balan 様ならゴルゴナの悪辣な罠を突破できる！」

ボラホーンなどは歓喜し、主の勇姿に打ち震えだし、ラーハルトもガルダンディーも同じ気持ちだった。

だが、

「素晴らしき力だが……良いのか？」

竜の騎士よ……真魔剛竜剣が闇を払う光を纏う時、その光にあてられた魔も怨霊も祓われる。

良いのか？」

ゴルゴナは、まるで balan が己に一矢報いるのを待っているかのように……聖なる光を

望むかのように、バランの動きをただ見守るばかり。

「……………」

(ゴルゴナめ…一体何を仕掛けている！)

これにはバランもたじろいだ。

たじろぎ、そして蜘蛛と竜の視線は交差し、バランは精神を研ぎ澄ます。

息子を人質にとられ、心身は激しく疲労し電撃呪文も冥界には届かぬ今、神代の剣・真魔剛竜剣に賭けるしか手はない。

(このまま見えていても、デイーノはあの怨霊ゴーストに命を蝕まれる！罨があろうと…やるしかない！)

「真魔剛竜剣よ！」

ドラゴニックオーラ

掲げ、なけなしの竜闘気を愛剣へと注ぎ込めば、激しくも清廉な光が刀身に宿る。

主の心に応え、聖剣が邪悪な冥界を引き裂かんと瞬いた。

囚われのダイにも、その光は降り注ぎ、取り憑いていた霊を祓わんとした。

…その時だった。

「きやああああああああつ!!」

女があげるような、耳をつんぎく金切り声が勇者達の耳朵を打つ。

それは、女の悪霊が呪詛の為にあげるような声ではない。

まるで全身を焼かれた人の女があげるような、痛ましい声。

「っ!？」

それを聞いたバランは咄嗟に剣を曳き、そして愛剣に満たしていた残り少ない貴重な闘気を霧散させてしまった。

真魔剛竜剣から光が消える。

(ば、馬鹿な…!!!)

そして狼狽した。

戦鬼たる事を宿命付けられた竜の騎士たる己が、戦いの中で一瞬戦いを忘れた事もだが、何よりも祓おうとした霊魂から聞こえたその声。

忘れよう筈はない。

決して、生涯忘れない。

「ま、まさか——」

わなわなとバランの身体が震え、そして大蜘蛛が肩を揺らして笑い出した。

さも愉快そうに。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ…! 酷い男だ。

己が愛した女を、聖なる焦熱で焼き払わんとするとは!!

ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ!」

「ソ、ソアラっ!!!?」

「あ、ああ…バ! バラン…:…い、痛い…:…苦しい…:…全身が、焼ける…:…ああ…:」

ダイに纏わりついていた魂が、徐々に生前の姿を取り戻し、そして力なく倒れ込むようにして地へと堕ちた。

バランの顔から怒りが消えて、ただ悲壮一色となっていく。

探し求めた一粒種と、そして亡妻の幻影と相見えたその瞬間から、羅刹が如くの戦鬼から一人の父、夫へと戻ってしまっていた。

真魔剛竜剣を投げ出し、両手を伸ばして落ちゆく妻を抱き救おうと駆け出していたのは、竜の騎士の本能ではなく唯一人の男としての本能に突き動かされた証だった。

ソアラが地に叩きつけられる寸前、バランは跳び、そして十数年ぶりに愛する妻をその腕に抱いたのだ。

「ソアラ…:…ほ、本当に、ソアラなのか…:!!」

す、すまない! すまない…:!! わ、私のせいで!

「バ、ラン…:」

薄く透き通る魂の姿の妻。

死んだ時の姿のまま。

若々しく美しい、儂げで優しそうな、たおやかな花。

それが己のせいで全身を焼かれ、痛々しい。

声を出すのも辛そうに、ソアラは必死に何かをバランへと伝えようとしていた。

「…バ…ラ、ン」

「ソアラ…！喋ってはいかん！」

「だめ…バラン…：…これ、は…あ、あの…ゴルゴナの…：…さく、りや、く——」

愉快そうに夫婦の愛劇であり喜劇を眺めていたゴルゴナの八つ目がギラリと光った。

「——あつ!?うつ、ぐう!!あ、ああああああつ!!!」

「ソアラッ!!!」

ソアラの魂が内側から焼ける。

魂がバラバラになりそうな程に、奥底から呪力で縛られる。

「や、やめろ…やめろゴルゴナあああ!!!」

腕の中に抱いているのに、妻を襲う苦しみを全く癒せない。苦痛から守ってやれない。

そして、間違いなく妻を苦しめている元凶である大蜘蛛に対しては、もはや冥界というフィールドでは打つ手はなく、元凶を断てないのがバランには理解できてしまった。

血の涙を流すかのような、そういう顔で大蜘蛛を睨むバランだが、もはやその目には闘志よりも懇願の感情こそが大きくなってしまっているのは、バラン自身意図せぬ事



だった。

「ぐぶぶぶぶぶぶぶ……この地は冥界。

そして我は冥王……竜の騎士よ……貴様の妻が安寧に浸れるかどうかは全て私の指先一つで決まるのだ。

死者は須らくこの冥王の下僕たるべし……ぐぶぶぶぶ……貴様の妻ソアラとて、死した身なればその宿命からは逃れられぬ。

いつかは使える日も来るであろうと、こうして我が手元で飼っていた甲斐があつたというものよ」

ゴルゴナの、無表情の虫の顔に浮かぶ勝利を確信したが故の傲慢。

大勇者アバンもうなだれ、竜騎衆達も希望は潰えたと消沈し、そして大敵たる竜の騎士の心もはや萎え始めているのがゴルゴナには解った。

(グブブブー……これにて「詰み」だ……竜の騎士よ)

「見よ……バラン、そして我が冥府の奴隷ソアラ……貴様らの息子が、石となつて砕ける様を」

「つつーよ、よせ、ゴルゴナ!!!」

「あ、あああーやめて……お、お願い……お願いします……冥王よ、ど、どうか……それだけは……!」

竜の騎士とアルキードの姫が、傷つき疲れ切った腕を必死に伸ばした。

自分達の最愛の子を取り戻そうと、守ろうと、届くはずのない腕をそれでも必死に伸ばす。

「ならぬ。

お前達勇者は大罪を犯した……大魔王様に逆らうという大罪をな。

……バーン様はチャンスは与えてくださった。

人魔共存がなったリンガイアという先例も知っている筈。

それでも、バーン様が差し伸べた救いの手を払い除けたのは誰だ？

他でもない貴様ら勇者よ……ぐぶぶぶぶぶぶ」

ゴルゴナの無慈悲な宣告。

——ピシリ

と、ダイの表皮を石が覆い出した。

「やめろっ!! や、やめてくれ! 私の身はどうなってもいい! デイノだけは!!!」

「あ、ああ……」

バランがとうとう、その感情を言葉に出した。

そして、もはや“この流れは止められない”と悟ってソアラはただ落涙するのみ。

ソアラは思う。

自分という消えぞこないの魂が、夫の足を引つ張ってしまつたと。

自分が腹を痛めて生んだデイーノを守るといふ大義名分が、夫を崇高な存在から墮落させようとしていると。

だが何より、夫に誇りを捨てさせる事になろうと、デイーノを救い守つてやつて欲しいとも思つてしまつていた。

それが、母としてのソアラの紛れもない本心であり願ひでもあつた。

だからこそ、ソアラはもう泣くしかできないでいる。

(ああ……神よ……もうしわけありません……私は罪深い女です。私などいなければ……竜の騎士様をこのような目に合わさずに済んだのに)

心で天に祈り、慟哭し、懺悔する。

水は、一度流れれば低きにただひたすらに流れる。

決壊した心は、もはや流れ落ちるだけだった。

そしてゴルゴナは言う。

決定的な言葉を。

「……だが、大魔王様の御慈悲は未だ潰えておらぬ。

此度、頭を垂れて我ら魔王軍の軍門に降るといふならば……大魔王様は、どのような望みでも叶えてやる」と仰せである。

ぐぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ……竜の騎士バラン、大勇者アバン……竜騎衆……そして魔王軍の裏切り者・クロコダイン。

これが、最後の機会だ。

……我ら魔王軍に平伏し、忠誠を誓え。

さすれば……そう。まさに、いかような望みでも叶うのだ。

……囚われた仲間を助ける事も……砕けちった同志を救う事も……死した妻に、再び命を与えることも。

……そして、人類の助命と保護すらも、な」

それは悪魔の囁きだった。

聞くに優しく、甘美で芳醇な墮落の誘い。

以前ならば、常ならば、即座に切って捨てたような敵の言葉。

聞く耳を持たない敵の甘言。

だが、もはやここには「くだらない」と言つてのけるだけの精神を保った戦士はいなかった。

誰もが打ちのめされ、心が折れた。

「……………その言葉に……………偽りはないというのか」

ようやく絞り出した竜の騎士のその言葉は、否定の言葉ではなかった。

「……………ぐぶ、グブブブブブブブ！」

我が言葉であれば信用は出来まい。

だが安心するがよい……………今の言葉は大魔王様の御言葉であるが故……………嘘偽りは無い」

「……………そう、か……」

いつの間にか、ゴルゴナの金縛りの術は消え失せていた。

だが、もう誰も立ち向かい刃を向ける者はおらず、勇者達は皆力なく膝をつく。

折れた心は、肉体に蓄積した疲労とダメージを、一気に肉体の持ち主へと実感させる。

その顔からは覇気は失せて、誰もが憔悴していた。

蜘蛛の悪辣なる罠の糸が、とうとう勇者達を絡め取った瞬間だった。

そして、それら一連の様子を、ゴルゴナの術によるものか、それとも悪魔の目玉によるものか、大魔王バーンは玉座から悠然と眺めている。

全ての謀は冥王ゴルゴナの手のひらの上。

そして、そのゴルゴナでさえも大魔王バーンの掌中で踊る存在だったが、バーンとゴ

ルゴナという二柱は互いにそれを承知で、そして望んでいた。

今のゴルゴナにとつては、バーンの手のひらの上というのは実に居心地の良い安住の地であり、それだけの大器がバーンにはある。

「くつくつくつく…ふふ、ははははは…」

気品すら感じさせながらも、実に愉しげに微笑んでいる魔族の神がそこにいた。

「見よ…ミストバーン。」

竜の騎士がひれ伏し、乞うておるわ」

「…は」

寡黙な従者は、上機嫌な主の様子を見、己もまた気分が良くなるのを感じていた。

聞く者によつては、短い返事にも喜色が混じっているのが解るだろう。

たとえばゴルゴナやキルバーンだが、しかし、珍しくバーンの側にキルバーンは控えていない。

代わりに、同じように邪悪に染まりきった戦士が傍に控えていた。

「ヒュンケル。お前の待ち人は、どうやらもうじき余の元へ馳せるであろう。」

その時…余の前でアバンとの血闘を演じてみるか？ん？」

「バーン様がお望みとあらば」

鎧の魔剣の鎧形態で身を隙なく覆い、マントと邪剣ネクロスを背に負った魔剣戦士が

そこにいる。

暗黒闘気が魂奥底まで染み付き、血と死臭が肉と骨の奥底まで染み付いたヒュンケルは、大魔王バーンが求める暗黒の戦士としてとうとう完成された。

冥界を映す大水晶。

そこに映る、光の闘法のかつての師が項垂れる姿を、ヒュンケルもまた主君と同じように愉しげに見つめる。

バーンは、そんな魔剣戦士を見るといつそ優しげにも見える邪悪な微笑みを浮かべて、己の千年計画がいよいよ最終段階に来たのを実感していた。

倒れる勇者。

俯く竜の騎士。

暗黒に染まった光の剣士。

そして…。

「くくくく…神の涙までが余の掌中にある。神々の奇跡が尽く、余の元に…」

バーンは飲み干したワイングラスを消し去ると、まるで何かを掴むように宙空へと細い腕を伸ばし、握る。

「今…に…魔の時代来たる…！」

物静かな老人然とした先程のまでの空気を一変させ、覇気満ちる凶悪な眼でバーンは



世界を、天を見る。

大魔王バーンには、確かに暗黒の時代の足音が聞こえていた。